兵庫県文化財調査報告書　第100冊

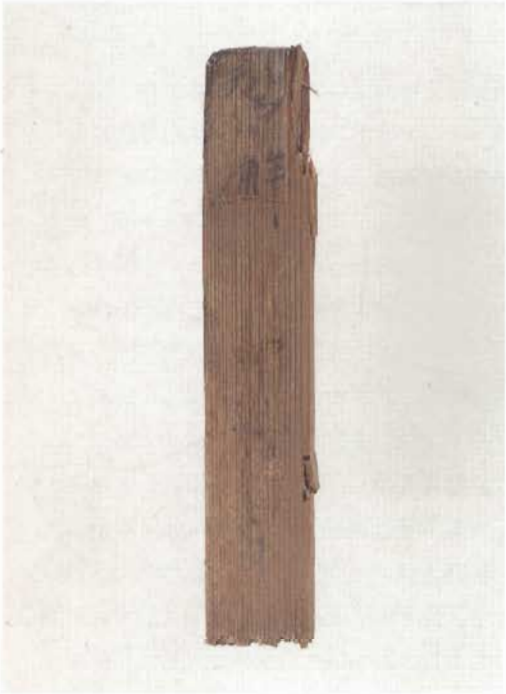
長尾・沖田遺跡（Ⅰ）

－県道下庄・佐用線道路改良工事に伴う発掘調査報告書－

1991

兵庫県教育委員会

巻頭図版



例　　言

1．本書は、県道下庄・佐用線道路工事に先立ち、昭和57年度から昭和62年度にかけて兵庫県教育委員会が実施した長尾・沖田遺跡の発掘調査報告書である。

2．各年度の発掘調査担当者は以下のとおりである。

昭和57年度確認調査　西口和彦　　昭和60年度全面調査　大平　茂・村上賢治
昭和58年度全面調査　西口・水口富夫　昭和61年度全面調査　大平・村上泰樹
昭和59年度確認調査　西口・山田清朝　昭和62年度全面調査　渡辺　昇・村上（泰）

3．整理作業は昭和61・62年度・平成元年度・平成２年度に行ない、西口・大平・渡辺・村上（泰）・村上（賢）が分担して行った。

4．本書で用いた方位は、建設省告示3059号に定める平面直角座標系第Ⅴ系の座標北である。本遺跡の基準点設置は、伊東太作・西村　康（奈良国立文化財研究所）両氏の指導を得て、西口が実施した。

5．写真図版のうち遺物は森昭氏の撮影によるもので、遺構の撮影は、各発掘調査担当者が分担して行った。

6．本書の編集は西口・大平の両名が共同で行い、和田早芳子の援助を受けた。

7．本書の執筆名は本文目次に示している。島地　謙(京都大学名誉教授)・林　昭三（京都大学木材研究所）の両氏には、本遺跡より出土した木製品の樹種同定をお願いした。その成果は、第４章に掲載している。また、第３章第３節の石器については、瀧川友子氏にお願いし、久保弘幸が加筆・校正した。

8．本書に掲載している遺物実測図は、土器・木器・金属器・石器・玉類・土製品ごとに写真図版と共通する番号を付した。

9．本遺跡の発掘調査にあたっては、奈良国立文化財研究所の伊東太作・岩本次郎(当時)・木全敬蔵・西村　康・森　郁夫(当時)・山中敏史の諸氏をはじめ、遺跡の地理的環境について高橋学（立命館大学講師）・青木哲哉（立命館大学講師）・吉本昌弘（立命館大学）の各氏に指導・助言を賜った。整理作業にあたっては、水野正好（奈良大学教授）・藤田　等（静岡大学教授）・松井　章（奈良国立文化財研究所）・小栗栖健治・小林基伸（兵庫県立歴史博物館）・山口卓也（関西大学講師）の各氏には、出土遺物について御指導を賜り、また佐用郡広域行政事務組合消防本部には当地の気象情報について御教示いただいた。また現地においては、八雲凱美・平瀬順一（佐用郡教育委員会）の両氏に御世話になった。

10．長尾・沖田遺跡から出土した遺物は、すべて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に保管している。

本 文 目 次

第1章　はじめに……（西口・大平・村上泰）　1

第2章　遺跡をとりまく環境
　第1節　地理的な環境……（大平）　9
　第2節　歴史的な環境……（大平）　11

第3章　調査の記録
　第1節　遺跡の立地と基本堆積土層 ……（大平）　17
　第2節　遺構
　　1．弥生～古墳時代……（水口・村上賢・村上泰）　21
　　2．奈良～平安時代……（大平・村上泰）　50
　第3節　遺物
　　1．弥生土器……（山田）　62
　　2．奈良～平安時代の土器……（渡辺）　74
　　3．中世以降の土器……（村上泰）　79
　　4．瓦……（西口）　82
　　5．石器……（瀧川・久保）　84
　　6．玉類……（大平）　90
　　7．木簡・木器……（西口・村上賢）　91
　　8．金属器……（大平・村上泰）　98
　　9．土製品……（大平）　102

第4章　長尾・沖田遺跡出土木製品の樹種……（島地・林）　103

第5章　おわりに……（大平）　109

〔挿　図　目　次〕

第１図　確認調査　坪配置図　3
第２図　坪13・14　検出溝　5
第３図　遺跡周辺地形図　10
第４図　周辺の遺跡　12
第５図　ナイフ型石器・石棒　14
第６図　平松出土の銅剣(種定淳介原図)　15
第７図　井谷遺跡出土の銅鏃　16
第８図　三日月町島脇西狭間池窯跡表採土器　16
第９図　Ａ～Ｄ地区土層断面図　19
第10図　弥生時代遺構配置図　21
第11図　Ａ地区　弥生時代遺構配置図　22
第12図　住居跡１・２　実測図　23
第13図　住居跡３　実測図　24
第14図　Ｂ地区　弥生時代遺構配置図　25
第15図　土壙29・30・31・33・34実測図　27
第16図　土壙35・36・38　実測図　28
第17図　土壙６・10　実測図　30
第18図　土壙８・16　実測図　31
第19図　土壙20・26　実測図　32
第20図　土壙27・28・37・39　実測図　33
第21図　土壙40　実測図　34
第22図　土壙11・18・19　実測図　35
第23図　土壙１～５　実測図　36
第24図　土壙７・９　実測図　37
第25図　土壙12～15　実測図　38
第26図　土壙17・21～23　実測図　39
第27図　土壙24・25・32　実測図　40
第28図　Ｃ地区　弥生時代遺構配置図　42
第29図　住居跡４　実測図　43
第30図　土壙41　実測図　44
第31図　土壙42・43　実測図　45
第32図　土壙44～47　実測図　46
第33図　奈良～平安時代　遺構配置図　50
第34図　Ｂ地区　奈良～平安時代遺構配置図　51
第35図　道路遺構　実測図　52
第36図　道路遺構　土層断面図　53
第37図　Ｃ地区　奈良～平安時代遺構配置図　54
第38図　道路遺構・側溝２　土層断面図　55
第39図　Ｄ地区　奈良～平安時代遺構配置図　56
第40図　道路遺構・側溝２　土層断面図　57
第41図　掘立柱建物跡１　実測図　58
第42図　掘立柱建物跡２　実測図　59
第43図　掘立柱建物跡３　実測図　60
第44図　土壙48　実測図　61
第45図　土壙49　実測図　61
第46図　土壙50　実測図　61
第47図　弥生土器　実測図（１）　63
第48図　弥生土器　実測図（２）　65
第49図　弥生土器　実測図（３）　67
第50図　弥生土器　実測図（４）　68
第51図　須恵器　実測図（１）　75
第52図　須恵器　実測図（２）　77
第53図　土師器　実測図　79
第54図　中世以降の土器　81
第55図　瓦　拓影図（１）　82
第56図　瓦　拓影図（２）　83

第57図　石器　実測図（1）　86
第58図　石器　実測図（2）　87
第59図　石器　実測図（3）　88
第60図　勾玉　実測図　90
第61図　小玉・管玉　実測図　90
第62図　木簡　実測図（1）　91
第63図　木簡　実測図（2）　92
第64図　木器　実測図（1）　93
第65図　木器　実測図（2）　94
第66図　木器　実測図（3）　96
第67図　木器　実測図（4）　97
第68図　木器　実測図（5）　98
第69図　銅鏃　実測図　98
第70図　銅銭　拓影図　99
第71図　鉄器　実測図（1）　100
第72図　鉄器　実測図（2）　101
第73図　紡錘車　実測図　102
第74図　土錘　実測図　102
第75図　出土木器　顕微鏡写真（1）　105
第76図　出土木器　顕微鏡写真（2）　106
第77図　調査区周辺の遺跡　109

〔 表 目 次 〕

1. 土壙計測一覧表　47
2. 弥生土器観察表　69
3. 土錘計測表　102
4. 長尾・沖田遺跡出土木製品の樹種　107

〔 図 版 目 次 〕

図版1　A・B地区　1. 長尾沖田遺跡 遠景
2. 長尾沖田遺跡
A・B地区 遠景
図版2　A・B地区　1. 遺跡周辺の航空写真
図版3　A・B地区　1. A・B地区 調査前
2. A地区　全景
図版4　A・B地区　1. 住居跡1
2. 住居跡2
図版5　A・B地区　1. 住居跡3
2. 住居跡3
図版6　A・B地区　1. 土壙10
2. 土壙29
3. 土壙30
4. 土壙31
図版7　A・B地区　1. 土壙34
2. 土壙35
3. 土壙36
4. 土壙37
図版8　B地区　1. 道路遺構
2. 建築部材出土状況
図版9　A地区　1. A地区　南端　溝
2. 溝内遺物出土状況
図版10　B地区　1. 側溝1内杭列
2. 道路遺構　土層断面
図版11　B地区　1. 道路遺構　下層基礎
2. 同　上
図版12　B地区　1. 建築部材　出土状況
2. 道路遺構　上面　瓦出

土状況
図版13　B地区　1. 側溝1内 斎串出土状況
2. 谷部　木器出土状況
図版14　C地区　1. C地区全景
2. 住居跡4
図版15　C地区　1. 土壙41
2. 土壙42・43
図版16　C地区　1. 土壙45
2. 側溝1　土層断面
図版17　C地区　1. 道路遺構
2. 側溝1内 木器出土状況
図版18　D地区　1. D地区　全景
2. 掘立柱建物跡1
図版19　D地区　1. 掘立柱建物跡2
2. 掘立柱建物跡3
図版20　D地区　1. 土壙48
2. 土壙49・50
図版21　D地区　1. 道路遺構
2. 側溝2　土層断面
図版22　弥生土器(1)
図版23　弥生土器(2)
図版24　弥生土器(3)
図版25　弥生土器(4)
図版26　須恵器(1)
図版27　須恵器(2)・墨書土器(1)
図版28　墨書土器(2)
図版29　須恵器(3)
図版30　中世以降の土器(1)
図版31　中世以降の土器(2)
図版32　瓦
図版33　石器
図版34　木器(1)
図版35　木器(2)
図版36　木器(3)
図版37　木器(4)
図版38　金属器(1)
図版39　金属器(2)・土製品

第１章　はじめに

１．調査に至る経過

昭和57年８月、兵庫県上郡土木事務所から兵庫県教育委員会に、県道下庄・佐用線の道路改良工事が通知された。

県道下庄・佐用線は、佐用郡佐用町から岡山県英田郡大原町下庄を結ぶ道路である。今回の道路改良は国道179号線から中国縦貫自動車道下の現道までの区間にバイパスを建設するものである。

通知を受けた県教育委員会では、計画路線内に土師器・須恵器等の土器片が散布し現水田区画に「条里型地割」が認められる事、さらに白鳳時代創建の長尾廃寺が近接している事などにより、事前の遺跡確認調査が必要であると、上郡土木事務所に回答した。

この後、県教育委員会と上郡土木事務所では、事業地内の発掘調査について具体的な協議を行い、工事工程と用地買収の進捗状況によって数次にわたって調査を実施することにした。

２．調査の概要

昭和57年度（確認調査）

確認調査は昭和57年11月29日から12月３日まで実施した。調査区間は、国道179号線から町道谷口塩田線までの約600ｍ、道路センター番号№46から№60までである。試掘坪（２×２ｍ）は道路センター杭に合わせ、10箇所を設定した（第１図）。

坪１から４は佐用川の氾濫原であり、耕作土下は砂礫層であった。坪５は段丘斜面にあたり、土器の細片は出土するが遺構は認められない。坪６から８は段丘上の平坦地で、耕作土下約５cmの黄褐色地山面で、柱穴・土壙・住居跡を検出した。坪８では、住居跡床面から銅鏃が１点出土した。坪９では灰色土や暗灰色粘土が堆積し、湧水が多く、遺構の検出はできなかった。しかし、堆積土中から瓦片、木片などが出土した。坪10は耕作土ですぐに地山が出土し、確認時には遺構、遺物は検出されなかった。

確認調査の結果、道路センター№55以降には遺跡は拡がらず、遺構は№53から北に拡がり、古墳時代の住居跡や瓦の出土により、長尾廃寺に関連する遺跡があると想定した。

昭和58年度（Ａ地区西半全面調査）

昭和57年度の確認調査に続く第１次全面調査であり、昭和58年12月７日から昭和59年３月27日まで実施した。調査は道路建設事業計画地の道路センター杭にあわせ、４ｍグリッドを設定し、東西列をＡ～Ｄ、南北列00～25と命名した。調査区は地形から台地と谷部に分かれる。

調査期間が冬場であったため、住居跡のある台地部は少しでも条件の良い春先に送ることに

して、谷部の調査から開始した。

まず、確認調査時で瓦が出土した層位の拡がりをおさえるため、瓦を検出できる面まで掘り下げた。その結果、瓦は北端のみで出土し、南の地区には拡がらなかった。しかし、南にはこの面で南北に延びる溝が存在することが明らかになった。溝は、片側に丸木杭を打ち込み横板を組み合わせる護岸施設がある。調査前には、谷部に土器・木器等が流れ込みの状態で混入しているものと判断していたため、調査期間の制約もあり、この遺構を残して下層のシルトを掘り下げていった。この層では、多くの木製品が出土した。注意すべきものに木簡の発見がある。次いで、さらに下層へ掘り下げ谷部の地山面を切り込む旧地形を復原した。最下層には弥生時代中期〜後期の土器が入っている。

谷部の図化と併行して、台地部の調査を開始した。遺構は地山面を切り込んで造られているため、この面まで掘り下げた。そして、住居跡・土壙・溝・柱穴を調査した。土壙については、一部調査が完了しないまま、年度末を迎えたので図化の後埋戻し、後日の調査に備えた。

昭和59年度（確認調査）

昭和60年1月8日から同月25日にかけ、確認調査を実施した。確認調査を行ったのは、道路センター№26から№45までの区間で、坪11から坪30である（第1図）。前回と同様に2×2mの坪を道路センター付近に設定した。

坪18から坪21では遺構・遺物は検出されず、坪19から坪27間は瓦粘土の採掘が行われて、耕作土下は大きく掘削されていた。また、坪28から坪30地域は南から北に下がる地形で、黒色シルトや礫層が厚く堆積していた。当地域は東から入り込む、埋没した谷の一部であると判明した。遺構が検出されたのは坪12から坪18間の地域である。南北に走る溝や土壙が認められ、弥生土器片や須恵器・土師器片も出土した。坪13・坪14で検出された溝は幅0.7m〜0.8m・深さ0.2mを測り、同一の溝と考えられる。A地区西半全面調査（昭和58年度）で検出されている溝の北延長にあたる可能性が考えられた。

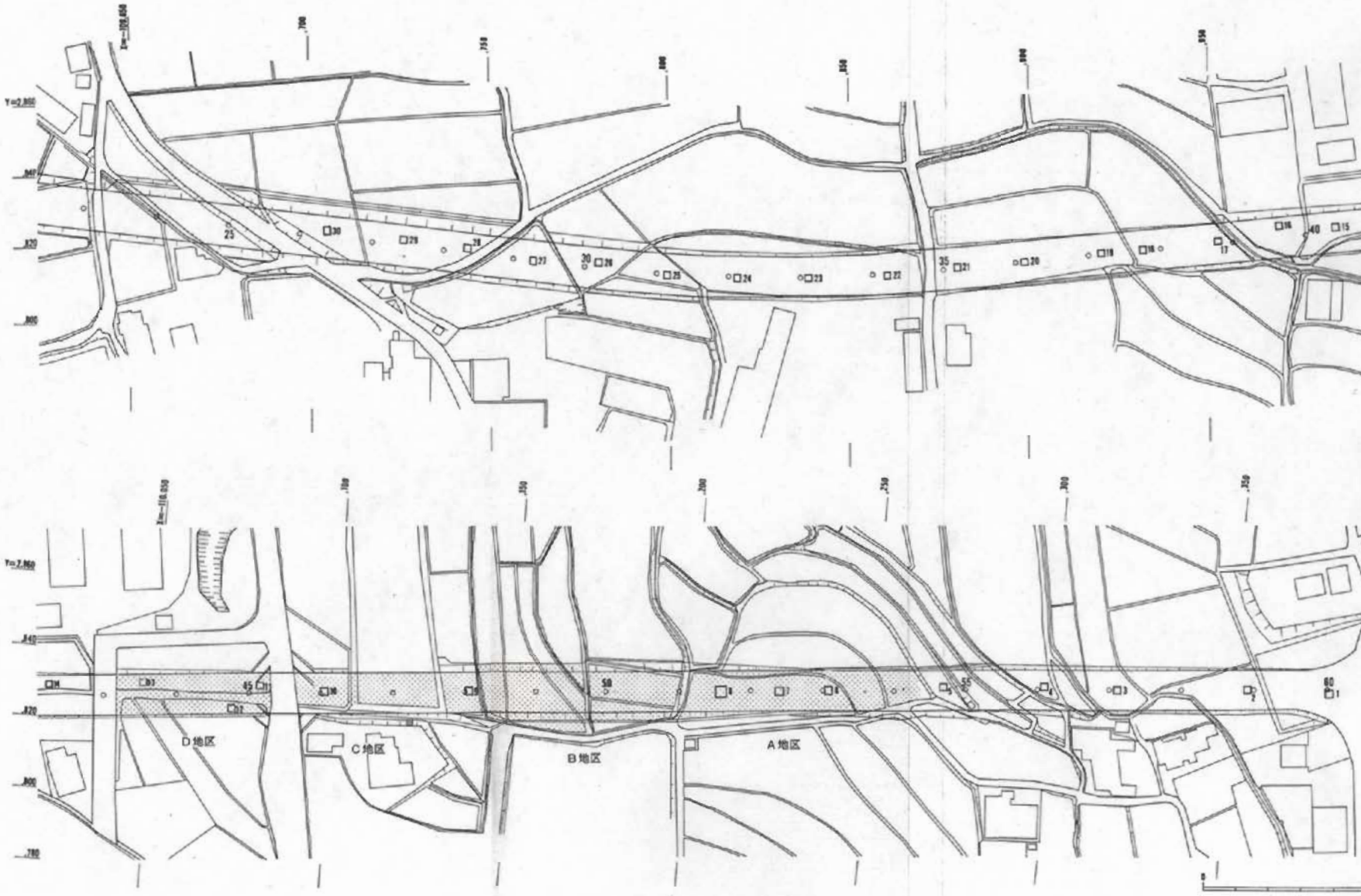
調査の結果、坪11から坪18間（道路センター№37〜№45）に遺構が認められ、長尾・沖田遺跡の北辺部にあたる。今後、南の地域との遺構の関連に注意して調査を実施する必要がある。

昭和60年度（A地区東半・B地区全面調査）

本調査は、昭和58年度に続く第2次全面調査で、昭和60年5月20日から8月23日まで実施した。調査位置は第1図のとおりである。

昭和58年度の調査で、台地部に弥生時代〜古墳時代初頭の土壙と住居跡を検出しており、この遺構の内容実態を把握するのと谷部で発見された平安時代前期と考えられる溝の性格を捉えるのが目的であった。

調査方法は、前記の調査視点に基づいて、道路建設事業計画地の道路センター杭にあわせ、4mグリッドを設定する。先年度と同様に東西列をA〜D・南北列を00〜26と命名し実施した。



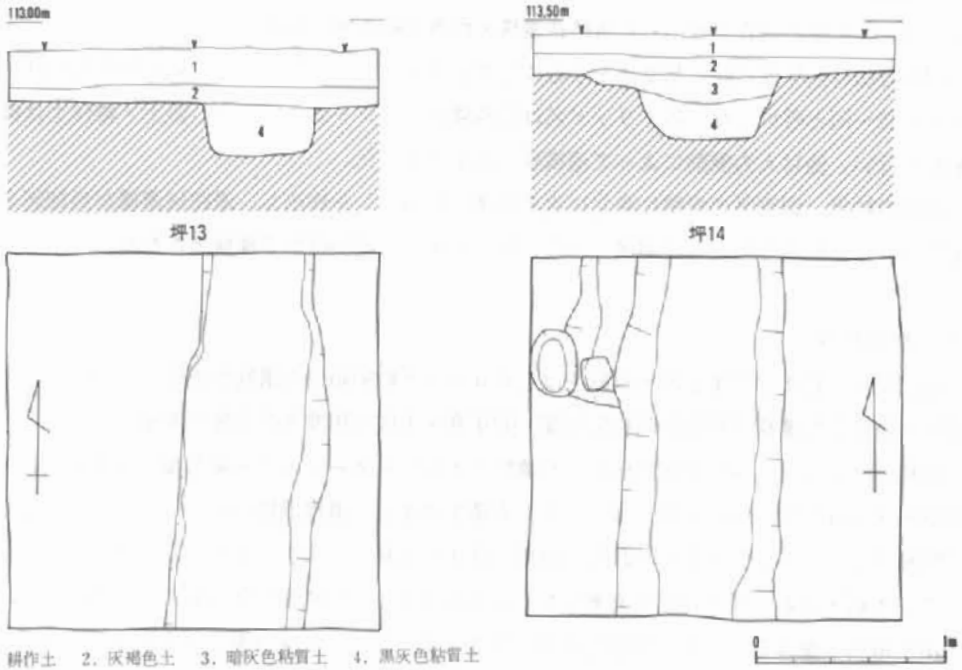
第1図　確認調査坪配置図

調査区は、台地部・谷部の二つに大きく分かれている。

台地部では先年度の調査区の埋め土を排除し、昭和58年度の最終時の状態に戻した。そして掘削が完了してない土壙の調査と並行して、本年度調査地区の東と南に調査を拡張していった。東地区では、弥生時代の隅丸方形住居跡の東半分の検出と数基の土壙を調査している。南地区では、小礫を敷いた道路状遺構とそれに伴う溝を検出した。

次いで、北の地区に移り、12基の土壙を調査した。大半が木棺墓であり、土壙38ではガラス玉を検出している。

谷部も、一部を昭和58年度に調査を実施していたため、平安時代前期の溝の検出面まで機械で除去し、ここから下層の調査と並行して北の調査区に入った。北端の台地に上がる部分で、黄褐色の地山層を切り込み小礫及び瓦片を敷いた道路遺構とそれに伴う溝を検出した。この溝は先年度に調査をした溝につながり、先年度調査地区の断面観察をした結果、東横に道が存在することも明らかになった。そして、この谷部の一番低地に造られた道路部分は下層に枕木を敷き、上に人頭大の礫を並べる土木工事を行っており、溝内からは墨書土器・斎串等を発見し



第2図　坪13・14検出溝

た。この後、弥生時代に埋まる谷の河道を掘削し、最後に北の台地部の確認調査を実施した。

昭和61年度（C地区全面調査）

本調査は、昭和60年度に続く第3次全面調査で、昭和61年5月28日から7月4日まで実施した。調査位置は第1図のとおりである。

昭和60年度の確認調査では、台地部に弥生時代の土壙を検出している。この遺構の実態を把握するのと谷部から続く平安時代前期と考える道路の性格を捉えるのが目的であった。

調査方法は、前記の調査視点に基づいて、道路建設事業計画地の道路センター杭にあわせ、4mグリッドを設定する。前年度と同様に東西列をA～D、南北列を30～40と命名し、実施した。調査区は、概ね台地部となっている。

北地区では、弥生時代隅丸方形住居の西半分の検出と数基の土壙（木棺墓を含む）及び平安時代前期の溝を調査している。注目すべきは道路遺構と直交するかたちで検出した東に延びる溝で、これも道路側溝の可能性が高い。南地区では、小礫を敷いた道路状遺構とそれに伴う西側溝を検出した。溝内からは、墨書土器や馬歯、木製品等が出土した。

昭和62年度（D地区全面調査）

本調査は、昭和61年度に続く第4次全面調査で、昭和63年2月22日から3月4日まで実施した。調査は、道路センター杭№43～45付近の490㎡の範囲（第1図）について実施し、調査の目的は、前年度の調査で検出した道路状遺構・側溝の続きを把握することにあった。

調査方法は前年度と同じ基準点を中心にして、4mグリッドを設定し、東西列をA～D、南北列を42～53と呼称した。各グリッド名は北西隅のポイント名を用いた。盛土・耕作土は機械掘削を行い、他は人力掘削によって遺構検出面まで下げた。

調査の結果、調査区の東側に南北に走る側溝（側溝2）を検出し、道路状遺構が当地区まで延びることが判明した。この遺構以外に、新たに掘立柱建物跡が3棟検出された。

3．整理作業

前記調査の結果、弥生土器・石器をはじめコンテナ約90箱分の遺物が出土している。これら遺物と検出した遺構の整理を昭和61年度・62年度・平成元年度と2年度に実施した。

昭和61年度は、A～C地区で出土した遺物の水洗い・ネーミング・接合復元・実測拓本・写真撮影を実施した。翌62年度には、前年の実績を踏まえ、遺構遺物のトレースを実施し、木器の樹種同定分析を京都大学名誉教授　島地　謙氏に依頼し成果をいただいた。またこれと並行して、木器・鉄器の保存処理を実施した。平成元年度は、昭和62年度に新たに調査したD地区の出土遺物の整理を行った。整理内容は、水洗・ネーミング・接合復元・実測・拓本・遺構遺物のトレースである。平成2年度はD地区で出土した木器の樹種同定を島地氏に依頼するとともに、レイアウト作業を実施し、報告書を作成した。

発掘調査体制

昭和57年度

調査体制　兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課

〔事務担当〕課　　長　　藤本　繁
参　　事　　吉村芳郎
課長補佐　　池田義雄
埋蔵文化財係長　　大村敬通

〔調査担当〕主　　任　　西口和彦

調査期間　昭和57年11月29日～昭和57年12月３日

昭和58年度

調査体制　兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課

〔事務担当〕課　　長　　西沢良之
参　　事　　大西章夫
課長補佐　　池田義雄
埋蔵文化財調査係長　　櫃本誠一
技術職員　　大平　茂

〔調査担当〕主　　任　　西口和彦
技術職員　　水口富夫

調査期間　昭和58年12月７日～昭和59年３月27日

昭和59年度

調査体制　兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課

〔事務担当〕課　　長　　西沢良之
参　　事　　大西章夫
課長補佐　　和田富男
埋蔵文化財調査係長　　櫃本誠一
技術職員　　大平　茂

〔調査担当〕主　　任　　西口和彦
技術職員　　山田清朝

調査期間　昭和60年１月８日～昭和60年１月25日

昭和60年度

調査体制　兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課

〔事務担当〕課　　長　　北村幸久
参　　事　　森崎理一
課長補佐　　和田富男
埋蔵文化財調査係長　　櫃本誠一
主　　任　　渡辺　昇

〔調査担当〕主　　任　　大平　茂
技術職員　　村上賢治

調査期間　昭和60年５月20日～昭和60年８月23日

昭和61年度

調査体制　兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課

〔事務担当〕課　　長　　北村幸久
参　　事　　森崎理一
課長補佐　　福田至宏
埋蔵文化財調査係長　　大村敬通
主　　査　　井守徳男

〔調査担当〕主　　任　　大平　茂
技術職員　　村上泰樹

調査期間　昭和61年5月28日～昭和61年7月4日
発掘作業委託　（株）神崎組

昭和62年度

調査体制　兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課

〔事務担当〕	課　長	北村幸久
	参　事	森崎理一
	課長補佐	福田至宏
	埋蔵文化財調査係長	大村敬通
	主　査	井守徳男
〔調査担当〕	主　任	渡辺　昇
	技術職員	村上泰樹

調査期間　昭和63年2月22日～昭和63年3月4日
発掘作業委託　（株）神崎組

（補助員）小谷五郎、小谷義男　昭和57年度～昭和61年度

整理体制

昭和62年度

調査体制　兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課

〔事務担当〕	課　長	北村幸久
	参　事	森崎理一
	課長補佐	福田至宏
	埋蔵文化財調査係長	大村敬通
	主　査	小川良太
	主　任	岡田章一
〔整理担当〕	主　任	大平　茂

昭和63年度

調査体制　兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課

〔事務担当〕	課　長	中根孝司
	参　事	森崎理一・日野和広
	埋蔵文化財調査係長	大村敬通
	保存担当	松下　勝
	主　査	小川良太
	主　任	岡田章一
〔整理担当〕	主　任	大平　茂

平成2年度

調査体制　兵庫県教育委員会　埋蔵文化財調査事務所

〔事務担当〕	所　長	内田隆義
	副所長	村上紘揚
	総務課長	小池英隆
〔整理事務担当〕	整理普及課長	松下　勝
	技術職員	岸本一宏
〔金属器保存処理担当〕	主査	加古千恵子
〔木器保存処理担当〕	技術職員	別府洋二
〔整理担当〕	課長補佐	西口和彦

第2章　遺跡をとりまく環境

第1節　地理的な環境

千種川は、鳥取県境の宍粟郡千種町三室山の南麓に源を発して、播磨の西部を南流し、瀬戸内海に注ぐ全長67.6㎞の2級河川である。支流には佐用川（32.9㎞）・志文川（23.1㎞）等があり、低地は河口部の赤穂市の他、顕著に発達しておらず、わずかに支流との合流点付近で谷底平野がみられる程度である。佐用郡では、丘陵・段丘・低地といった地形がコンパクトに存在しているが、低地の発達が悪いため、人間の活動は主に比高の大きい段丘の平坦面を利用して水田・畑を営んでいるのである。集落はこの河川沿いに形成された南光・三日月・佐用・上月の各町に点在する。

ここ佐用町は、兵庫県のほぼ西端にあり、JR姫路駅から北西へ約46㎞、播磨・美作・因幡の国境に位置する中国山地の山間に開けた町である。面積は約115㎢、人口9,440人である。

山林・田畑が約9割を占め、かつては農林業が主体の町であった。

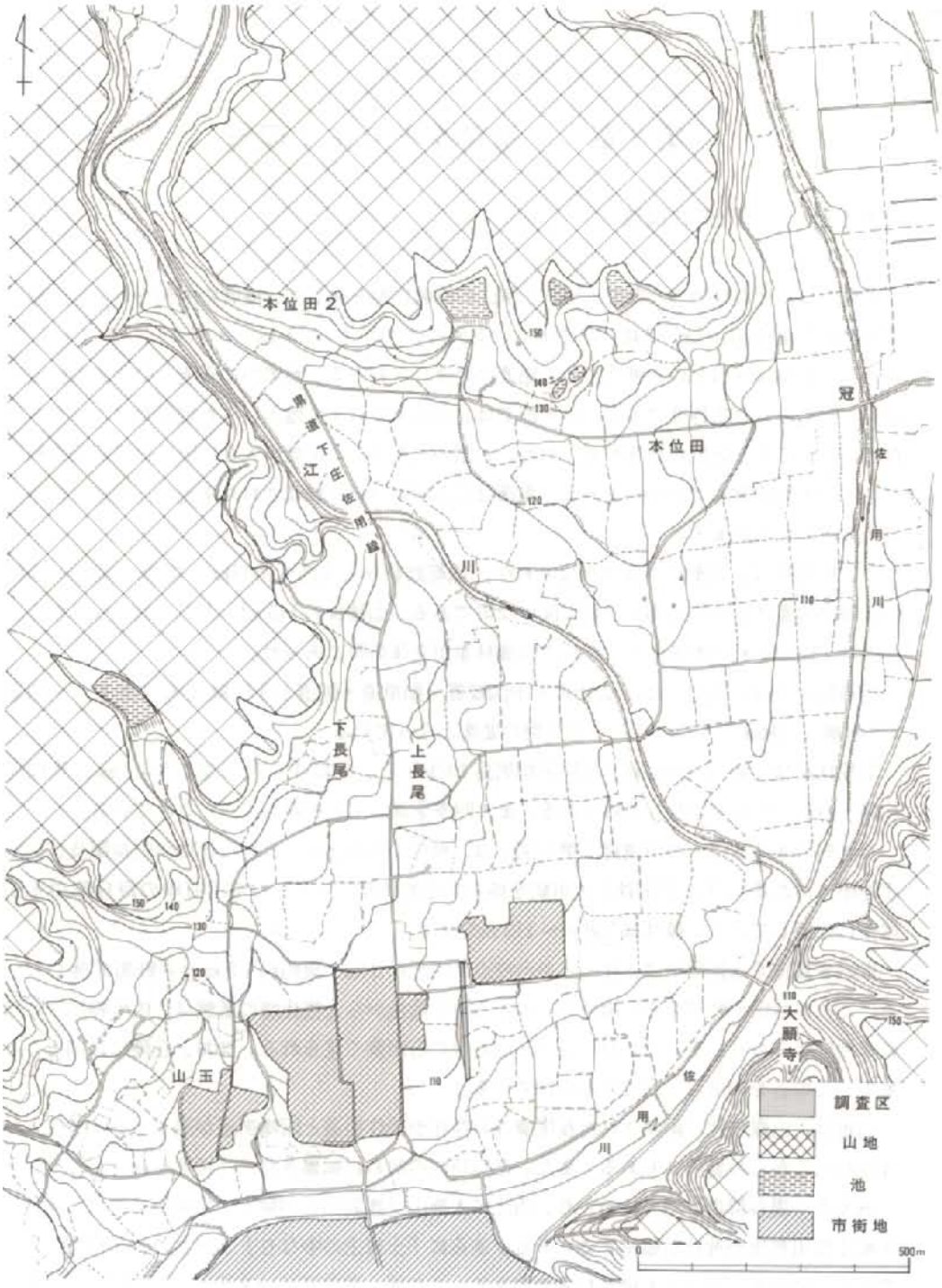
交通関係では、前記したJR姫新線・中国縦貫自動車道・国道179号線（美作街道）・国道373号線（因幡街道）等が走り、佐用郡の要衝となっている。

気象状況は、瀬戸内性に属し年間平均気温13.34°C、年間平均降水量1,334.8㎜、年間平均降水日数103日と温和な気候である。また四季を通じての朝霧もよく知られている。

今回報告する長尾・沖田遺跡（第3図）は、現在の行政区画では佐用郡佐用町長尾及び佐用字沖田にあたる。JR（旧国鉄）佐用駅を核とする繁華街の北側、佐用川右岸の段丘部の水田地帯に立地している。標高は108m～112mを測る。

町内を貫流する佐用川は、江川との合流点に南北約2㎞・東西約1.5㎞の平野部を擁している。これが沖田平野である。遺跡の立地する河岸段丘から上位丘陵の基盤は、佐用礫層と呼ばれる地層からなり、安山岩や凝灰岩・花崗岩等の石が多く見られる。なお、丘陵には開析谷も多く、この谷を利用して溜池も造られている。

当地は、白鳳時代に創建された長尾廃寺の存在や美作街道と因幡街道が通じる等歴史的・地理的に古くからの要所でもある。また、奈良時代の初めに編纂された『播磨国風土記』に記載のみえる「讃容郡讃容里」にあたり、西北に大撫山（鹿庭山）が聳え、中央部に佐用の開拓神を祀る佐用都比売神社が鎮座するとある。さらに「土は上の中なり」と記され、収穫量の多い豊かな土地であったことも窺われるのである。この他、讃容郡には速湍里、邑宝里、柏原里、中川里、雲濃里があった。



第3図　遺跡周辺地形図

第２節　　歴史的な環境

平成元年度における兵庫県内の発掘調査件数は、519件であった。そのほとんどが道路建設・建物建設等の開発事業にかかるものである。ここ佐用郡内でも例外ではない。農業基盤整備事業を中心に開発の波が押し寄せ、これに伴う事前発掘調査が実施されているのである。このため郡内の原始・古代の生活については、22年前の町立福祉センター建設（吉福遺跡）調査時、16年前の中国縦貫自動車道建設（本位田遺跡他）の調査時とは比較できないほど明らかになってきた。本稿も、農業基盤整備事業を中心とする佐用郡教育委員会の実施した事前発掘調査の成果に負うところが多い。

千種川中流域の遺跡

地理的環境で述べたように、郡内には沖積地が非常に少ない。このため遺跡は、丘陵山麓・台地・自然堤防上の高地に立地し、旧石器時代から歴史時代にわたっている。ここでは、千種川中流域にあたる佐用郡内の各時代の遺跡について概観してみよう。

１．旧石器時代

旧石器時代の遺跡（遺物）は、佐用町に２箇所、南光町・三日月町に各１箇所があり、いずれも丘陵から張り出す山麓の台地部に立地する。佐用町では、長尾沖田遺跡（第４図１、以下番号のみ記す、下長尾遺跡２を含む）にナイフ形石器・剥片（黒曜石）、本位田遺跡（３）で削器（サヌカイト）があり、また南光町の漆野段遺跡（４）と三日月町の植木遺跡（５）ではナイフ形石器が発見されている。

しかし、遺物は断片的であり、遺跡としてまとまりをもったものは確認されていない。岡山県下の中国山地部と同一の文化と推定されるが、今後の調査研究に期待される分野で、特に長尾周辺の台地部は注意していく必要があろう。

２．縄文時代

次に縄文時代の遺跡（遺物）は、上月町・佐用町・南光町・三日月町の全域に分布し、早期・前期には山麓台地部・段丘上に、後期・晩期には段丘上・自然堤防上に立地する。

早期では、上月町金屋中土居遺跡（６）、佐用町下長尾遺跡（２）山脇カジヤ遺跡（７）、南光町漆野段遺跡（４）と三日月町西村遺跡（８）がある。遺物は山形文・楕円文を中心とする押型文土器が出土しているが、遺構は未確認である。

前期には、三日月町の西村遺跡（８）と佐用町石井遺跡（９）の爪型文土器が知られる。石井遺跡では中期の土器も出土している。

後期では、上月町金屋下土居遺跡（10）櫛田奥村遺跡（11）、三日月町植木遺跡（５）春哉遺跡（12）長田遺跡(13)で磨り消し縄文土器があり、植木遺跡では打製石斧・石鏃等かなり石

9
39
15
29
49
30
36
4
38
50
32
37
34
51
2
45
21
31
23
6
12
5
27
28
26
16
10
33
35
47
18
19
7
41
40
44
46
43
42
14
20
13
8
25
48
11
24
17
22
0
4000m

第４図　周辺の遺跡

1 長尾・沖田遺跡
2 下長尾遺跡
3 本位田池尻遺跡
4 膳野段遺跡
5 植木遺跡
6 金屋中土居遺跡
7 山脇カジヤ遺跡
8 西村遺跡
9 石井遺跡
10 金屋下土居遺跡
11 櫛田奥村遺跡
12 春哉遺跡
13 長田遺跡
14 安川中島遺跡
15 平福小学校遺跡
16 力万遺跡
17 小赤松遺跡
18 早瀬遺跡
19 山脇葉草遺跡
20 下山脇遺跡
21 平松銅剣出土地
22 大酒相の原遺跡
23 金屋上土居遺跡
24 秋里遺跡
25 石井遺跡
26 林崎遺跡
27 徳平蛇の杖遺跡
28 下本郷銅鐸出土地
29 宗行井谷遺跡
30 壁石遺跡
31 吉福遺跡
32 金子遺跡
33 上月中学校古墳
34 円応寺古墳群
35 丸山古墳群
36 横坂古墳群
37 本位田古墳群
38 水谷古墳群
39 豊福古墳群
40 宮古墳群
41 土井古墳群
42 甚田古墳群
43 高畑古墳群
44 島脇西挟間古窯跡
45 長尾廃寺
46 新宿廃寺
47 早瀬廃寺
48 櫛田廃寺
49 西下野遺跡
50 本位田谿遺跡
51 永谷遺跡

器も出土している。また、後期から晩期にかけてのものに佐用町本位田池尻遺跡（3）、南光町安川中島遺跡（14）がある。本位田池尻遺跡では石製耳飾・勾玉等の遺物が、安川中島遺跡では同時期の住居跡と注口土器が注目される。その他、時期は明らかでないが平福小学校グランド（平福遺跡15）から出土した石棒が注意されよう。

このように住居跡等遺構も発見されはじめ、播磨地方では宍粟郡とともに縄文時代研究の宝庫といえる。今後、山麓・台地部の開発には注目しなければならない地域である。

3．弥生時代

弥生時代の遺跡も4町全域に分布し、前期には段丘上・自然堤防上に、中期から後期には山麓台地部・段丘上・自然堤防上に立地する。遺跡は前・中・後期と継続するものもあり、中期から後期には数が増大している。

前期では、上月町金屋中土居遺跡（6）、佐用町本位田池尻遺跡（3）、石井遺跡（9）、三日月町西村遺跡（8）がある。いずれも新段階で、西村遺跡では住居跡も発見されたという。

中期には、上月町金屋中土居遺跡（6）、力万遺跡（16）、小赤松遺跡（17）、櫛田奥村遺跡（11）、早瀬遺跡（18）、佐用町山脇葉草遺跡（19）、下山脇遺跡（20）等があり、後期に続くものもある。すべて最近のほ場整備事業にかかる事前発掘調査で、何棟かの住居跡が検出されている集落遺跡である。埋納遺跡では、南光町平松銅剣出土地遺跡（21）の銅剣（中細B類）が出土状況とあわせ非常に注目される。

後期では、上月町大酒相の原遺跡（22）、金屋上土居遺跡（23）、秋里遺跡（24）、櫛田石井遺跡（25）、佐用町本位田池尻遺跡（3）、石井遺跡（9）、南光町林崎遺跡（26）、三日月町植木遺跡（5）、徳平（蛇の杖）遺跡（27）、春哉遺跡（12）等がある。徳平遺跡以外は何棟かの住居跡を検出し、本位田と植木遺跡は古墳時代に続いている。特記すべきは、大酒相の原遺跡の2重に巡るという環濠である。県下では、住居群を濠で囲む例は非常に珍しいものである。埋納遺跡では、三日月町下本郷銅鐸出土地（28）の銅鐸（突線鈕式6区袈裟襷文）がある。行方不明だった現物は、最近米国のメトロポリタン美術館に所蔵されていることが明らかにされた。その他、記しておかなければならないものに、佐用町宗行井谷遺跡（29）の銅鏃

と甕石遺跡（30）の壺棺がある。井谷例は採集品で共伴遺物が明らかでないため、遺跡の性格は把握できないが、数少ないこの時期の青銅製品として注目されよう。甕石例は山林の開墾時に発見した墳墓群である。

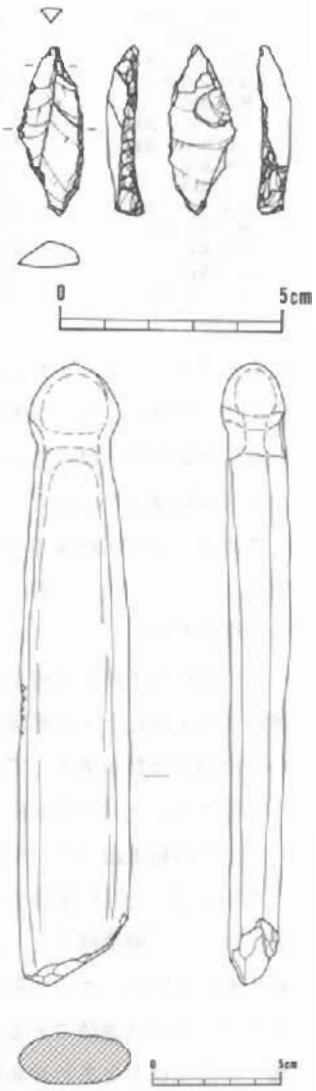
このように、縄文時代晩期に北九州に入ってきた水稲耕作は、揖保川もしくは千種川を遡り郡内各地で前期新段階から段丘上に集落を構え、低地の水田開発を行ってきたのである。中期前半の集落遺跡は現状で見当たらないものの、平松銅剣の保有は注目すべきものであり、中期後半からは、他地域と同様に遺跡数が増加することから、水田開発はさらに進んだのであろう。下本郷銅鐸の存在がこのことを裏付けている。注意すべきは環濠集落の存在である。規模・構造等明らかでないが、播磨の西部にあって、山陰・山陽の影響を受けやすい地域での検出は注目に値しよう。

4．古墳時代

古墳時代の遺跡は、まず弥生時代後期から続く集落遺跡と5世紀後半から造られる古墳があげられる。集落の立地は台地部・段丘上・自然堤防上であり、古墳は山麓部に多く分布する。

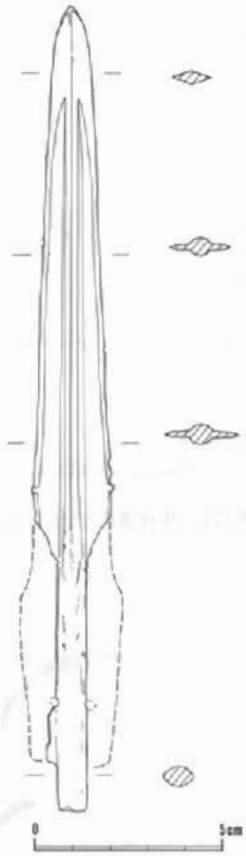
前期の集落遺跡では、佐用町本位田池尻遺跡（3）、三日月町植木遺跡（5）がある。墳墓には佐用町吉福遺跡（31）に5群13基の集団墓が見られるが、いわゆる前期の古墳は知られない。

中期になると、集落遺跡に上月町金子遺跡（32）がある。住居跡から鍛冶滓と製塩土器が出土しているのが注目される。古墳には上月町上月中学校校庭古墳（33）、佐用町愛宕塚古墳　（円応寺古墳群34）が知られる。前者は径28mの2段築成の円墳で、竪穴式石室に組合式石棺をもつと言われる。後者は一辺22mの方墳であるが、埋葬主体部は不明である。



第5図　ナイフ型石器・石棒

後期には、上月町櫛田遺跡（11）、三日月町春哉遺跡（12）、長田遺跡（13）の集落遺跡が知られ、古墳は横穴式石室を埋葬主体とするものが数多く存在する。上月町丸山古墳群（35）、佐用町円応寺古墳群（34）、横坂古墳群（36）、本位田古墳群（37）、水谷古墳群（38）豊福古墳群（39）、南光町宮古墳群（40）、土井古墳群（41）、菰田古墳群（42）、三日月町高畑古墳群（43）等である。注目できるのは横坂1号古墳が郡内唯一の前方後円墳の可能性があること、円応寺5号古墳で珠文鏡が出土したこと、本位田2号古墳に単鳳式環頭大刀と高畑2号古墳に双龍式環頭大刀が出土したことである。



第6図　平松出土の銅剣

その他、古墳時代の遺跡に窯跡がある。三日月町島脇西狭間池窯跡（44）である。採集遺物の時期に若干幅があるが、ここでは6世紀末から7世紀初頭としておく。

このように古墳は、佐用郡内では中期の後半から築造が開始され、竪穴式石室から木棺直葬墳を経て後期の横穴式石室をへ繋がっていくのである。なお、前期のものはおそらく絶対的な権力者が育っておらず造られなかったであろう。古墳に比べ、集落跡については幾つかの住居跡が見つかっているものの、規模・構造など未だ不明な点が多く今後の課題として残る。生産遺跡としての製鉄跡も古墳時代にまで遡る可能性はあるが、当時期のものは現在まで未発見である。

5．歴史時代

歴史時代の遺跡としては、官衙跡・寺院跡・生産跡等が知られる。

佐用郡の郡衙は沖田平野内にあると推定できるが、決め手となる遺構の検出はない。現状では、佐用町本位田池尻遺跡（3）が方形掘り方1mの掘立柱建物跡をもつことから候補として有力である。

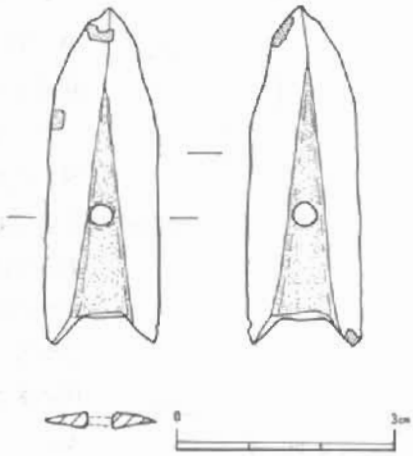
寺院跡関係では、白鳳期のものに佐用町長尾廃寺（45）がある。塔心礎が残存するほか、最近の発掘調査で中門に相当する遺構が検出されている。奈良時代では、三日月町新宿廃寺（46）がある。古瓦が出土するものの、その内容は明らかでなく、『延喜式』に記載のある美作路を通る「中川駅」とも考えられている。その他、礎石が残存する上月町早瀬廃寺（47）と、かつて礎石があり古瓦を出土する櫛田廃寺（48）がある。しかし、年代は明らかでない。なお、櫛田廃寺では発掘調査で平安期の掘立柱建物跡が見つかっている。また、式内社として佐用都比売神社と南光町天一神社が鎮座する。

生産跡には、製鉄遺跡である南光町西下野遺跡（49）、上月町金屋中土居遺跡（6）、佐用町山脇カジヤ遺跡（7）等と瓦窯遺跡の佐用町本位田逧遺跡（50）がある。西下野遺跡は、奈良時代初頭と考えるたたら炉5基に炭置き場と砂鉄置き場等を検出しているが、あとのものは明確な時期決定ができない。本位田逧遺跡は、未調査であるが長尾廃寺の瓦を焼いた窯跡と推測される。その他、最近佐用郡教育委員会が実施している生産遺跡（製鉄）の調査では佐用町永谷遺跡（51）が奈良時代と推定される等、多くの成果も上がっている。

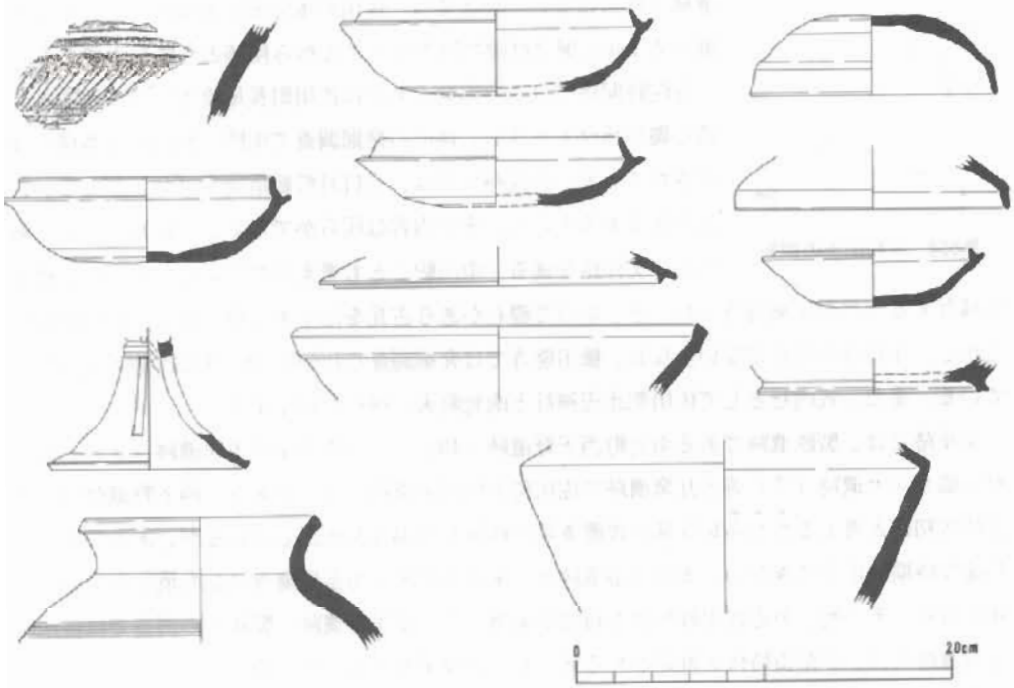
奈良・平安時代では、このように郡の役所と仏教流布の遺跡を見ることができ、諸廃寺は郡内の主要道路である美作路と、山陽路につながる道沿いに点在するのである。さらに注目しなければならないのは、『播磨国風土記』に記載の見える製鉄関係の記録である。時代決定を欠

くとはいえ、郡内のいたるところで鉄滓が出土し、西下野遺跡では確実に８世紀初頭に遡る製鉄跡を発見しているのである。今後は、これら鉄滓出土地に注意し、さらに初源を追求すべき必要があろう。

また、長尾・沖田遺跡で検出した平安時代初頭の道路遺構は条里に伴うものと考えられ、これの復元も課題となってきた。



第7図　井谷遺跡出土の銅鏃



第８図　三日月町島脇西狭間池窯跡表採土器

第３章　調査の記録

第１節　遺跡の立地と基本堆積土層

各調査年度の概要は第１章のとおりであるが、昭和58年度と60年度のように調査地区が年度をまたがって重複したこともあり、煩雑なものとなっている。そこで、本報告にあたっては新たに現存の道路・水田畦畔を利用し、Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ（第１図）の４地区に区分している。以下、これに従って記述する。

１．遺跡の立地

地形分析から見れば、当該地区は大撫山頂上から東南に張り出した山地、その裾野に拡がる居住域及び墓域に利用されたであろう上位・中位段丘（長尾台地）と、佐用川右岸に延びる水田としての利用が考えられる低位段丘・氾濫原（沖田平野）から成りたっていることが理解できる。

山地には幾つもの深い谷が入りこみ、これが扇状地状の台地を形成したようである。また微地形を見れば、この台地にも幾つかの浅い谷が存在する。バイパスは、この南東に延びる中位台地を南北に横断するかたちで設計された。南から佐用川の氾濫原、Ａ・Ｂ地区の段丘、Ｂ地区～Ｃ地区間に谷が入り、再度Ｃ・Ｄ地区の段丘に至る訳である。

弥生時代から古墳時代前期の集落は、遺跡名は異なるがこの台地全域に拡り、ひとつの遺跡として捉えることが可能である。奈良時代には、台地中央部に寺院が存在し、長尾から本位田にかけて条里地割りも施行されている。

２．基本堆積土層と検出遺構

調査地点の立地は上記の通りであり、段丘とその間の谷部とでは土層堆積は大きく異なっている。

調査地点センターの南北ライン縦断面観察からみた基本堆積土層は、次のごとくである。

Ａ・Ｂ地区

Ａ・Ｂ地区は、段丘部と北の谷部からなる。段丘部の層序は、以下の通りである。

第Ⅰ層―水田耕作土（厚さ平均20cm）

第Ⅱ層―灰褐色中～粗砂（厚さ平均５cm）

第Ⅲ層―黄褐色地山層

弥生時代から古墳時代の遺構は第Ⅲ層面を切り込んで造られ、埋土は黒褐色中〜粗砂である。検出した遺構は、土壙・木棺墓・竪穴住居跡・柱穴（掘立柱建物）・溝がある。標高は 110.30 mである。

第Ⅱ層は、中世の水田耕作土（弥生〜中世の遺物を含む層）であり、弥生時代及び古墳時代の生活面を大きく削平していると思われる。

この地は、近世以降も水田として利用され、現代に至っていると考えられる。

次に谷部は、以下の通りである。

第Ⅰ層—水田耕作土（厚さ平均20cm）

第Ⅱ層—灰褐色シルト質中〜粗砂（厚さ平均35cm）

第Ⅲ層—黒褐色シルト質中〜粗砂（最大厚さ55cm）

第Ⅳ層—黒褐色シルト質粗砂〜礫（最大厚さ75cm）

第Ⅴ層—青灰色シルト質粗砂〜礫層（最大厚さ40cm）である。

第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層は堆積層で、最下層のⅤ層（標高は 108.75 m）は弥生時代中期〜後期の遺物が包含されている。

この事実から、谷の埋没は弥生時代中期頃に始まったことが理解できる。

第Ⅳ層は遺物を含まない層で、第Ⅲ層には多量の木器・自然木などの植物遺体と奈良時代の土器を伴っていた。

第Ⅲ層上面が平安時代前期と考える道路面である。段丘上では削平されて残っていなかったが、道路の上面には礫及び一部瓦片を敷き均し、西側にのみ溝を持っている。また、低湿地部は丸太材や巨礫を敷いて構築する。

C・D地区

南に谷をはさみ、再度段丘面となる。層序は以下の通りである。

第Ⅰ層－水田耕作土（厚さ平均15cm）

第Ⅱ層－褐色中〜粗砂（厚さ平均10cm）

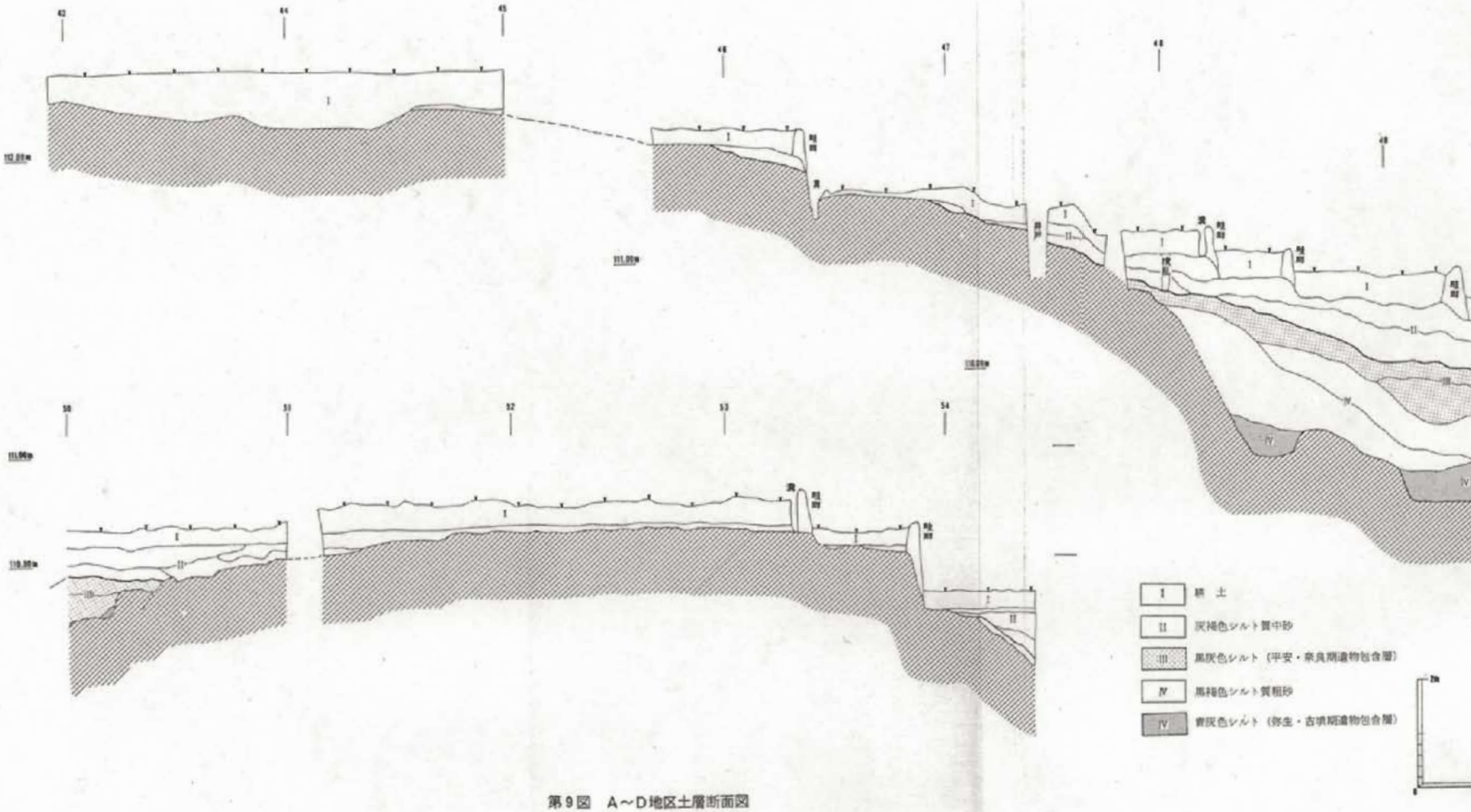
第Ⅲ層－黄褐色地山層である。

弥生時代〜平安時代の遺構は、すべて第Ⅲ層面を切り込んで造られ、埋土は黒褐色中〜粗砂である。

検出した遺構には、土壙・木棺墓・竪穴住居跡・柱穴（掘立柱建物）・道路（側溝のみ）がある。標高は 112.10 mである。

第Ⅱ層は、中世以降の耕作土で、弥生〜近世の遺物を包含する層である。なお、この造成で弥生時代〜平安時代の遺構面を大きく破壊している。

ここでも、近世以降の遺物が少し出土するが、基本的に水田としての利用が考えられる。そして、現代の水田に繋がる訳である。



第9図　A～D地区土層断面図

第2節　遺　　構

1．弥生～古墳時代

この時代の遺構は、遺跡の西から張り出した台地縁辺部に所在する。この地点、すなわちA地区・B地区が台地縁辺部であることは、A地区では南側に向かいなだらかに傾斜し、B地区では、北東方向に明瞭な段差をもつことからも明らかである。

これらは、遺構の立地から見ても、肯定されるところで、明らかに弥生～古墳時代の遺構は東へ張り出した台地の尾根筋に位置している。

発掘調査区は、この台地縁辺部にちょうど南北方向に設定したもので、A地区の東はまだ台地上にある。

弥生～古墳時代の遺構の存在するA地区・B地区の基本土層は、Ⅰ、耕土・床土、Ⅱ、灰褐色シルト質中砂、Ⅲ、黒灰色シルト、Ⅳ、黒褐色シルト質粗砂、Ⅴ、青灰色シルトであるが、A地区中央部西側が、標高が最も高く、この地区では、Ⅰ層を削いだ段階で遺溝を検出している。

A・B地区の遺構

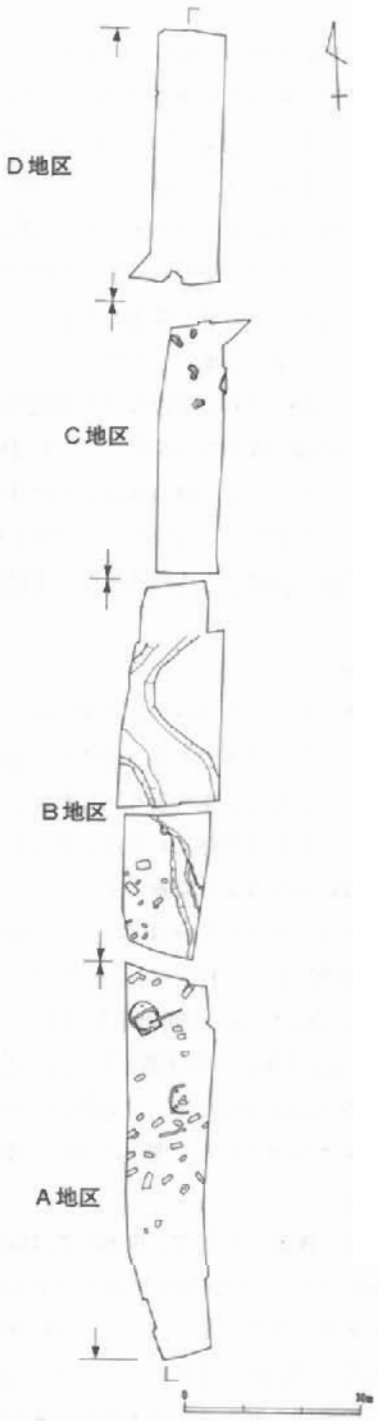
A・B地区には、3棟の竪穴式住居跡と40基の土壙、ほかに柱穴・溝が見られる。

A地区には、東側に張り出した尾根上の最高所に住居跡が検出されている。その住居跡を取り巻くように土壙が配置されているが、住居と墓域がはたして明確にとらえることができるかどうかを考えると、土壙と住居跡については、十分な検討が必要である。

住居跡　1

昭和57年の範囲確認調査で検出されたもので、方形住居跡2によって切られている。

住居の平面形態は円形で、直径4.9mである。



第10図　弥生時代遺構配置図

周溝は西側にわずかに残るのみであり、その部分でも、幅20cm・深さ4cmを測るにすぎない。また、住居の壁もほとんど残っておらず、住居跡2によって切られた東南部は全く残っていないが、西側の最もよく残っている所でも床面との比高差は3cmしかない。これは、尾根の最も高所に位置していて削平を受けたためで、東側の平面プランはわずかに残った周壁から推定している。

柱穴は、南北方向に明瞭な2本を確認しえたが、それ以外には同様な埋土をもつピットは検出できなかった。また、住居跡のほぼ中央に直径46cm・深さ19cmの不整円形の中央ピットがみられる。この住居跡からは、弥生時代後期の土器片が出土した。

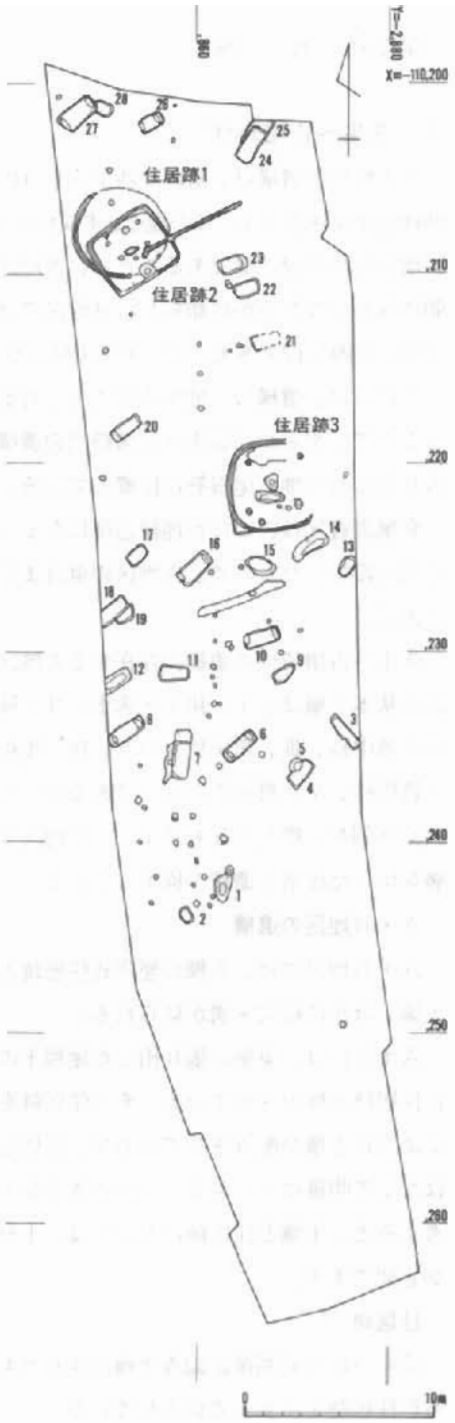
住居跡 2

住居跡2を切ったコーナーが幾分丸くなった平面方形の竪穴式住居である。南側約1mほどは、明瞭さは欠くものの東へ張り出した幅1mのベッドをもつ。1号住居跡よりは深く掘られているために、残存状況はより明瞭である。

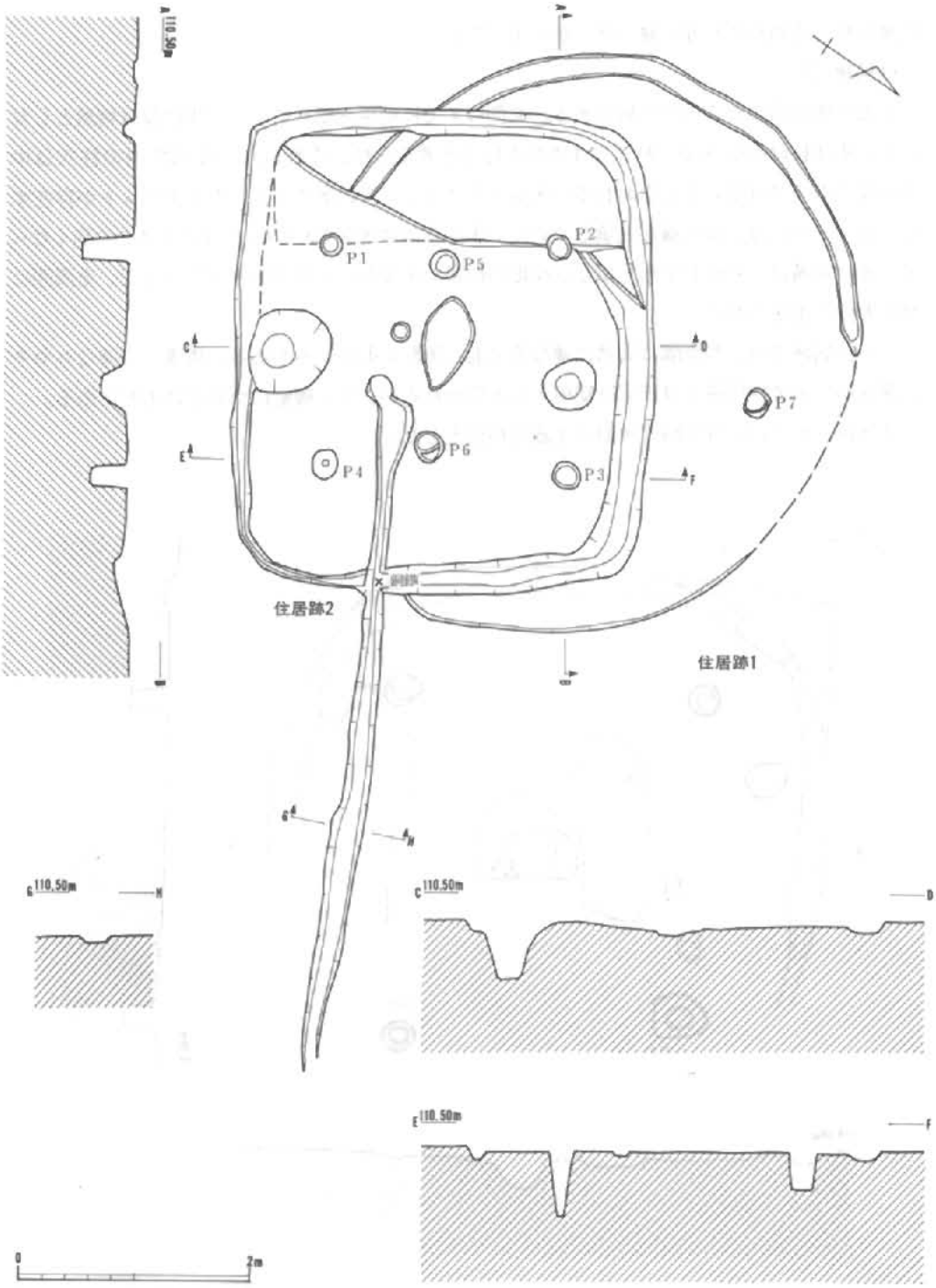
住居跡は、南北3.6m・東西4.2mの規模で、全周囲に周溝が廻る。柱穴は、4箇所で、それぞれ南北2m・東西1.9mの間隔を有する。ベッドの面積は2.7㎡で床面との比高差が4cmしかない。

住居跡のほぼ中央には、平面楕円形のピットがあり、深さ5cmである。埋土には焼土は認められなかった。

周溝は、断面U字形で、東南部では幅20cmと細くなるものの、北部あたりでは30cmもある。ベッドと周溝との接点では、ベッドから延びる溝が認められる。住居跡のほぼ中央からは、幅15cm・深さ8cmの溝状の掘り込みが床面と周溝を横断して住居跡外へ延びる。住居跡2の出土遺物は弥生時



第11図　A地区　弥生時代遺構配置図



第12図　住居跡１・２実測図

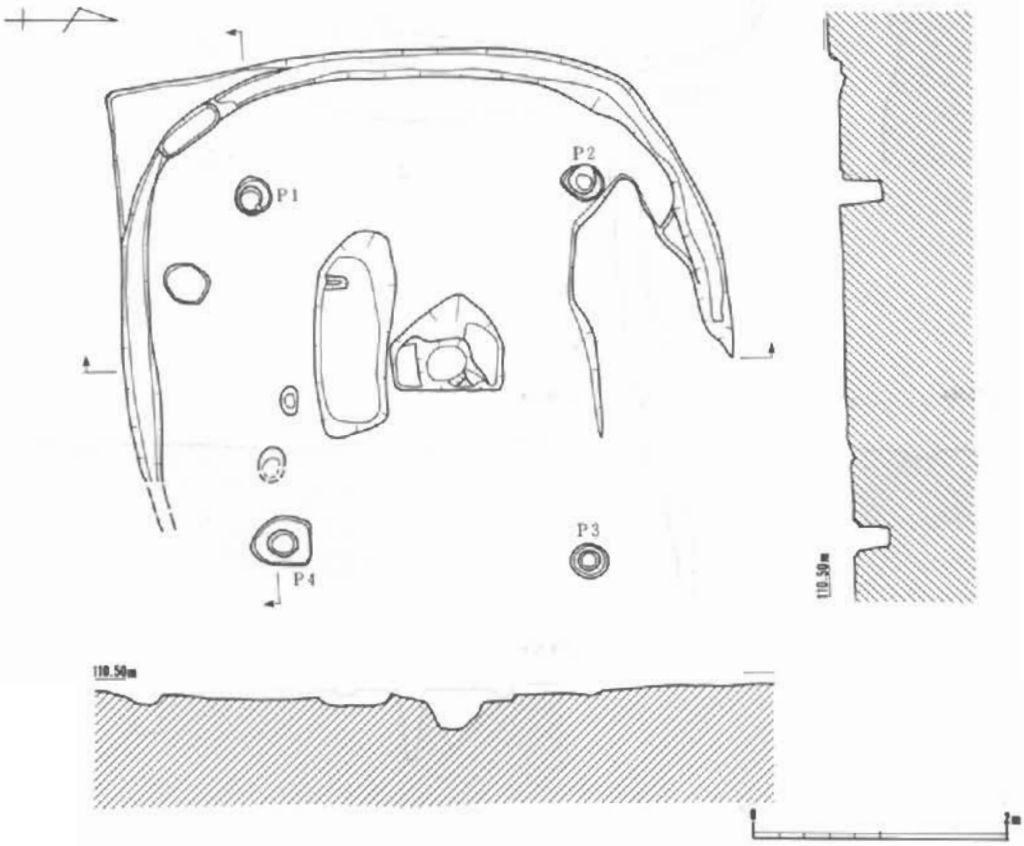
代後期から古墳時代初頭の甕（56）が出土している。

住居跡 3

平面形態は胴張りの円形住居である。東側はすでに削平を受けており、東西長は判然としないが、南北長は4.8mある。柱穴は4本が主柱穴と考えられ、これ以外の住居跡内の柱穴は中世以降のものではないかと思われる。床面中央には、二段に掘り込まれた中央ピットが存在する。ピット内には、炭化層が充填していた。床面はほぼ水平であるが、北側がわずかに高くなっている。周溝は、断面U字形を呈し、局地的に差があるものの幅20cm・深さ10cmで、全周囲に廻るものと推定される。

この住居跡では、西南隅に周溝に連なる平面三角形の掘り込みがある。周溝との連なりやその深さからみて住居跡とほぼ同時期のものと思われるが、その機能については不明である。

住居跡3からは、弥生時代後期の土器片が出土した。



第13図　住居跡3実測図

土壙はA・B地区で総数40基を調査した。これらは、昭和60年度の調査区中央にある小さな谷で二分された南北の微高地上に立地しているが、その分布状況は、南の微高地の方が多い。

これらの土壙は、調査中の検出状況とその形状から、便宜上4つに分類できる。それらの特徴は以下のようになる。

1．木棺の痕跡を検出できたもの。

2．掘削中には木棺の痕跡を検出できなかったが完掘時に木棺の小口穴を検出したもの。

3．木棺の痕跡を検出できなかったが、掘り方が長方形に近い形をしているもの。

4．掘り方の形が不定形のもの。

1・2は木棺墓である。3には木棺墓・土壙墓あるいは土壙が混在している可能性があるが、いずれとも確定できないため、本報告書では全て土壙として扱っている。

以下個別の土壙について述べる。

土壙29

木棺の両側板の中に小口板をはめこむタイプの木棺墓である。小口穴は検出されなかったため、小口を底板の上に置くタイプと推定される。

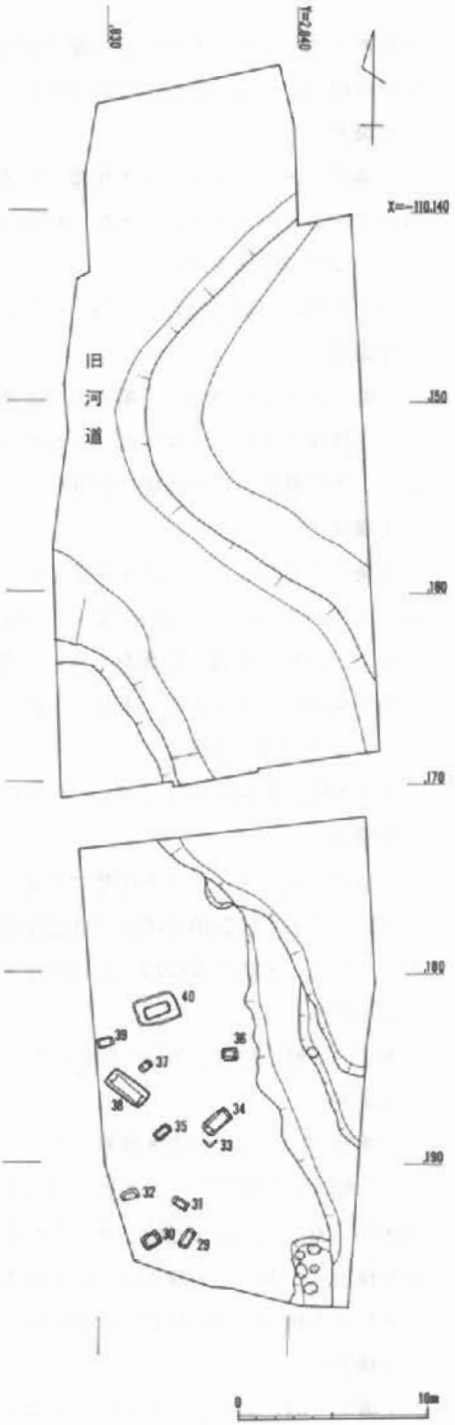
小口の幅は、北側が19cm・南側が16cmであり、頭位は北と推定される。墓壙内で20cm角の石が出土しており、意識的に入れたものと思われる。

木棺の規模は、長軸78cm・幅19cmを測り、木棺の痕跡を検出した面からの深さは16cmを測る。

木棺の主軸方位はN32°Eである。

土壙30

土壙29同様、木棺の両側板の中に小口板をはめこむタイプである。また両小口板を立てるための小口穴も検出した。小口の幅は、北側が27cm・南側が26cmであり、この数値からは、頭位がどちらであるか



第14図　B地区　弥生時代遺構配置図

は判断できないが、やや広い北側を頭位方向とすると、木棺の主軸方位はN59° Eとなる。木棺の規模は、長軸143㎝・幅27㎝を測り、木棺の痕跡を検出した面から深さは11㎝を測る。

土壙31

土壙30とおなじタイプの木棺墓である。小口の幅は、北側が17㎝・南側が19㎝であり、頭位は南であると推定される。木棺の規模は、長軸45㎝・幅19㎝を測り、木棺の痕跡を検出した面からの深さは16㎝を測る。

また木棺の主軸方位は、N74° Wである。検出した木棺の中で最も小さいものである。

土壙33

土壙34に切られており、掘り方の南隅しか遺存していなかったため、全体の規模は不明である。遺構検出面からの深さは12㎝を測る。木棺の痕跡を検出していないが、その掘り方の形状から、木棺墓であった可能性が強い。

土壙34

土壙29とおなじタイプの木棺墓である。小口穴は検出されなかったため、小口を底板の上に置くタイプであろう。小口の幅は、北側・南側とも35㎝であり、木棺の規模からは頭位は不明である。しかし墓壙の形状をみると、南側が北側にくらべて広くなっており、これを根拠として南側を頭位と推定する。木棺の規模は、長軸94㎝・幅35㎝を測り、木棺の痕跡を検出した面からの深さは26㎝を測る。

また木棺の主軸方位は、N41° Eである。

土壙35

土壙29と同じタイプの木棺墓である。小口穴は検出されなかった。小口の幅は、北側・南側とも16㎝であり、数値規模からは頭位は不明である。しかし木棺全体の印象から北側が頭位と考えられる。木棺の規模は、長軸63㎝・幅16㎝を測り、木棺の痕跡を検出した面からの深さは16㎝を測る。

木棺の主軸方位は、N52° Eである。

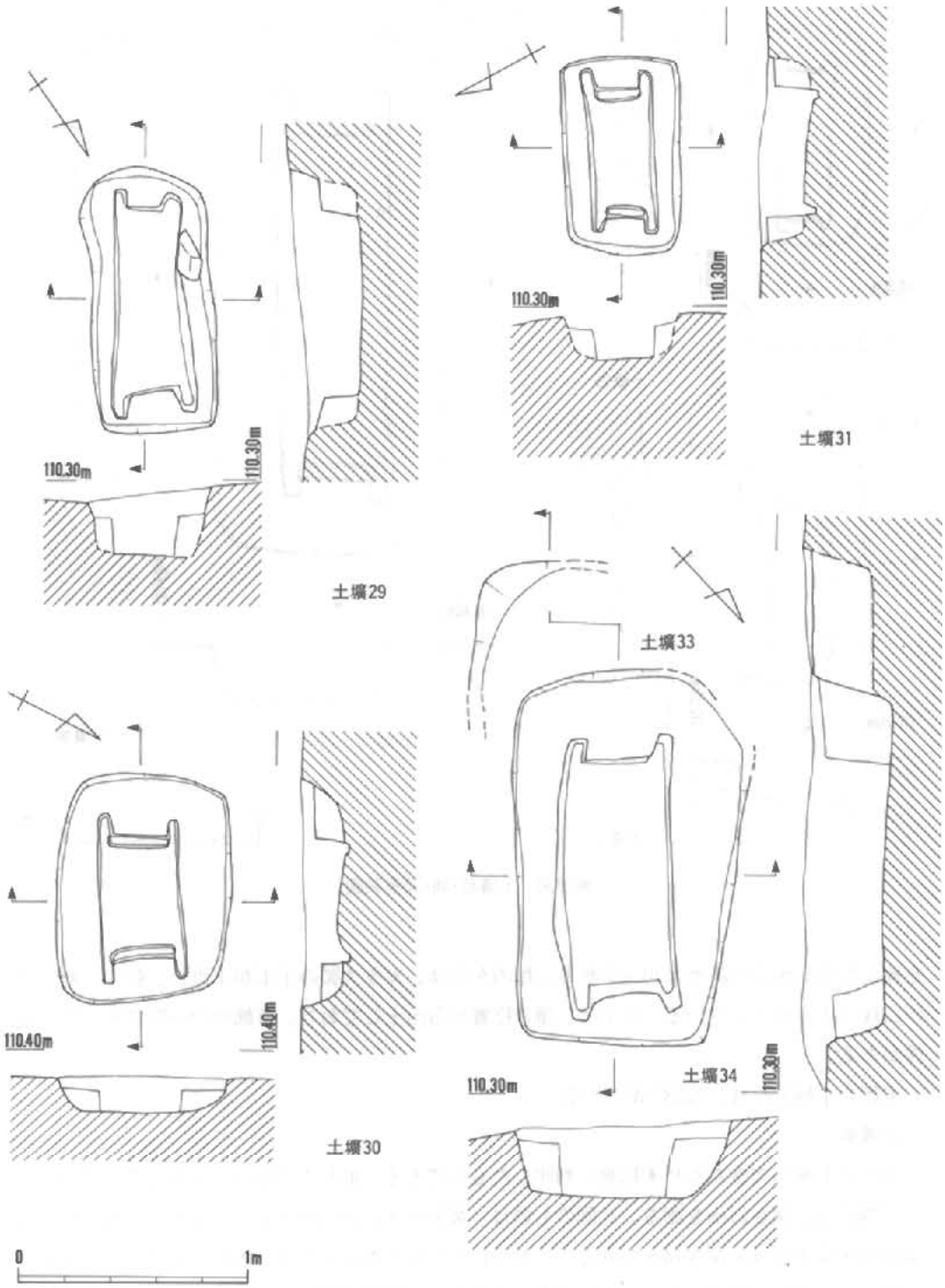
土壙36

土壙35と同じタイプの木棺墓であり、規模もほぼ同じである。小口穴は検出されなかった。小口の幅は、北側が17㎝・南側が16㎝であり、数値規模からは頭位は不明である。しかし木棺全体の印象から北側が頭位と考えられる。木棺の規模は、長軸74㎝・幅17㎝を測り、木棺の痕跡を検出した面からの深さは18㎝を測る。

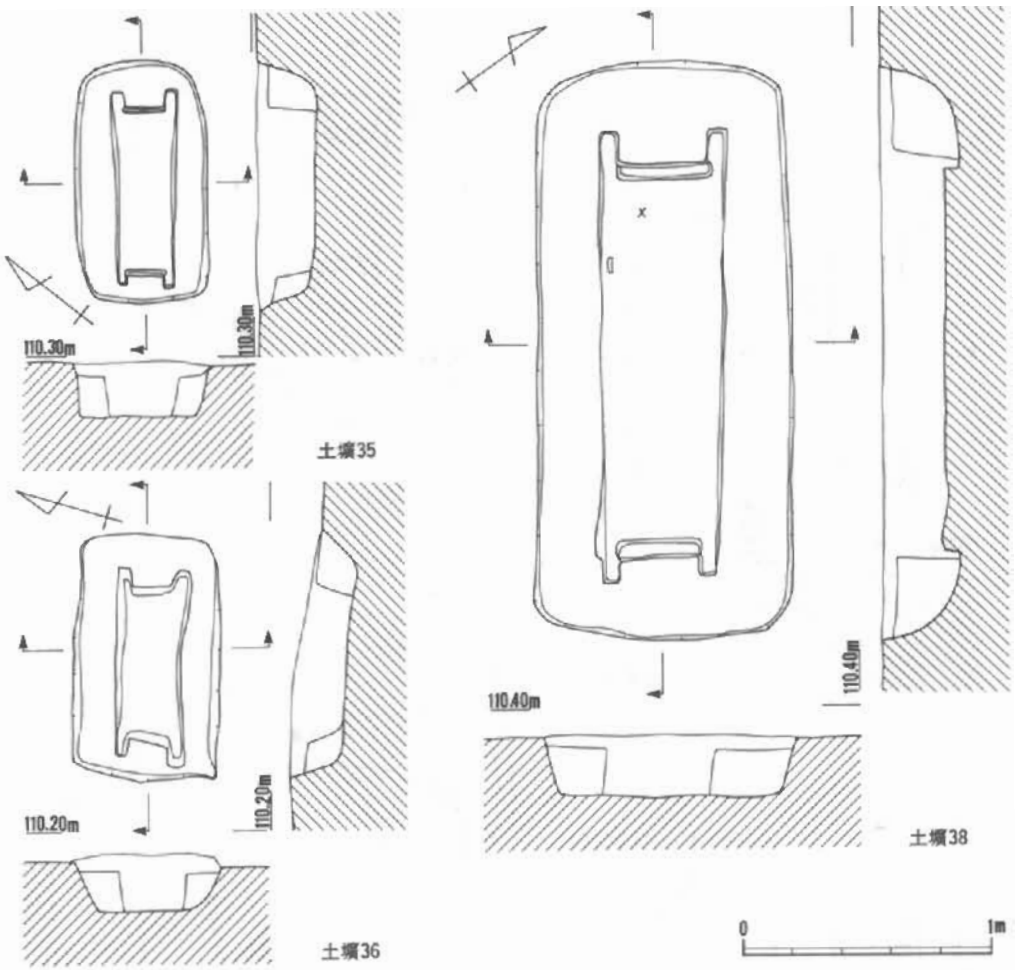
木棺の主軸方位は、N77° Eである。

土壙38

土壙30・31と同じ小口を掘り込むタイプの木棺墓である。小口の幅は、北側が38㎝・南側が34㎝であり、北側が頭位と考えられる。木棺の規模は、長軸143㎝・幅38㎝を測り、木棺の痕



第15図　土壙29・30・31・33・34実測図



第16図　土壙35・36・38実測図

を検出した面からの深さは20cmを測る。棺内からは、ガラス製の小玉が1点と、弥生土器の甕の口縁が1点出土している。管玉は、頭の位置から出土しており、首飾りの一部であった可能性がある。

木棺の主軸方位は、N53°Wである。

土壙6

小口穴を検出できたため木棺墓と判明したものである。掘り方の形状は長方形で、南北190cm、幅77cm、深さ21cmを測る。北側のものは、幅58cm・長さ14cm・深さ20cmで、南側のものは、幅66cm・長さ22cm・深さ14cmである。これらのことから推定すれば、木棺は長軸145cm・北小口幅58cm・南小口幅66cmの内法寸法が考えられる。土壙底面の深さは一定ではなく、北側では8cmであるのに対し南側では18cmある。また掘り方が小口穴から南では深さ10cmで止まってい

る。小口穴の形状は、南側では西に北側では東に、それぞれ掘り方との間に5㎝程度の空隙が存在する。

主軸はN50°Eである。遺物は出土していない。

土壙10

2箇所の小口穴をもつタイプの木棺墓である。掘り方は不整形の長方形で、長軸184㎝・幅79㎝・深さ42㎝である。西の小口穴は、長さ24㎝・幅56㎝で、掘り方に接して掘られているが、東側は、8㎝掘り方よりも西側に離れて位置し、幅64㎝・長さ22㎝・深さ19㎝である。また、西側の小口穴は、東側が南北一杯に掘り込むのに対し、南側を6㎝空けて掘る。木棺の内法寸法は、長さ120㎝・幅は西側56㎝・東側64㎝と推定される。

主軸はN76°Eである。遺物は出土していない。

土壙8

A地区の調査区外に一部掘り方が延びるもので、2箇所の小口穴によって木棺墓と判明したものである。掘り方は不整の長方形で、他の土壙に比べやや大きく長軸240㎝・幅70㎝・深さ19㎝である。小口穴は、南北とも掘り方よりそれぞれ約30㎝内側に掘られ、南側に比べ北側の小口が大きく掘られている。北の小口穴は、幅63㎝・長さ21㎝で、南は幅37㎝・長さ10㎝となっている、木棺の内法寸法は、長さ148㎝・幅37㎝が想定される。

主軸はN50°Eである。遺物は出土していない。

土壙16

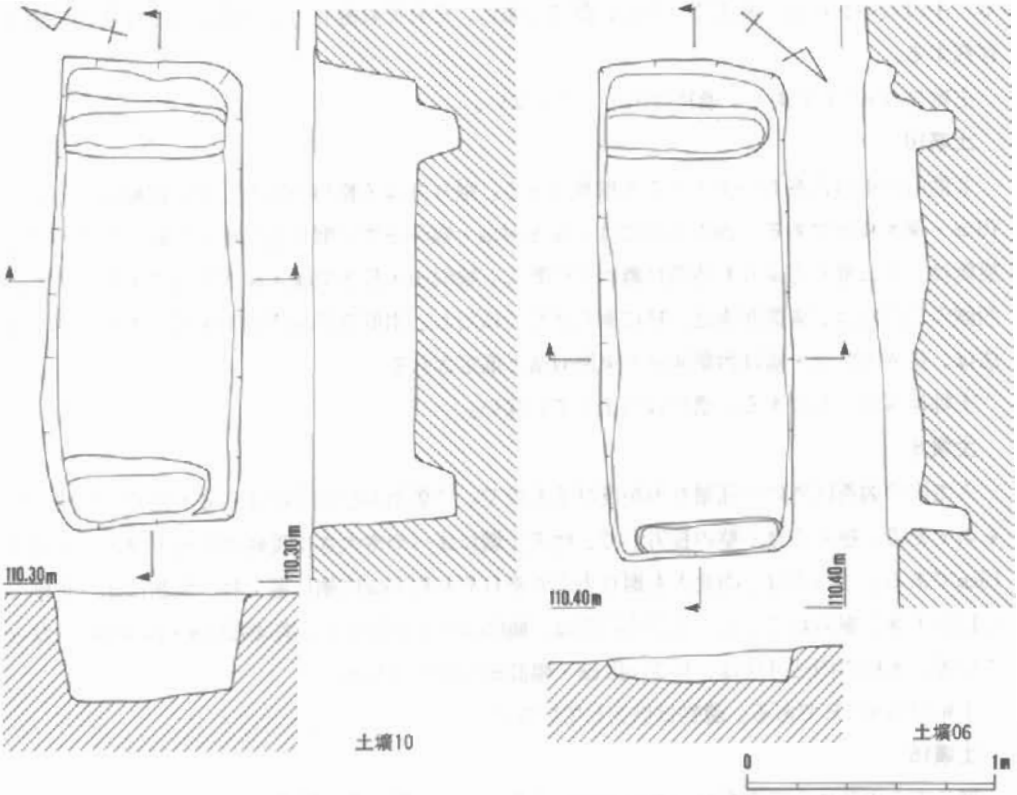
掘り方の両側に小口穴をもつタイプの木棺墓である。掘り方は長方形で、長軸202㎝・幅87㎝・深さ52㎝を有する。小口穴は、それぞれ掘り方に接して掘られ、ほぼ同じ大きさである。北の小口穴は、幅48㎝・長さ30㎝で、南は幅56㎝・長さ35㎝となっている、北の小口穴北隅と土壙内南側には20㎝ほどの礫が床面に接して位置している。この小口穴も他の例にみられるように掘り方の短軸方向一杯に掘り込むことなく、15㎝ほどの空隙がある。小口穴の深さは、土壙底面から南側では25㎝、北側では15㎝である。木棺の内法寸法は、長さ141㎝で、幅は北側が48㎝、南側56㎝が想定される。

主軸はN48°Eである。遺物は出土していない。

土壙20

他の土壙が複数で群をなしているのに対し、住居跡3の近くに単独で存在する。掘り方の両側に小口穴をもつタイプの木棺墓である。掘り方は長方形で、長軸172㎝・幅64㎝・深さ21㎝を有する。小口穴は、それぞれ掘り方に接して掘られ、南側が大きい。北の小口穴は、幅60㎝・長さ13㎝で、南は幅56㎝・長さ30㎝となっている。小口穴の深さは、底面から南側で22㎝、北側で28㎝ある。木棺の内法寸法は、長軸131㎝、幅は北側が60㎝、南側が56㎝と推定される。

主軸はN55°Eである。遺物は出土していない。



第17図　土壙６・10実測図

土壙26

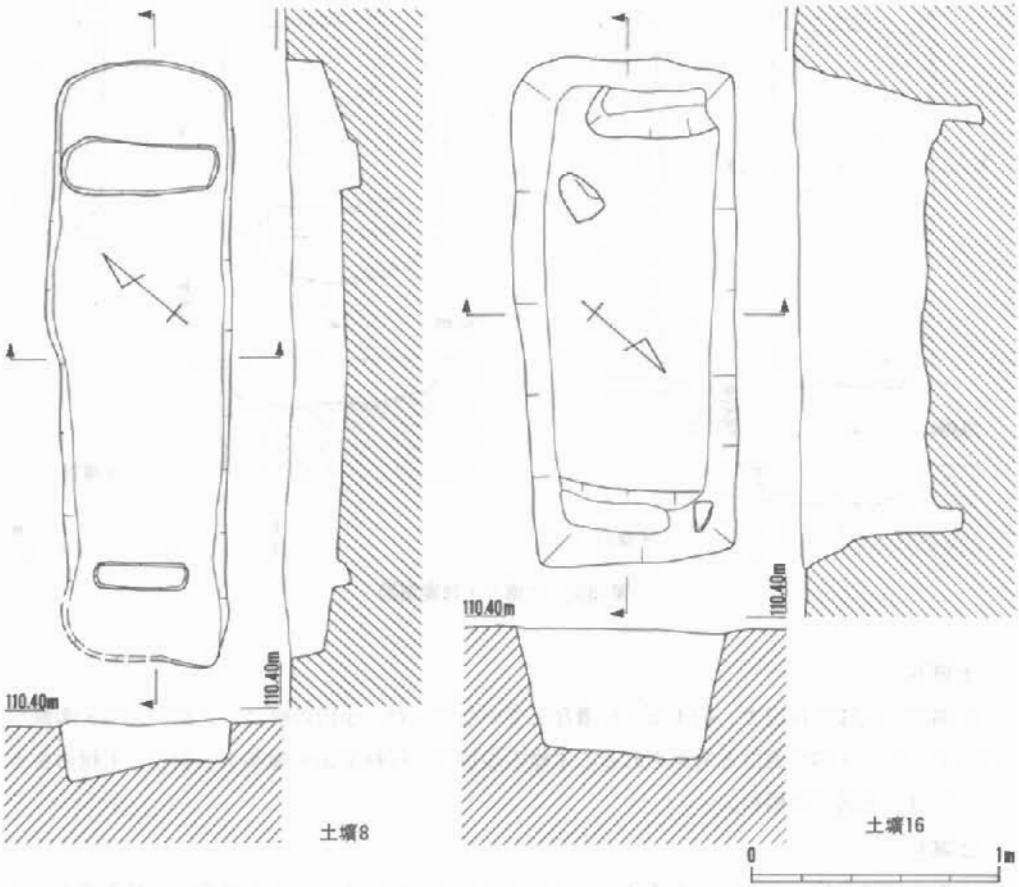
小口穴を東西に２箇所対置してもつ木棺墓である。掘り方の形状は楕円形で、長軸132㎝・幅89㎝・深さ24㎝である。北側の小口は、長さ19㎝・幅51㎝・深さ12㎝で、南側の小口は長さ13㎝・幅58㎝・深さ７㎝である。木棺は、長軸74㎝・北小口幅51㎝・南小口幅58㎝の内法寸法が考えられ、小型の埋葬施設であったことがわかる。土壙底面は、平坦である。

主軸はN58°Eである。遺物は出土していない。

土壙27

土壙26の東２ｍに位置する木棺墓である。土壙28と切りあっており、土壙28が先行して掘り込まれている。掘り方の形状は楕円形で、長さ214㎝・幅106㎝・深さ28㎝である。土壙は、東西側に小口穴が２箇所ある。北側のものは、幅70㎝・長さ20㎝・深さ８㎝で、南側のものは幅58㎝・長さ21㎝・深さ10㎝である。木棺は、長さ146㎝・北小口幅70㎝・南小口幅58㎝の内法寸法が考えられ、小型の埋葬施設であったことがわかる。土壙底面は、平坦である。

主軸はN46°Eである。遺物は出土していない。



第18図　土壙8・16実測図

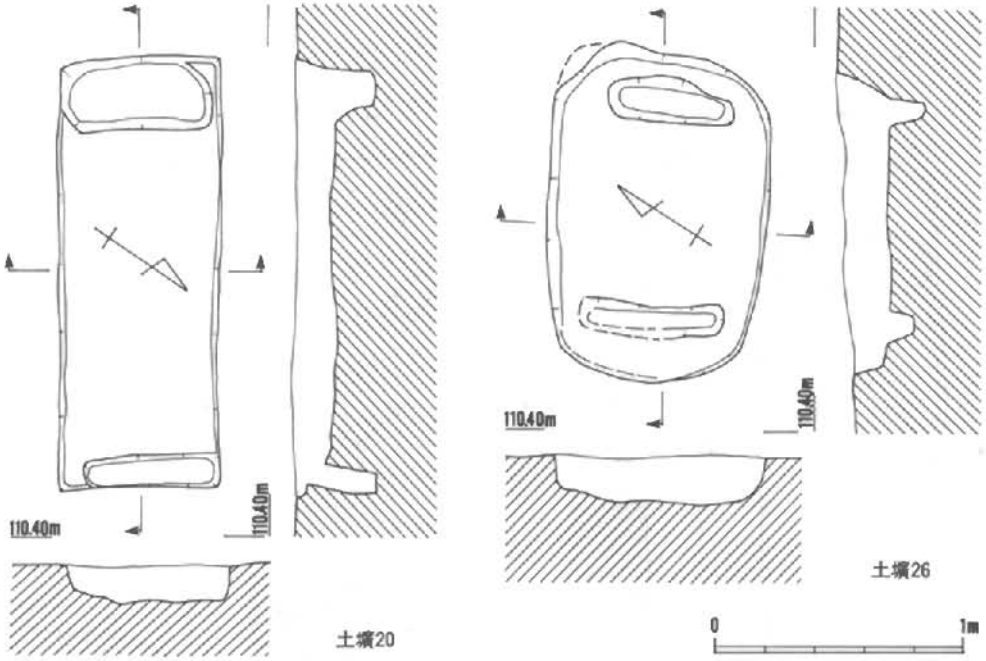
土壙28

土壙27と切りあっている。土壙の形状は、楕円形を呈するものと思われる。土壙の残存する長軸は86cm・幅は70cmである。土壙底面の形状は、やや中心が凹んでおり、深さは18cmある。

主軸はN23°Wである。遺物は出土していない。

土壙37

遺存していた深さが7cmと浅かったため、木棺の痕跡を検出できなかったが、小口穴を検出したため木棺墓と判明した。小口の幅は、北側が26cm・南側が27cmであり、墓壙の形状を加味しても、頭位は不明である。木棺の規模は、長軸50cm・幅27cmを測り、非常に規模の小さいものである。



第19図　土壙20・26実測図

土壙39

土壙37と同様の状況で、約4㎝しか遺存していなかった。小口の幅は、北側が32㎝・南側が29㎝であり、北側が頭位と考えられる。木棺の規模は、長軸50㎝・幅26㎝を測り、木棺の長さとしては、2番目に短い。

土壙40

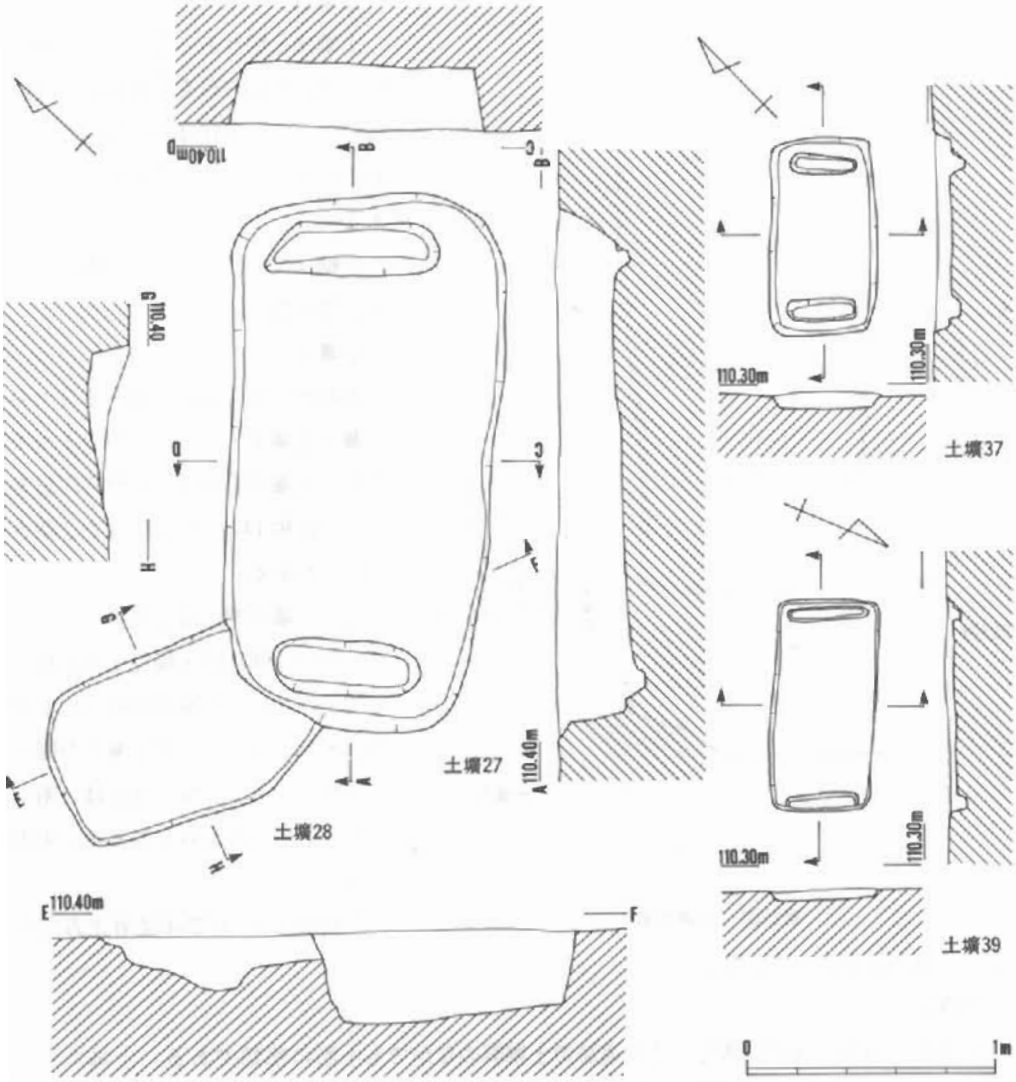
木棺の痕跡を検出したが、土壙29・30などのように側板が小口よりも外方へのびるタイプではなく、また小口穴を掘り込むタイプでもない。箱形の木棺であったと推定される。

墓壙は長軸225㎝・幅133㎝を測り、長尾・沖田遺跡の木棺墓の中では、最も規模の大きなものである。この墓壙と比較して、木棺の規模は長軸136㎝・幅62㎝と小さく、他の木棺墓よりも、木棺と墓壙の間が広く開いている。しかし、埋葬に伴うような遺物は出土していない。小口の幅は、北側が56㎝・南側が62㎝であり、南側が頭位と考えられる。また、木棺の主軸方位は、N68°Eである。

土壙11

小口を底板の上に置くタイプの木棺墓と考えられる。掘り方は長方形で、長軸142㎝・幅67㎝・深さ34㎝を測る。掘り方の東側に小口穴状の掘り込みが存在するが、対置する小口穴がないことから、小口穴とは考えにくい。

主軸はN88°Wである。遺物は出土していない。

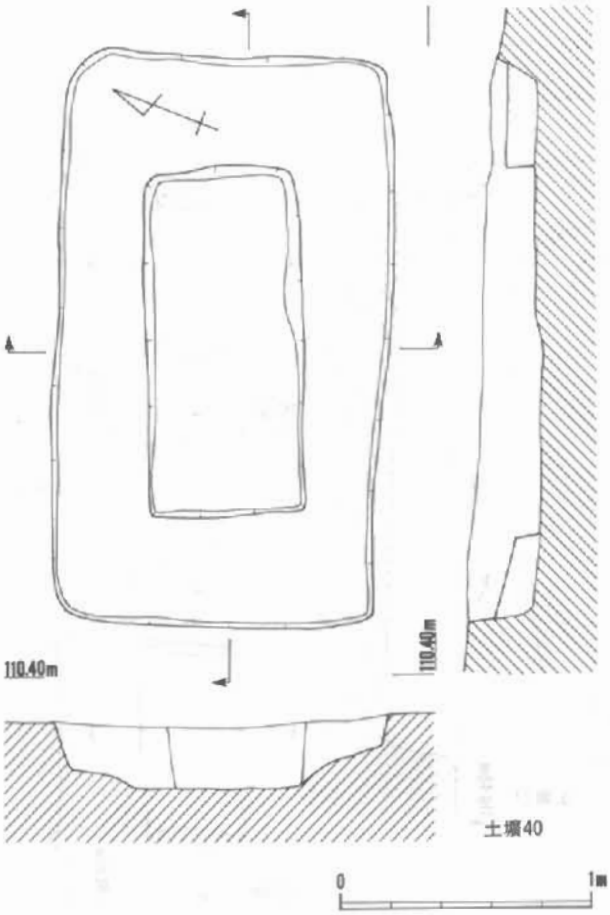


第20図　土壙27・28・37・39実測図

土壙18

木棺の痕跡は検出しえなかったが、形状から木棺墓と推定される。土壙19と切りあっており、土壙18が先行して掘り込まれている。土壙の形状は、約三分の一が調査区外へ延びるため全容は不明だが、ほぼ長方形を呈するものと思われる。調査区内の長軸は131㎝で、幅は80㎝である。壙底の形状はほぼ平坦で、小口穴はなく、深さは26㎝である。

主軸はN45°Eである。遺物は出土していない。



第21図　土壙40実測図

土壙19

土壙18と切りあっている。土壙の形状は、不整方形を呈するもので、長軸は108㎝・幅は83㎝である。底面の形状はほぼ平坦で深さは14㎝である。

主軸はN89°Eである。遺物は出土していない。

土壙1

A地区の最南端に位置する2つの土壙（土壙1・2）のうちの1つである。土壙の形状は、不整楕円形を呈し、長軸147㎝・幅80㎝で、深さは36㎝を測る。

この土壙の埋土は、黒色土であるが、その北側に暗灰褐色土の長楕円形で深さ20㎝の土壙が取りついており、それを切った形で土壙1が掘り込まれている。土壙の底面は、南へ向かって下方に傾斜しており、平坦ではない。

主軸はN3°Eでほぼ南北方向を示す。遺物は出土していない。

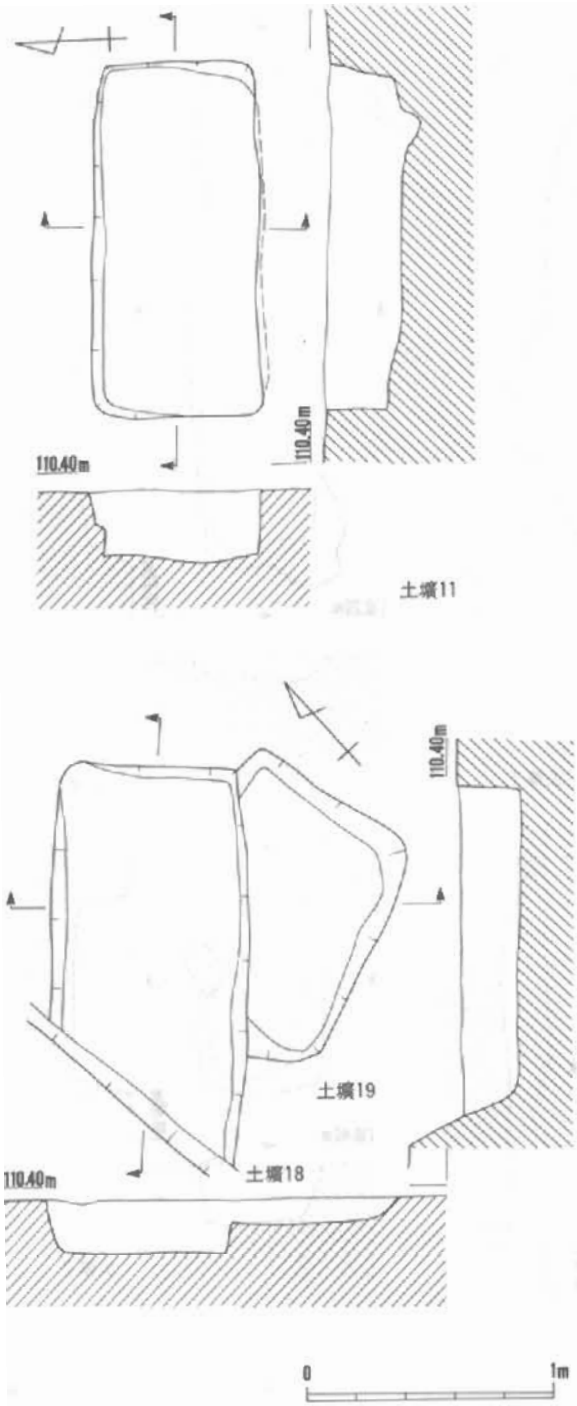
土壙2

土壙1の西南1.6mに位置し、この遺跡の土壙群のなかでも小形の部類である。土壙の形状は楕円形で、長軸80㎝・幅50㎝である、最深部の深さは23㎝で、長軸方向の底面はほぼ平坦であるものの、短軸方向は、西へ向かってわずかに下方に傾斜する。土壙の肩西には20㎝ほどの礫が1個埋土側に覆い被さるように位置する。埋土は黒色土である。

主軸はN40°Wである。遺物は出土していない。

土壙3

A地区の東南部に位置する。土壙の形状は、長方形を呈するが、2つの土壙が切りあったものである。埋土は黒色土で両者の境は明瞭ではないが、形状から推定すると、北側のものが長軸136㎝・幅54㎝で、南側は長さ62㎝・幅48㎝と考えられる。深さは南北ともほぼ同一で22㎝



第22図　土壙11・18・19実測図

である。

土壙3の北側には不定形の掘り込みが主軸を南北にして取りつくが、深さが数cmしかなく、必ずしも同様の遺構とは考えられない。

主軸はN40°Wであるが南側のものは、やや東にふれるものと思われる。遺物は出土していない。

土壙4

土壙3の南西約2mに位置する。土壙5と切りあっており、土壙5が先行して掘り込まれている。土壙の形状は、ほぼ長方形を呈するが、短辺は南側76cm・北側64cmと幾分台形気味になっている。土壙の長軸は150cmで、幅は74cmである。土壙底面は北へ向かって僅かに下る。深さは16cmである。

主軸はN45°Eである。遺物は出土していない。

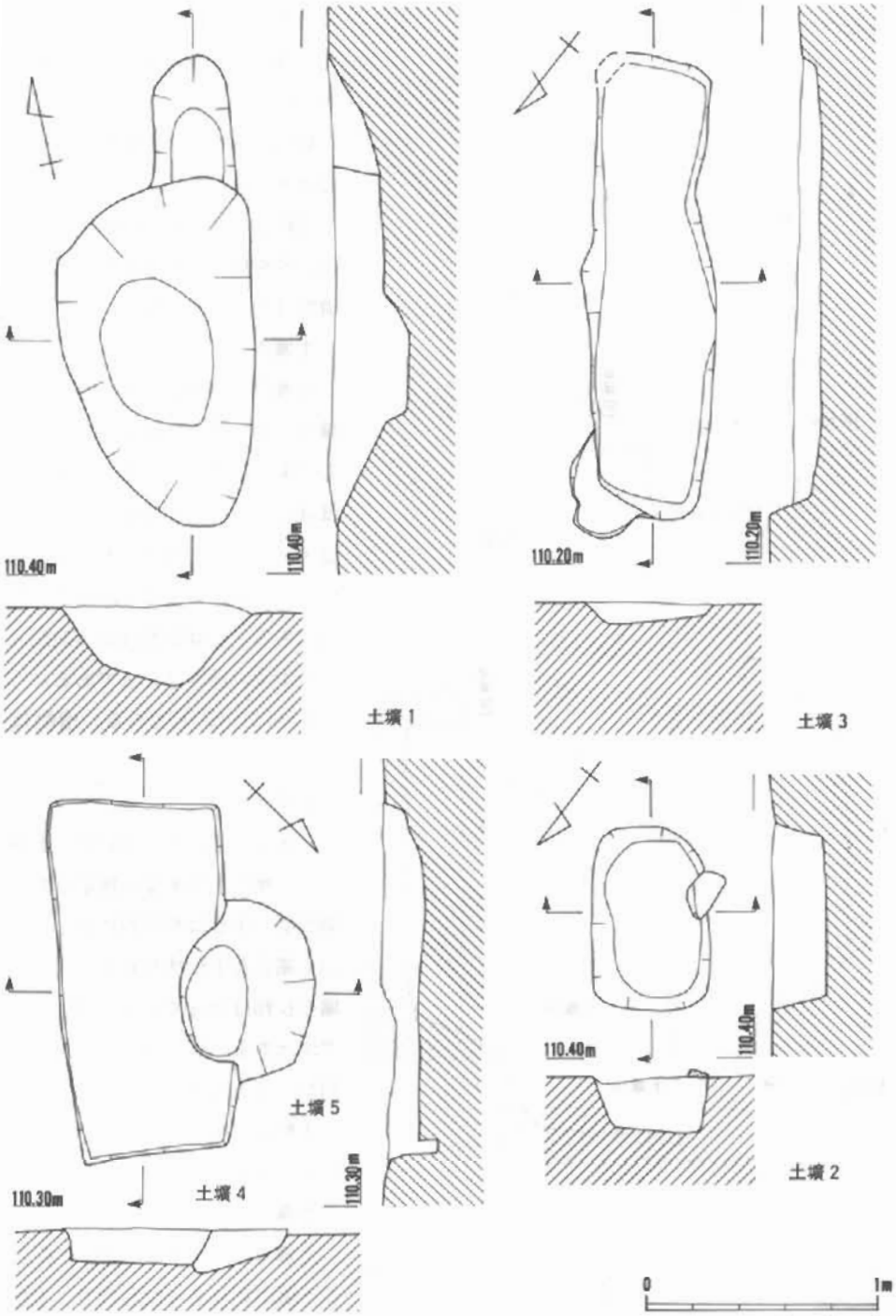
土壙5

土壙4と切りあっている。土壙の形状は。楕円形であると推定される。土壙底面の中心はやや西に偏しており他の土壙と若干形状が異なっている。土壙の長軸は78cmで、幅は残存する部位で58cmある。深さは20cmで徐々に西へ向かって下っている。

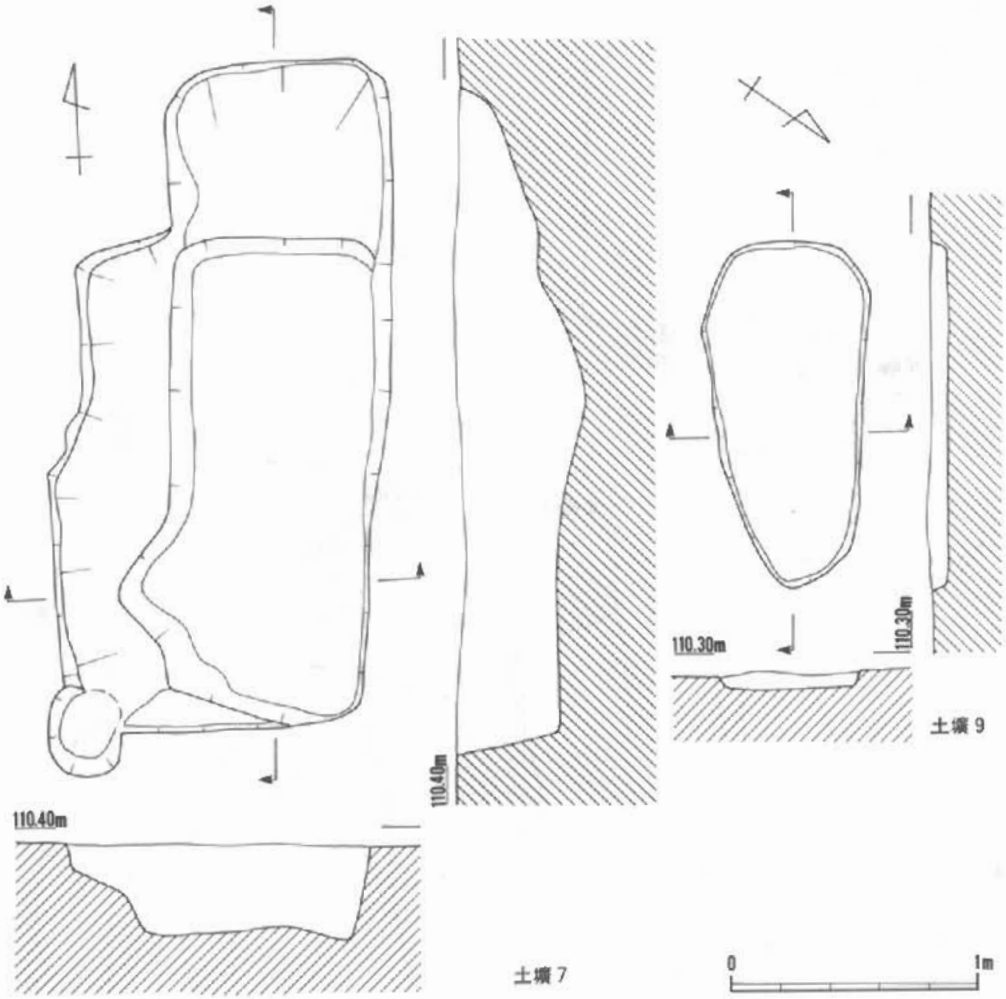
主軸はN45°Eである。遺物は出土していない。

土壙7

土壙6の西1.8mに位置する。複数の土壙が切りあったもので、木棺墓と考えられるものは南東の1基だけであ



第23図　土壙 1 ～ 5 実測図



第24図　土壙 7 ・ 9 実測図

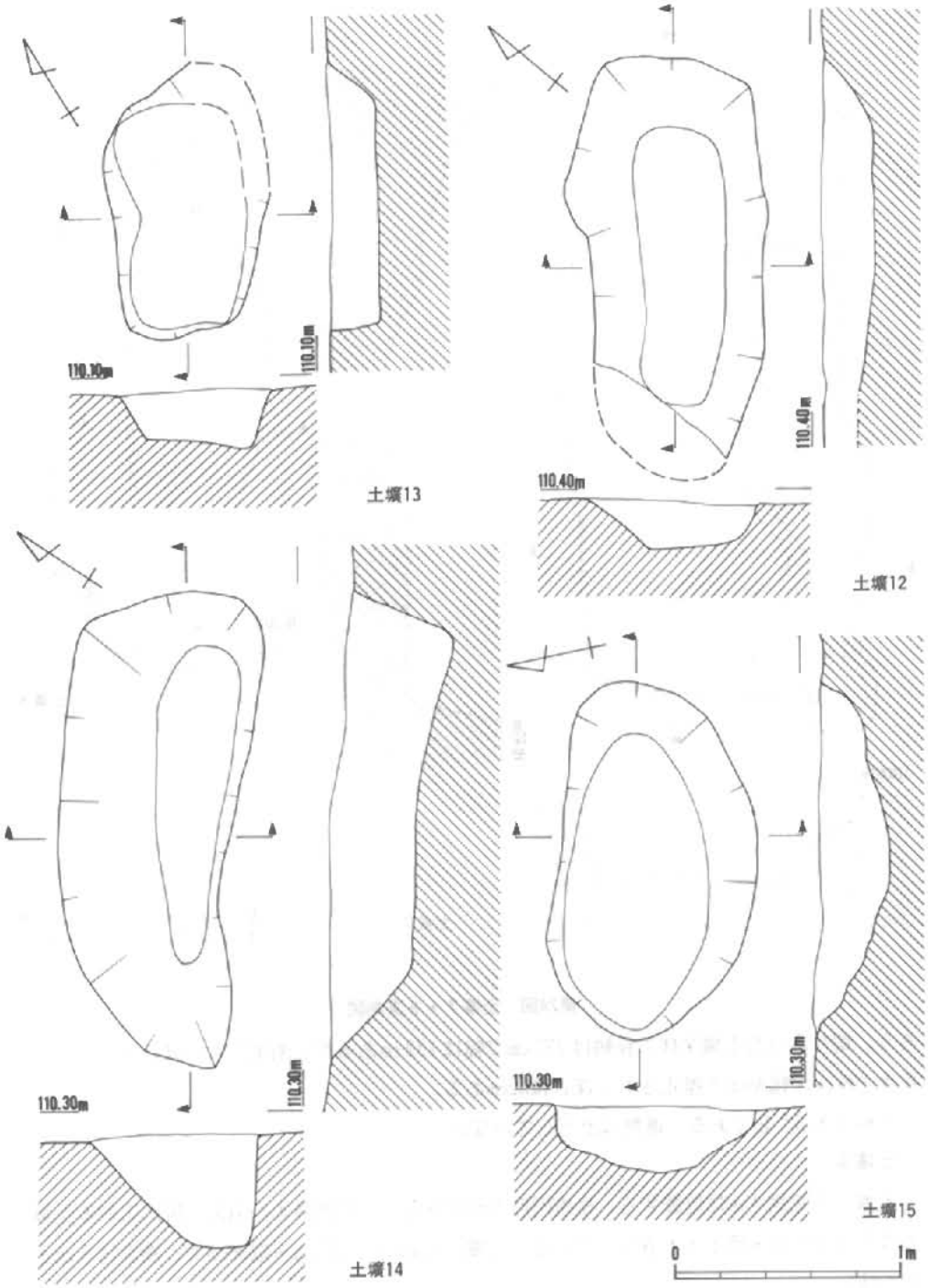
ろう。切りあった土壙全体の長軸は 270 cmで幅は 132 cmあるが、南東のものは、その形状から長さ 196 cm・幅88cmと推定され、深さは52cmある。

主軸はＮ３°Ｅである。遺物は出土していない。

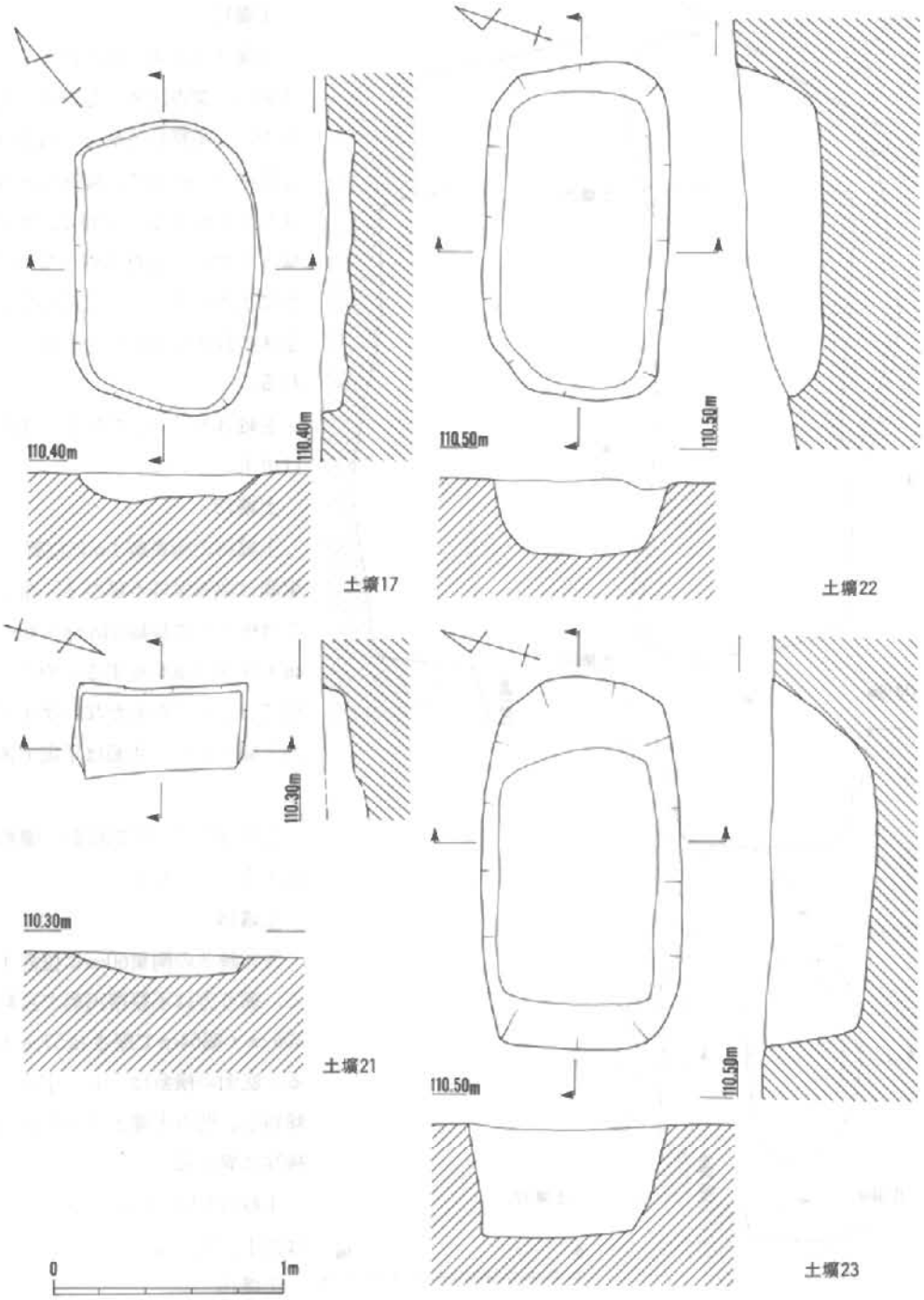
土壙 9

土壙 5 の北側 4 mに位置する。長楕円形の形状を有し、住居跡 3 の南側一帯に広がる土壙群のなかでは形状・埋土とも異なっている。土壙の長軸は、 140 cm・幅56cmで、深さは 8 cmと著しく浅い。

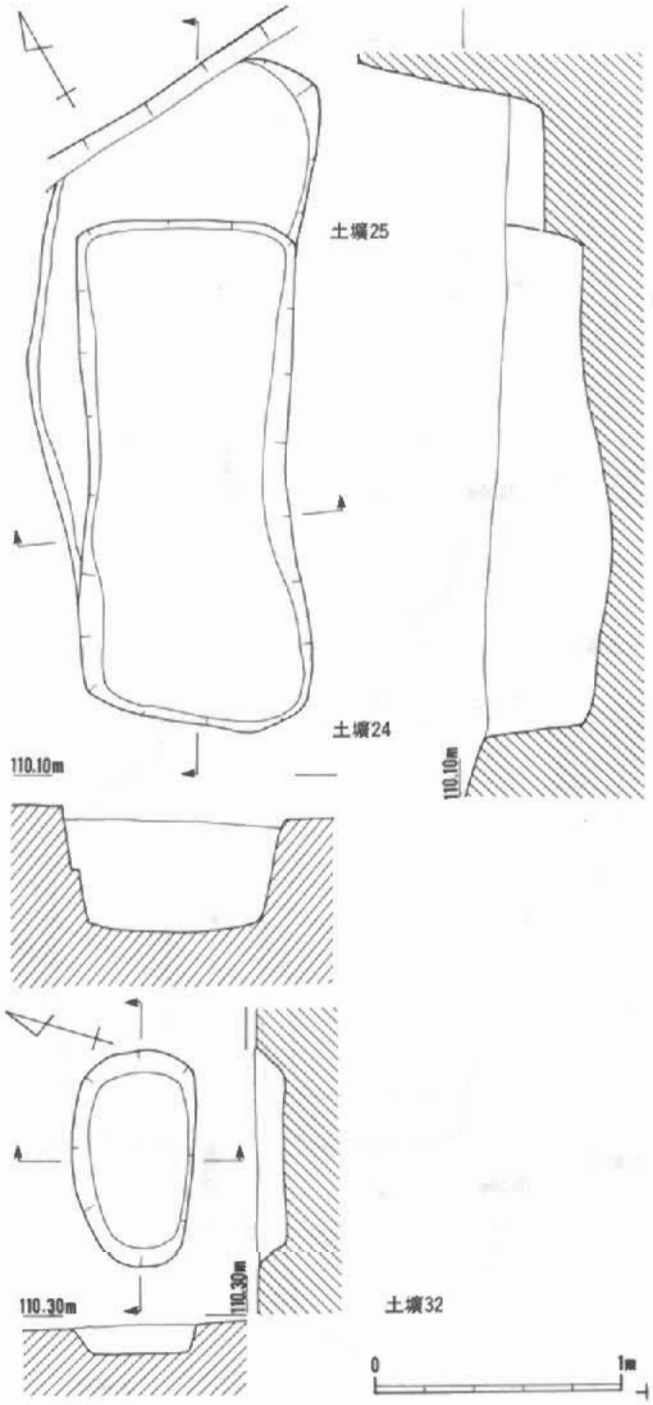
主軸はN60°Ｅである。遺物は出土していない。



第25図　土壙12～15実測図



第26図　土壙17・21～23実測図



第27図　土壙24・25・32実測図

土壙12

土壙８の北側２ｍに位置し、西側は、調査区外へ延びる。掘り方は、不整長方形で、残存する長軸は186㎝で、幅76㎝・深さ27㎝を有する。底面は皿状になっており、調査区外へなだらかに上がっていくところから、全体の長さは200㎝余と推定される。

主軸はN50°Eである。遺物は出土していない。

土壙13

土壙14の南東側１ｍに位置し、東側は調査区外へ延びる。掘り方は楕円形で長軸118㎝・幅66㎝・深さ29㎝を有する。やや小形で、小口穴をもたないタイプの土壙である。底面は平坦である。

主軸はN32°Eである。遺物は出土していない。

土壙14

住居跡３の南東60㎝に位置する。掘り方は不整楕円形で長軸206㎝・幅64㎝で深さは57㎝ある。底面の横断は「レ」字状に傾斜し、他の土壙とその形状は極端に異なる。

主軸はN54°Eである。遺物は出土していない。

土壙15

住居跡３の南側１ｍに位置す

る。掘り方は楕円形で、長軸 156 cm・幅86cmで、深さは33cmある。底面は緩やかに傾斜し、擂鉢状を呈する。

土壙15と土壙16の南側に幅42cm・長さ4.8mの溝があるが、遺物が出土せず時期が不明なものであることから、必ずしも土壙群に伴うものとは考えられない。

主軸はN75° Wである。遺物は出土していない。

土壙17

土壙の形状は楕円形で、長軸 126 cm・幅80cm・深さ26cmを有する。底面は平坦で底板のない木棺墓の可能性がある。埋土は黒色土で、他の小口穴を有する土壙と同様である。

主軸はN40° Eである。遺物は埋土中から管玉（4・5）が2点出土している。

土壙21

この土壙のほとんどは水田の開削時に失われてしまっている。形状は、長方形を呈し、小口を底板の上に置くタイプの木棺墓と推定される。現存する長軸は36cmで、幅74cm・深さ14cmを有する。底面は、おおむね平坦である。

主軸はN83° Eである。遺物は出土していない。

土壙22

土壙の形状は隅丸の長方形で、長軸 144 cm・幅80cm・深さ36cmを有する。底面はおおむね平坦であることから、木棺墓の可能性が高い。

主軸はN70° Eである。遺物は出土していない。

土壙23

土壙22の北側60cmに土壙22とほぼ同位置方向に並んで位置する。形状は、隅丸の長方形で長軸 160 cm・幅86cm・深さ52cmを有する。底面は、おおむね平坦である。

主軸はN75° Eである。遺物は出土していない。

土壙24

A地区の最北西に位置する。土壙25と切りあっており、土壙25が先行して掘り込まれている。形状は、ほぼ長方形を呈するもので、長軸は 203 cm、幅は84cm、深さは52cmある。底面はやや擂鉢状に中心に向かって凹む。

主軸はN32° Eである。遺物は出土していない。

土壙25

土壙24と切りあっている。形状は、長方形を呈するものと思われる。推定される土壙の長軸は 224 cmで、幅は90cmである。底面の形状は、ほぼ平坦と考えられ。深さは32cmである。

主軸はN32° Eである。遺物は出土していない。

土壙32

楕円形の土壙で長軸87cm・幅50cm・深さ約11cmを測る。遺物は出土していない。

C地区

C地区の弥生時代の遺構は、住居跡1棟（住居跡4）・木棺墓3基（土壙41～42）・土壙4基（土壙44～47）である。いずれも遺構も調査区の北側に偏在している。これらの遺構以外に柱穴群を検出しているが、建物として識別できるものはない。

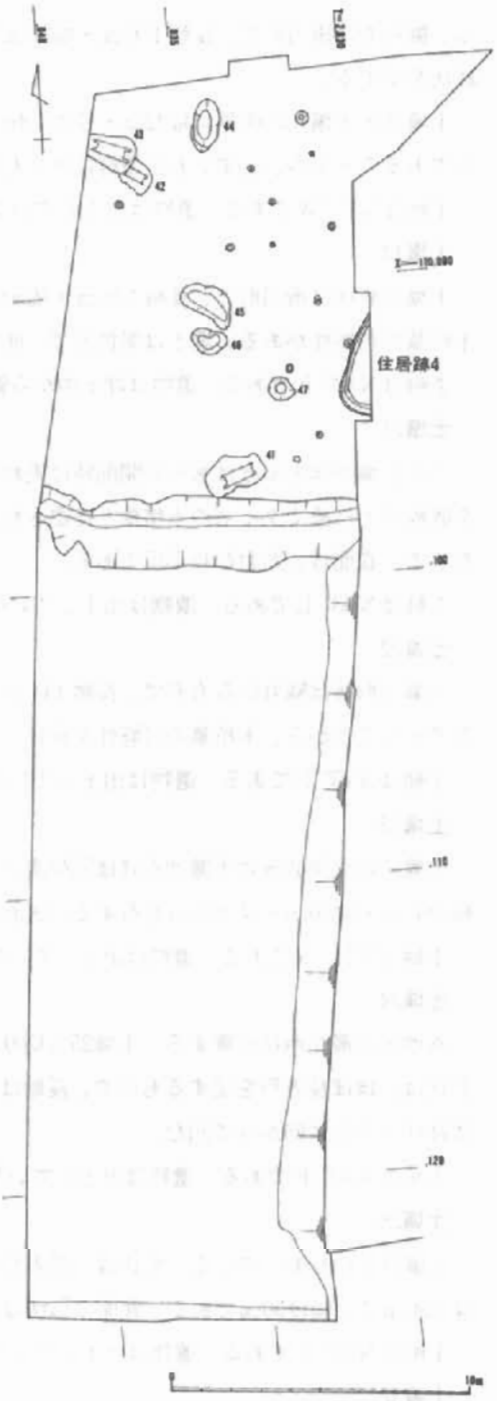
遺構が集中する調査区の北半部は北西側が標高112.10mと高く、南東側に行くに従い高度を下げている。この南東側には地山の上に灰褐色細砂混じりシルト（Ⅱ層）が堆積し、中世の遺物を包含している。

弥生時代の遺構は、いずれも黄褐色シルト層上面で検出した。高位に位置する土壙42～46は、耕土を除去した段階で黄褐色地山層が確認され、この地山層上面で遺構を確認した。また土壙41・47、住居跡4はⅡ層灰褐色細砂混じりシルトを除去した段階、地山層上面で遺構を検出した。

柱穴群

柱穴は12個検出された。いずれも調査区の北半に集中し、調査区の南半では検出されなかった。検出面は黄褐色シルト層上面である。調査区北半土壙41付近で検出した柱穴を除いたすべての柱穴群で柱痕を検出した。柱穴の掘り方は大きいもので40cm小さいもので20cmと一定していない。検出面からの深さは、深いもので25cm浅いものでは5cmを測る。確認できた柱痕は、直径10cm前後と小さい。

これらの柱穴群は建物跡として識別可能なものはなかったが、当地区が人為的な削平を受けていることを考えると、建物跡が存在した可能性は否定できない。



第28図　C地区　弥生時代遺構配置図

遺物は弥生土器片が掘り方内より出土した。

住居跡4

調査区の北半、東寄りに位置する。住居跡の東側は調査区外に延び、住居跡の南西隅部分のみ調査した。遺構検出面は第Ⅱ層を除去した段階である。遺構の主体が調査区外であるため規模・形態ともに不明瞭であるが、一辺3.2m前後の方形の住居跡と考えられる。検出面からの深さは15～20cmと比較的浅く、床面は住居跡の北側が高く、南側に向かって低くなっている。住居跡の壁際には幅10～20cm・深さ6cmの規模の周溝が巡り、住居跡の南辺では壁際から20cm内側を周溝が巡っている。調査した範囲内では、柱穴等の付帯施設は確認できなかった。

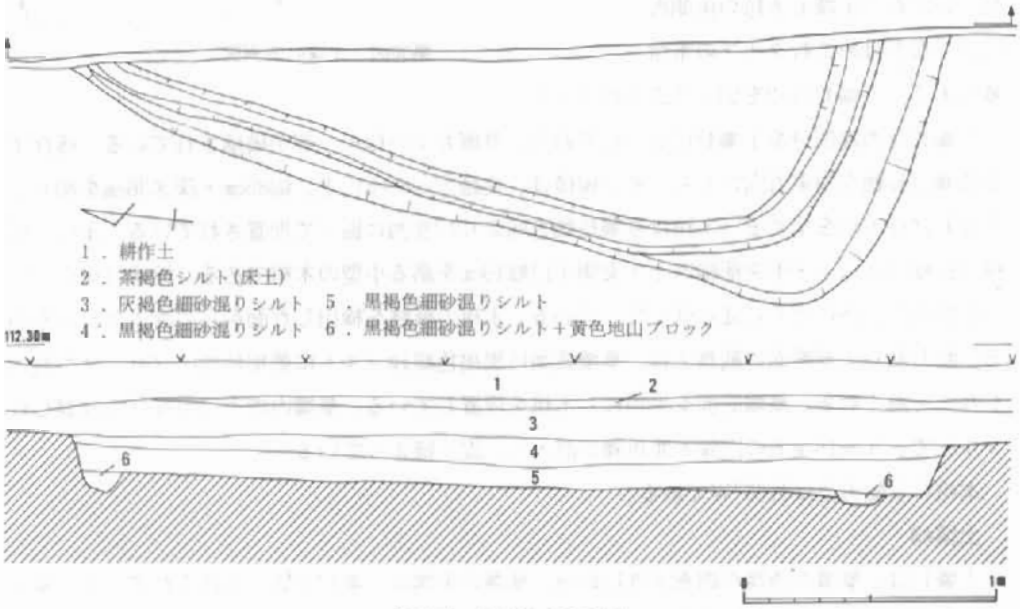
住居跡内の埋土は2層に分けられる。上・下両層とも黒褐色細砂混じりシルト層であるが、上層は小礫を混入する点で異なっている。

遺物は埋土中より弥生土器の破片が数点出土している。

土壙41

調査区の北半、中央寄りに位置し、当地区で検出した弥生時代の遺構群のなかでは、南端に位置する。木棺の両側板の中に小口板をはめこむタイプの木棺墓である。墓壙は北東方向に長軸をもち、法量は、長軸方向205cm・幅110cm・深さ32cmを測る。平面形は、西側が膨らんだ楕円形を呈する。

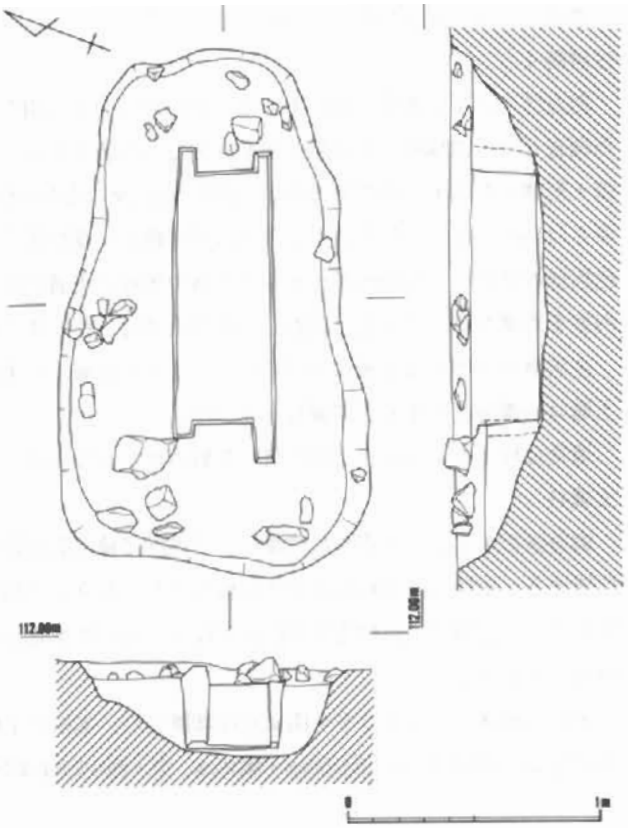
木棺は墓壙の中央よりやや南よりに埋置され、木棺の主軸方向は、墓壙の長軸方向より多少南に振る。規模は長軸方向100cm・幅40cm、東・西小口幅は23cmを測る。木棺の痕跡を検出した。



第29図　住居跡4実測図

面からの深さは27cmである。棺底は西側小口部が低く、東側小口部に向かって高くなり、西側小口部と東側小口部との比高差は5cmである。断ち割り土層断面の観察では木棺は、墓壙底面に黄灰色シルト層を5cmの厚さで敷き、墓壙の底面を平坦にし、木棺を埋置している。墓壙内の埋土は黄褐色土と黒褐色土が混ざりあった層で、10cm大の亜角礫が混入し、固く締まっている。

木棺の主軸方位はN68°Eである。遺物は墓壙内より弥生土器の細片が出土している。



第30図　土壙41実測図

土壙42

調査区の北西隅に位置し、木棺墓が2基重複した状態で検出された。いずれの土壙も木棺の両側板に小口板をはめこむタイプの木棺墓である。土壙43は42を切って造られている。

土壙42は西端部分を土壙43に切られており、墓壙および棺の一部が破壊されている。残存する墓壙は長軸を南東方向にもち、その規模は、長軸方向85cm以上、幅85cm・深さ36cmを測り、平面形は長方形を呈する。木棺は墓壙長軸方向より13度西に振って埋置されている。木棺の規模は長軸57cm以上・中央部幅28cm・東側小口幅19cmを測る小型の木棺である。棺底は東側小口付近が高く、西に行くに従い低くなっている。木棺の痕跡を検出した面からの深さは31cmを測る。断ち割り土層断面の観察では、墓壙底面に黒褐色細砂シルトに黄褐色地山ブロックが混入した土を薄く敷き、墓壙底面を平坦にし木棺を埋置している。墓壙内埋土は黒褐色中砂混じりシルトで、5～15cm大の円礫・亜角礫が混入し、固く締まっている。

木棺の主軸方位はN65°Wである。

土壙43

土壙43は、墓壙の西端が調査区外に延び、墓壙の東端は土壙42を切って造られている。墓壙は土壙42と同様、長軸を南東方向にもち、規模は長軸方向160cm・中央幅98cm・深さ31cmを測

る。平面形は、西側が膨らんだ楕円形を呈する。木棺の規模は、長軸170 m・中央部幅44cm・東側小口幅33cm・西側小口幅23cmを測る。東・西小口際の棺底には、小口穴を検出した。木棺の痕跡を検出した面からの深さは25cmである。

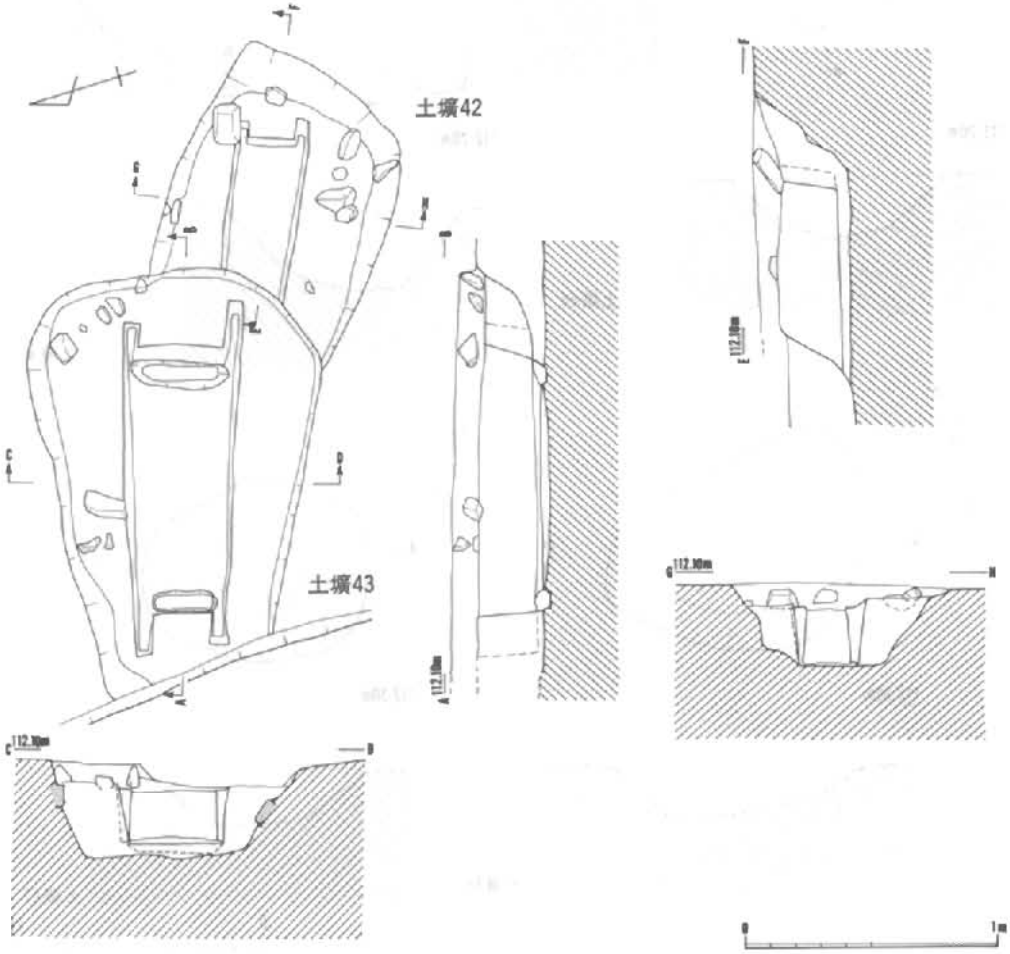
断ち割り土層断面の観察では、墓壙底面に黒褐色細砂シルトに黄褐色地山ブロックを混入した土を5cmの厚さで敷き、木棺を埋置している。墓壙内の埋土は暗灰色細砂混じりシルト層で5cm大の角礫が混入し、固く締まっている。

木棺の主軸方位はN72°Wである。遺物は木棺内より弥生土器の細片が出土している。

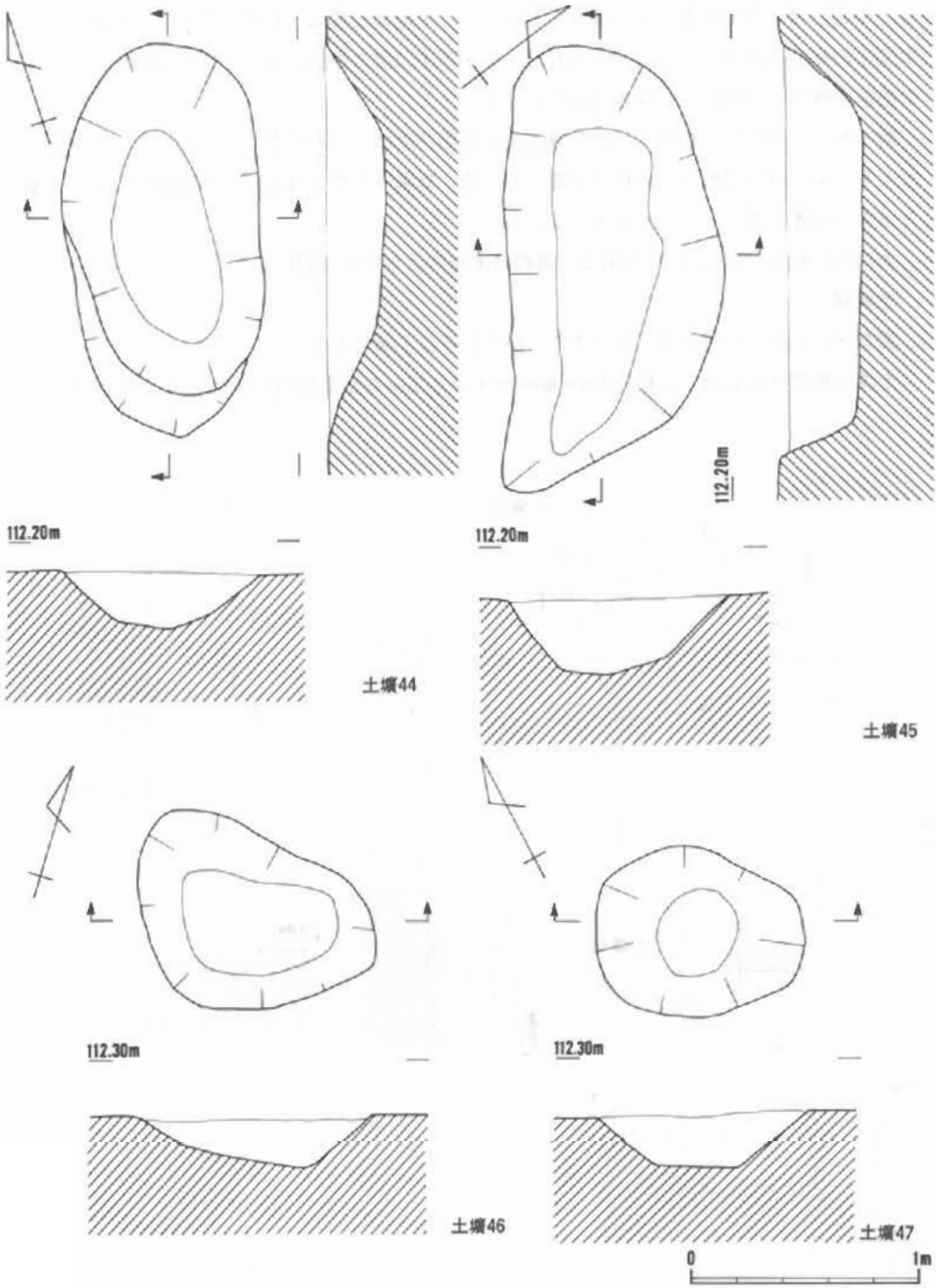
土壙44

調査区の北端に位置する。掘り方の形が不定形な土壙である。

土壙の規模・形態は、長軸168cm・幅87cm・深さ26cmを測る楕円形を呈する。壙底は舟底状



第31図　土壙42・43実測図



第32図　土壙44～47実測図

を呈する。底面は南壁際から北壁際へ向かって低くなる。 その比高差は3㎝である。土壙の埋土は黒褐色細砂混じりシルトで5㎝大の礫を小量含む。長軸方向を主軸とした方位は、N19°Eである。遺物は、墓壙内より弥生土器片が出土している。

土壙45

調査区の南半に位置する。土壙は掘り方の形が不定形で、土壙の南東端が狭まった不整楕円形を呈する。規模は長軸183㎝、幅96㎝、深さ33㎝を測り、壙底は舟底状を呈する。土壙埋土は黄褐色地山ブロック混じりの黒褐色細砂シルトである。小礫を少量含む。長軸方向を主軸とする方位はN53°Wである。遺物は出土しなかった。

土壙46

調査区の南半に位置する。土壙は掘り方の形が不定形で、西側が膨らんだ楕円形を呈する。規模は長軸100㎝・幅75㎝、深さは最深部で21㎝を測る。断面形は皿状を呈し、壙底は西壁際に向かって高くなっている。埋土は土壙46埋土と類似するが、礫を含まない点で異なる。長軸方向を主軸とする方位はN73°Eである。遺物は弥生土器の細片が出土した。

土壙47

調査区の南半に位置する。土壙は掘り方の形が不定形で西北側が多少膨らんだ楕円形を呈する。規模は長軸90㎝・幅75㎝、深さは最深部で24㎝を測る。断面形は逆台形状を呈する。土壙埋土は2層に分かれる。上層は淡黄褐色細砂混じりシルト、下層は淡黄褐色細砂混じりシルトに地山ブロックが混入している。長軸方向を主軸とした方位はN61°Wである。遺物は出土しなかった。

土壙　計測一覧表　No.1

＊は、数値が確定しないもの

土壙番号	堀り方				木棺（内法）					
	長軸 (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	主軸方位	長軸 (cm)	小口寸法 北東 (cm)	小口寸法 南西 (cm)	深さ (cm)	主軸方位	頭位
1	147	80	36	N- 3° -E	—	—	—	—	———	—
2	80	50	23	N- 40° -W	—	—	—	—	———	—
3	—	—	22	N- 40° -W	—	—	—	—	———	—
4	150	74	16	N- 45° -E	—	—	—	—	———	—
5	78	＊ 58	20	N- 45° -E	—	—	—	—	———	—

土壙　計測一覧表　No.2

＊は、数値が確定しないもの

土壙番号	堀り方				木棺（内法）					
	長軸 (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	主軸方位	長軸 (cm)	小口寸法 北東 (cm)	小口寸法 南西 (cm)	深さ (cm)	主軸方位	頭位
6	190	77	21	N- 50° -E	145	58	66	—	———	南？
7	270	132	52	N- 3° -E	—	—	—	—	———	—
8	240	70	19	N- 50° -E	148	63	37	—	———	北
9	140	56	8	N- 60° -E	—	—	—	—	———	—
10	184	79	42	N- 76° -E	120	64	56		———	北？
11	142	67	34	N- 88° -W	—	—	—	—	———	—
12	＊186	76	27	N- 50° -E	—	—	—	—	———	—
13	118	66	29	N- 32° -E	—	—	—	—	———	—
14	206	64	57	N- 54° -E	—	—	—	—	———	—
15	156	86	33	N- 75° -W	—	—	—	—	———	—
16	202	87	52	N- 48° -E	141	48	56	—	———	—
17	126	80	26	N- 40° -E	—	—	—	—	———	—
18	＊131	80	26	N- 45° -E	—	—	—	—	———	—
19	＊108	83	14	N- 89° -E	—	—	—	—	———	—
20	172	64	21	N- 55° -E	131	60	56	—	———	南？
21	＊ 36	74	14	N- 83° -E	—	—	—	—	———	—
22	144	80	36	N- 70° -E	—	—	—	—	———	—
23	160	86	52	N- 75° -E	—	—	—	—	———	—
24	203	84	52	N- 32° -E	—	—	—	—	———	—
25	＊224	90	32	N- 32° -E	—	—	—	—	———	—
26	132	89	24	N- 46° -E	74	51	58	—	———	南？

土壙　計測一覧表　No.3

＊は、数値が確定しないもの

土壙番号	堀り方				木棺（内法）					
	長軸 (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	主軸方位	長軸 (cm)	小口寸法 北東 (cm)	小口寸法 南西 (cm)	深さ (cm)	主軸方位	頭位
27	214	106	28	N- 46° -E	146	70	58	—	———	南？
28	＊ 86	70	18	N- 23° -W	—	—	—	—	———	—
29	115	53	28	N- 33° -E	78	19	16	16	N- 32° -E	北
30	198	76	15	N- 63° -E	143	27	26	11	N- 59° -E	北
31	86	50	21	N- 60° -W	45	17	19	16	N- 74° -W	南
32	87	59	11	N- 76° -E	—	—	—	—	———	—
33	＊ 54	＊ 35	12	———	—	—	—	—	———	—
34	162	95	32	N- 44° -E	94	35	35	26	N- 41° -E	南
35	98	54	21	N- 52° -E	63	16	16	16	N- 52° -E	?
36	121	89	24	N- 74° -W	74	17	16	18	N- 77° -W	南
37	80	43	7	N- 46° -E	50	26	27	—	———	?
38	232	103	24	N- 55° -W	143	38	34	20	N- 53° -W	北
39	184	42	4	N- 68° -E	70	32	29	—	———	南
40	225	133	25	N- 71° -E	136	56	62	17	N- 68° -E	南
41	205	110	32	N- 69° -E	100	23	23	27	N- 68° -E	東
42	＊ 85	85	36	N- 75° -E	＊ 57	19	—	31	N- 65° -W	東
43	160	98	31	N- 51° -E	170	33	23	25	N- 72° -W	東
44	168	87	26	N- 19° -E	—	—	—	—	———	—
45	183	96	33	N- 53° -W	—	—	—	—	———	—
46	100	75	21	N- 73° -E	—	—	—	—	———	—
47	90	75	24	N- 61° -W	—	—	—	—	———	—

2．奈良～平安時代の遺構

A地区

調査地区の最南部に、最大幅約3.5ｍ・長さ約12ｍにわたって礫を敷き詰め、その西側に溝（側溝１）を持つ遺構を検出した。

Ｂ地区で発見している道路遺構と一直線に並ぶため、この道路の延長部と考えている。

なお、この道路遺構より南と北は中世以降の水田造成により削平されたため、当時期の遺構は検出できなかった。

B地区

この時期のものは谷部にのみ存在し、谷が埋没する過程で造られていた。

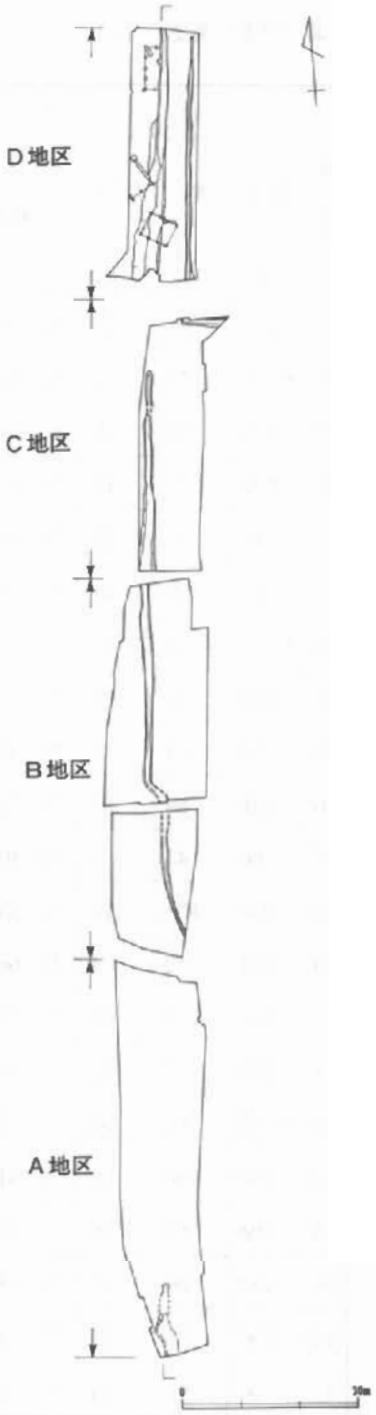
検出した遺構には道路と溝がある。道はほぼ南北に一直線に延び、溝は道路に付設された西側溝（側溝１）である。なお、道路遺構は段丘から南では中世以降の水田造成により削平されたためか確認できなかった。

道路は平均幅約3.50ｍ・平均高さ約0.40ｍ、溝は、幅約1.20ｍ・深さ約0.30ｍを測る。

道路の遺存状況は、北端部が特に良好である。東は段丘地山を削り込んで画し、西側は一部盛土をして道路面を成し、さらに上面は礫及び瓦片を敷き均して形成する。西横には溝を敷設し、道路の規模及び構築法が明瞭に確認できた。

また、低湿地部では下層に直径約20cmの丸太材を道路幅と並行に敷き、その上層を人頭大の河原石と土砂で覆う強固な構築工事を施していた。

側溝は、部分的に西立ち上がり部を板材と杭で補強する護岸工事を施している。すなわち、杭を約１ｍ間隔で打ち込み、幅約30cm長さ３ｍの板材を横に添える護岸施設が認められた。この施設には、河原石が裏込めとして使用されている。



第33図　奈良～平安時代遺構配置図

なお、側溝は南の段丘にあがる手前で道路下を斜めに潜り、杭と板材により暗渠に仕上げる。

ここからは、段丘下の谷地形に沿って傾斜変換点を流れ、調査区の東外へ出てしまう。

溝は、この地区では黄褐色の地山面を切り込むだけで護岸施設はなかった。

谷部の出土遺物には、低湿地部の最下層に弥生時代中期〜後期の土器・土製品（1）・石器（13・14・16）古墳時代前期の土器が出土する。

次いで無遺物層をはさみ、谷部が埋没する過程でできた奈良時代の土器（土師器・須恵器）、木器（曲物・挽物等）、自然木、植物質遺体を含む層がある。この層では、注目すべきものとして木簡の検出があった。

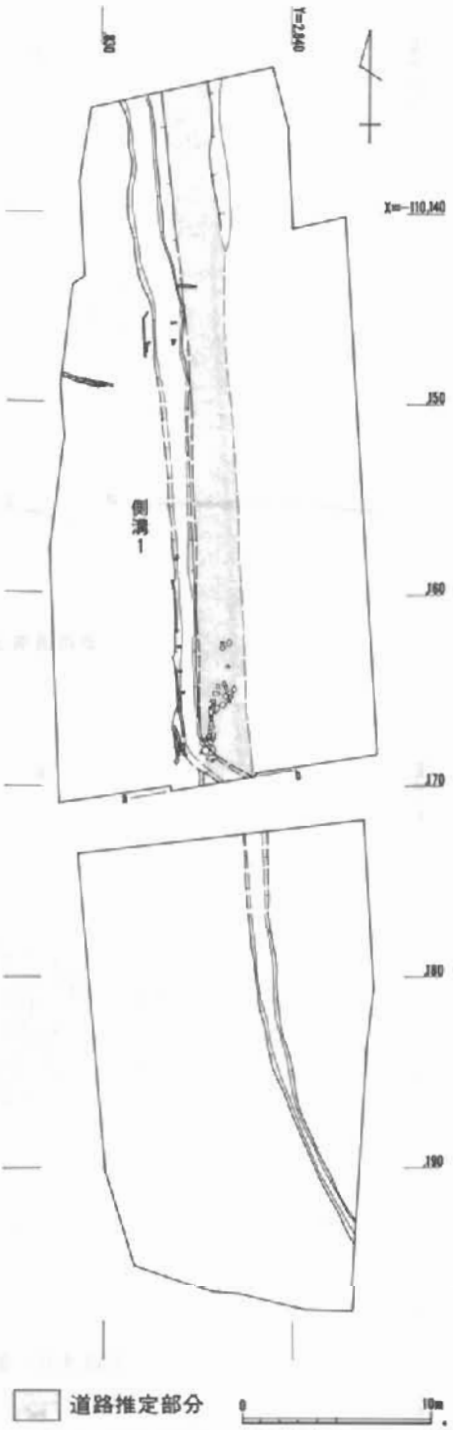
そして、この上層に道路遺構とそれに伴う溝が構築されたのである。

溝内の遺物は、段丘下部に「川邊」「中殿」と記す墨書土器（92・94）・暗渠部に木簡（2・3）、北端から斎串（3・4・7・8・9）・軒平瓦（4）等が出土している。

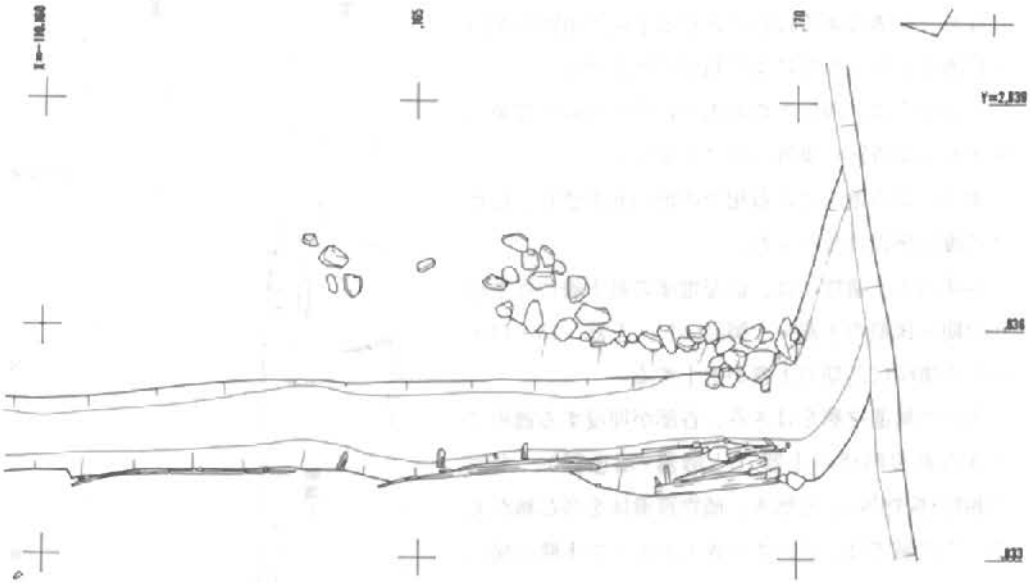
また、道路北端の瓦敷上面には軒丸瓦（1）もあった。さらに、低湿地部の丸太材を敷いた地点には鉄製品（12）が出土している。

これら道路上面及び溝内出土の遺物から、この道路遺構の構築年代は平安時代前期以前と想定している。なお、側溝に護岸施設を施していることからみれば、道路はかなり長期間機能していたことも考えられる。

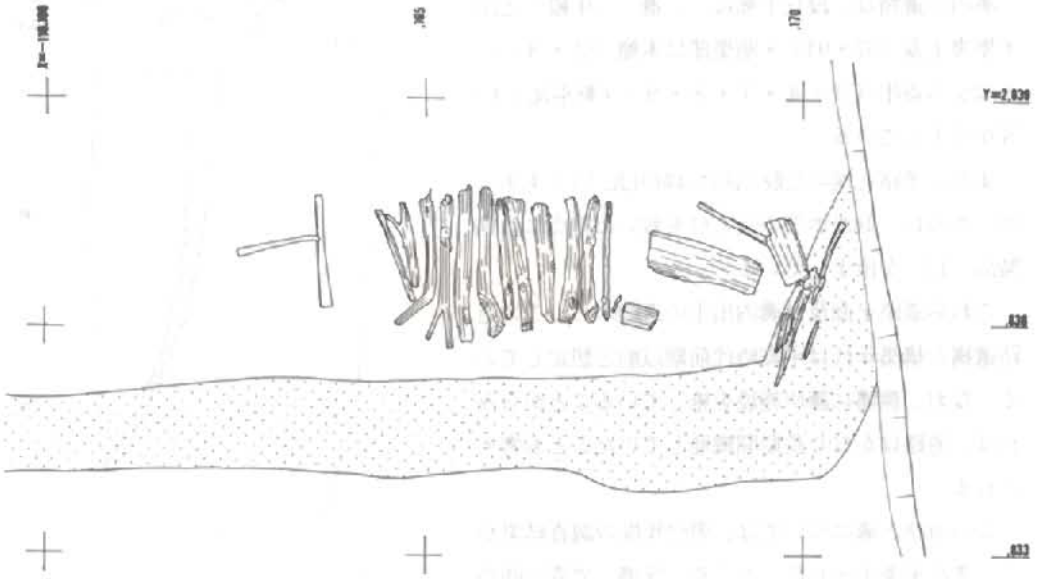
この道路と溝については、翌61年度の調査結果から、溝が現条里とおなじところ（坪境）で直に曲がるため古代条里制に伴う遺構と捉えている。



第34図　B地区奈良〜平安時代遺構配置図

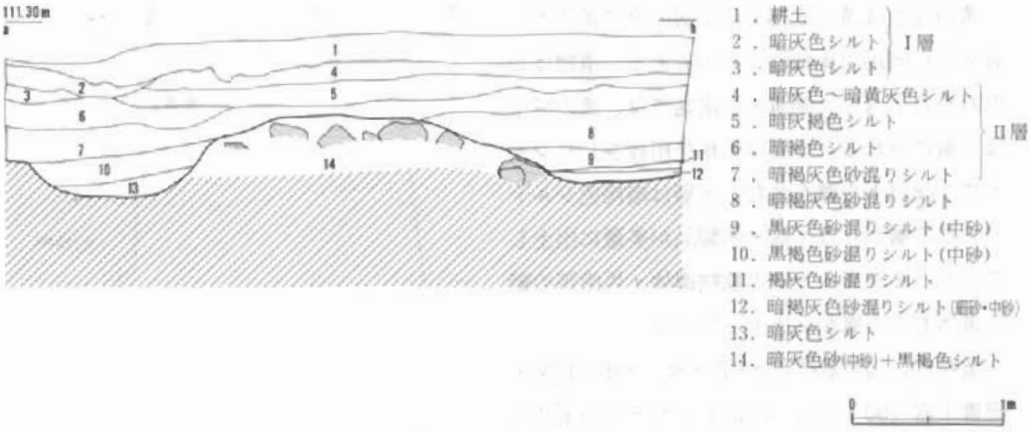


道路遺構上面



道路遺構下層基礎

第35図　道路遺構実測図



第36図　道路遺構土層断面図

C地区

この時期に該当する遺構は、調査区の西側を南北に走る側溝1、調査区の北東隅で東西方向に走る側溝2および両側溝に画された道路遺構である。これらの遺構のうち、道路遺構は調査区南壁の土層断面観察で確認できるが、平面的には道路遺構が片側にのみ側溝をもつ構造であるため道路の規模等は不明瞭であった。

遺物は側溝1より集中して出土し、とくに木製品（護岸材・曲物・斎串等）が多い。耕土・包含層（第Ⅱ層）からは須恵器杯(87)・稜椀(96)・皿(99)・鉢(108)、青磁椀(124)、施釉陶器(123)、土錘(3)、スクレイパー(8)、鉄製箭(11)が出土している。

側溝1

調査区の西側を南北方向に走る形で検出された。遺構の検出面は第Ⅱ層を除去した段階、黄褐色シルト層上面である。溝の北端はX＝－110,090mライン付近で、後世の削平を受け消滅している。溝底は北側に行くに従い高度を上げ、溝の北端と南端では1mの比高差をもつ。溝の上端幅は南端で2.5m、北端で1m前後、下端は南端で2m、北端で40cmを測り、北上するにしたがって幅を減じている。検出面からの深さは南端で47cm、北端で10cmを測り、溝の断面形は浅い皿状を呈する。溝の南端では東側の立ち上がりは西側のそれに比べて不明瞭である。

側溝1の、X＝－110,110mより南側、側溝内西側立ち上がり部分では、幅10cm、長さ2m前後の3枚の板材が、直径3cm前後の丸木杭で固定された状態で検出された。さらに板材の西側には10×20cm大の河原石が多数検出された。これら板材と杭の出土状況から判断して、側溝の西側立ち上がり部分には護岸施設が施されていたと推察される。また多量の河原石は裏込め石の機能を有すると判断される。溝の東側立ち上がり部分には、杭および板材等は検出されず道路側に護岸施設があったかはどうかは不明である。

溝の埋土は溝の北端では１層のみで黄色地山層を含む暗褐色極細砂シルトである。遺物は須恵器を若干含む。側溝１の南端では、溝の埋土は２層に分れる。上層は暗褐色粗砂混じりシルトで１cm以下の礫を含む。下層は暗褐色シルトで、この層からは土器・木製品が多量に出土している。またクルミ等の植物遺体・馬歯等の動物遺体もこの層から出土している。

遺物は、須恵器杯（78・79・88）・壺（105）・墨書土器（90・91）、平瓦(6)、ガラス小玉(2)、木製品曲物(19)・斎串(5) が、上層より出土した。下層からは弥生土器（44・46）、須恵器杯（75・80・83）、平瓦(5)、木器は墨画板(10)をはじめ（11・16）が出土している。

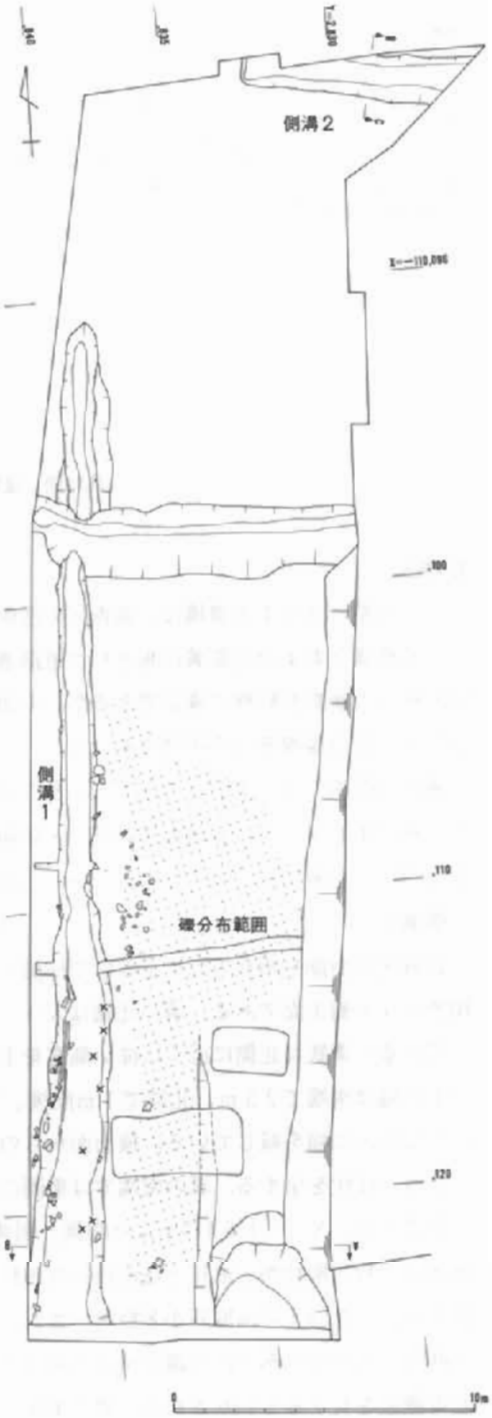
側溝２

調査区の北東隅を東西方向に走る形で検出された。検出面は、耕土を除去した段階、黄褐色シルト層上面である。溝の北側立ち上がり部分は一部北側調査区外に延びているため、溝の全容は不明瞭であるが、溝の南西端隅は北方向に直角に向きを変え、隣接するＤ地区で検出された溝（側溝２）に続くと考えられる。

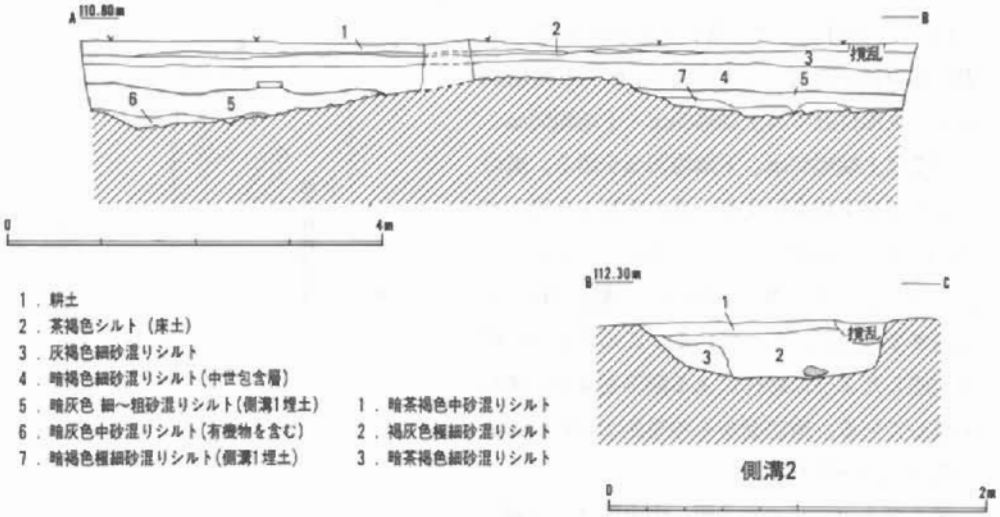
溝の規模は上端幅1.5 m、下端幅80cm前後で検出面からの深さは東端で30cm、西端で20cmと西端が浅くなっている。溝の西端と東端では10cmの比高差があり、西端に行くに従って低くなっている。

溝の埋土は３層に分かれる。上層は暗茶褐中砂混じりシルト、中層は褐灰色中～粗砂混りシルトである。下層は黄褐色地山土を混入する暗茶褐色細砂混じりシルトである。

遺物は柱状両刃石斧(10)が出土した。



第37図　Ｃ地区　奈良～平安時代遺構配置図



第38図　道路遺構・側溝２土層断面図

道路遺構

当地区で検出された側溝はいずれも片側のみ検出されたため道路の規模は不明である。調査区南東端には浅い落ち込みが認められ、また落ち込みの埋土も側溝１と類似していることからこの落ち込みは側溝１と同時期と理解している。この側溝１と落ち込みとの間隔は４ｍあり、これが道路幅と考えられる。この部分には径５～10cm大の亜角礫ないしは角礫が集中している（網点の範囲）。この礫の分布は調査区の南端付近では、ほぼ道路部分内におさまり、道路上に敷かれたものの可能性が考えられるが、調査区の中央付近では東側に広がり、また遺構検出層内にも同様の礫を含むことを考慮すると、人為的に敷かれた礫かは断定できない。

この道路上面より平瓦(8)・咸平元寶(2)が出土している。

Ｄ地区

この時期に該当する遺構は、調査区の西側を南北方向に走る側溝２、土壙48～50、掘立柱建物跡１～３がある。また調査区の中央を側溝２と併行して走る溝は、現在まで使用されている水路である。検出されたこれらの遺構のうち土壙49・50は側溝２に切られ、道路より古いことが判明している。これらの遺構群はいずれも黄褐色シルト（地山）上面で検出している。

遺物は側溝２中より須恵器杯に混じって、円面硯・軒丸瓦等が出土している。耕土・包含層からは須恵器甕(109)・捏鉢(115)、羽釜(114)、備前焼擂鉢(129)、椀形鉄滓（17・18）が出土している。水路からは須恵器椀(116・117)、備前焼擂鉢(133)が出土し、水路裏込めからは施釉陶器椀(126)、備前焼擂鉢(130・131)、椀形鉄滓(16)が出土している。

側溝２

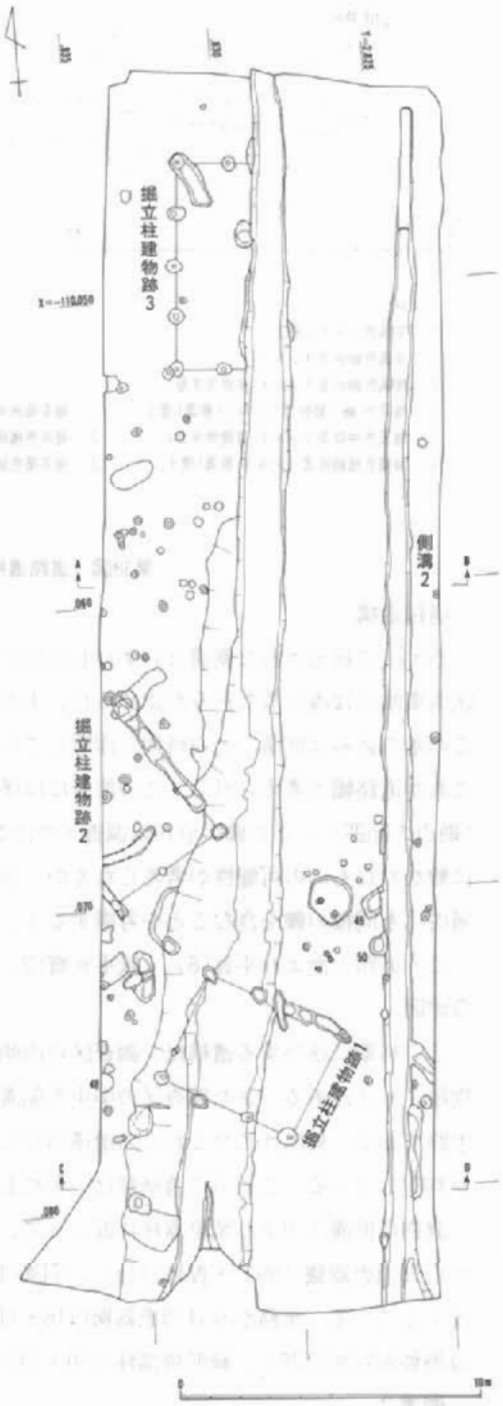
調査区の西側を南北方向に走っている。溝の北端は人為的な削平を受け消滅している。Ｘ＝

－110,070 m付近では土壙49・50を切っている。溝の規模は、南端では上端幅1.1 m・下端幅50 cm、中央部付近では上端幅85cm・下端幅65cm、北端では上端幅40cm、下端幅35cmを測る。溝の断面形はU字状を呈する。溝の南端と北端とでは約50cmの比高差があり、北端に行くに従って高くなっている。溝の北端付近の溝底は約5 cmの高さで一段高くなっている。この段より北側は前述したように耕作による削平を受け、溝が消滅している。検出面からの深さは南端で30cm、中央部で25cmを測る。

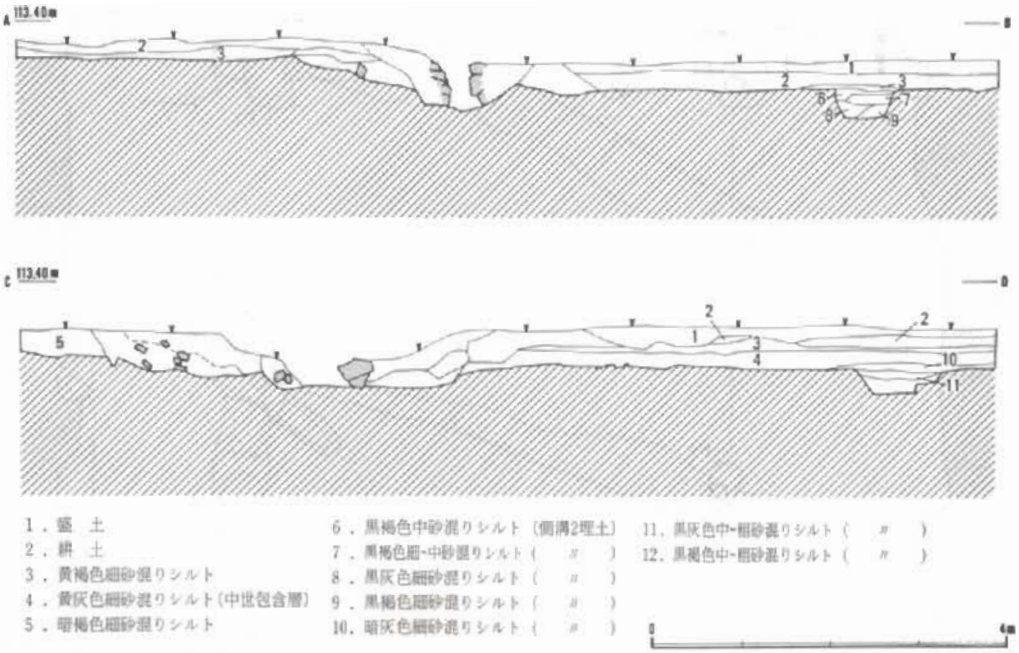
溝の埋土は南端では2層、中央部では4層に分かれる。いずれも黒褐色シルト土であったが地山土・礫の有無によって分層が可能であった。溝の中央付近では中層と下層の層理面より、板材・骨片が土器に混じって出土した。遺物は上層より須恵器蓋（68・69）・円面硯(101)・鉢(107)・杯(110)，土師器皿(112)，軒丸瓦（2）が出土し、中～下層にかけては須恵器杯(74)・壺(106)している。最下層からは土師器杯(111・113)，軒丸瓦（3）が出土した。

掘立柱建物跡1

調査区の南端に位置する。建物の西半は水路によって破壊され、P1・P2・P7の各柱穴は水路の底面でその痕跡を検出した。掘立柱建物は東西方向3間（4.7m）、南北方向1間(3.8m）の規模で棟柱をもたない構造である。桁行の柱筋はP7・P4がいずれも南にずれている。柱間は、柱痕が識別できたP5～P6間で1.5mを測る。柱穴の掘方は直径45～60cmで、検出面からの深さは25cm前後と比較的浅く掘られている。柱痕跡が識別できたのはP5・P6・P8のみで、柱の直径は20cm前後である。柱穴P3～P4の間には



第39図　D地区　奈良～平安時代遺構配置図



第40図　道路遺構・側溝２土層断面図

幅35cm・深さ10cmの規模の浅い溝が掘られ、柱穴が破壊されていた。この溝の性格は建物跡南側の桁行（P5～P8）には柱痕が認められたのに対し、北側のそれは柱痕が認められないことから考え柱を抜き取る際掘られた溝と理解している。

東西方向を主軸とした方位はN60°Wである。遺物は、須恵器の細片が少量出土している。

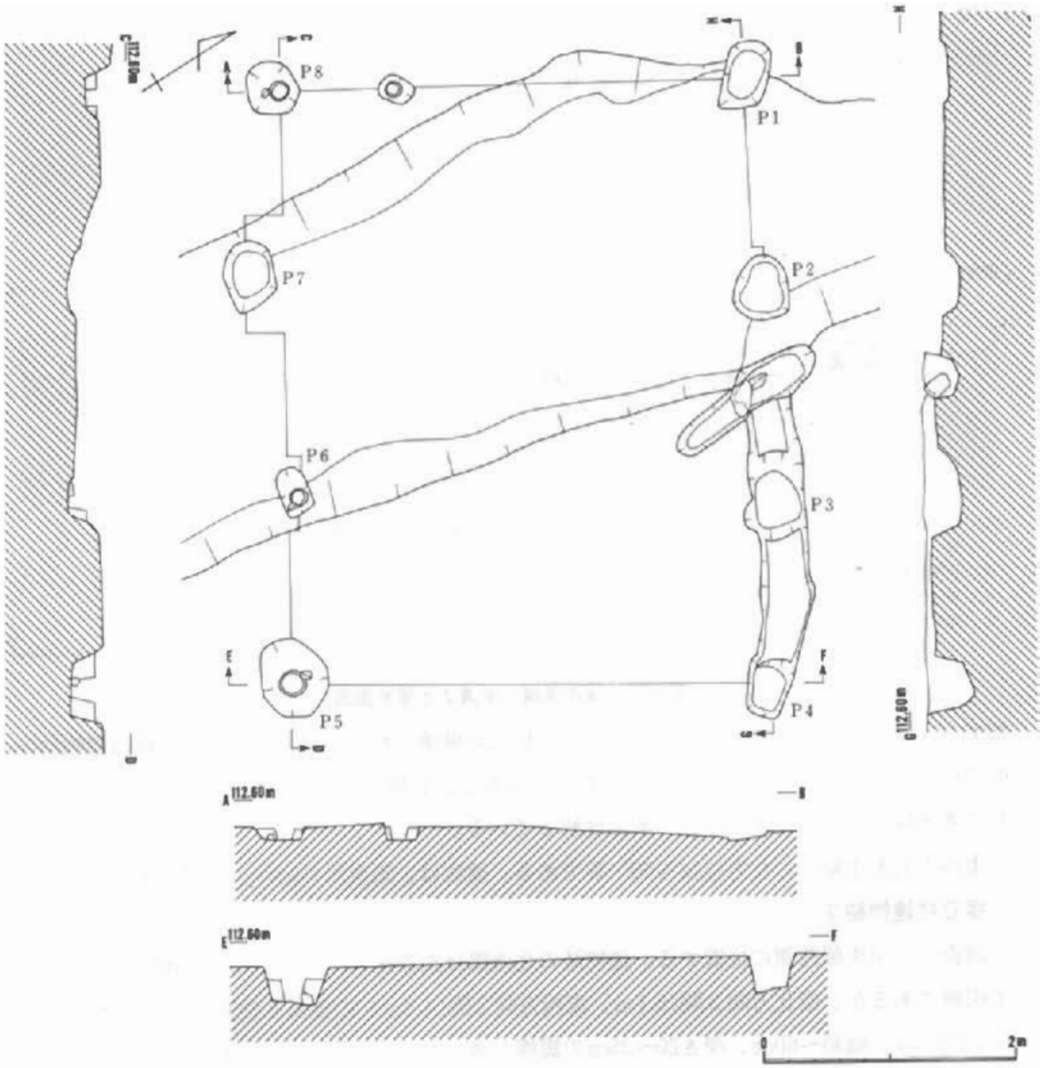
掘立柱建物跡２

調査区の中央部西側に位置する。建物跡の北西隅は調査区外に延びており、建物跡の全容は不明瞭であるが、南北方向３間(5.1m）東西方向２間(4.2m）の規模と推察される。両桁行の柱穴間には、幅30～60cm、深さ20～25cmの規模の溝が掘られ、P1～P4・P6の上部は削平されている。残存する柱穴掘方の規模は直径55cm前後で、検出面からの深さは60cm前後と深く掘られている。柱穴のなかでもP5は16cmと浅い。これらの柱穴にはいずれも柱痕が無く、この溝は掘立柱建物跡１と同様、柱を抜き取る際掘られた溝と考えられる。

東西方向を主軸とした方位はN35°Wである。遺物は出土しなかった。

掘立柱建物跡３

調査区の北端に位置する。建物の東側は水路によって破壊されている。残存する掘立柱建物は南北方向４間(6.7m)・東西方向１間以上(1.4m以上）の規模である。上記したように建物の東側の桁行柱穴は水路によって消滅したと考えられ、梁行２間・桁行４間の規模の建物を想定している。掘立柱建物は棟柱（P6・P7）をもつ構造で、現存する柱穴は７個である。柱間



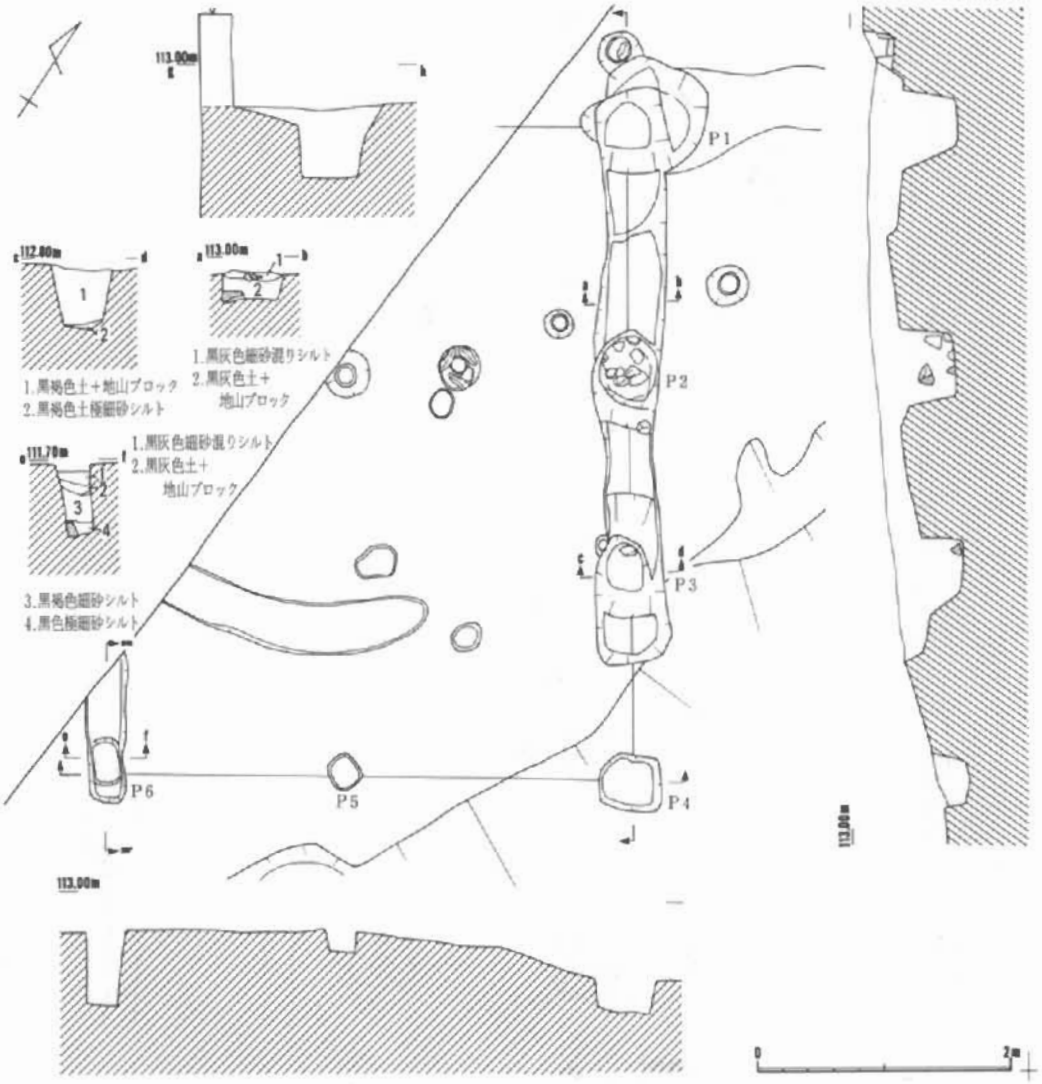
第41図　掘立柱建物跡１実測図

は梁行が 1.4 m前後、桁行は 1.6m前後を測る。柱痕はP2を除く柱穴で確認され、柱の直径は12～17cmと幅をもっている。柱穴の掘り方は直径47～60cmの不整楕円形を呈する。検出面からの深さは、深いもので30cm、浅いもので15cmを測り、P6・P7の棟柱は掘り方が浅い。P2・P4・P5は掘り方埋土中に10～15cm大の河原石が混入している。遺物は出土しなかった。

土壙48

調査区の南西隅に位置し、東側には掘立柱建物跡１が近接する。土壙の西半は調査区外に延び土壙の東半部のみ検出した。検出面は第Ⅱ層を除去した段階、黄褐色地山層上面である。

計測可能な規模は南北方向75cm・東西方向48cm以上、検出面からの深さは最深部で56cmを測



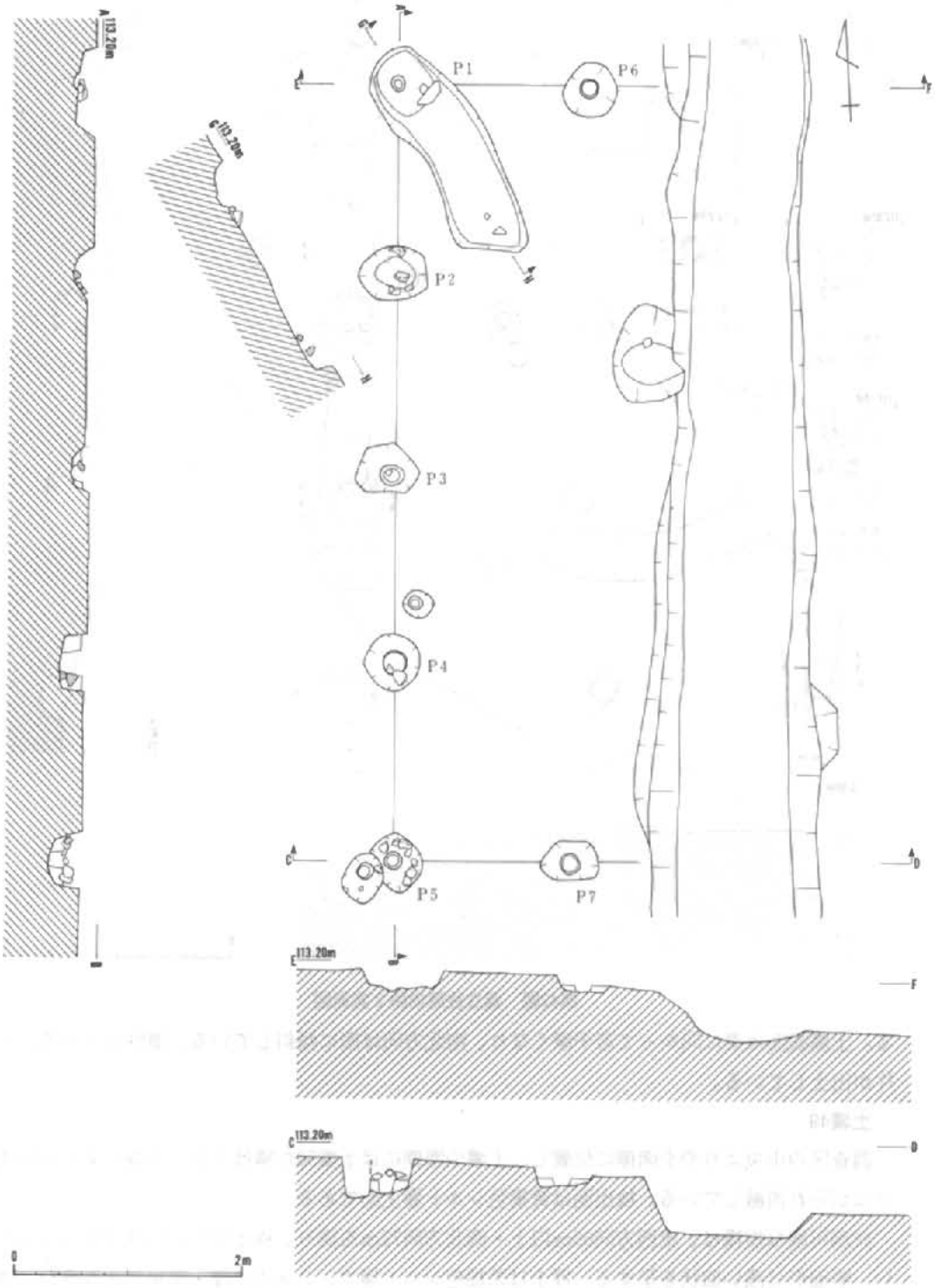
第42図　掘立柱建物跡２実測図

る。土壙底面は東に向かって若干深くなり、南北方向は南に傾斜している。遺物は土師器の細片が出土している。

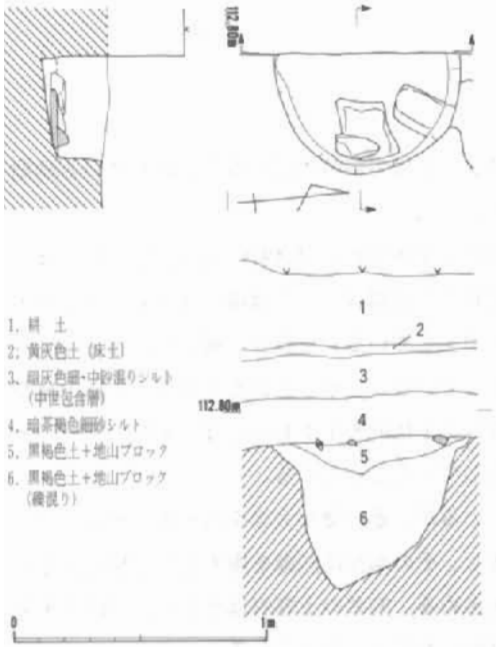
土壙49

調査区の中央よりやや南側に位置し、土壙の南側には土壙50が隣接する。土壙の東半は側溝２に切られ消滅している。検出面は黄褐色シルト層上面である。

計測可能な規模は、東西方向66cm以上・南北方向72cmを測り、検出面からの深さは８cmと浅い。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は黒褐色シルト層で、３cm大の礫・黄褐色土を含む。遺物は須恵器の細片が出土した。



第43図　掘立柱建物跡3実測図



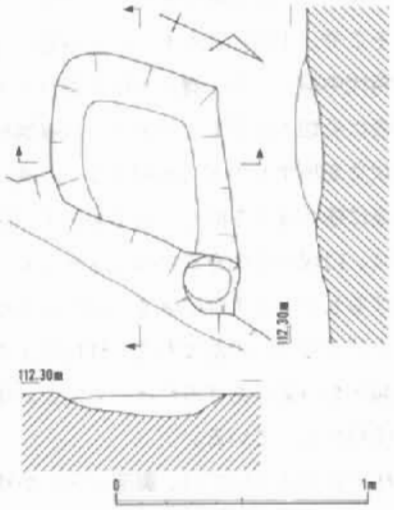
第44図　土壙48実測図

3 cm大の礫を少量含む。遺物は須恵器の細片が出土した。

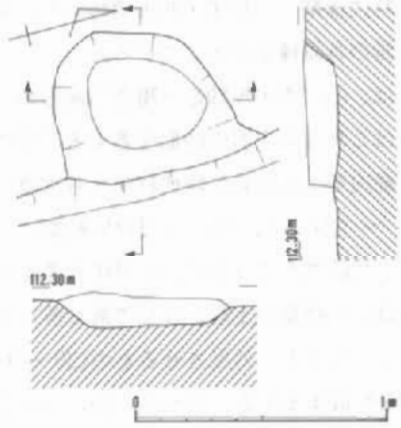
土壙50

調査区の中央よりやや南側に位置し、北側には土壙48が隣接する。土壙の東半は側溝 2 に切られ消滅している。遺構検出面は黄褐色地山層上面である。

計測可能な法量は、東西方向42cm以上・南北方向72cmを測る。検出面からの深さは最深部で10cmと比較的浅く、断面形は浅い皿状を呈し、土壙底部埋土は土壙49と同じ黒褐色シルト層で、



第45図　土壙49実測図



第46図　土壙50実測図

第3節　遺　物

1．弥生土器

まず、当節で対象とする弥生土器とは、ひとによっては古墳時代に入るといわれている時期まで含むものであることをおことわりしておきたい。

そこで、長尾・沖田遺跡出土の弥生土器であるが、全体で約100数個体出土している。ほとんどが小片であり完形のものは認められない。これらの土器は、一部遺構に伴うもの（2が土壙28、12が土壙7、46が溝2、56が住居跡1から出土している）を除き、層位的にはB地区谷部の底部の最下層にあたる黒灰色砂礫層から出土している。しかし土器をみると、中期と後期の2時期に大別が可能である。したがって、良好な出土状況を示すものとはいえない状況である。そこで、土器形式をもとに2時期に分け報告していくことにする。

弥生時代中期　壺・甕・高杯・器台が出土しているが、壺と甕が大半を占める。壺は、全て広口壺に分類されるものである。口縁端部を拡張し、その端面に凹線を施すものと無文あるいは波状文を施すものとに大別でき、前者が大半を占める。前者の土器群はさらに、凹線文を施した後に棒状浮文を貼りつけるものと、貼りつけないものとに分けられる。

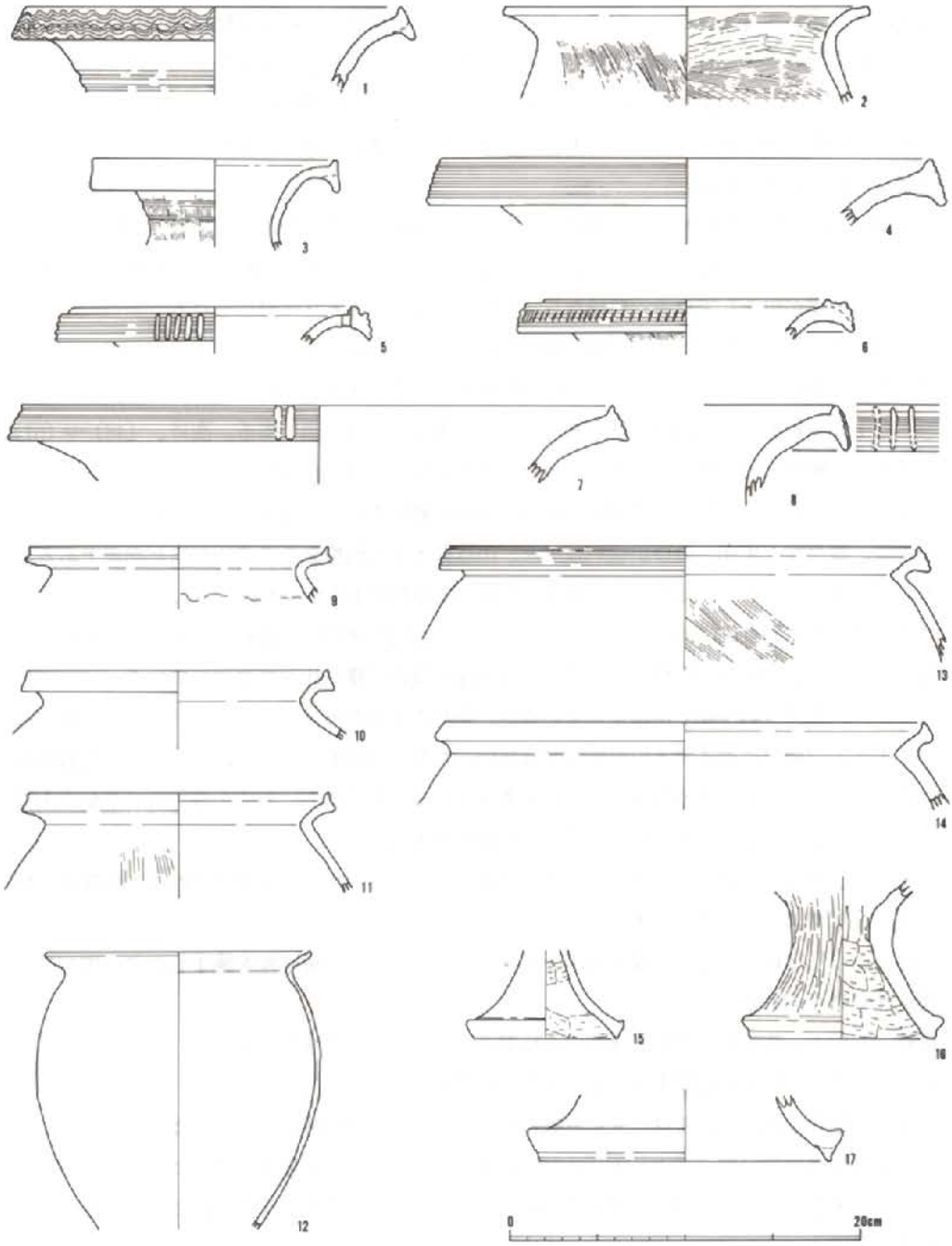
甕は、口縁部を如意形に外反させるものと、外方に短く屈曲させ端部を上方にわずかにつまみあげるものとに大別できる。前者の土器（2）は、内面を横方向、外面を縦方向の刷毛調整で仕上げており、中期でも古い様相を示すものである。後者に分類される土器（9）～（14）は、端部をつまみあげるだけのものと、端部に凹線を施すものとがあり、全体的に中期でも新しい様相を示している。

高杯・器台については、脚部のみしか残存しておらず、明確な特徴を指摘することはできない。

弥生時代後期　長尾・沖田遺跡出土の弥生土器の大半を占め、壺・甕・高杯・鉢・ミニチュア土器の各器種が出土している。

壺は、広口壺・短頸壺・複合口縁壺が出土している。このなかで、（25）～（29）の複合口縁壺はこれらの土器の時期を考えるうえで大いに参考となるものである。まず（25）・（26）は、畿内を中心に弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて一般に見られる土器である。次に、（27）～（29）は、（25）とほぼ同時期に山陰地方に一般的な土器である。ただし、胎土の上からは、当該地方ではなく、在地産と考えられる特徴を示している。

甕は、当時期の土器のなかで最も多く出土している。口縁部部の形態からみると、①口縁部を「く」の字形に外反させるもの(30 ～39)、②外方に短く屈曲させるもの（40～43)、③複合口縁を形成するもの（47～59／59についても、体部の形態・調整法等から本型式に含まれるものと考えられる）と、大きく3つに分類できる。



第47図　弥生土器実測図（１）

①は、当該期に畿内及びその周辺地域に一般的に認められるものである。体部外面は、叩き技法により成形されている。一部の土器は、叩き成形後縦方向の刷毛調整が施されている。内面は、横方向を主体とした刷毛調整で仕上げられているものと、左方向を主に箆削り調整されているものとがある。また、完形のものがなくほとんどが口縁部～肩部までしか残存していないため、明確には指摘できないのであるが、本タイプの甕は法量から大・中・小の3タイプに分類が可能のようである。

②は、口縁部端部がわずかに凹線状をなすのが一般的で、外面を縦方向の刷毛調整、内面を左方向の箆削りにより仕上げられている。当遺跡の北方約0.5㎞に位置する長尾遺跡[1]でも同じタイプの甕が出土している。口径から、大型と小型の2タイプに分けられる。

③は、壺の（27）～（29）と同様山陰地方に一般的な特徴を示すものである。ただし、このタイプの土器については、いくつかに細分が可能である。まず、(58)・(59)のように、形態・胎土等の特徴から山陰地方から搬入されたと考えられる土器である。次に、(48)～(57)のように形態的には山陰系の特徴をもつものであるが、胎土上の特徴からは搬入品とは認められない一群である。ただし、口縁部の形態を詳細に観察すると、複合部外面の稜のシャープさを欠き、複合部上半部ののびが短い点など、山陰系本来の形態からの退化傾向が顕著である。そして最後に、(47)のように、口縁部の形態は山陰的であるが、体部の成形は叩き技法によって仕上げられており畿内的といえるもので、いわば山陰と畿内の折衷様式と考えられるものである。ただし、口縁部の形態については、②同様山陰系の甕に比べて退化している。

この他、底部（44～46）が出土しているが、完形のものが出土していないため、①～③のどのタイプの口縁部に対応するのか断定できない。ただ、当該期の他の遺跡で出土した土器から判断すると、②に対応するのではないかと考えられる。いずれも、内面を縦方向（下から上方向）の粗い箆削り調整が施されている点が特徴的である。

高杯は、杯部と脚部とが出土している。両者とも同一型式のものと考えられる。杯部の形態より、後期中葉ごろのものと考えられる。

鉢は、小形の鉢である。口縁部端部を斜下方に拡張し端面に擬凹線を施すもので、脚が付く可能性も考えられる。

小結　以上、弥生時代中期と後期の2時期に分けて概観してきた。そして、これらの各時期についても、それぞれ時期を分けることが可能である。

まず中期の土器については、先にも触れたように、2つの時期に分けることができる。一つは、量的には少ないが、（1）・（2）に代表されるような、中期でも前半に位置付けが可能な一群である。もう一つは、凹線文に特徴付けられる、中期でも後半に位置づけられる一群である。

次に後期にかけての土器についてであるが、当該期についても2時期に分けることが可能で

第48図　弥生土器実測図（２）

ある。一つは、高杯（60）に代表されるもので、杯部の形態から、後期中葉と考えられる時期である。他の器種としては、②タイプの甕及びこれに対応すると考えられる底部（44〜46）が当該期に属するのではないかと考えられる。主な根拠として、特に底部に認められる突出しない広い平底を有し、内面を縦方向の篦削り調整する点などである。

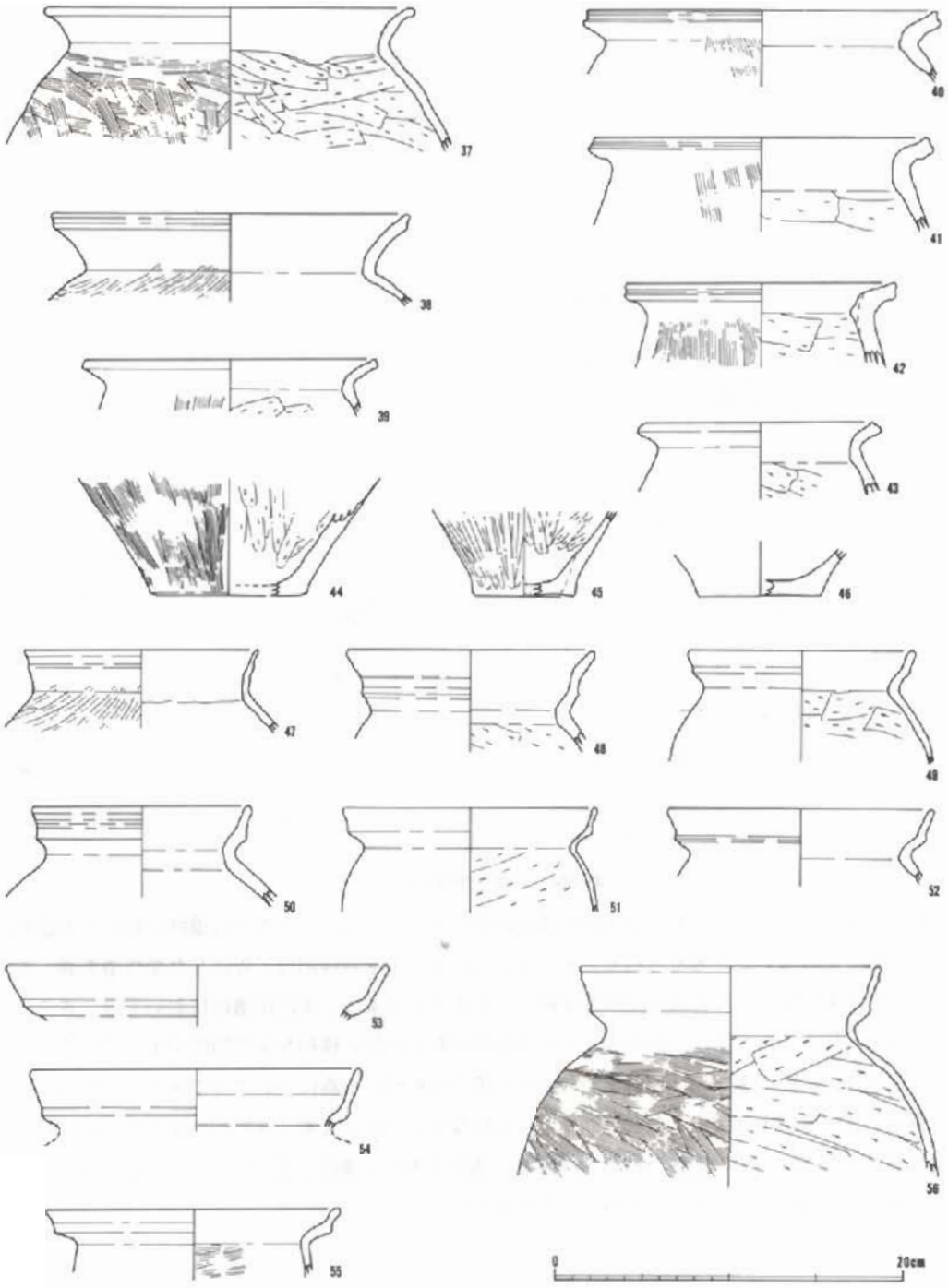
もう一つは、弥生時代後期末〜古墳時代初頭にあたる時期である。後期とした土器の大半はこの時期に対応するものと考えられる。前述したように、二重口縁壺・山陰系複合口縁壺・山陰系甕（③タイプの甕）が指標になるものと考えられる。また①のタイプの甕も、この時期に含まれるものと考えられる。

最後に、長尾・沖田遺跡出土の弥生時代後期末〜古墳時代初頭の土器について、気付いた点を述べておきたい。一つは、土器様式として、いわゆる畿内系の土器と山陰系の土器から構成されていることである。特に甕を中心にみると、畿内系と山陰系との比率がほぼ同じ割合で出土している。畿内系については、内面を篦削りするものと刷毛調整で仕上げるものとがある。

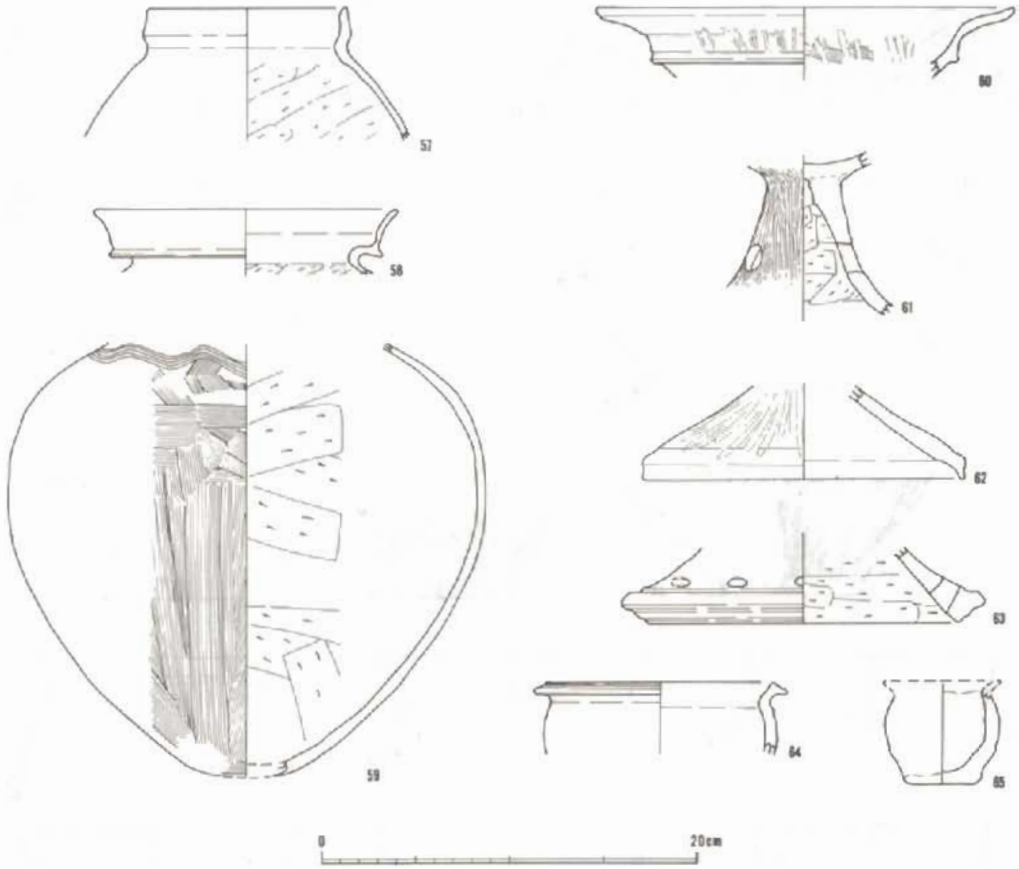
山陰系については、山陰系そのもの、つまり搬入されたものは極一部である。他は形態的には山陰系に類似するものの胎土が異なるものである。ただし、先述したように、形態的に山陰系そのものとは若干のバリューションをもち、特に口縁部を中心に複合部の退化傾向が顕著である。このような複合部の退化したものは、中国地方内陸部の美作・備中北部を中心とした地域によくみられるものである。これらの地域では、山陰系の土器がバリエーションをもった形態で一定の割合で出土しているようである[2]。特に、美作地域の中心にあたる津山盆地に面した丘陵上に立地する大田十二社遺跡出土の当該期の土器の胎土分析の結果、因幡地方から搬入された土器の存在が明らかとなっている[3]。ただし、①のタイプの甕、つまり畿内系の甕がわずかである点は、長尾・沖田遺跡で認められた様相とは異なる。

ところで、長尾・沖田遺跡遺跡は第2章第1節でも述べたように、播磨と美作を結ぶ美作道沿いに位置している。そして、この美作道の延長上は山陰地方へ通じている。また、当地からは、鳥取地方への因幡街道が分岐している。このような点と、先にみた長尾・沖田遺跡出土の山陰系甕の在り方が美作地域のものと類似していた点を考慮に入れると、このような交通路は、弥生時代末まで遡るものとみなすことができる。そして、当該期にみられる土器の様相はこの状況を端的に反映したものといえよう。

次に以上のことをふまえて、長尾・沖田遺跡に認められる特徴は当遺跡のみに限られるのかどうかを、周辺遺跡との比較をおこなってみたい。長尾・沖田遺跡の所在する佐用盆地において、当該期の遺跡としては、当遺跡の北約1㎞の所に本位田遺跡[4]がある。当遺跡出土遺物についても、遺構にともなうものではなく、長尾・沖田遺跡とほぼ同じような出土状況を示している。これらの土器をみると、山陰系ないしこれに類似する土器が一定の割合で出土しており、長尾・沖田遺跡とほぼ同様の特徴を示している。したがって、長尾・沖田遺跡に認められ



第49図　弥生土器実測図（3）



第50図　弥生土器実測図（４）

た土器様相は、少なくとも長尾・沖田遺跡に限るものではなく、その周辺遺跡においても認められるのではないかと考えられる。そして、このような土器様相は、先述した美作道を通して結ばれた美作地域との密接な関係を反映したものといえよう。本位田遺跡においては、さらに讃岐系・丹波・但馬系の土器も少なからず認められ、上記の様相をより端的に示している。

以上長尾・沖田遺跡出土の弥生時代末～古墳時代初頭の土器についてみてきた。しかし、当遺跡における出土状況は、前述したように良好な状況とはいえず、資料的に限界がある。また、地域性の問題についても、当該期と同時期の遺跡が本位田遺跡と限られており、限界がある。今後、当地域での良好な一括資料の出現をまちたい。

〔注〕

(1) 村上紘揚・輔老拓治「長尾遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－佐用郡編－』（兵庫県文化財調査報告　第11冊）兵庫県教育委員会　1976

(2) 中山俊紀「岡山県北部におけるいわゆる『山陰系土器』の様相」『第18回埋蔵文化財研究会　弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について　発表記録　』第18回埋蔵文化財研究会事務局　1986

(3) 清水芳裕「土器の胎土分析について」『大田十二社遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集　津山市教育委員会　1981

(4) 井守徳男編「本位田遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－作用郡編－』（兵庫県文化財調査報告　第11冊）兵庫県教育委員会　1976

第２表　弥生土器観察表

No.	器　種	法　量（cm）	調　整　の　特　徴	残存状況	色　調	備　考
1	壺	口径：21.2　頸径：13.4 器高：(4.8)	内面：横方向のナデ 外面：横方向のナデ／口縁部端部に２段の波状文／頸部に凹線	口縁1／4	にぶい橙	
2	甕	口径：20.4　頸径：17.0 器高：(5.5)	内面：横方向の板ナデ（２種の原体を使用） 外面：縦方向のハケ	口縁1／8	灰白	土壙28
3	壺	口径：13.8　頸径：7.4 器高：(5.2)	内面：横方向のナデ 外面：口縁部は横方向のナデ／頸部以下は縦方向のハケ	口縁1／8	灰白	
4	壺	口径：15.6 器高：(2.1)	内面：横方向のナデ 外面：横方向のナデ／口縁部端部を３条の凹線文の後棒状浮文を貼り付	口縁1／6	にぶい黄橙	口縁部に円孔あり
5	壺	口径：27.6 器高：(3.7)	内面：磨滅の為調整不明 外面：口縁部端部を拡張し、６条の凹線文／他は不明	口縁1／9	にぶい褐	1㎜大の砂礫非常に多く含
6	壺	口径：16.0 器高：(2.3)	内面：横方向のナデ 外面：縦方向のハケの後横方向のナデ／口縁端部を３条の凹線の後刻目	口縁1／4	にぶい黄褐	
7	壺	口径：33.6 器高：(4.4)	内面：磨滅の為調整不明 外面：口縁部端部を拡張し、４条の凹線文、その後棒状浮文	口縁1／8	にぶい黄橙	
8	壺	口径： 器高：(5.7)	内面：磨滅の為調整不明 外面：横方向のナデ／口縁部端部に５条の凹線文、その後棒状浮文	口縁部わずか	灰黄	

No.	器　種	法　　量（cm）	調　整　の　特　徴	残存状況	色　調	備　考
9	甕	口径：16.8　頸径：15.6 器高：(5.7)	内面：口縁部を横方向のナデ、以下をナデ 外面：横方向のナデ	口縁1／8	にぶい黄橙	外面に煤付着
10	甕	口径：17.0　頸径：15.8 器高：(8.0)	内面：口縁部を横方向のナデ、以下をナデ 外面：横方向のナデ	口縁1／6	にぶい褐	
11	甕	口径：17.0　頸径：15.4 器高：(5.6)	内面：口縁部を横方向のナデ、以下をヘラナデ 外面：縦方向ハケの後横方向のナデ	口縁1／6	にぶい橙	
12	甕	口径：14.9　頸径：13.0 器高：(15.7)腹径：16.2	内面：口縁部を横方向のナデ、頸部をナデ 外面：体部を縦方向のハケ		橙～灰色	土壙7 出土
13	甕	口径：27.0　頸径：25.6 器高：(13.0)	内面：口縁部を横方向のナデ、以下を左上がり方向のハケ 外面：口縁部をナデ、以下を縦ハケ	口縁1／8	灰白	
14	甕	口径：27.2　頸径：26.6 器高：(9.8)	内面：口縁部を横方向のナデ、以下を横方向のハケ 外面：横方向のナデ	口縁1／8 以下	灰白	
15	高 坏	脚径：8.0 器高：(5.0)	内面：横方向のヘラ削り 外面：縦方向のヘラ磨き／端部は横方向のナデ	裾部1／4	橙	1㎜以下の砂粒多く含
16	高 坏	脚径：10.4　筒径：5.6 器高：(9.0)	内面：横方向のヘラ削り 外面：縦方向のヘラ磨きの後、端部は横方向のナデ	1／4	灰白	
17	脚 部	脚径：16.4 器高：(3.8)	内面：ナデ 外面：横方向のナデ	1／10	にぶい橙	
18	壺	口径：19.3　頸径：13.8 器高：(5.7)	内面：横方向のナデ 外面：端部を拡張し3条の凹線／端部付近を横方向のナデ以下を縦ハケ	口縁1／8	橙	
19	壺	口径：13.4　頸径：11.4 器高：(5.2)	内面：横方向のナデ 外面：口頸部を横方向のナデ／肩部をハケ	口縁	浅黄	
20	壺	口径：11.4　頸径：10.2 器高：(3.8)	口縁部内面：横方向の刷毛の後ナデ 頸部内面：指抑え 口頸部内外面：横方向のナデ	口縁	にぶい橙	
21	壺	口径：16.0　頸径：12.8 器高：(5.5)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部内面：ナデ 体部外面：縦方向のハケ		にぶい黄橙	
22	壺	口径：15.8 器高：(5.0)	内面：横方向のナデ 外面：横方向のナデ	口縁1／8	灰白	
23	壺	口径：9.2　頸径：9.2 器高：(14.0)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部内面：横方向のヘラ削り 体部外面：縦方向のハケ	口縁1／8	浅橙	

No.	器種	法量（cm）	調整の特徴	残存状況	色調	備考
24	壺	口径：11.2　頸径：11.4 器高：(14.6)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部内面：ナデ 体部外面：叩きの後縦方向のヘラ磨	口縁1／3	浅黄橙	
25	壺	口径：16.8 器高：(7.0)	内面：横方向のナデ 外面：横方向のナデの後、2帯の波状文（6条）	口縁	淡橙	二重口縁
26	壺	口径：21.0　頸径：13.2 器高：(10.0)	内面：横方向のナデ／頸部は不明 外面：横方向のナデ／頸部と口縁部の接合部は指押さえ	口縁1／4	にぶい橙	二重口縁
27	壺	口径：24.0 器高：(10.4)	内面：横方向のナデ 外面：横方向のナデ	口縁	灰白	山陰系
28	壺	口径：17.3　頸径：12.2 器高：(7.7)	内面：横方向のナデ 外面：横方向のナデ	口縁1／4	浅黄橙	山陰系
29	壺	口径：17.2 器高：(9.0)	内面：横方向のナデ 外面：横方向のナデ	口縁1／5	橙	
30	甕	口径：14.7　頸径：12.0 最大径：13.4 器高：(6.8)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部内面：ナデの後横方向のハケ 体部外面：叩きの後、ナデ・縦ハケ	口縁1／10	淡橙	
31	甕	口径：14.7　頸径：11.8 最大径：12:2 器高：(5.8)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部内面：横方向のハケ 体部外面：叩きの後、縦方向のハケ	口縁1／6	浅黄橙	体部外面煤付着
32	甕	口径：15.4　頸径：13.3 最大径：14:6 器高：(6.0)	内面：口縁部を横方向のハケ／体部はナデ 外面：口縁部は横・体部は縦のナデ	口縁	浅黄	
33	甕	口径：17.8　頸径：15.4 器高：(4.0)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部内面：横方向のハケ 体部外面：叩きの後縦方向のハケ	口縁1／8	暗青灰	
34	甕	口径：12.6　頸径：10.2 器高：(4.6)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部内面：左上がり方向のヘラ削り 体部外面：右上がり方向の叩き	口縁1／4	にぶい黄橙	
35	甕	口径：15.0　頸径：13.2 器高：(4.7)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部内面：左り方向の弱いヘラ削り 体部外面：縦方向のハケ	口縁1／4	にぶい橙	煤付着（口縁部外面）
36	甕	口径：14.8　頸径：13.0 器高：(5.0)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部内面：左り方向の弱いヘラ削り 体部外面：縦方向のハケ	口縁1／4	橙	煤付着（口縁部外面）
37	甕	口径：20.8　頸径：18.4 器高：(8.2)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部内面：左り方向の強いヘラ削り 体部外面：横方向の後縦方向のハケ	口縁1／6	暗灰褐	
38	甕	口径：20.3　頸径：16.4 器高：(5.0)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部内面：ナデ 体部外面：右上がり方向の叩き	口縁1／4	橙	

No.	器種	法量（cm）	調整の特徴	残存状況	色調	備考
39	甕	口径：16.6　頸径：4.2 器高：(2.8)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部内面：右方向のヘラ削り 体部外面：ナデの後縦方向のハケ	口縁1／4	にぶい橙	煤付着（外面）
40	甕	口径：19.8　頸径：18.0 器高：(3.6)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部内面：ナデ 体部外面：縦方向のハケ	口縁1／8	にぶい褐	
41	甕	口径：18.8　頸径：17.0 器高：(5.1)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部内面：左方向のヘラ削り 体部外面：ナデの後縦方向のハケ	口縁1／8	浅黄	
42	甕	口径：15.0　頸径：13.0 器高：(4.8)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部内面：左方向のヘラ削り 体部外面：縦方向のハケの後ナデ	口縁1／8	にぶい黄橙	
43	甕	口径：13.0　頸径：11.6 器高：(4.1)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部内面：左上がり方向のヘラ削り 体部外面：ナデ	口縁1／6	灰黄	
44	甕	底径：7.8 器高：(6.7)	内面：縦方向（下→上）の粗掻き 外面：縦方向のハケ	底部	灰白	
45	甕	底径：5.5 器高：(5.0)	内面：縦方向（下→上）の弱いヘラ削り 外面：縦方向のヘラ磨き	底部1／2	浅黄橙	
46	甕	底径：6.8 器高：(5.4)	内面：ナデ 外面：ナデ	底部	灰白	溝2出土
47	甕	口径：13.4　頸径：12.4 器高：(4.5)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部外面：右上がり方向の叩き 体部内面：ナデ	口縁1／6	にぶい黄橙	
48	甕	口径：14.0　頸径：11.4 器高：(5.1)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部内面：左上がり方向のヘラ削り 体部外面：不明	口縁1／4	暗灰黄	
49	甕	口径：12.6　頸径：10.2 器高：(6.4)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部内面：右方向のヘラ削り 体部外面：不明	口縁1／4	橙	
50	甕	口径：12.5　頸径：10.6 器高：(5.2)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部内面：ナデ 体部外面：横方向のナデ	口縁1／4	橙	
51	甕	口径：14.4　頸径：12.2 器高：(6.0)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部内面：ヘラ削り 体部外面：不明	口縁1／8	赤橙	
52	甕	口径：14.8　頸径：12.6 器高：(4.0)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部内面：ナデ 体部外面：横方向のナデ	口縁1／6	灰黄褐	
53	甕	口径：21.5 器高：(3.0)	内面：横方向のナデ 外面：横方向のナデ	口縁1／8	浅黄橙	

No.	器種	法量（cm）	調整の特徴	残存状況	色調	備考
54	甕	口径：18.8 器高：(3.4)	内面：横後方のナデ 外面：横方向のナデ	口縁1／6	灰白	
55	甕	口径：16.6　頸径：13.2 器高：(13.3)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部内面：弱い横方向のハケ 体部外面：不明	口縁1／12	橙	
56	甕	口径：17.0　頸径：14.2 器高：(12.0)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部内面：左上がり方向のヘラ削り 体部外面：左上がり方向のハケ	口縁	浅黄灰	煤付着（外面） 住居跡2
57	甕	口径：10.4　頸径：5.6 器高：(6.7)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部内面：右上がり方向のヘラ削り 体部外面：ナデ・縦方向のハケ	口縁1／8	橙	
58	甕	口径：15.8　頸径：12.0 器高：(3.4)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部内面：右上がり方向のヘラ削り 体部外面：ナデ	口縁1／6	にぶい黄橙	山陰系（搬入）
59	甕	器高： 最大径：	内面：横方向を主体としたヘラ削り 外面：上半を横・下半を縦方向のハケの後、肩部に波状文			山陰系（搬入）
60	高坏	口径：21.9 器高：(3.7)	内面：横方向のハケの後横方向のナデ、最後に縦方向のヘラ磨き 外面：横方向のナデの後ヘラ磨き	口縁1／8	灰褐	内外面の磨きは部分的
61	高坏	接合部径：3.9 器高：(8.0)	内面：坏部はヘラナデ／脚部は左方向のヘラ磨き 外面：縦方向のヘラ磨き		橙	
62	器台	脚径：16.6 器高：(4.9)	内面：ナデ／端部を特に強いナデ 外面：縦方向のヘラ磨き／端部を強いナデ	脚部	橙	
63	器台	脚径：16.0 器高：(4.0)	内面：左方向のヘラ削り 外面：横方向のナデ	脚部1／8	にぶい黄橙	計16の円孔（残存は3孔）
64	鉢	口径：11.9 器高：(3.8)	口縁部内外面：横方向のナデ 体部内面：ナデ 体部外面：ヘラナデ	口縁1／4	橙	
65	壺	頸径：5.2　最大径：6.1 底径：3.2 器高：(4.8)	体部内外面：手づくね 底部画面：ナデ		にぶい橙	ミニチュア土器

※備考欄に出土位置明記したもの以外はすべてB地区谷部包含層から出土した遺物である。

2．奈良～平安時代の土器

出土土器の大半は須恵器で、土師器が少量出土している。さらに土師器は磨滅しているものが多く図化できたのは3点だけである。須恵器は45点図化している。そのうち（66）・（67）の2点は明らかに古墳時代の須恵器である。しかし、長尾・沖田遺跡では当該時期の遺構は検出されておらず、遺物もこの2点だけであることから便宜的に本項で扱うこととする。

杯蓋（66）

前述したように古墳時代後期の所産である。通有の蓋で、天井部の一部を欠くものの、ほぼ全体像を想定出来るものである。復原口径11.8 cm・器高 3.2cmを測り、焼成・胎土とも良好で青灰色に焼き上げられている。まだ天井部にヘラケズリが残っており、他はロクロナデで仕上げられている。

杯身（67）

口縁端部が欠失していることから、立ち上がり部の形状が不明なため確実な時期は決定できないが、体部の稜線が明瞭であることやヘラケズリの範囲が広いことから（66）の杯蓋よりは古いものと思われる。残存高3.4cmで推定の口径は12cm余りと思われる。内外面は青灰色だが、器肉は赤褐色とやや焼成が甘い。僅かに砂粒を含むものの、焼成・胎土ともに良好である。

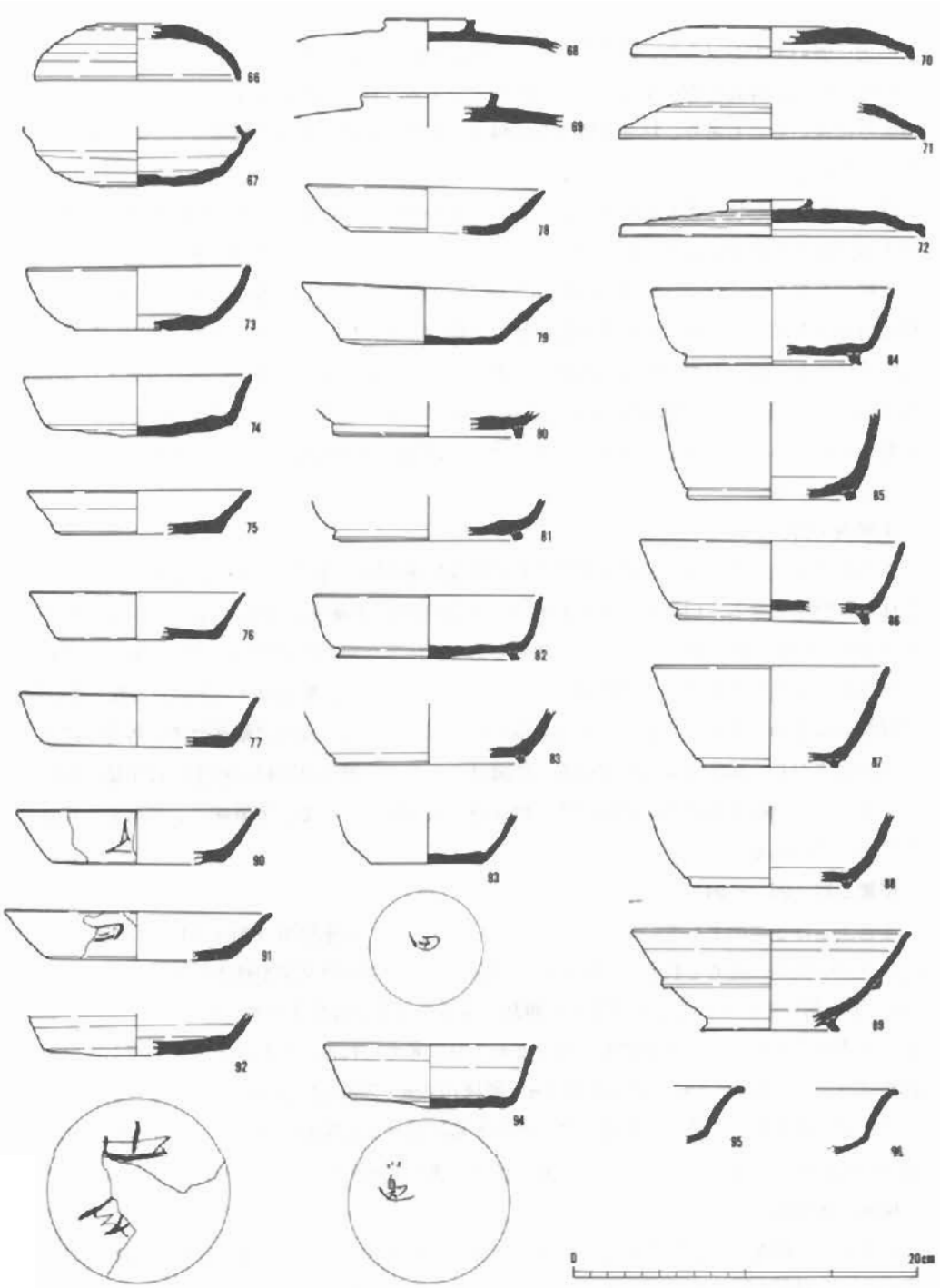
杯蓋（68～72）

つまみ部が付くもの3点とつまみ部を欠く端部の破片2点の5点である。（72）だけが図上で完形である。つまみ部は径の大きい輪状のものである。（69）が最も大きく8.5cmを測る。稜椀の蓋とされているものに似るが断定は出来ない。胎土も良好で、（69）のように胎土も灰色でやや白っぽいところは十分に稜椀の蓋に想定されるものである。端部は3点とも折り曲げるものであるが、形状はすべて異なっている。（72）は内面に墨が見られ硯として使用されたようである。他の土器と比べて内面にナデ仕上げが見られるなど丁寧である。

杯（73～88）

最も量の多い器種である。ただ、時期的な開きもあり、器種として皿とした方が良いものも含まれている。

（73）～（79）は高台を有さないタイプの杯である。（73）は底部未調整のものでプロポーションも古い時期のものと似るが、胎土や灰色に近い色調に焼き上げられていることから、他の土器と同時期と考えられる。（74）のように底部と体部との境が明瞭でないものと、（75）のように明瞭なものとに分けられる。これは成形技法の相違によるもので、前者は底部未調整で、後者はヘラ切りによるものである。また、前者は焼成が甘く色調は灰白色であるが、後者は焼成は良好で青灰色～灰白色を呈している。灰白色のものは（77）・（78）でともにヘラ切りではあるが稜線が鈍く時期が下る可能性が高い。（75）・（76）に比べると口径も大きくなっている。（75）で口径12.9cm・底径9.4cm・器高2.5cmを測る。（78）は焼き歪みが見られる。底部と体部



第51図　須恵器実測図（１）

との境に強いナデが見られ、底部を作り出す際の痕跡と思われる。

(80)～(88)は高台を有するタイプ（杯B）である。ただ、杯部の深さの大小はあり、(85)のように深いものもあり、杯とは異なる器種の可能性もある。すべて輪高台で、底部成形後に付加している。

高台の断面の形状はまちまちである。台形のものやM字形のもの、丸みを持つもの、踏ん張りぎみに端部が肥厚するものに分けられる。体部のプロポーションも直立ぎみに立ち上がるものと緩やかなものに分けられる。(82)で口径13.2cm・底径10.5cm・器高3.7cmを測る。底部に焼成時の灰を被っている。砂粒を含むが胎土・焼成ともに良好である。(84)はしっかりした高台を持つもので、やや緑がかった色（明オリーブ灰）を呈している。口径17.0cm・底径10.1cm・器高4.5cmを測る。口縁端部は尖りぎみに収めている。(86)の底面はヘラ切りによって切り離されたのち、高台を貼り付けている。(87)は器高5.9cmと深めの杯であるが、高台が退化しはじめている。

突帯椀（89）

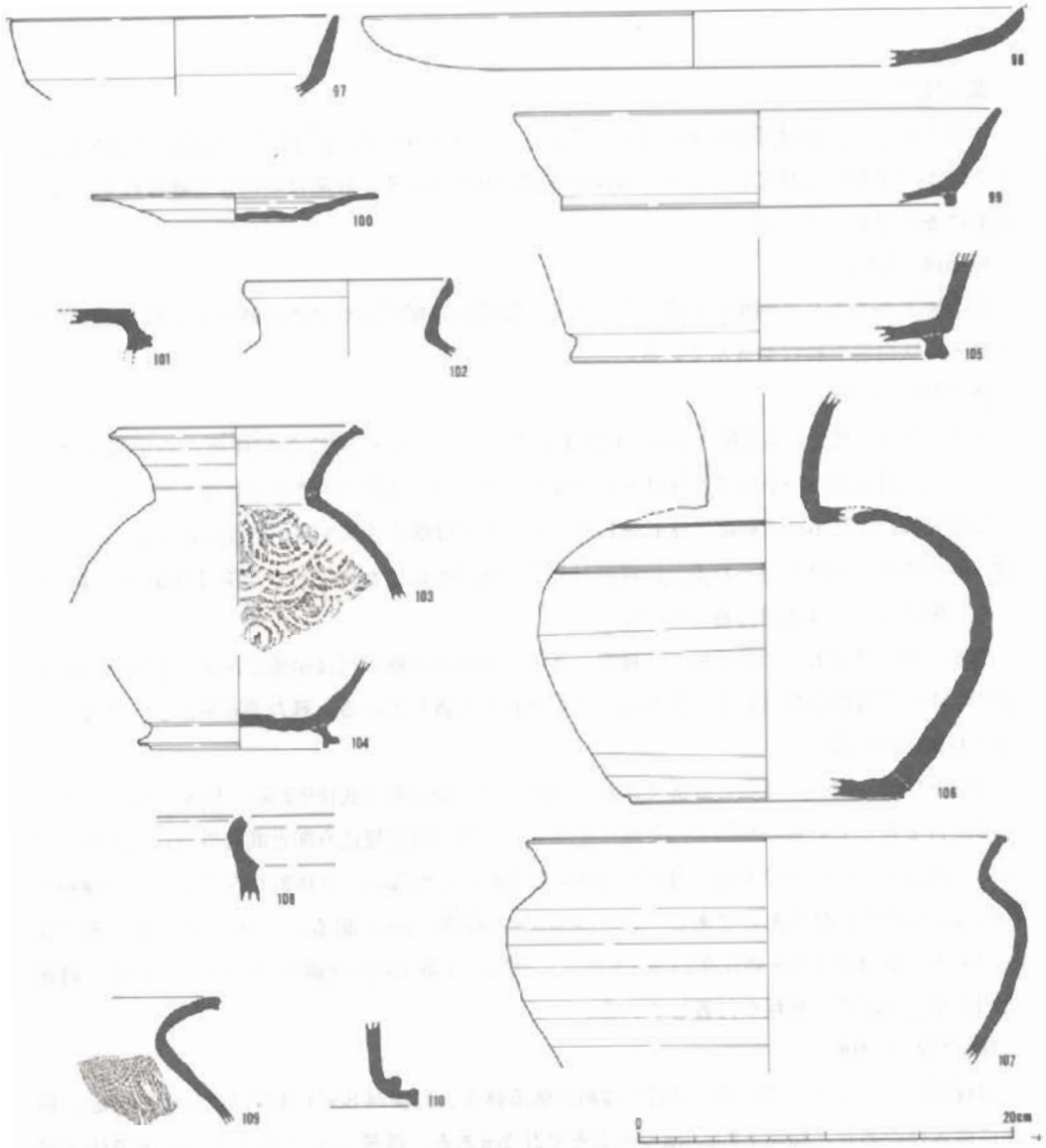
1点だけ出土している。高台・突帯ともに椀成形後に貼り付けている。底部を欠いているが、全体像は想定できる。口径16.0cm・底径8.0cm・器高5.8cmを測る。突帯は器高の中位に付けられており、径も口径と底径の真ん中の数値である。体部が緩やかに内弯しているものの直線的に延びているためであろう。突帯はシャープなものではなく、断面は半円形に近くなっている。口縁端部は僅かに外反しており、尖りぎみに丸く収めている。高台は輪高台で、外方へ踏ん張りぎみに広がり、端部は尖らせている。色調は灰白色で、焼成は良好、胎土には少量の砂粒を含んでいる。口縁部から内面にかけて、焼成時の灰が被っている。突帯椀にしてはやや粗雑な作りかと思われる。

墨書土器（90)～(94）

墨書土器は5点出土している。すべて杯で、記されている部位が(90)・(91)が体部外面に、他の3点が底面に認められる。(90)・(91)は破片で、1字だけ文字が残されている。各々『上』『日』で土器片の記されている位置から複数の文字が上下には存在せず、左右に書かれていたものと考えられる。が、1字であったことも十分に考えられる。ともに灰白色を呈し、底部の調整は行っていない。(90)は口径14.0cm・底径10.0cm・器高3.1cmを測る。(92)は底面に大きく2文字が書かれている。『中殿』で、他の土器に比べると筆致が大きい。(93)・(94)は細い文字が書かれている。(93)は『田』、(94)は『川邊』と書かれている。

稜椀（95～97）

2タイプの稜椀が出土している。大型でシャープさを欠くものとシャープな口縁部との2者である。口縁部の破片が2点出土している。ともに稜より僅かに下までしか残っていない。口縁端部は、外反して丸く収めている。稜線はシャープであるが、砂粒を含み精良とは言えない。



第52図　須恵器実測図（2）

灰色に焼き上げられており、焼成は良好である。

（97）は大型の稜椀で、稜線は明瞭でない。口径17.4cmで、端部は角張っている。器肉も厚く胎土も砂粒を含み精製品とは言えない。残存高4.2cmで、灰白色を呈している。

大型杯（盤）（98）

口径25.7cmを測る大型品で、器高5.1cm・底径20.9cmである。全体にロクロナデで仕上げられている。高台は断面方形のもので底部との比高差は少ない。口縁部は直線的に広がっており、端部は丸く収めている。焼成・胎土とも良好である。

皿（100）

小型であるが、口縁部が大きく開く皿である。口径14.9cmで、底径7.7cm・器高1.5cmを測る。ロクロナデで整形されており、その痕跡が明瞭に残っている。底部は糸切りで離されている。内面に墨が付着している。

円面硯（101）

円面硯とかろうじて判断される小片である。陸部から脚部にかけての破片で、残存高2.4cmを測る。灰白色で砂粒を含んでいる。

壺（102）～（106）

大きく壺としたが、長頸壺（104）も含まれている。（102）・（103）は口縁部のみの破片で、（102）は口径10.8cmの小型で外面はタタキ成形している。端部下の外面で肥厚している。

（103）は口径12.6cmで胴部は球形をしている。外面は格子タタキが、内面には同心円（青海波）の当て具の痕跡が見られる。口縁部は外方に緩やかに広がっており端部は外側に肥厚している。胴部上半には灰が付着している。

（105）は長頸壺もしくは平瓶の口縁部である。頸部との継ぎ目は明瞭である。胴部内面は接合時のユビの痕跡が見られる。内外面とも自然釉が付着している。残存高6.9cmで、焼成・胎土とも良好である。

（104）・（105）・（106）は壺の底部である。（104）は小型の壺で底径9.2cm、大きく外方へ踏ん張る高台を有している。端部は内外面に肥厚している。内面見込み部と高台外面に灰を被っている。高台はシャープである。（105）は鉢の底部かもしれない。全体的に厚く、高台は稜線を持たない丸みをおびたものである。底径19.8cm・残存高5.8cmを測る。（106）は大型の壺の底部である。底径14.6cm・残存高23.4cmを測り、肩部に３条１対の沈線を２対持っている。肩部と内面見込み部に自然釉が付着している。

鉢（107）・（108）

口縁部が２点出土している。（107）は肩の張る鉢で、口径24.8cm・残存高12.1cmを測る。肩部に最大径があり、頸部下約2.0cmのところで27.2cmある。肩部上半のみロクロナデで仕上げている。下半はヘラケズリのままである。端部はわずかに内外面に肥厚している。口縁部が完存していないので、残っていないが片口が付くかもしれない。

（108）は大型の鉢の口縁部と思われる。小片のため口径は復原できない。全体的に磨滅しているが、ロクロナデで仕上げている。

甕（109）

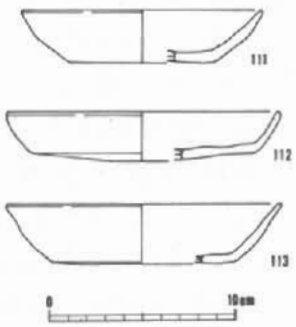
図化したものは１点だけである。小片のため復原径は出せなかった。外面はタタキののちナデで仕上げている。

高杯（110）

高杯も１点だけ出土している。方形の透孔があるが個数は不明である。ロクロナデで仕上げている。

土師器　杯（111）～（113）

土師器は少量で図化したものは３点だけである。全体的に磨滅しており、成形技法など明らかでない。（111）は口径12.9cm・器高2.8cm・底径7.9cmを測る。（112）は皿にした方が良いかもしれない。（111）よりも底部と体部との境（稜線）が明瞭である。口径14.6cm・器高2.6cm、底径12.0cmを測る。内面は灰色気味でヨコナデで仕上げる。（113）はヘラで底部を切り離している。器高は3.2cmとやや高く、口径14.7cm・底径10.0cmを測る。口縁部はややいびつである。



第53図　土師器実測図

３．中世以降の土器

長尾・沖田遺跡出土の中世以降の土器は、瓦質羽釜、須恵器捏鉢・椀、備前焼系甕・擂鉢、唐津系皿・椀等の国産陶器、中国製青磁椀が出土している。中世以降の土器は破片を含めても29点と出土量は極めて少ない。出土状況はA～D地区ほぼ全域で出土しており、（116）・（117）の須恵器椀（130）・（131）・（133）の備前系擂鉢、（126）の唐津焼系椀がD地区水路より出土している。これら以外はすべて各調査区の耕土・包含層（Ⅰ・Ⅱ層）より出土している。

瓦質土器　（114）は口縁部が短く内傾する瓦質羽釜である。鍔は幅１cmと狭く先端を丸くおさめている。

須恵器　（115）は口縁部が上方に拡張する捏鉢である。口縁部外面は黒化し、重ね焼きの痕跡を残す。（116）・（117）はわずかに突出した円盤状高台をもつ椀である。底部は回転糸切り手法で切り離されている。（115）は底径が推定で５cmを測る。遺存状況の良好な（117）は推定口径13.7cm・器高5.3cm・底径は５cmを測り、比較的小型の椀である。

中国製磁器　（118～121）・（123）・（124）は龍泉窯系青磁椀である。（118）は口縁部の破片である。（119）は内面身込み部に双魚文を陽刻した椀である。外面体部には蓮弁文が刻まれている。釉はオリーブ灰色を呈し、畳付部を除き全面に厚く施釉されている。底径は推定で５cmを測る。（120）は見込み部に花文を筋彫りした椀である。内面見込み部と体部の境には凹線が巡り、外面体部には鎬蓮弁文が刻まれている。釉はオリーブ色を呈し、畳付部および高台裏面を除き厚く施釉されている。底径は、推定で5.5cmを測る。（121）・（123）・（124）は内外面とも無文の青磁椀である。（121）は畳付から高台裏面が露胎であるのに対して、（123）・（124）は高台裏面のみ露胎である。高台径は推定で（124）が6.8cmと大きく（121）・（123）が5.9cmを測る。

国産陶器 (122)・(125〜127) は施釉陶器である。(122) は京焼系椀である。畳付以外は透明釉が施され、釉面には細かな貫入が認められる。胎土はクリーム色を呈し、焼成は甘い。(125) は見込み部に砂目の目跡を残す唐津系の皿である。口縁部は大きく外反し、端部を水平方向に拡張している。削り出し高台で、釉は畳付を除く全面に施されている。口径は推定で13.1cm、底径4cmを測る。(126) は筒形の体部をもつ唐津系の椀である。削り出し高台をもち、体部外面には明青灰色の釉が施される。見込み部・外面高台部・外面体部下端は露胎である。底径は推定で5.2cmを測る。(127) は産地不明の鉢ないしは皿である。底部は蛇の目高台様のつくりで、畳付から高台裏面は露胎である。釉色は浅黄色を呈し、内面見込み部には目跡を残す。底径は、推定で10.2cmを測る。(128〜134) は備前焼系の甕および擂鉢である。(128) は口縁部が外方に折れ曲がり、玉縁化した口縁端部をもつ甕である。(129) は口縁端部が若干上下に拡張する擂鉢である。内面には櫛描きによる擂目を施す。(130) は (129) よりも口縁端部の拡張の度合いが大きい擂鉢である。内面には4本以上1単位の櫛描きによる擂目を施す。(131) は口縁端部が上方へ拡張する片口擂鉢である。(132)・(133) は擂鉢の底部である。(132) は底径が推定で14cmを測り、9本1単位の擂目を放射条に施している。(133) は11本1単位の櫛状工具による擂目を施す。(134) は上方に拡張した口縁端部外面に3条の凹線をもつ擂鉢である。口径は推定で23cm、残高9cmと小型の擂鉢である。内面には擂目の痕跡を残す。

以上が中世以降の土器である。

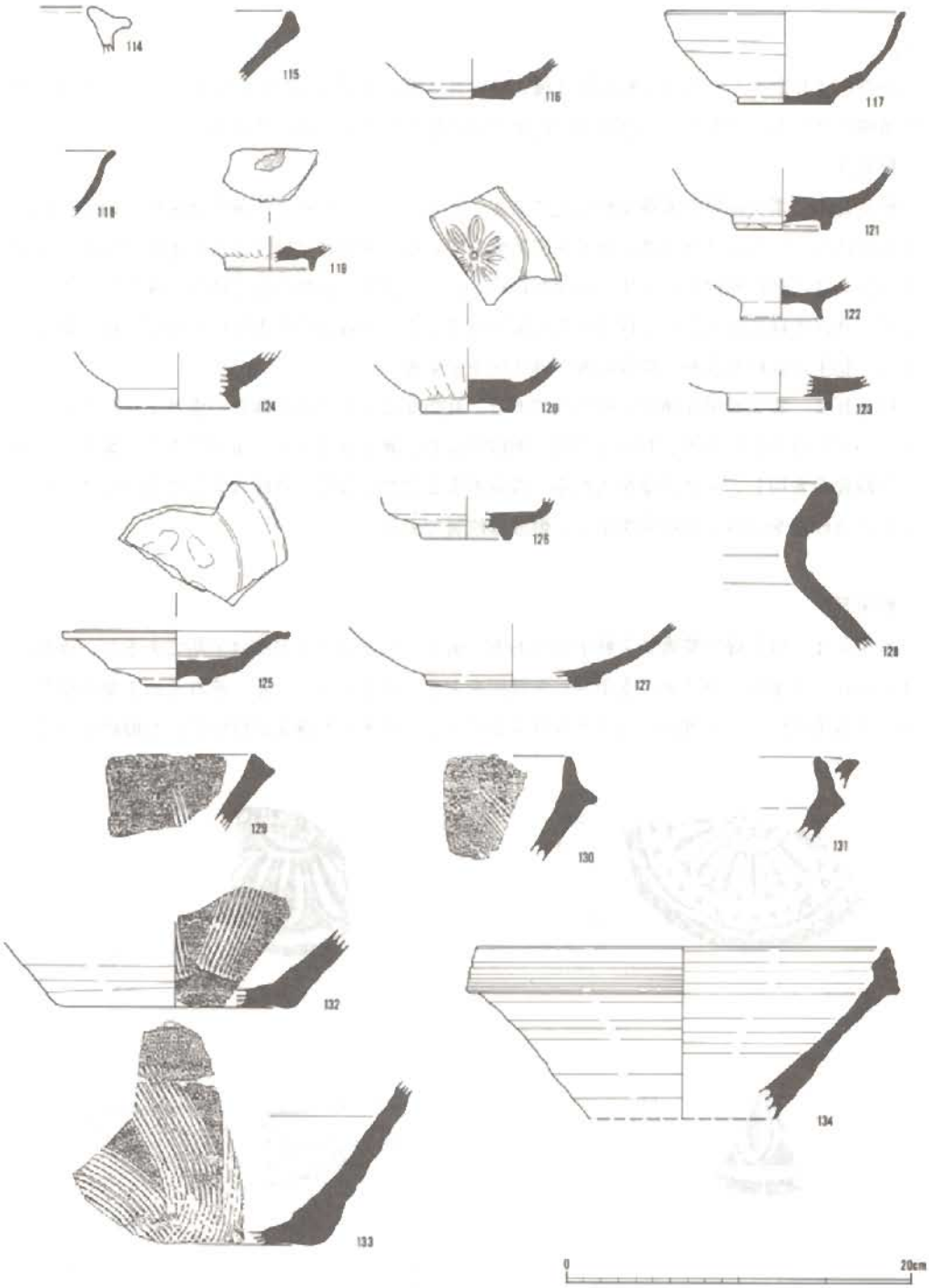
(115) の捏鉢は東播系須恵器の編年に従えば、12世紀末から13世紀前半の間におさまると理解している。また (117) の須恵器椀はおおよそ11世紀頃と理解したい。備前焼系甕・擂鉢は、(128) の甕がⅢB期に比定でき、擂鉢は (129) をⅢ期の範疇で捉え、(130) がⅣA期、(131)がⅣB期、(134) がⅤ期に相当すると理解し、その時期は鎌倉時代後半〜江戸時代初頭と考えられる。また (125) の唐津系皿は江戸時代初頭に比定されるものである。

参考文献

森田　稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開」『神戸市立博物館研究紀要　第3号』1986

間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート(1)」『倉敷考古館研究集報　第1号』1966「同ノート(2)」『倉敷考古館研究集報　第2号』1968、「同ノート(3)」『倉敷考古館研究集報　第5号』1987、「同ノート(3)」『倉敷考古館研究集報　第18号』1988

伊藤　晃「備前焼の流れ」『木村コレクション古備前図録』1984



第54図　中世以降の土器

4．瓦

調査により出土した瓦は、軒丸瓦２種、軒平瓦３種、道具瓦及び平瓦である。これらは、建物遺構に伴うものでなく、道路敷面に円礫と共に敷かれていたものである。

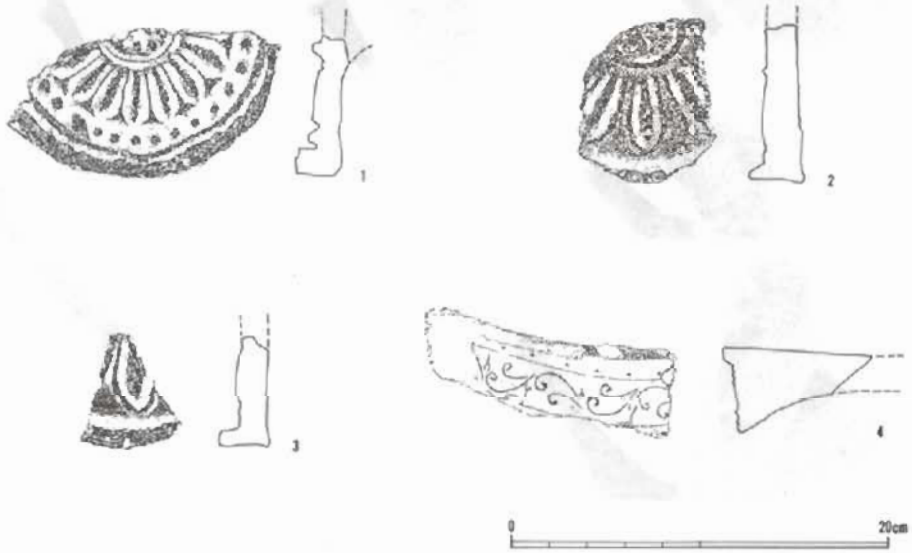
軒丸瓦

軒丸瓦１　素文縁単弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当の下半分のみで、蓮弁は16弁に復原できる。中房は低く、小ぶりで背の高い蓮子を密に配している。蓮子数は破片のため不明である。中房と弁区の間に細い圏線を巡らす。各連弁は細く、くさび状の間弁が長く伸び、蓮弁を区画している。外区内縁には大ぶりの珠文が密に配されている。外縁はやや内傾化する直立縁で素文である。胎土に砂粒を含み、焼成は硬く青灰色を呈する。

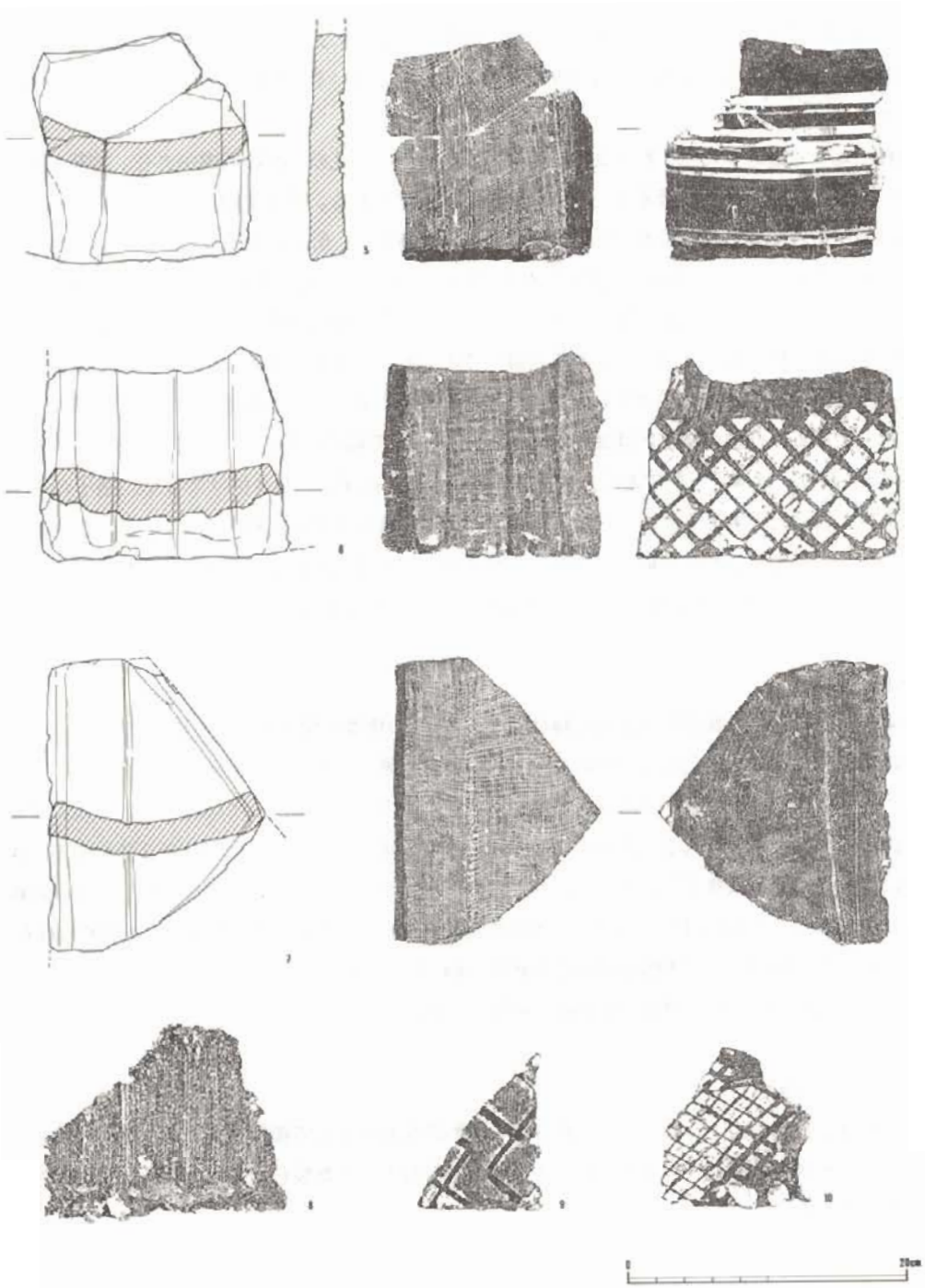
軒丸瓦２　素文縁単弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当面は平坦であり蓮弁の盛り上がりも余りない。中房も盛り上がらず、弁区との間に圏線が巡る。蓮子は１＋８に復原できる。蓮弁は凸線で外輪郭を表現し、中に子葉を入れる。復原すると12弁となる。外縁は素文で直立縁である。胎土には砂粒を含み、赤褐色を呈し、焼成は軟質である。

軒平瓦

軒平瓦４　珠文縁均整唐草文軒平瓦である。破片のため瓦当中央部は不明であるが、唐草は４回反転し主葉ならびに第１支葉共、先端部を大きく巻き込んでいる。それぞれ主葉の基部には小さな蕾が付く。上外区には小さな珠文が付き、下外区にも珠文が付いていた痕跡がある。



第55図　瓦拓影図（１）



第56図　瓦拓影図（２）

顎は曲線顎で平瓦凹・凸両面ともケズリにて調整している。瓦の断面から、瓦当は平瓦広端部を差しこんで接合している。焼成は硬く、黒灰色を呈している。同様な笵型として北宿廃寺の軒丸瓦が[(1)・(2)]ある。

軒平瓦５　破片のため、軒平瓦と断言はできないが、平瓦の凸面に凹線があり、端部が厚くなっているので、軒瓦と考える。瓦当（端部）は無文である。顎は直線顎で、瓦当より5.5cm～11cmにかけて６本の凹線を引く。凹線には広狭２種あり、0.6cmと0.3cmを測る。広狭の凹線が一組となり、0.9cmの間隔で３箇所引かれている。平瓦の凹面には布目痕、模骨痕がわずかに判別できる。凸面は凹線の箇所も含めヘラ削りをする。焼成は硬く、青灰色を呈する。

軒平瓦６　軒平瓦２と同じく、端部の破片であり軒瓦とは断言できないが、凸面の端部側にのみ粗い格子の叩き痕を付けているので、軒平瓦と考える。瓦当（端部）は無文で、約2.5cmの厚みである。凸面の格子目は瓦当から約9.5 ～ 10cmの幅にのみ付けられ、格子の一辺は約2.0cmを測り、ほぼ正方形である。格子目の凹凸は非常に深く、叩き付けでなく、格子の叩き板を押し付けたと考えられる。凸面は格子目の箇所以外ヘラ削り調整をするが、極一部に縄目痕が残っている。成形には縄目叩きを行ったと考えられる。凹面は目の細かい布目を残し、幅約3.5cmの模骨痕も明瞭に残している。側端部上面はヘラ削りにて角を落としている。

道具瓦

隅平瓦　平瓦の広端部を平瓦の長軸に対し、約40°の角度で焼成前に切り取っている。凹面には粗い布目を遺し、凸面はヘラ削りをする。焼成は硬く、灰白色である。

平瓦　凹面には模骨痕が認められ、側端部が瓦円弧の中心に向かって切断されているので桶巻作りによると考えられる。凸面成形の叩き痕には、縄目叩きと格子目叩きの２種がある。さらに、格子叩きには格子目の大小により３種に分けられる。大は3.5cm、中2.0cmと小1.3cmの格子一辺である。凹面には布目が付きヘラ削り調整により布目が消されているものも認められる。

〔注〕(1)今里幾次　『播磨国分寺式瓦の研究』播磨郷土文化協会　1960

(2)鎌谷木三次　『播磨上代寺院址の研究』　1942

５．石　　器

石器は、計15点出土している。石鏃５点・定形的なものとして楔形石器１点・剥片（加工痕有）１点・スクレイパー１点・石庖丁１点・磨製石器１点・磨製石斧２点・砥石２点・磨製敲石１点である。

石鏃

(1)　凹基無茎式。サヌカイト製。未製品と考えられる。右側辺は先端部で広がり、角をつく

り、基辺にかけてやや弧状を呈している。基辺の凹みは浅い。裏面には大剥離面が残り、調整は粗い。基部中央に厚みがあり、中央断面形は、ほぼ三角形を呈している。

(2) 凹基無茎式。サヌカイト製。先端及び右逆刺を欠損する。形状はほぼ正三角形を呈し、逆刺はやや鋭い。表面は粗い調整面よりなり、裏面中央に大剥離面が残る。中央断面形は扁平な扇形を呈する。

(3) 平基無茎式。サヌカイト製。薄身で二等辺三角形を呈する。表面は丁寧な調整が施されているが、基部中央に右下方に打点を持つやや大きな剥離面を残す。両側辺沿いには細かな調整が施されている。裏面は周辺に調整が施されているが、基部中央に、右側に打点を持つ大剥離面が大きく残る。基辺にも調整を施すが、基辺は平坦である。中央断面形は扁平な六角形を呈する。

(4) 平基無茎式。サヌカイト製。形状はほぼ正三角形を呈する。風化が著しく、剥離面は明確ではない。両面共に、周辺に細かな調整が施され、表面中央に、左側と右側に打点を持つやや大きな剥離面を残す。裏面は、中央に大剥離面を残す。基辺にも調整を施すが、基辺は平坦である。中央断面形は、扁平な扇形である。

(5) 凸基有茎式。サヌカイト製。左逆刺、先端部が完全に調整されていないので、未製品と考えられる。両面共に基部中央に、左上方に打点を持つ大剥離面を残す。中央断面形は、扁平な五角形である。

剥片（加工痕有）

(6) サヌカイト製。左縁辺の一部に調整が見られる。

楔形石器

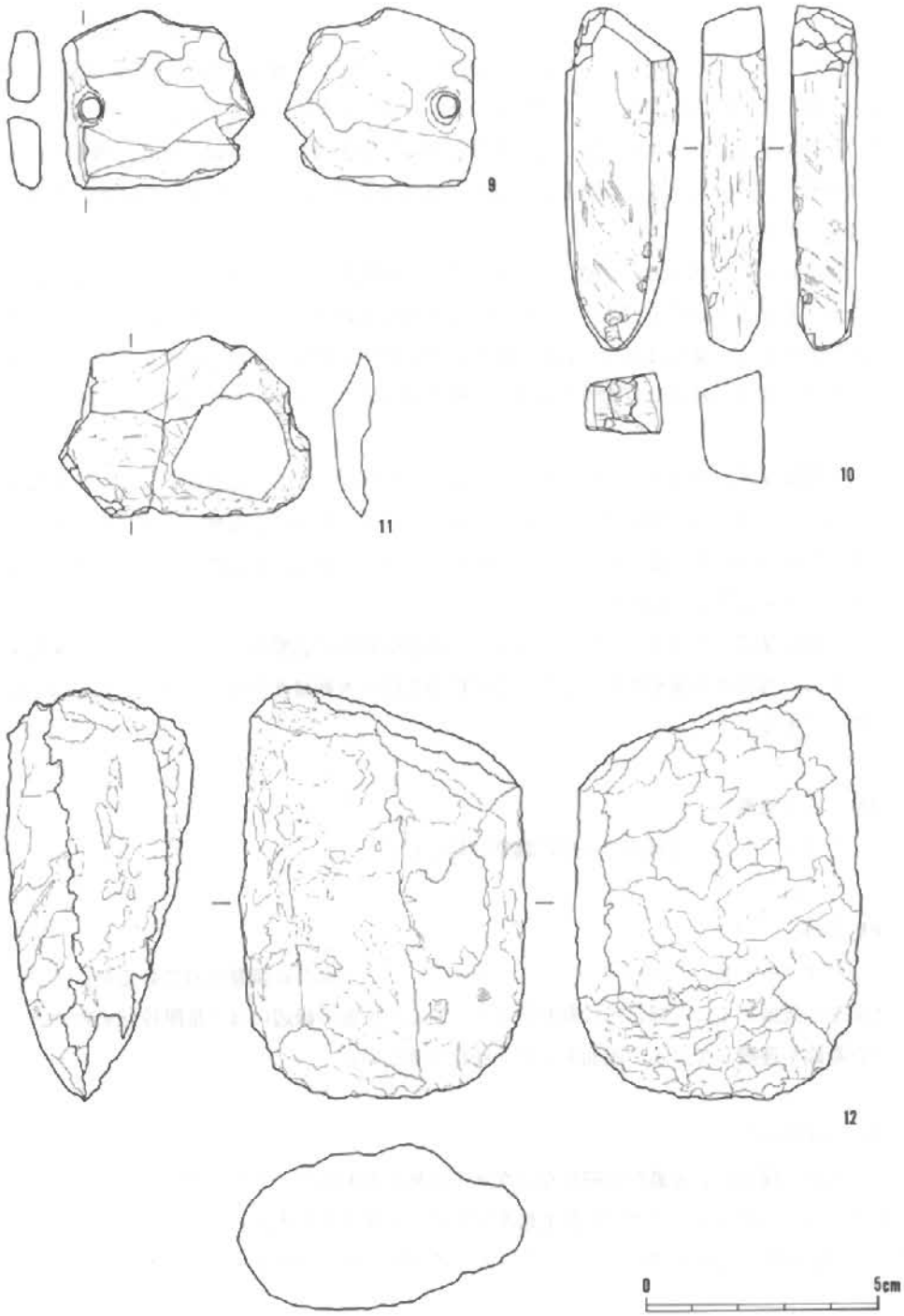
(7) サヌカイト製。形状はやや扁平な五角形を呈し、両面共に調整されているが、裏面には自然面を一部留める。左縁辺には截断面が見られる。両面の縁辺には一部階段状剥離の著しい調整剥離痕が連続している。両面共にやや風化が著しい。

スクレイパー

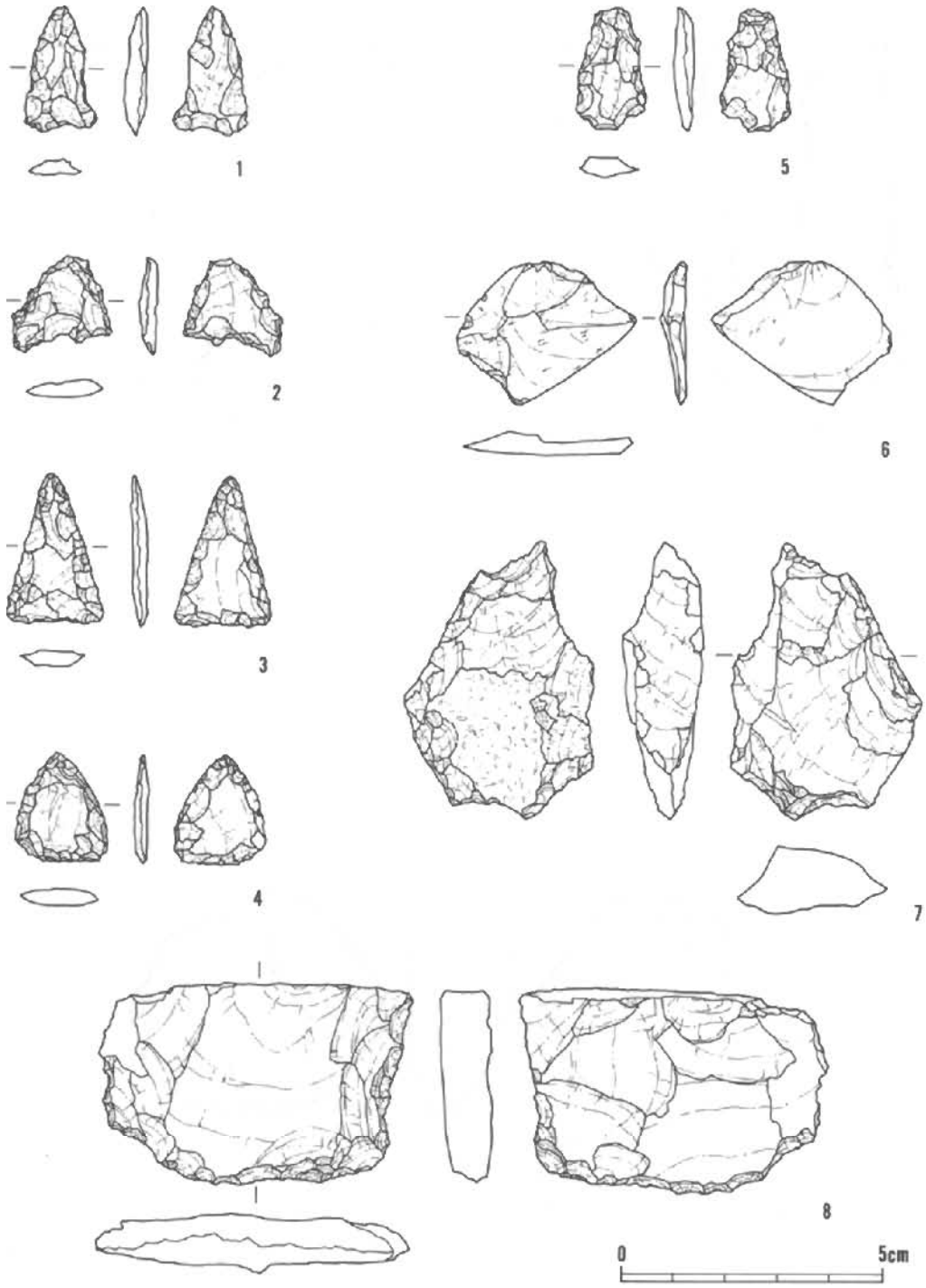
(8) 剥片の縁辺に、表裏から細かな二次加工を施したもので、その形態からスクレイパーと判断される。刃部は、ジグザグの側面観を呈する。上縁は折れ面となっており、それを打面として、調整剥離が行われていることから、剥片を切断したものが素材とされたと思われる。

石庖丁

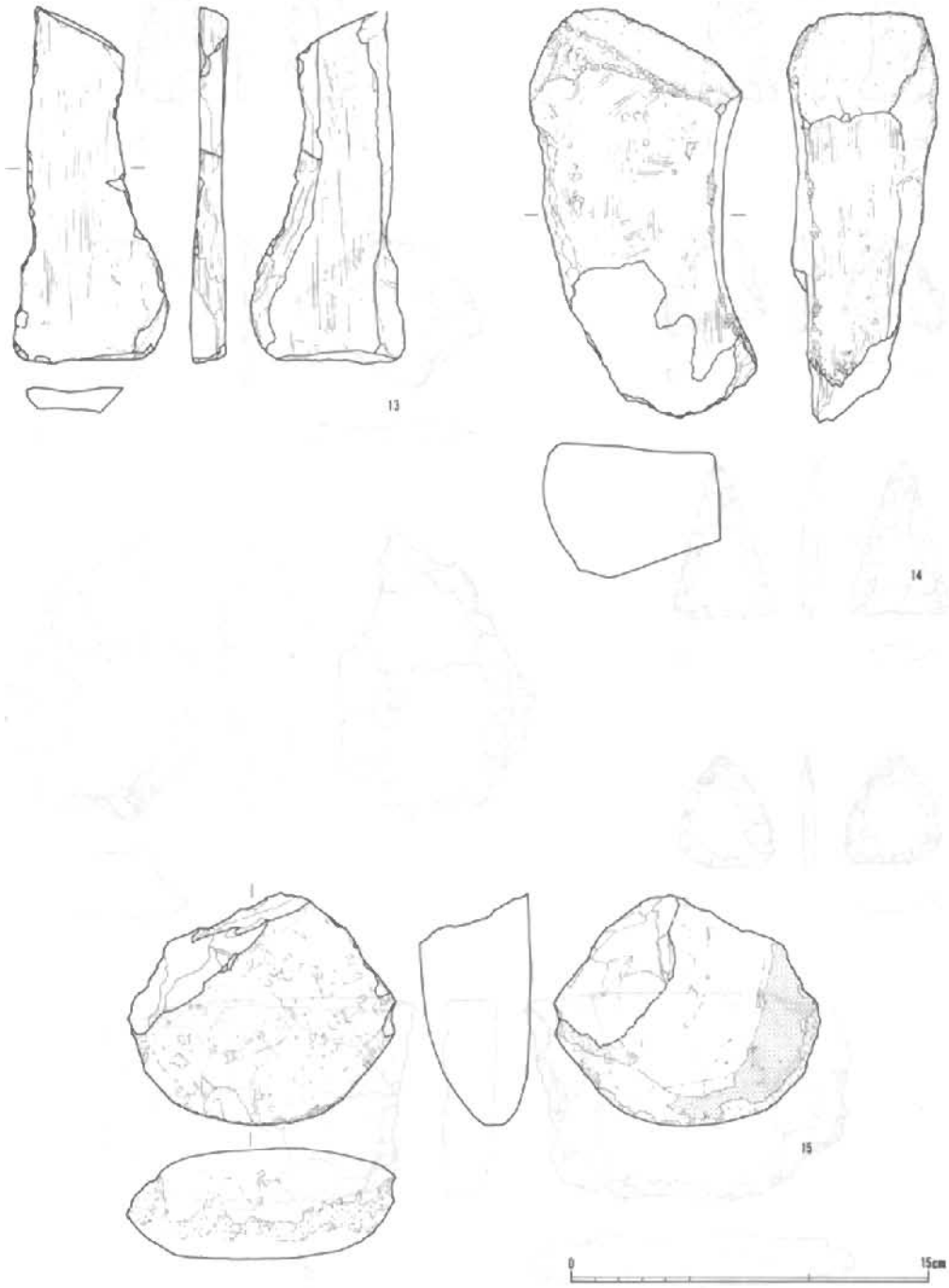
(9) 片岩製。背部及び刃部を欠損する。紐孔を含む体部破片（内 4.5㎜・外6.5㎜）。紐孔



第57図　石器実測図（1）



第58図　石器実測図（2）



第59図　石器実測図（３）

は表裏両面より穿孔している。形態は近畿地方通有のものであれば、片刃直線刃半月形態であるが、大きく欠損しているため定かではない。風化が著しく、両面とも剥離し、研磨面が明確でない。

磨製石斧

⑽　柱状両刃石斧。黒色片岩製。基端の一部欠損。片側部を大きく欠損するが、基部中央と刃部との幅は等しく、基部中央断面形は、変形四辺形を呈すると考えられる。両刃の円刃で蛤刃を呈し、角は破損し刃こぼれが見られる。両面・側面には、左上がりの線条痕が見られる。

⑾　磨製石斧。凝灰質泥岩をもちいた磨製石器の破片である。石器の表面が剥離したものであるため、器種の判断が困難であるが、緩やかにカーブする器表面の状況から、ひとまず石斧とした。下縁には、縦方向に細かな研磨痕が認められる。

⑿　太型蛤刃石斧。砂岩製。基部で斜めに欠損。基部の幅と刃部の幅はほぼ等しいが、わずかに両側面に膨らみを持つ。刃縁の形状は円刃であるが、左縁の一部を欠損する。片面の基部には、打撃による大きな凹みがある。風化が著しく、研磨はほとんど見られないが、片面の一部にわずかに残る。

砥石

⒀　凝灰質泥岩製。破片。仕上げ砥に使用されたと考えられる。表面の研磨は非常に丁寧である。研磨方向は明確ではないが、一定ではない非常に浅い擦痕が見られる。

⒁　泥岩製。形状は薄手で、下端が幅広な直方体を呈し、二面を利用している。上下両端は敲打整形の後、最終的に研磨によって整えている。この砥石は、構成粒子の細かさから見ると、仕上げ砥に使用されたと考えられる。両面共中央に浅い皿状の溝状部が形成され、研磨方向は上下方向に明確に見られる。これにより対象は石斧等の刃部形成と考えられる。

磨製敲石

⒂　半割りしている楕円形の扁平な円礫を素材とし、側縁部をとどめている部分に敲打痕が認められる。右面の半割面と礫面とのなす縁片の一部にも、敲打痕が認められる。敲打の程度は激しく、側縁部は帯状に浅い凹凸をもった敲打面を形成する。右面の右側縁部近くには、非常に滑らかで光沢を持った研磨面が認められる。研磨方向は明瞭ではない。

以上が本遺跡から出土した石器である。この時代は鉄器が大量に使用され始めた時期で、一般的には石器の技術の低下が見られはじめるとされている。しかし、本遺跡の石器をみると、比較的形状は整っている。

6．玉　類

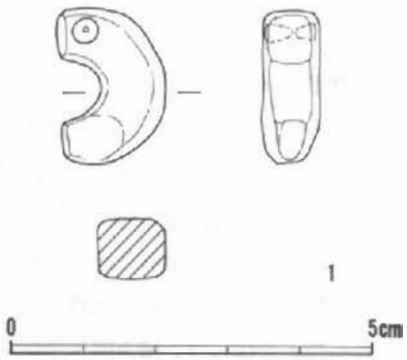
勾玉

(1)　A地区南半部の地山面で検出。

方頭系不定形勾玉と呼称される形態で、長さ2.17cm・幅9.2mm・厚み8.1mmを測る。小さい方頭で胴部が大きく尾端は薄くなる。腹部の刳りは深い。紐孔は両面からの穿孔であるが、貫通していない。

石材は、茶褐色を呈す硬質の石である。正式な鑑定はしていない。

時期は、周辺出土の土器から弥生時代のものと考えているが、縄文的な感じも受ける。



第60図　勾玉実測図

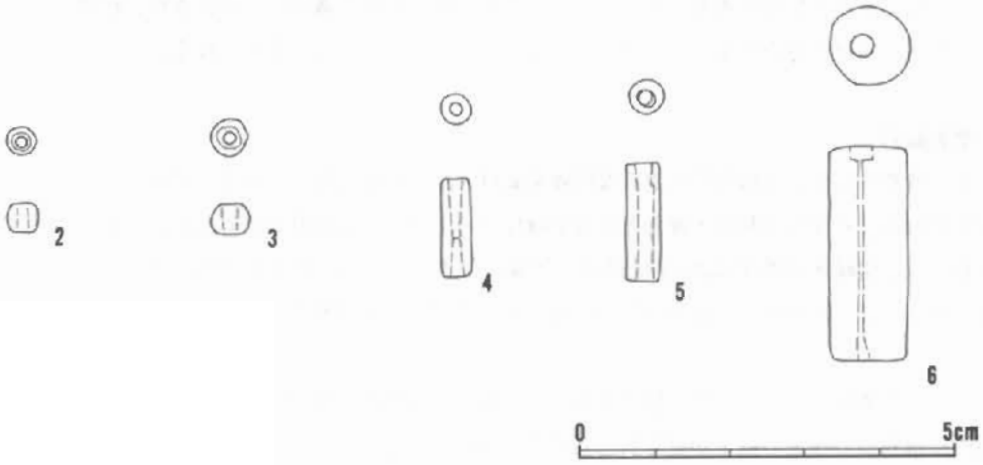
ガラス小玉

(2)　C地区道路西側溝（側溝１）出土。色調は半透明な淡青色である。直径は3.9mm・長さ3.6mm・孔径1.5mmを測る。時期は平安時代前期の溝出土であるが、弥生時代のものと考える。

(3)　土壙38の副葬品。色調は濃青色である。直径は、4.8mm・長さ4.0mm・孔径1.6mmを測る。時期は土壙に共伴遺物がないため確定できないが、弥生時代中期末と考えている。製作は、(2)・(3)とも気泡がすべて孔と平行に並ぶことから引き伸ばし技法と考える。

管玉

(4)・(5) 土壙17の副葬品である。淡緑色の碧玉製管玉。(4)は直径4.1mm・長さ13.1mm・孔径1.8mm。(5)は直径4.2mm・長さ15.7mm・孔径1.9mmを測り、両面穿孔である。時期は土壙に共伴遺物がないため確定できないが、弥生時代中期末と考えている。



第61図　小玉・管玉実測図

(6)A地区の耕作土直下の検出である。暗緑色の碧玉製管玉。直径10.4㎜・長さ28.2㎜・孔径0.9㎜を測り、片面穿孔である。時期は、形態から古墳時代後期と考える。

7．木簡・木器

木　簡

(1)「□守解　申進□部事　　(193)×34×5　　019
　　傳ヵ

調査区のB区、北西隅の埋没した谷から出土した木簡である。頭部から約7㎝の箇所で折れている。

文書形式は「解」による文書木簡である。「解」の前に「□守」の2字が認められるので、個人の上申文書と考えられる。事書の次に本文内容が記入されていたと考えられるが、欠損しているので不明である。また、宛所については、書かれていなかったか、もしくは欠損部に記入されていたのか共に不明である。「解」として個人が上申する先はその所属機関であろうから、一般的に考え、当木簡は郡衙などの地方官衙と考える。スギ。

(2)-①・「奴□□□毎里
　　「［　　］　(288)×(45)×3　　019

(2)-②・「［　　］天マ×　　(60)×(16)×5　　081

調査区のB地区、道路西側溝（側溝1）から、多数の木製品・木片と共に出土した。

わずかに墨痕が残るのみで、肉眼判読は不可能である。

第62図　木簡実測図(1)

木製品

木製品は道路状遺構の側溝とB地区中央にある谷に堆積した黒灰色の砂混じりシルトあるいは泥土から出土している。なお、文中の表現については、奈良国立文化財研究所発行　史料第27冊『木器集成図録　近畿古代篇』を参考にした。

斎串（3～9）

(3)はCⅤ形式の斎串で、上下の切り込みが2対のものである。現存長34.5㎝・幅1.2㎝　厚さ0.3㎝を測る。下端は左右対照ではなく、刀のように図上では左に先端が偏っている。

(4)はCⅣ形式の斎串で、両側に上から2回以上の切り込みを入

れている。長さ14.5cm・幅1.4cm・厚さ0.25cm。

(5)はＣＶ形式の斎串で、上下の切り込みが１対で、それぞれ２回以上の切り込みを入れている。下端は欠損している。現存長15.8cm・幅2.5cm　厚さ0.35cmを測る。上部の切り込みは上端木口といってもいい部分から切り込んでいる。(3)の上半部と似ており、同規模のものである可能性もある。

(6)は上部を山形に作り、下端を剣先上に作っている。切り込みは見られず、ＣＩ型式の斎串と思われる。(7)・(8)は上部しか遺存していないが、Ｃ型式の斎串である。(9)はＣ型式の斎串の下半部である。

杓子状・棒状の木製品・部材

(10)は墨画板である。

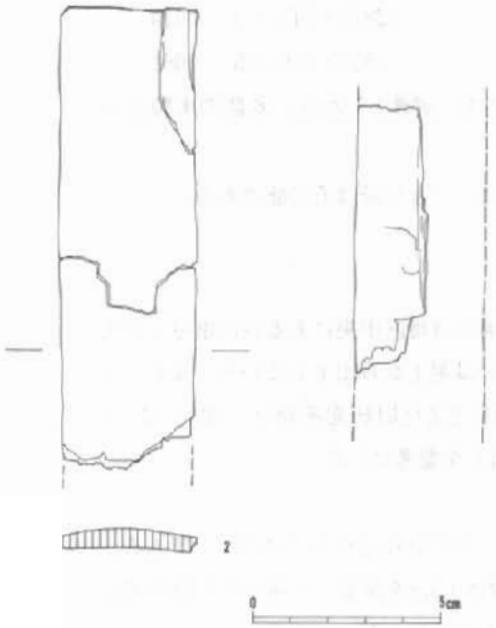
(11)・(12)は杓子形の木製品である。どちらも身の先縁を直線的につくるＡ型式のものであろう。(18)も杓子形木製品の柄であろうと思われる。

(13)・(14)は棒状の木製品であるが、何の部材かは不明である。

(15)は用途不明品である。細板の表裏を平坦に削平したもので、両端の角を切り欠いている。

(16)・(17)は釘孔のある板材で、部材である。

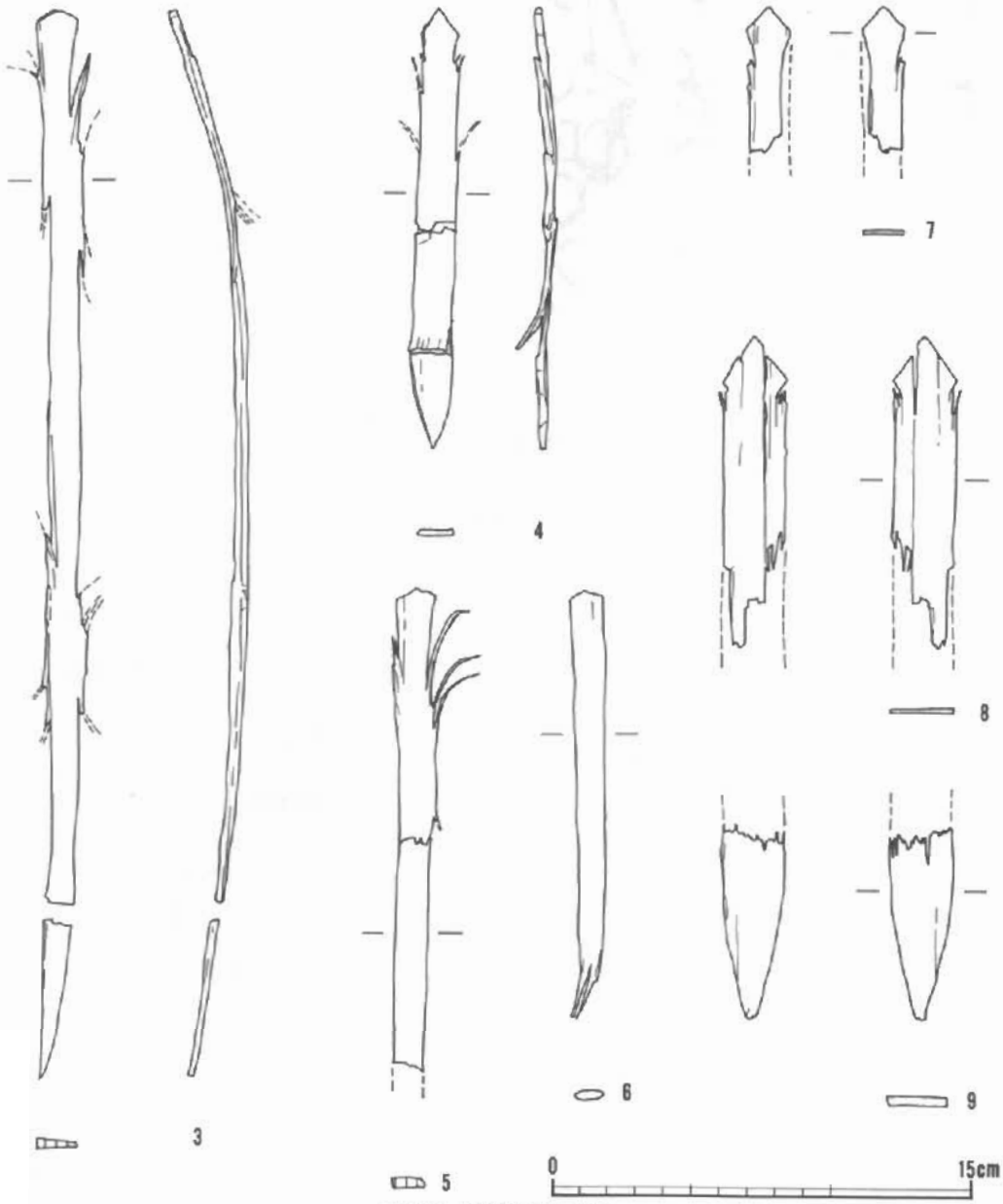
曲物・挽物



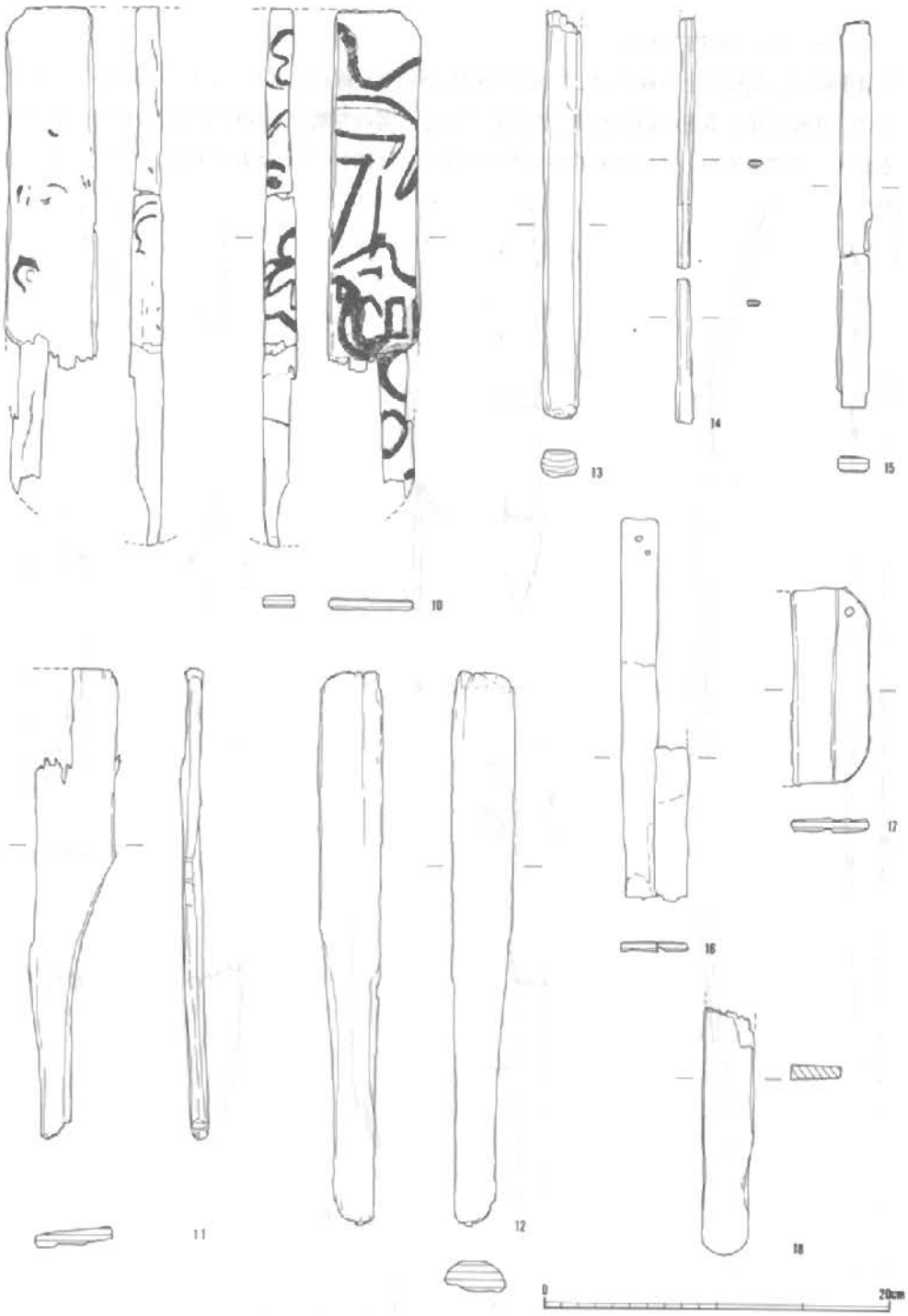
第63図　木簡実測図（２）

(19) ～ (24) は曲物である。

⒆は側板で、側板の上下縁に対して縦平行線及び斜平行線にケビキがいれられている。また内面は、底板と接する部分以外が黒く焼かれている。図の左端は、側板を綴じ合わせた部分であるが、1列であるか、2列であるかは不明である。(20)・(21)は蓋である。(20) は小孔



第64図　木器実測図（1）



第65図　木器実測図（2）

が2つ穿たれており、樺皮結合曲物Bである。蓋板周縁には段は認められない。(21)は4箇所で側板と綴じ合わされた蓋板で、樺皮結合曲物Bである。蓋板周縁に低い段がある。(22)は円板で、樺皮結合のための小孔が認められないため、釘結合物である可能性がある。周縁には段は認められない。(23)は、底板と思われるが、片面に墨書が認められる。また中央部には掘り込みが見られるが、欠損部が多く何を意味しているかは不明である。(24)も同様で、中央部に彫り込みが見られるが、意味は不明である。

(25)・(26)は挽物で、両者とも高台をもたない皿である。復元径は、(25)が18.0㎝、(26)が17.6㎝である。(25)は内面が直線的で、口縁を意識した掘り込みは内面に関しては見られない。器壁は厚く底面で1㎝を測る。(26)は口縁を上方に向けて作り出しており、器壁の厚さはほぼ均等で6㎝と薄い。

槌の子

(27)から(29)は槌の子である。(27)・(29)は割材を、(28)は丸木材を用いている。(27)は板状の材の中央を両側から削り込んだもので、偏平な形状をしている。(28)は中央が欠損しているか、中央に向かって、両側から円錐状に削り込んでいる。(29)は方柱状の材の中央を円錐状に削り込んでおり、全面に面取りがなされている。両端も隅を削り落としている。

その他の木製品

(30)は、斧の柄である。基端は円錐状に加工されているが、斧台及び握りにはあまり加工がなされていない。装着部は欠損しているが、規模が小さいことから、横斧（手斧）の柄であろうと推定される。

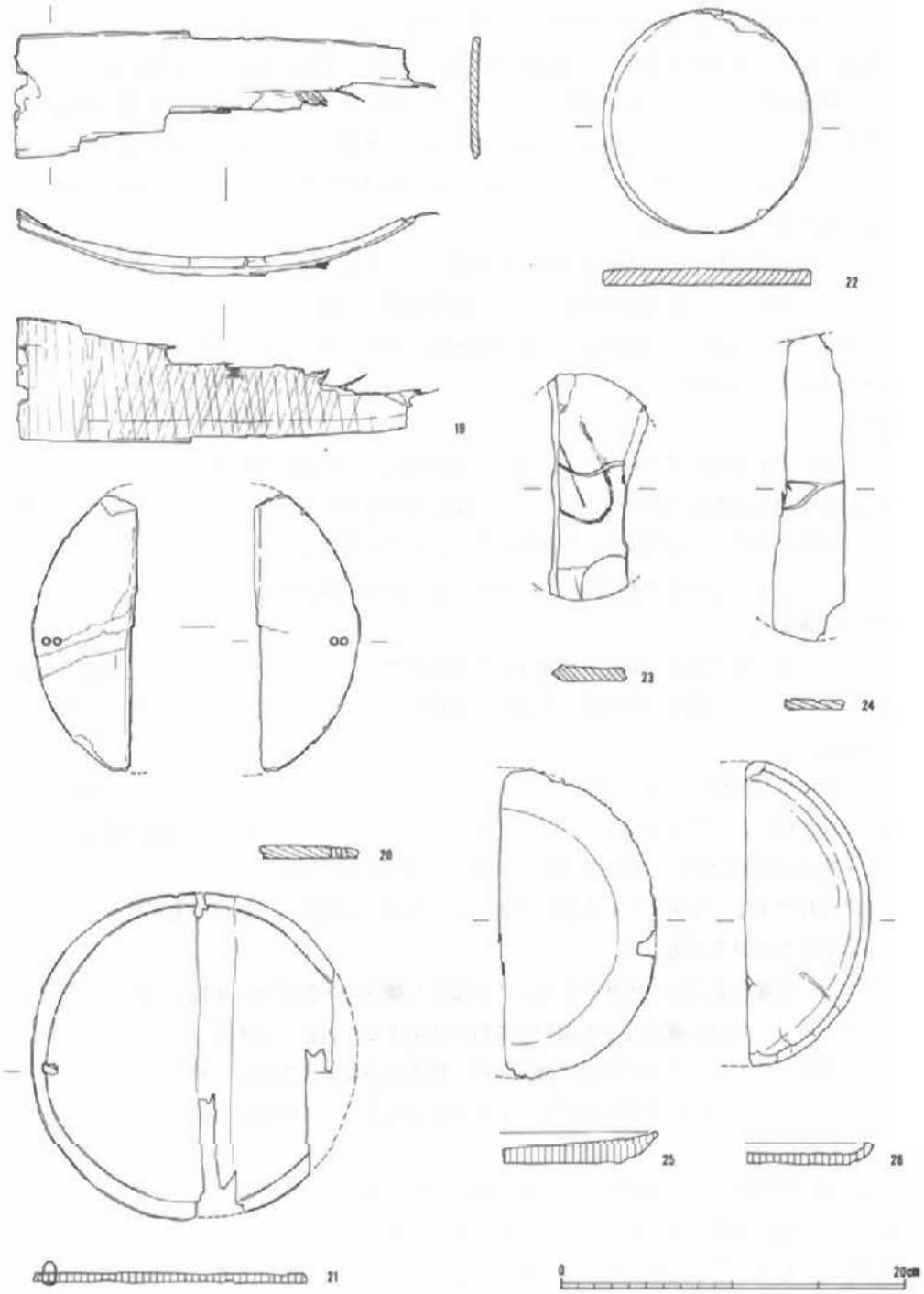
(31)・(32)は部材である。(31)は直方体の長辺の両面に抉りを入れた、部品の一部と思われる。(32)は材の芯の部分を使用し、コの字形に作りだしたもので、楔に似た形状をしている。表面・裏面・側面は手斧の痕跡が認められる。用途は不明である。

(33)は栓である。中央に1孔を穿っており、この部分に鈕がつくものであろう。下面には十文字の筋彫りが見られる。

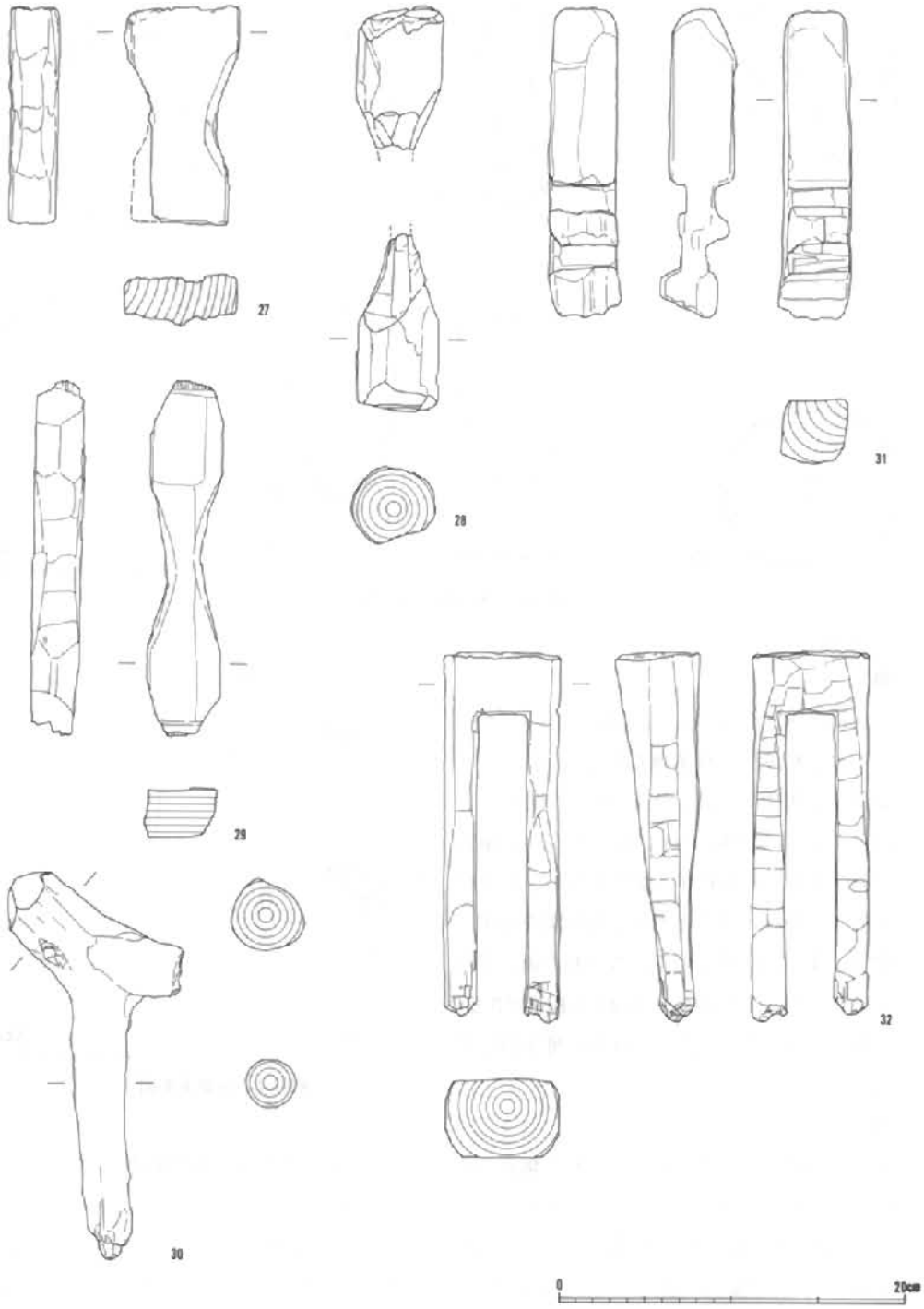
(34)は、両端が膨らんだ形状をした、やや偏平な棒状の木製品で、両端には各々1穴が開けられている。これは、綱の長さを調節する時に使用する「自在」である。

(35)は鋤のミニチュア品である。鋤先と柄の接合部分などはきわめて精巧に作り出している。柄は欠損しているが、柄と鋤先は組み合わせ品ではなく、一つの材から作り出されたものであろう。

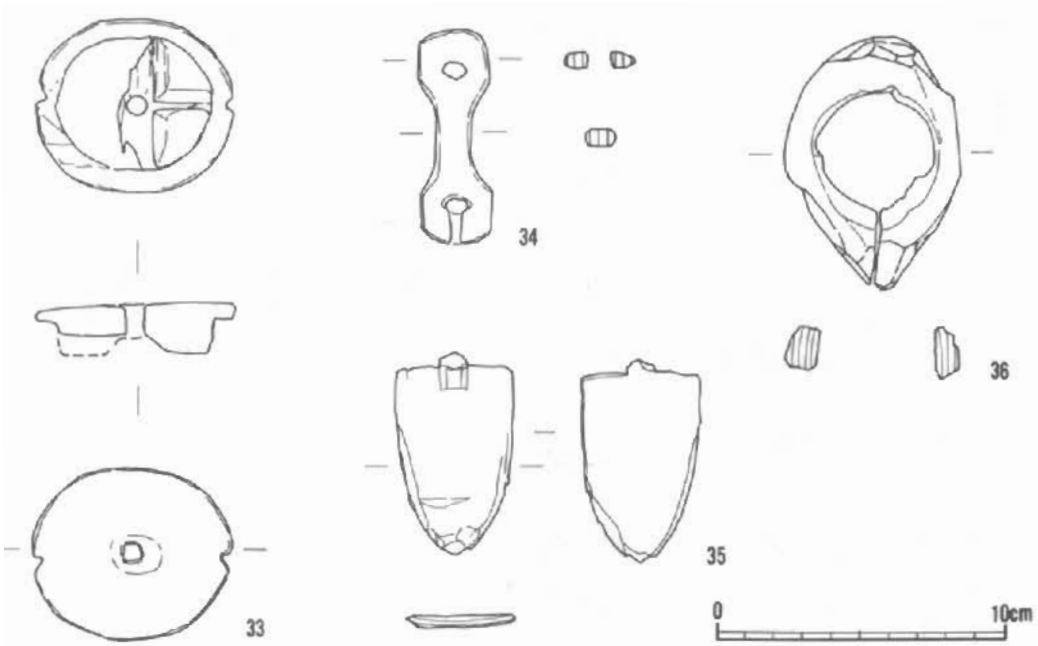
(36)は、木の幹と枝の分岐部分にできる瘤状の部分を利用して作り出している。両面を平面に仕上げ、図の下側を尖るように削り、上側は丸みを持たせるように仕上げている。中央部の穴に棒状のものを差し込む以外には、他の部品と組み合わせる事はできず、単体で使用するものかも知れないが、用途は不明である。



第66図　木器実測図（3）



第67図　木器実測図（４）



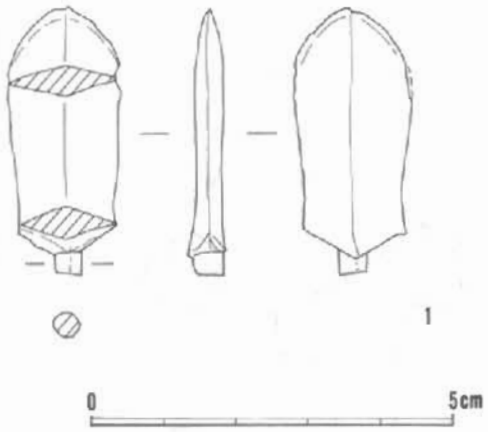
第68図　木器実測図（５）

８．金属器

銅鏃

住居跡２床面からの出土、身部の下手に刳込みをもつ、柳葉形の有茎鏃である。

茎部中途欠損のため、全長は不明であるが、鏃身長3.4cm、最大幅1.6cm、最大厚0.5cm、重さ7.88ｇを測る。身部断面は菱形をなし、中央に鎬を持つ。身部・茎部とも入念な研磨を施す。研磨は、まず鎬と直行方向になされた後、平行におこなったことが細かい条痕から観察できる。碧玉製品のような光沢を呈し保存状態も良好である。



第69図　銅鏃実測図

銅銭

銅銭は３枚出土している。いずれも腐食が著しいが、文字の判読は可能である。（2）は半分欠けた状態で出土しているが、（3・4）の２枚は完形である。

（2）は咸平元寶（998年初鋳）で、（3）は聖宋元寶（1101年初鋳）である。いずれも北宋銭である。（4）は裏面に波文を刻む寛永通寶（1636年初鋳）である。（2）はＣ地区耕土直下より、（3）はＡ地区床土より、（4）はＢ地区耕土中よりそれぞれ出土し、遺構に伴うものはない。

鉄　器

鉄器は、破片を含めると20数点出土し、A～D地区全域で出土している。いずれも遺構から出土したものはなく、包含層からの出土である。出土した鉄器のうち（5・14）はA地区包含層、（6～10・12・13）はB地区包含層、（11）がC地区包含層、（16）がD地区水路、（17・18）がD地区包含層よりそれぞれ出土している。また（15）の雁股式鉄鏃は、B地区黒灰色シルト層（Ⅲ層）より出土している。以下出土した個々の鉄器について説明する。

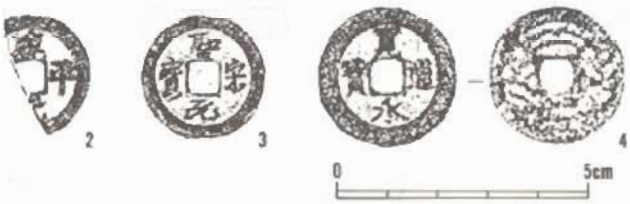
（5）～（9）は鉄釘である。いずれも錆化が著しく、（7）を除いて身部下半を欠損する。頭部は頭巻で、頭巻部は潰れたり、あるいは欠損している。全長は遺存状況の良好な（7）で全長4cm、（9）で4.5cm前後を測る。（10）は大型の釘と思われるものである。頭部は平坦に打ち出し、折り曲げている。全長12.5cmを測る。

（11・12）は箭の一種と思われる鉄器である。（11）は身部先端が錆化が剥離状にすすみ痩せてはいるが、ほぼ全体の形状を留めている。全長20.5cm、身幅は最大で2.1cmを測り、先端は尖っている。（12）は形状が（11）と近似しているが、全長27cm、最大身幅4.2cmと大型のものである。頭部は平坦に打ち出し、折り曲げている。身部は頭部よりで屈曲し、身部先端も丸くなっている点から、使用されていると判断される。身部の表面には直径2.5～4cm前後の打痕と思われる浅い凹みが多数認められる。

（13・14）は把手状の製品である。（13）は両端が欠損し、遺存状況は悪い。（14）は全長9.6cmを測り（13）よりは大型のものである。

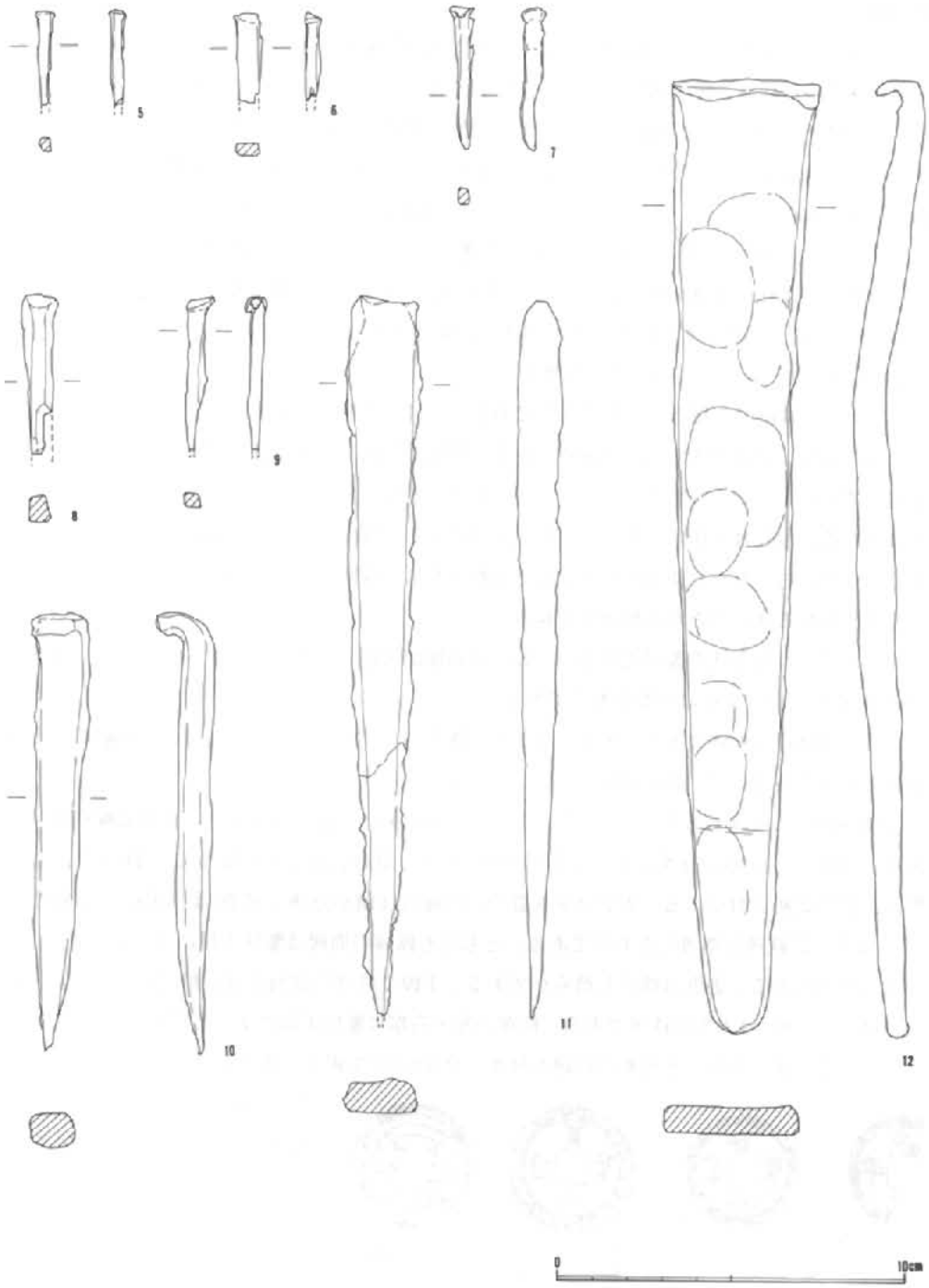
（15）は雁股式鉄鏃である。茎部には矢柄（篠竹か）が残り、茎部を附装した矢柄部分には紐状の樹皮を巻き付け、鏃と矢柄を固定している。

（16～18）は鉄滓である。うち（16）・（17）は鍛冶炉の炉底に溜まる、いわゆる椀形鉄滓である。（16）は長さ6.2cmを測り、平面形は楕円形で、底部は丸底状を呈する。鉄滓の左端は鏨状工具で切断されている。表面は多孔質で、周縁には錆が浮き、底部は炉床粘土を噛む。（17）は2つの鉄滓が熔着したものである。どちらも鉄滓の周縁は鏨状工具によって切断され、形状は不明である。表面は熔化し滑らかである。下段の鉄滓の底面には少量であるが、炉床粘土を噛む。（18）は大型の鉄滓である。鉄滓の左・右端は鏨状工具によって切断され、形状は不明である。また表面にも切断の痕跡を残す。全長8.2cmを測る。表面は多孔質で1～5mm大の孔があく。裏面は炉床粘土の痕跡は認められず、平滑である。

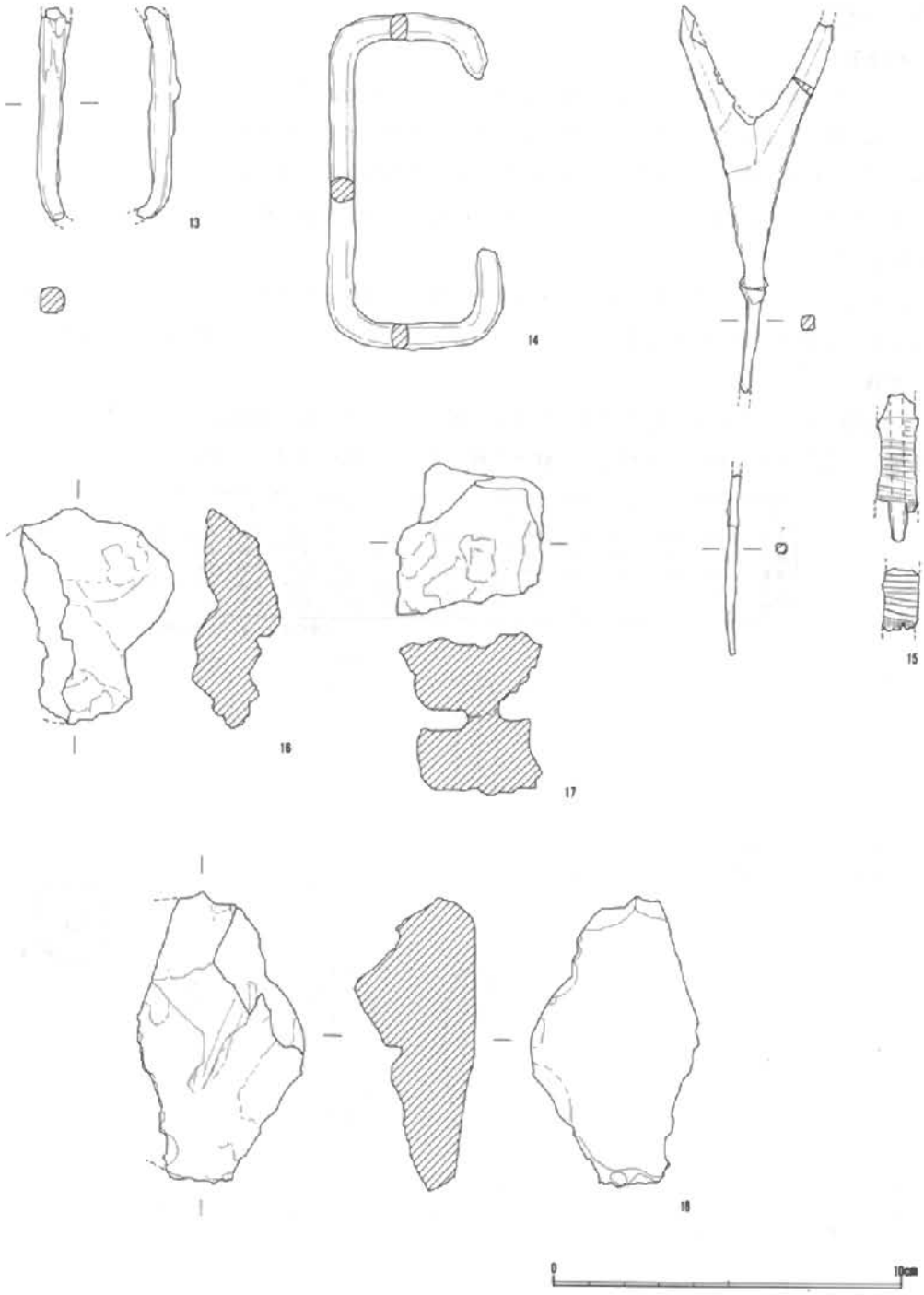


第70図　銅銭拓影図

（18）は（16）・（17）の椀形鉄滓と比較して表面・裏面の形状から判断して椀形鉄滓とは異なるものと理解している。



第71図　鉄器実測図（1）



第72図　鉄器実測図（２）

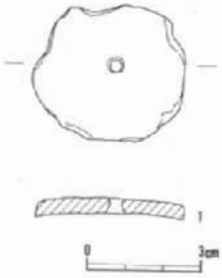
9．土製品

紡錘車

（1）B区弥生時代の旧河道包含層（V層）からの出土である。

土器（甕）片を利用したもので、周辺を打ち欠いて整形する。打ち欠きの破面は研磨調整をしていない。平面形態は楕円形を呈し、ほぼ中央に穿孔がある。長径4.0cm、短径3.5cm、厚さ4.0mm、孔径3.2mm、重さ8.36ｇを測る。

時期は、この土器の外面刷毛目調整・内面ヘラ削りの技法と胎土から弥生時代中期末～後期と推定する。



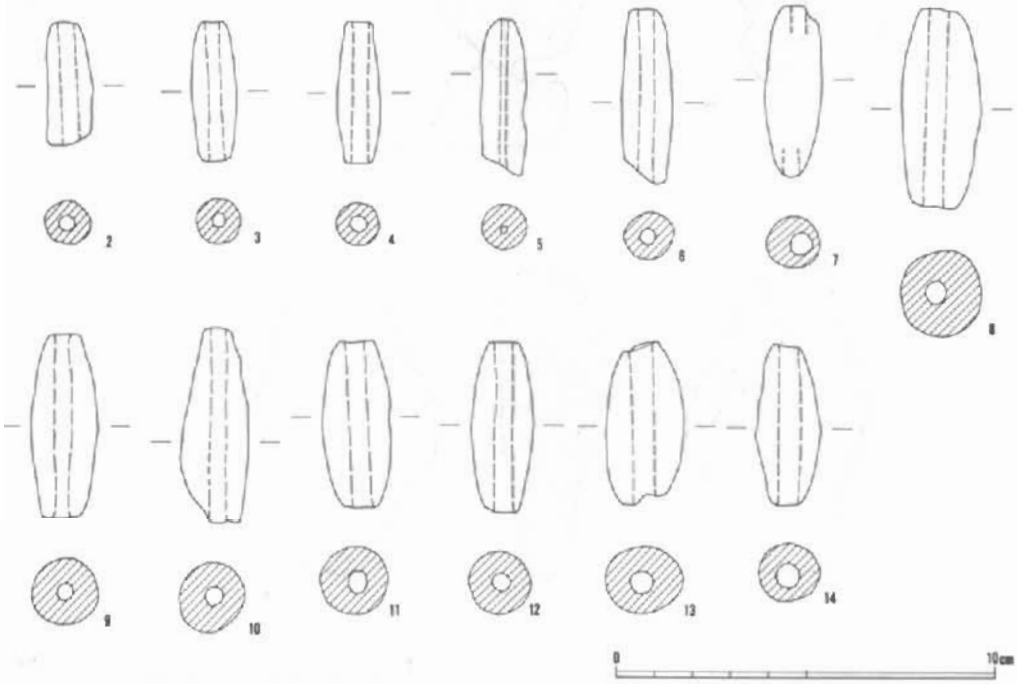
第73図　紡錘車実測図

土錘

包含層中の出土である。地点はA・B地区が多い。いずれも身の長軸方向に貫通孔があり、形態（A管形・B紡錘形）・焼成（1軟・2硬）から4分類できる。所属時期は不明。

No	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
長さ	3.22	3.68	3.74	4.10	4.62	4.55	5.28	4.83	5.15	4.40	4.50	4.31	4.23
幅径	1.23	1.22	1.12	1.15	1.35	1.52	2.12	1.78	1.75	1.82	1.63	2.02	1.72
重量	2.89	4.91	3.60	5.77	6.83	8.70	19.2	15.3	11.8	12.3	9.98	13.6	8.36
孔径	0.42	0.38	0.42	0.14	0.40	0.54	0.52	0.42	0.43	0.48	0.48	0.62	0.62
分類	A 1	A 1	A 1	A 2	A 1	B 1	B 1	B 1	B 1	B 1	B 2	B 1	B 1

（単位はcm・g、（）内は現存分）



第74図　土錘実測図

第４章　長尾・沖田遺跡出土木製品の樹種

第4章は公開していません

第5章　おわりに

1．長尾・沖田遺跡の名称

長尾・沖田遺跡の名称は、県道下庄佐用線道路改良工事にかかる埋蔵文化財調査に際して新たに命名したものである。

当該地は、従来、八反田遺跡・佐用高校グランド遺跡と呼称されている。長尾の台地には、これ以外にも長尾遺跡・下長尾遺跡・烏垣内遺跡等が所在する。これらはいずれも字名等を取り名付けた文化財保護行政上の名称である。

しかし、遺跡は字限りで区切れるものではなくこれを越えて存在し、長尾では上記のものは同一の遺跡あるいは密接な関係にある遺跡として捉えられる。

そこで、ここでは学問上のことを重視し、地形名称から段丘部長尾台地の長尾・低湿地部沖田平野の沖田を取り、長尾・沖田遺跡とした訳である。今後、行政上の遺跡名は長尾・沖田遺跡○○地点もしくは○○地区と呼称したら如何なものであろうか。

2．長尾・沖田遺跡の変遷

旧石器～縄文時代

長尾台地に、最初に人類の足跡を残したのは後期旧石器時代の人々である。遺物に黒曜石製のナイフ形石器等（八反田地点・G－70区）があるが、遺構に伴うものではない。対岸の本位田遺跡でも削器等があり、この段丘部のどこかにベースキャンプ地が存在すると考える。

続く縄文時代では、早期にあたる押型文土器のみを出土する下長尾地点がある。この後、縄文人の足跡は途絶えてしまうようである。

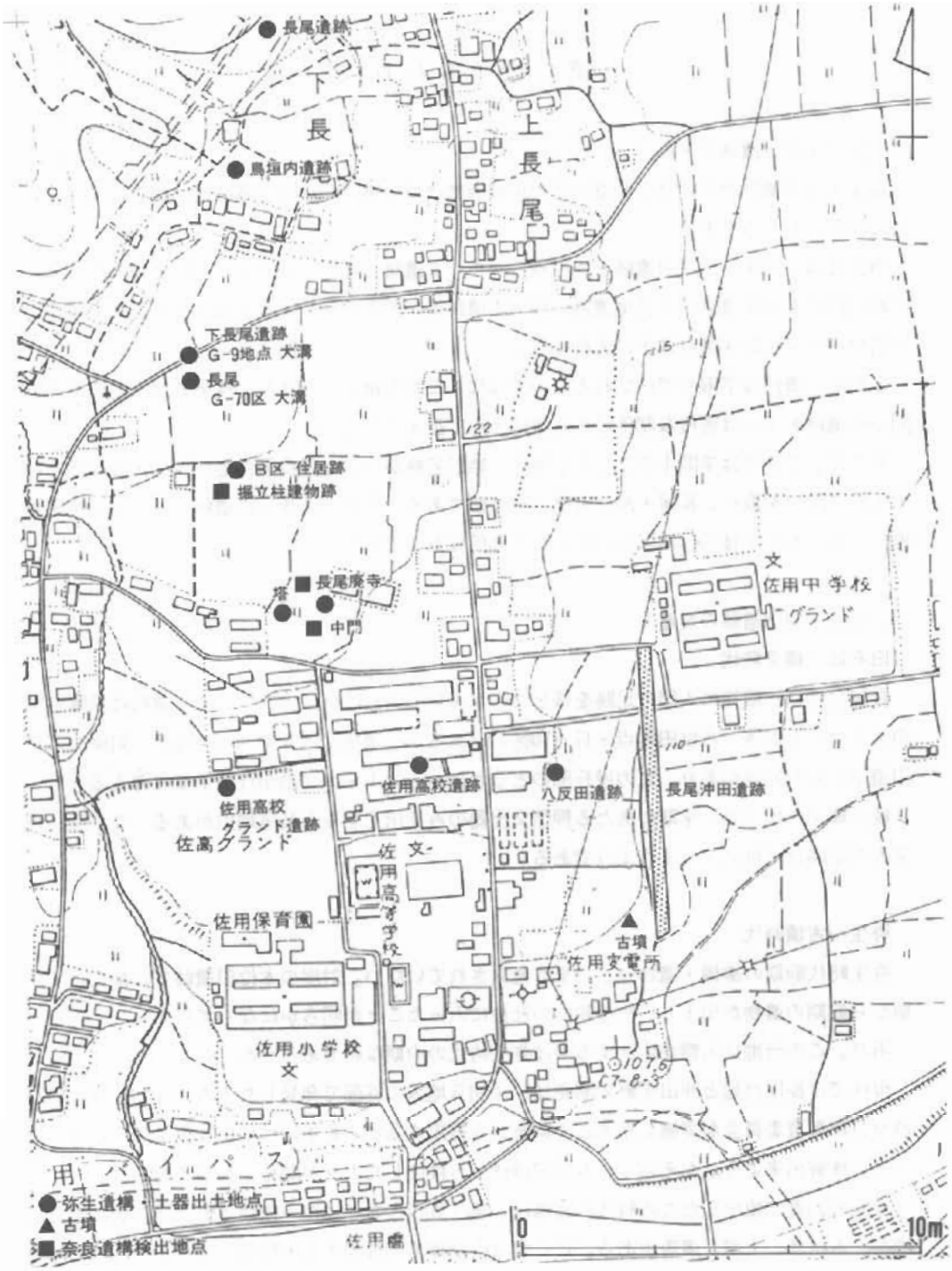
弥生～古墳時代

弥生時代前期の遺構・遺物は、いまだ発見されていない。対岸の本位田遺跡では縄文後・晩期から前期の遺物が出土し、水稲耕作の社会に入ったことが明らかになっている。

再び、この台地に人類が生活するのは弥生時代の中期なのであろうか。

現状では長尾台地と沖田平野の開発は、今回B地区の谷部で発見した土器とA地区発見の石器及び郡教育委員会が実施した周辺の調査から推定すると、弥生時代の中期後半頃に始まったことが理解出来よう。おそらく、本位田遺跡から移住した人々が開拓したのであろう。

今回の調査で検出したこの時代の遺構は、第3章のとおり中期～後期の竪穴式住居、掘立柱建物、木棺墓、土壙、溝等がある。ここでは中期後半と推定する木棺墓（長さ1m前後と50cm前後の2種類がある）の基数と、管玉・ガラス玉等の副葬品を持つものが存在すること、及び



第77図　調査区周辺の遺跡

古墳時代前期の竪穴式住居から出土した銅鏃が非常に注目される。

さらに、この地域の特徴として、土器に山陰と畿内の両者の影響が認められ、特に美作とよく似た様相を示すことは地域間の交流を物語るものとして特筆できよう。

また、台地内では烏垣内地点に竪穴式住居、長尾廃寺（塔ノ石地点）周辺に中期～後期の竪式穴住居・柱穴群・土壙、八反田地点に柱穴群、佐用高校中庭地点に土壙・溝、下長尾及びG－70区地点に中期～後期の大溝、長尾地点に後期の土壙、岡の平地点では後期～古墳時代前期の木棺墓の検出がある。その他、土器・石器を出土した地点は数多く認められるのである。

このように、弥生中期から古墳時代前期にかけては、長尾台地に住居と墓が交互あるいは同時に存在しており、一大集落を展開していたのであろう。

周辺にも、本位田遺跡で後期～古墳時代前期の竪穴式住居、台地の西丘陵に古墳時代前期の小竪穴式石室をもつ吉福遺跡、東の丘陵には壺棺墓で知られる甕石遺跡等があり、盆地内で徐々にではあるが、前方後円墳の時代への胎動がみられるのである。

しかし、長尾台地を含めて古墳時代前期に古墳と呼べるものは発見されていない。存在しないのであろうか。

次の、古墳時代中期では住居等遺構が見つかっていない。新たに築造される円応寺古墳群（最初に築造された愛宕山古墳は方墳）の山麓に集落が移動している可能性が考えられ、この時期に盆地内の統一が成ったとみる。

古墳時代後期にも住居は発見されていないが、今回調査地点のすぐ西隣では郡教育委員会の調査によりに周溝のみが残った円墳が検出された。おそらく低墳丘の木棺直葬墳が何基か存在したのであり、水田造成の際に破壊されたのであろう。A地区包含層中発見の管玉はこうした結果の遺物と考える。周溝には須恵器が発見されたという。また、大撫山山麓には埋葬主体部が横穴式石室の長尾古墳群が存在する。

周辺では、佐用都比売神社裏の本位田と水谷に古墳群（横穴式石室）があり、本位田は副葬遺物に単鳳式の環頭大刀を持つ。また、本位田から北東の横坂には郡内唯一の前方後円墳が築造され、集落の存在も予想されるところである。これらの背景には、大撫山の砂鉄を利用したタタラ製鉄の生産があるのかも知れない。

奈良～平安時代

こうした有力豪族層の台頭で、白鳳時代には台地中央部に長尾廃寺が建立されるのである。最近の調査では金堂・中門等が検出され、法隆寺式と想定されている。

当然、郡衙も造営したであろう。しかし確実な位置は明らかでない。

併せて、台地と平野部にはこれらを基準に現代まで残った条里地割が施工されたのである。今回検出した長さ220 mにも及ぶ側溝を持つ直線道路は、溝が1町ごとに直に折れ曲がること

から確実にこの条里制遺構と考えられる。

また、出土遺物には木簡・墨書土器・円面硯など役所を暗示するものが多く、斎串・馬歯の祭祀遺物もある。周囲にはこの時期の建物跡も確認されている。さらに、以前旧佐用中学校の南庭では、池を造る際巨大な柱根が発見されたと言う。白鳳の寺院址に接して郡衙を造営することが多い事実から言えば、近辺に郡衙を想定することは可能であろう。とすればこの道路は寺と役所の間を南北に走る主要大路で、中川駅からくる美作路もしくは因幡路とも考えられよう。

また、本位田遺跡では最近の発掘調査で1m四方の掘り方を持つ掘立柱建物が発見され、北の谷に長尾廃寺で使用した瓦を焼いた窯も見つかっているという。ここも郡衙の候補地としてあげられる。

このように、長尾の台地は本位田の台地とともに美作路・因幡路の合流地で交通路の要衝にあり、旧石器時代以来佐用盆地の歴史の主要舞台として、非常に密接な関係にあったことが理解できるのである。

なお、本位田の台地先端部に鎮座する式内社『佐用都比売神社』と『播磨国風土記』に記載のみえる「鉄」も、佐用の歴史を考える上で忘れてはならない存在であろう。

参考文献

1．武藤　誠「長尾寺址」『兵庫県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第14輯　1939
2．鎌谷木三次「長尾廃寺」『播磨上代寺院阯の研究』　1942
3．兵庫県教育委員会「播磨吉福遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第2集　兵庫県文化協会　1974
4．兵庫県教育委員会「長尾遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書　－佐用編－』1976
5．兵庫県教育委員会「本位田遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書　－佐用編－』1976
6．武藤　直「播磨国」『古代日本の交通路』　大明堂　1978
7．足利健亮「美作国」『古代日本の交通路』　大明堂　1978
8．吉本昌弘「古代播磨国の郡衙」『人文地理』第35巻第4号　1983

図　　版

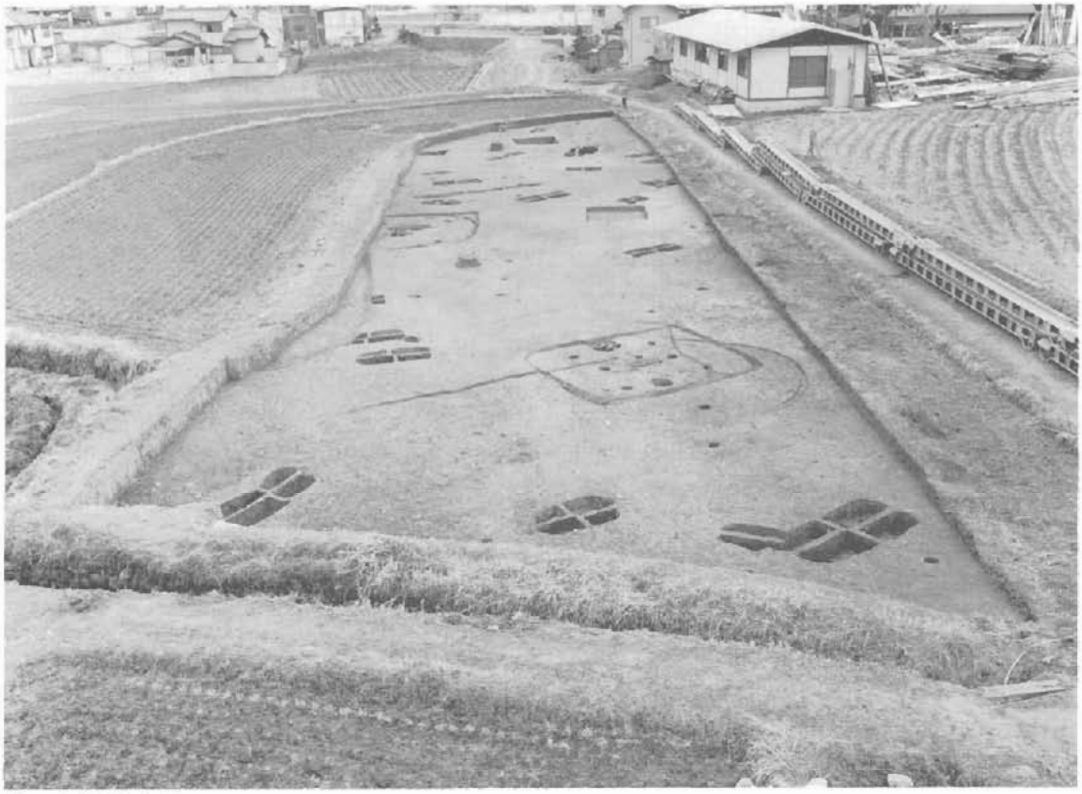
1. 長尾・沖田遺跡遠景(南東から)

2. 長尾・沖田遺跡A・B地区遠景(東から)

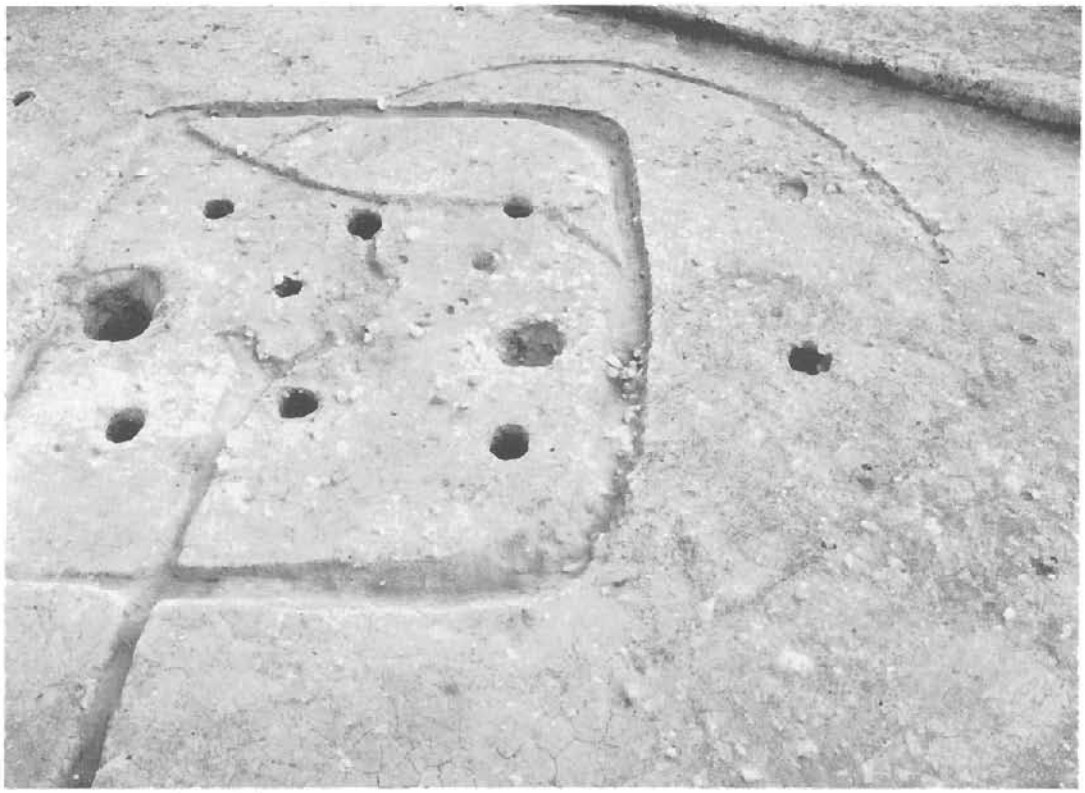
遺跡周辺の航空写真

図版三　A・B地区

1．A・B地区 調査前（北から）

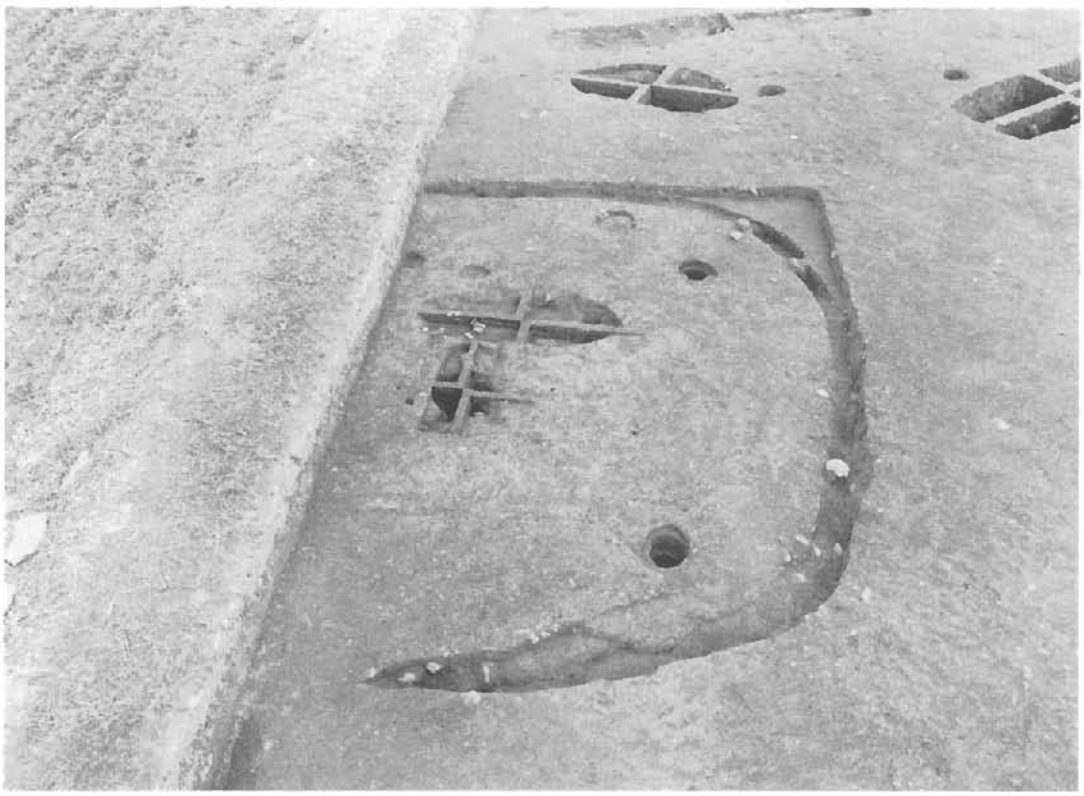


2．A地区 全景

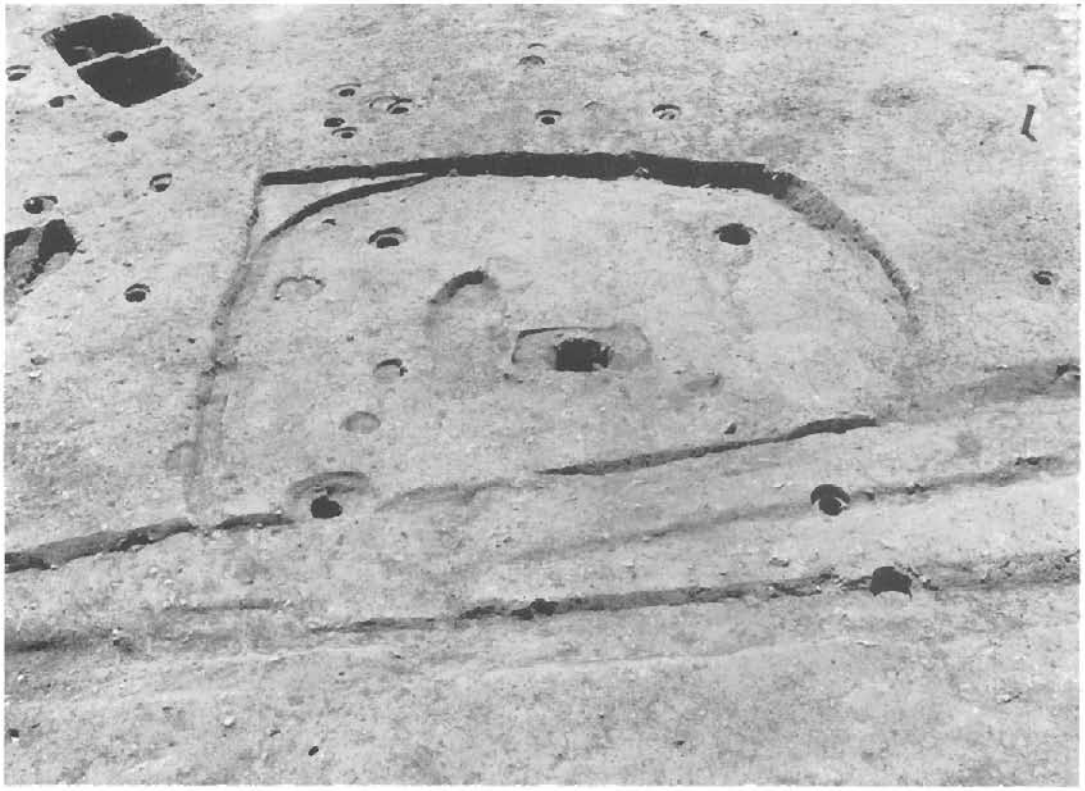


1.　住居跡１（西から）

2.　住居跡２（北東から）



1. 住居跡３（北から）



2. 住居跡３（東から）

1．土壙10（西から）

2．土壙29（北から）

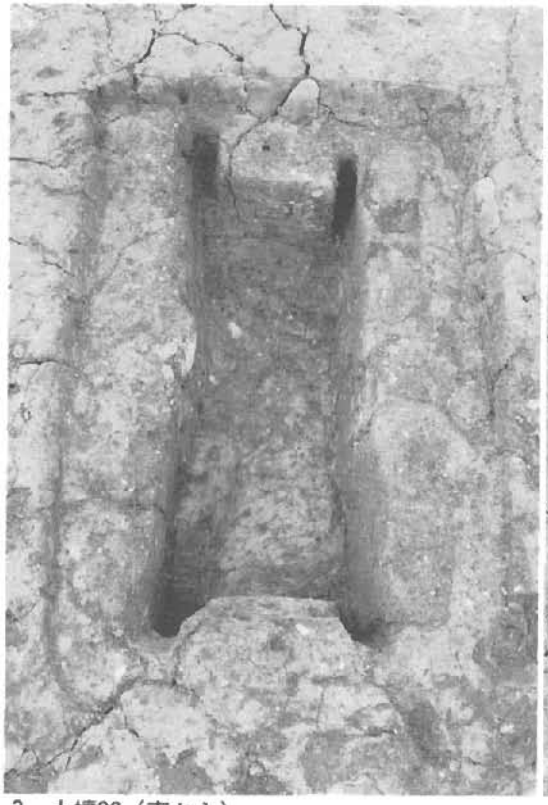
3．土壙30（北から）

4．土壙31（東から）

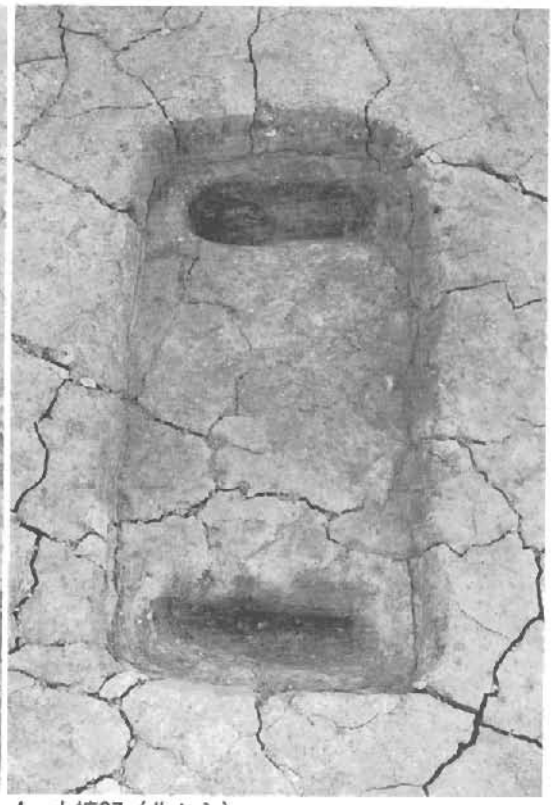
図版七　A・B地区

1．土壙34（北東から）

2．土壙35（西から）



3．土壙36（東から）



4．土壙37（北から）

1．道路遺構（南から）

2．建築部材出土状況（北から）

図版九　A地区

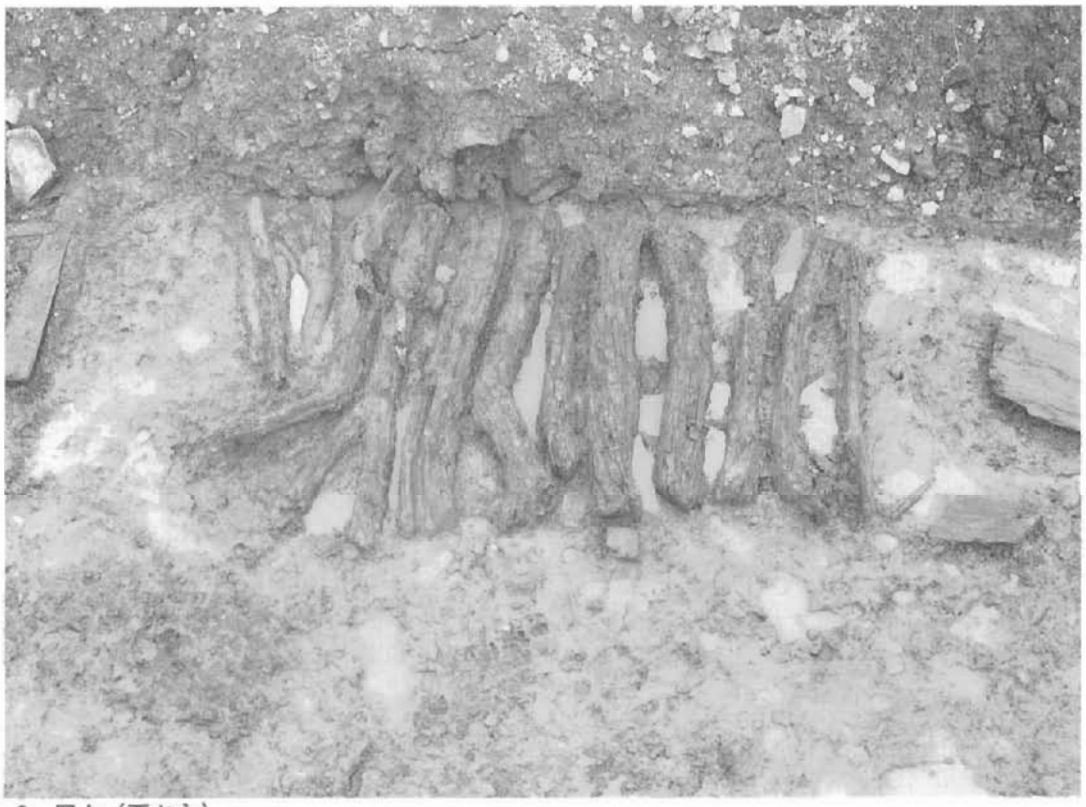
1. A地区南端溝（南から）

2. 溝内遺物出土状況（東から）

1. 側溝1内 杭列（北西から）

2. 道路遺構土層断面（北から）

1. 道路遺構 下層 基礎（北から）



2. 同上（西から）

1．建築部材出土状況（北から）

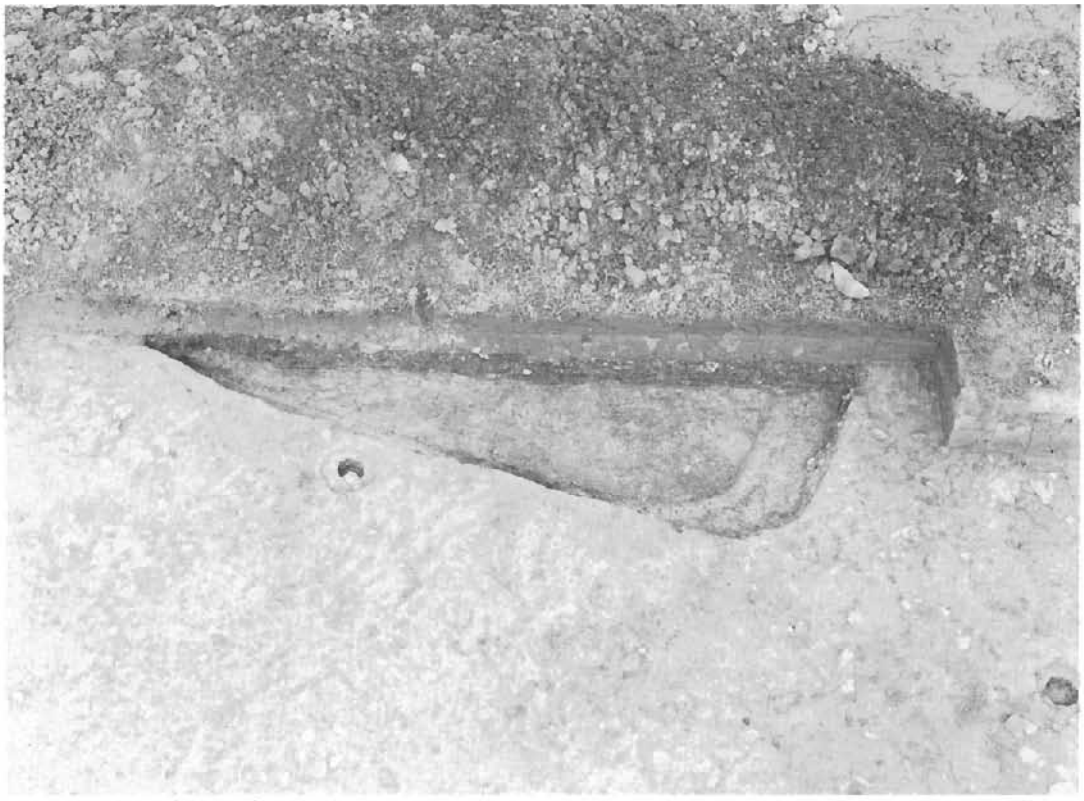
2．道路遺構上面 瓦出土状況

図版一三　B地区

1. 側溝内 斎串 出土状況

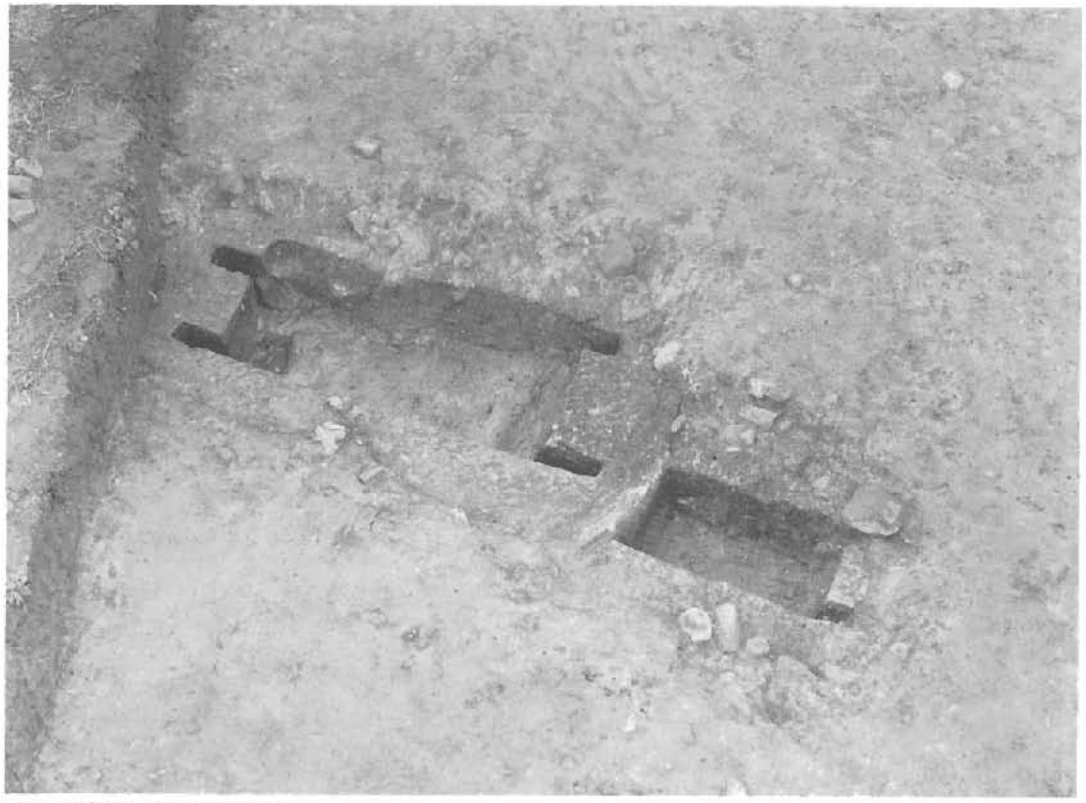
2. 谷部 木器出土状況

1. C地区 全景



2. 住居跡4 （西から）

1. 土壙41（東から）



2. 土壙42・43（南から）

1．土壙45（東から）

2．側溝1　土層断面

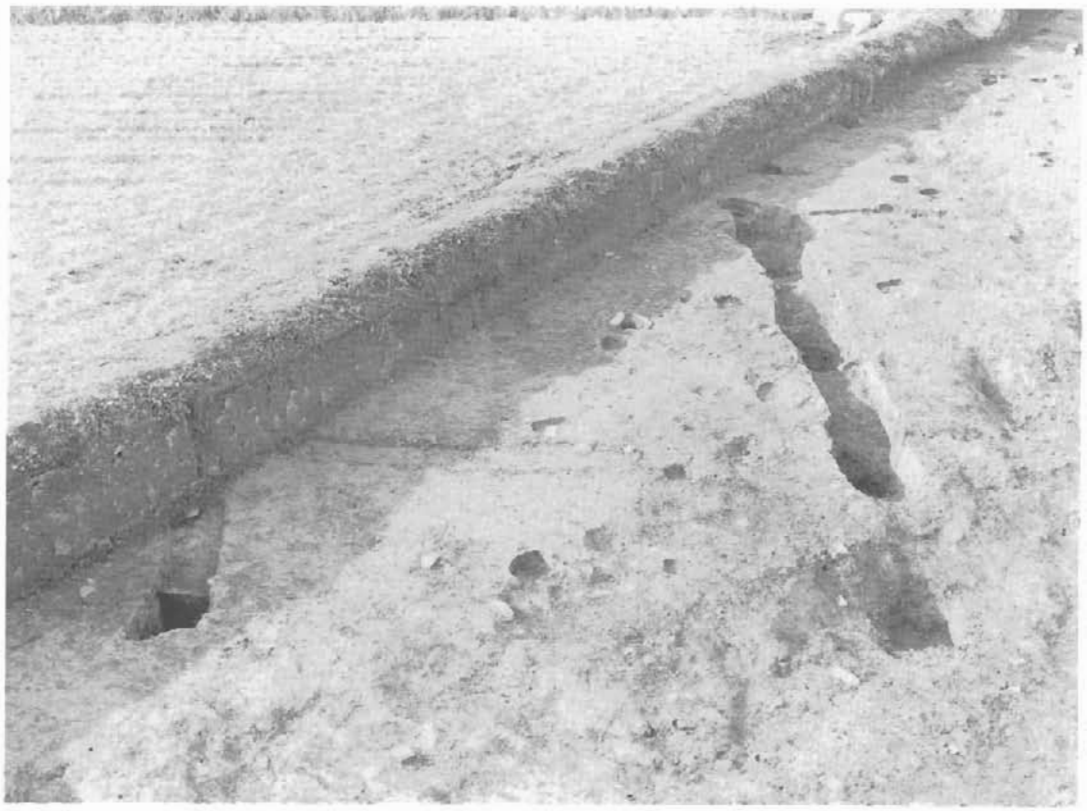
1.　道路遺構（南から）

2. 側溝１内　木器出土状況

図版一八　D地区

1．D地区　全景(南から)

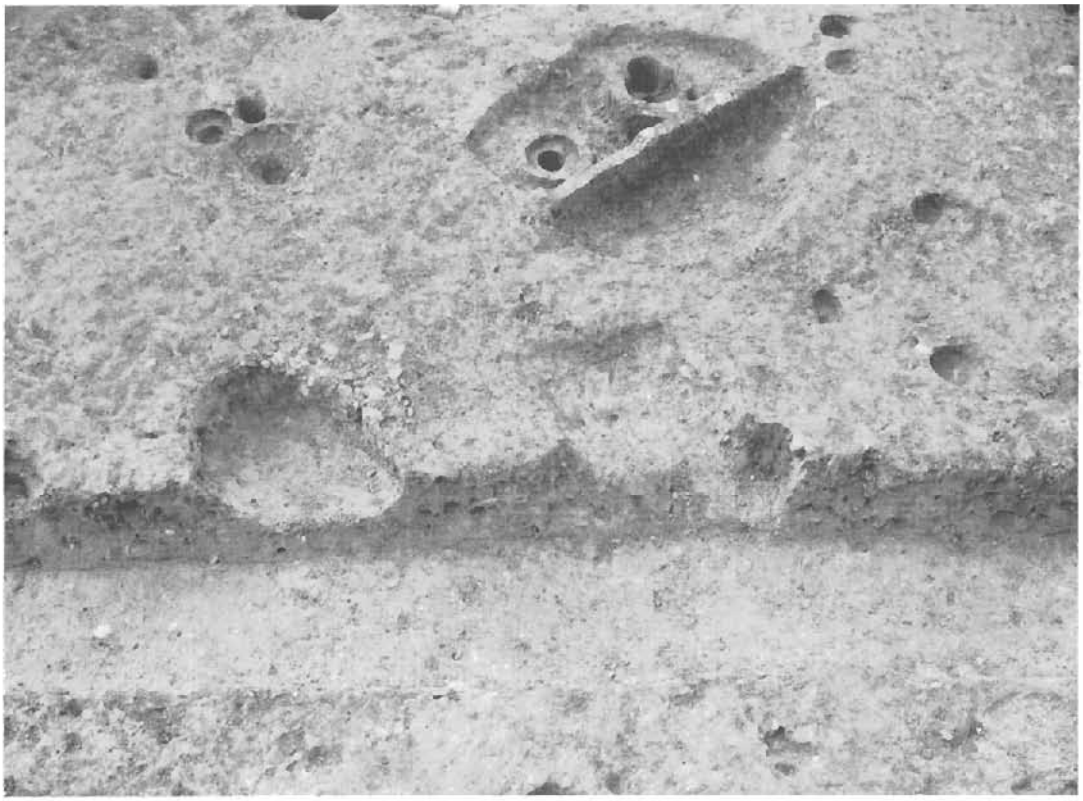
2．掘立柱建物跡1（東から）



1．掘立柱建物跡２（南東から）

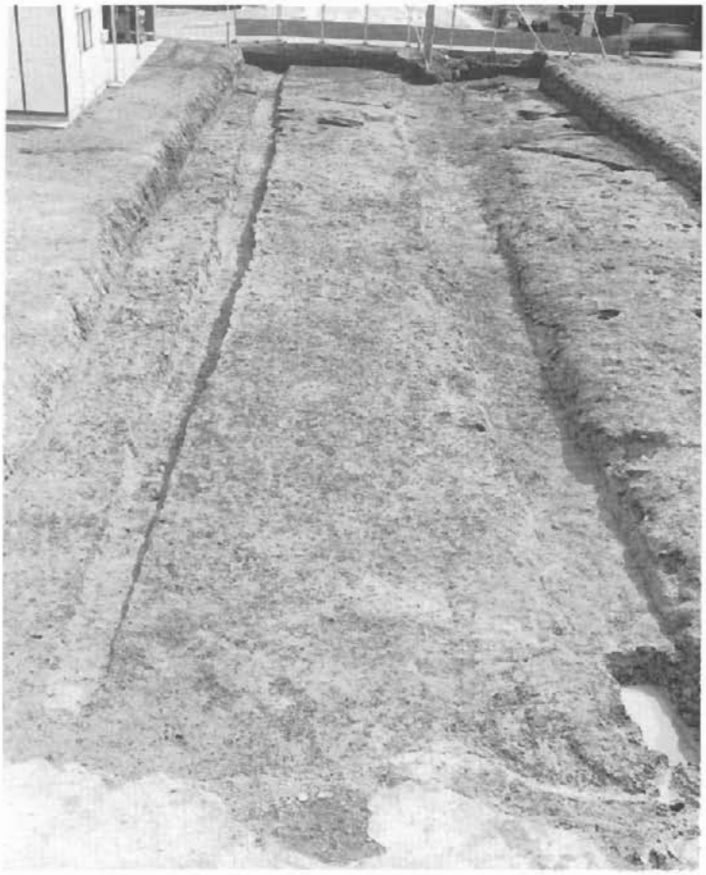
2．掘立柱建物跡３（東から）

1. 土壙48（東から）



2. 土壙49・50（東から）

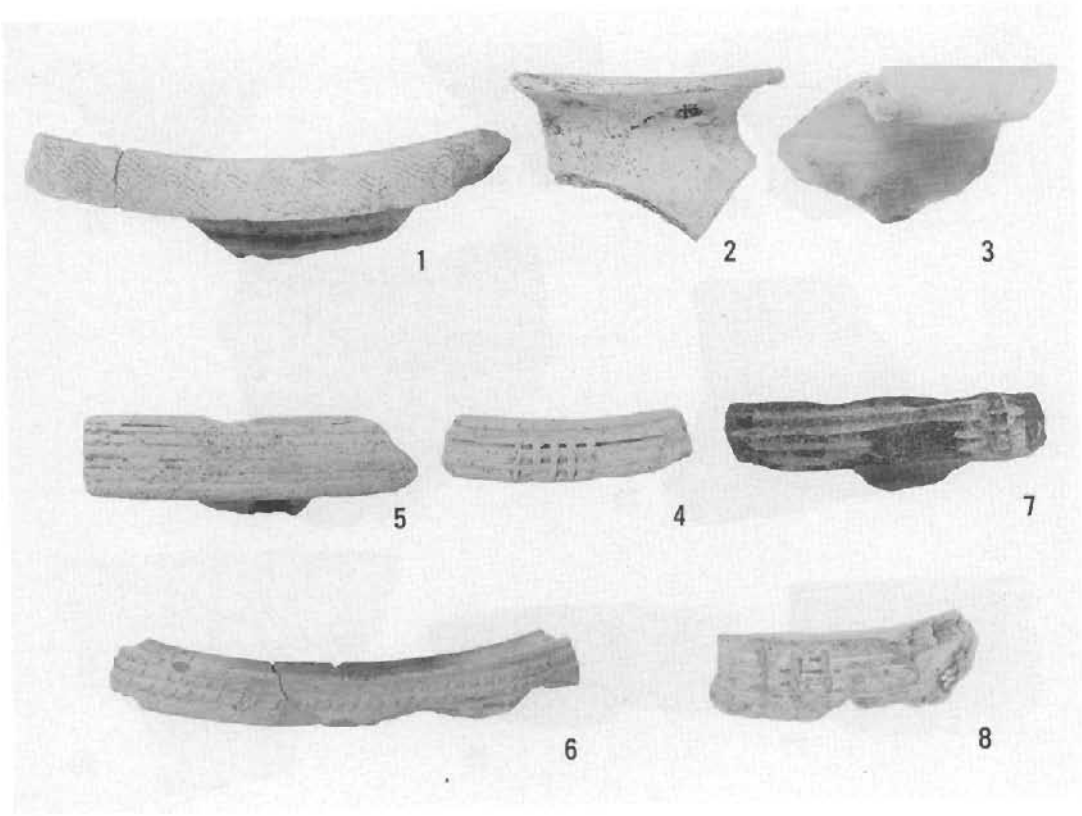
図版二一　D地区

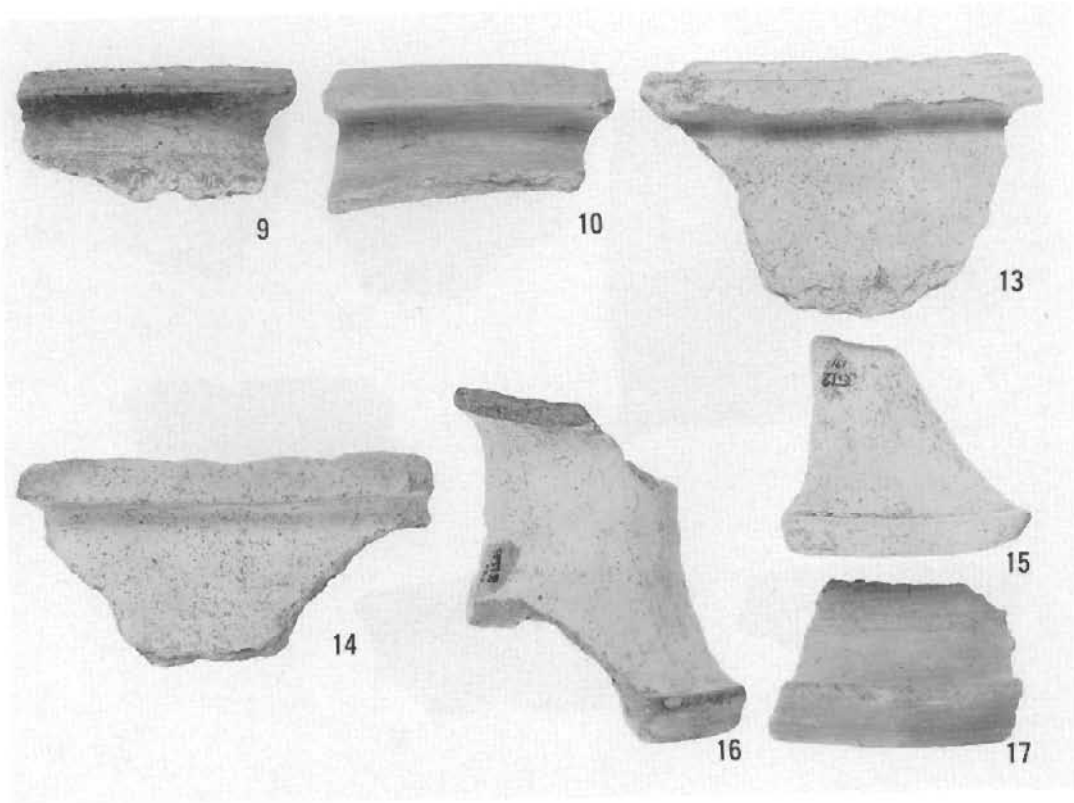


1．道路遺構（北から）

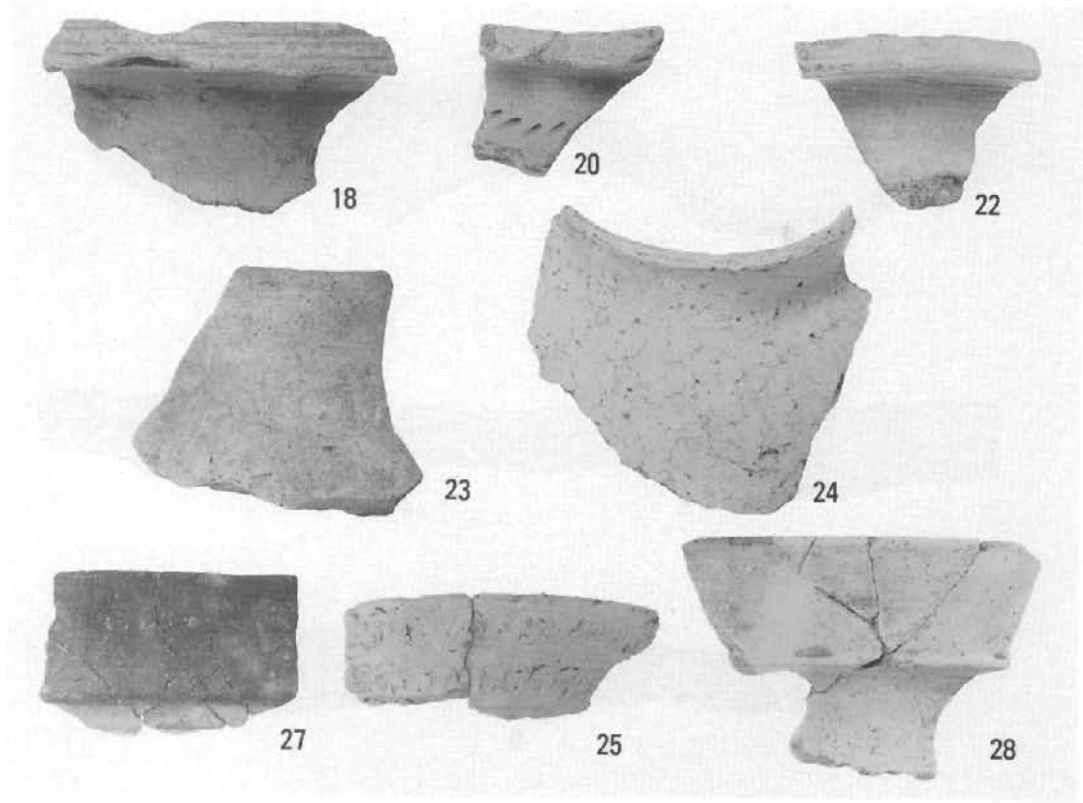
2．側溝2　土層断面（南から）

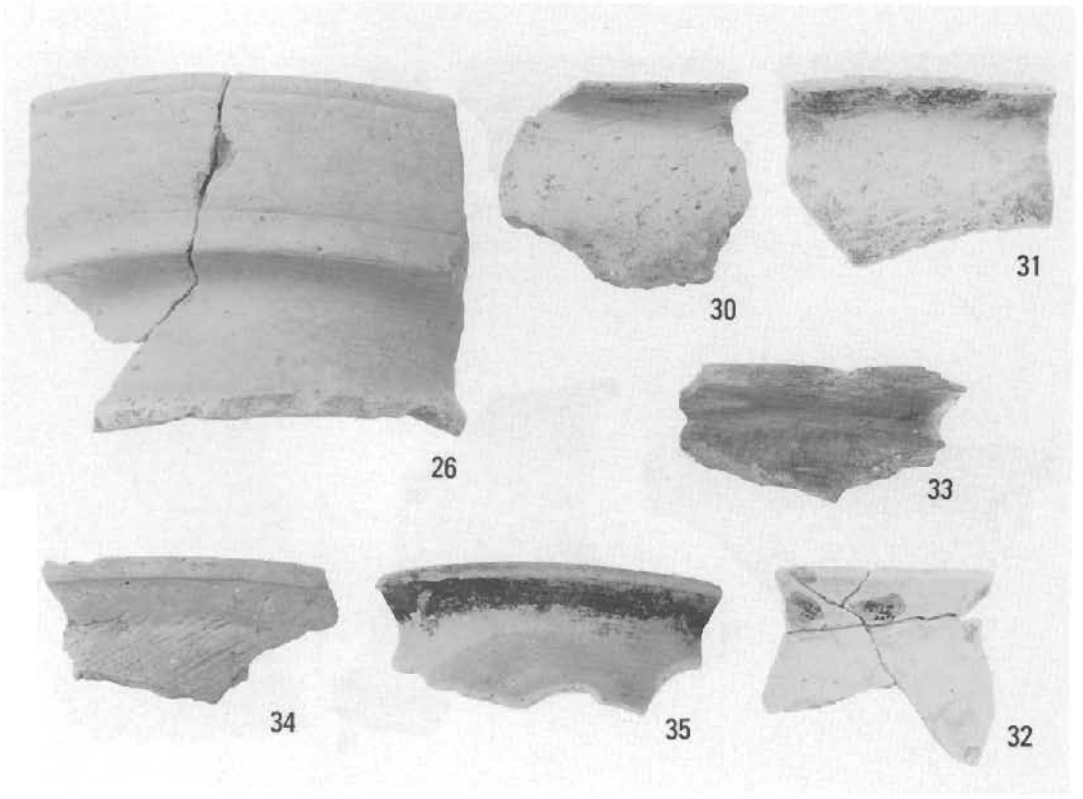
図版二二　弥生土器(1)



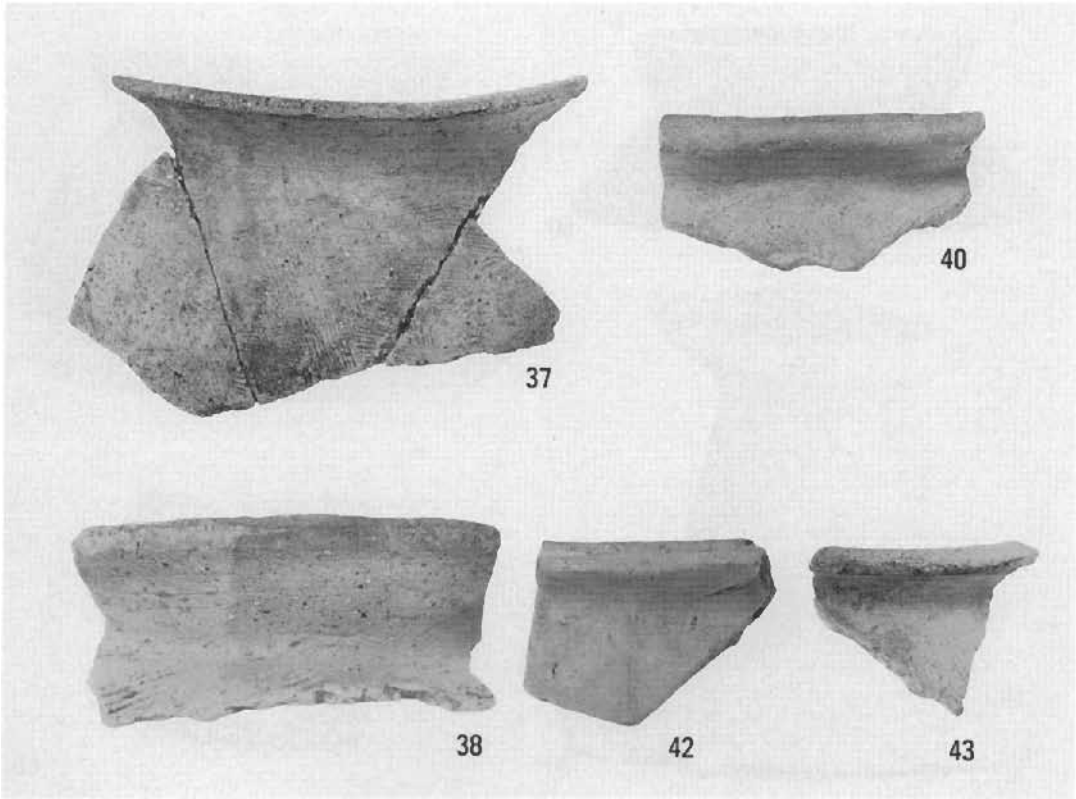


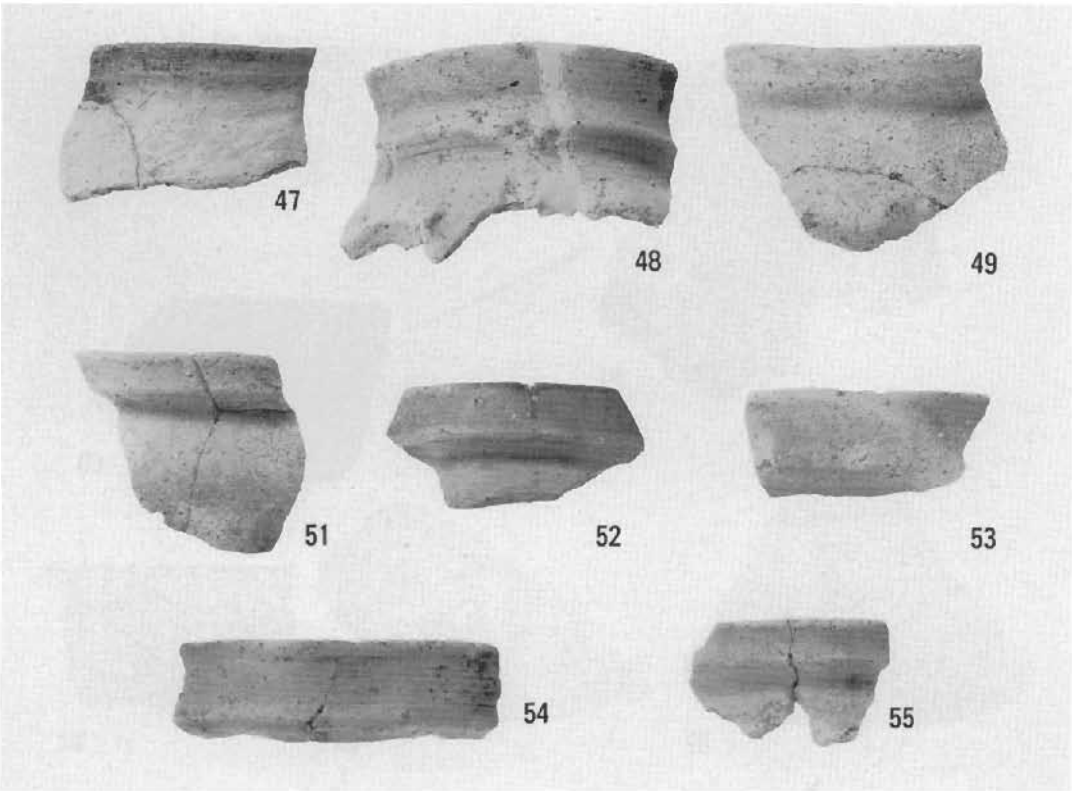
図版二三　弥生土器(2)



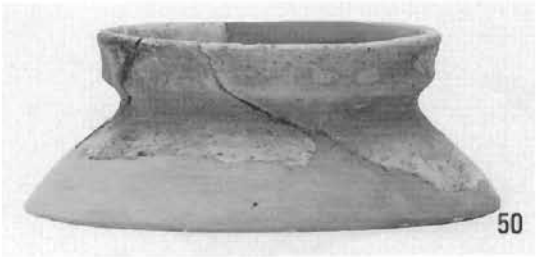


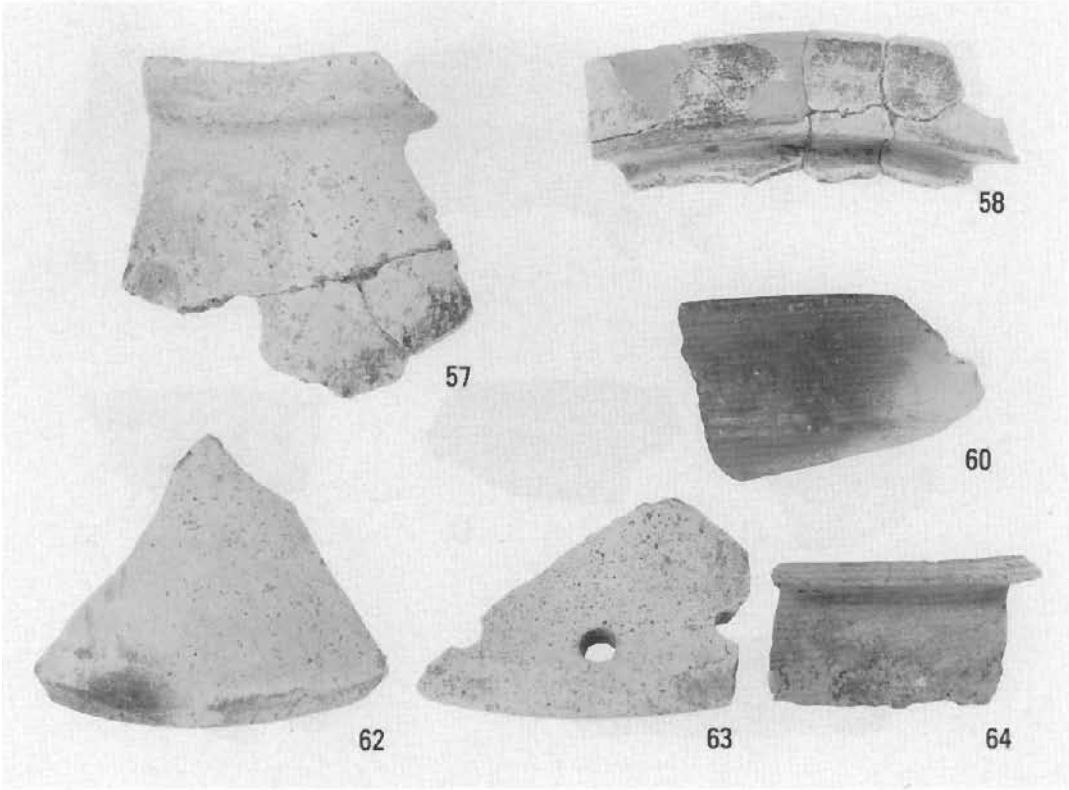
図版二四　弥生土器(3)

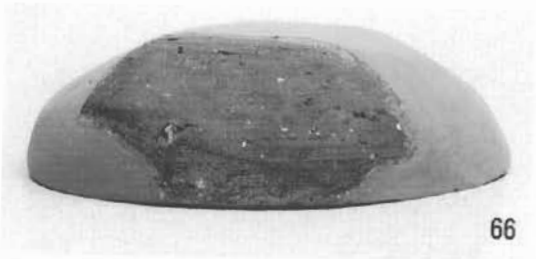




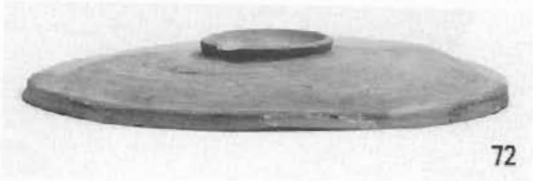
図版二五　弥生土器(4)






66

67

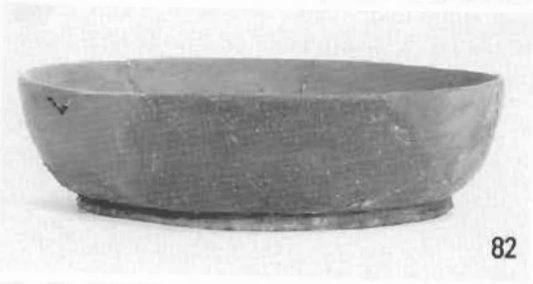

72

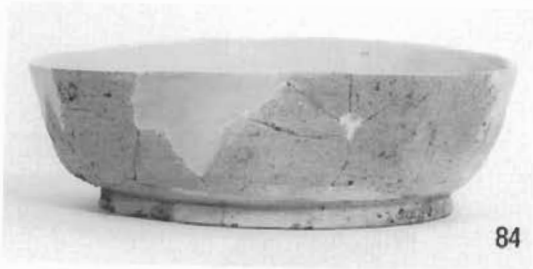
74

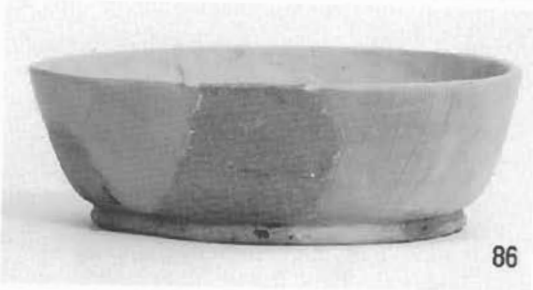
76

78

79


82

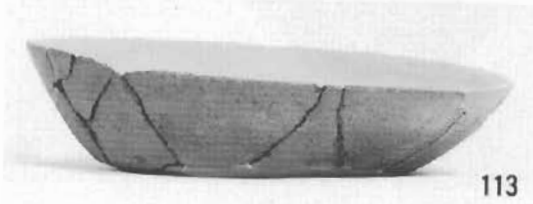

84


86

89

100

112

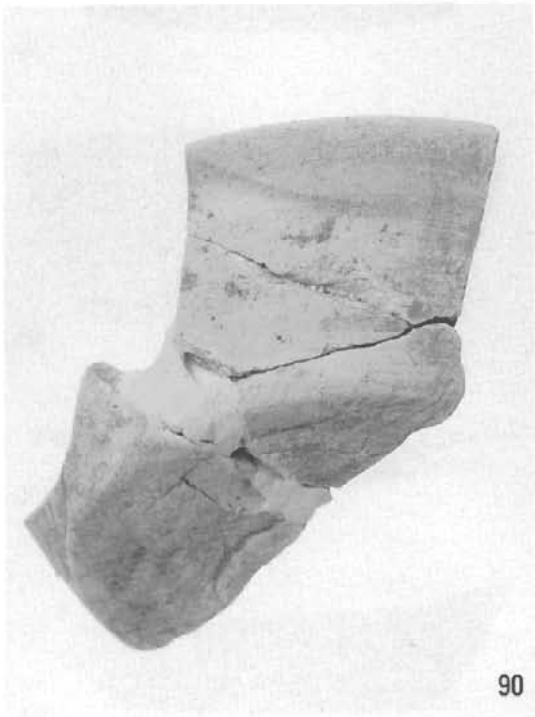

113

図版二七　須恵器(2)・墨書土器(1)

106

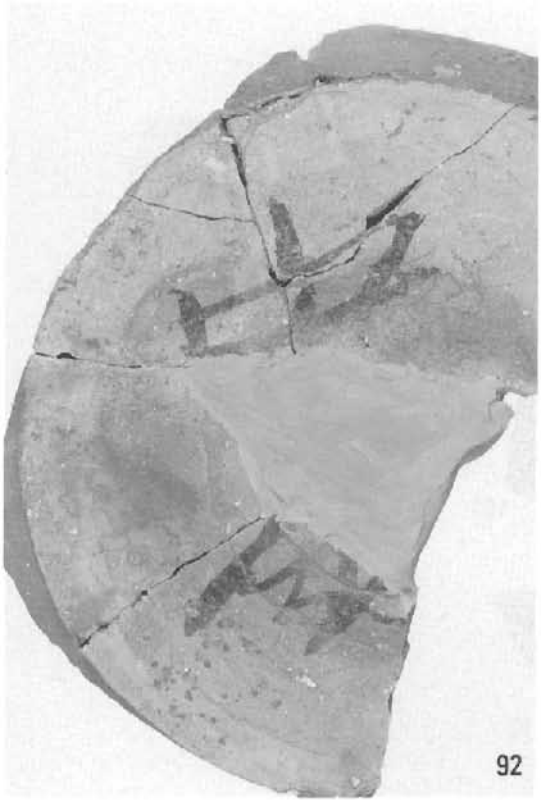
107

117


90

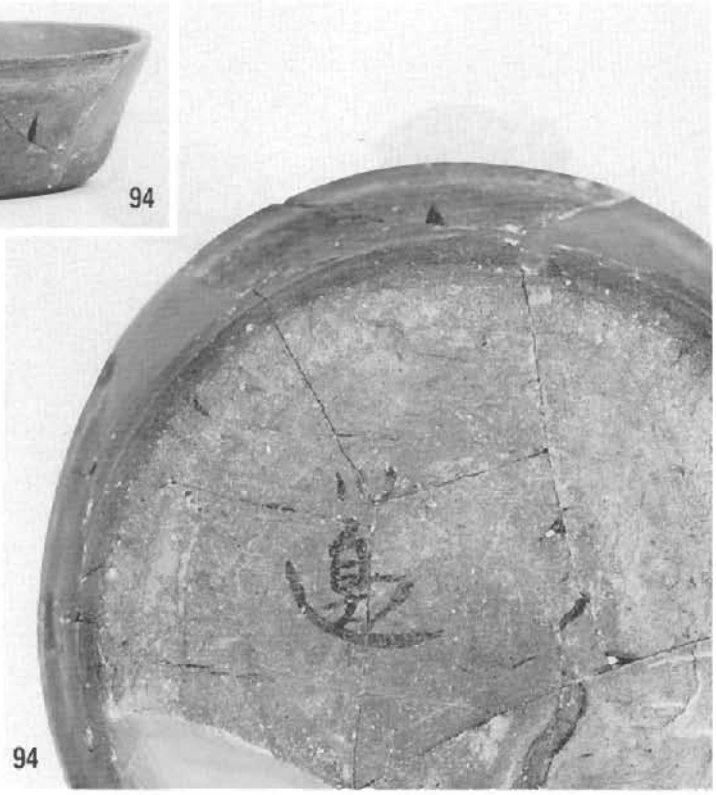
91

図版二八　墨書土器(2)

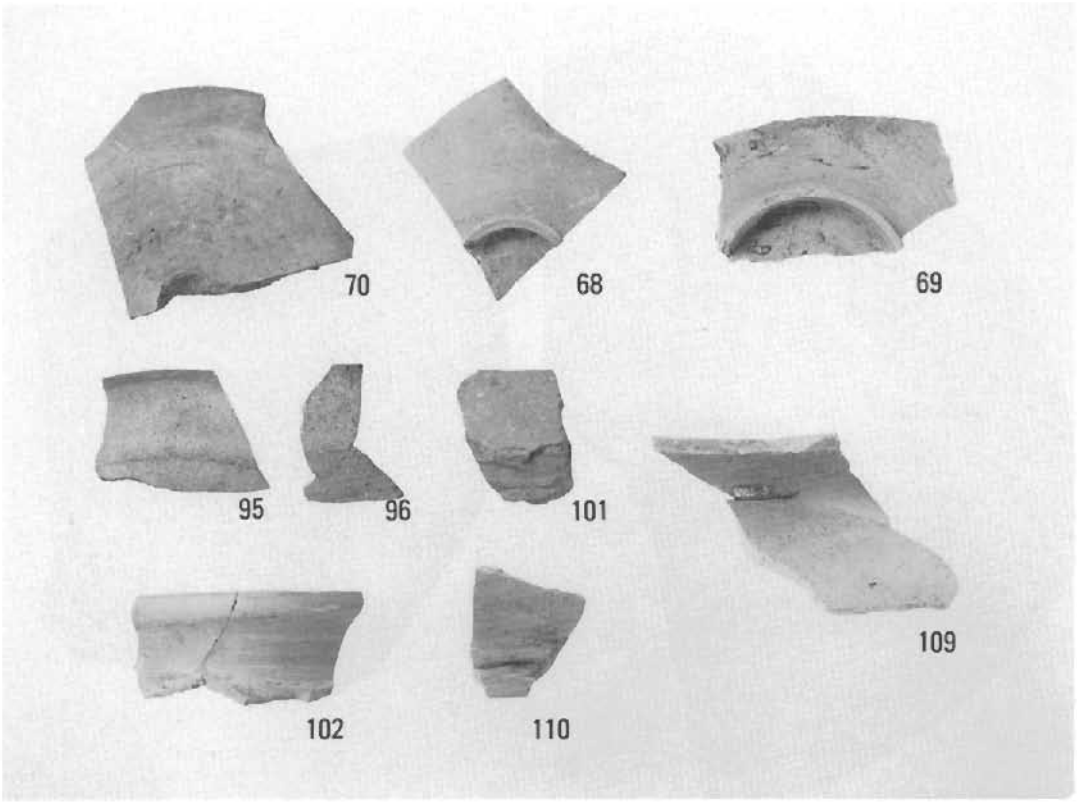

92

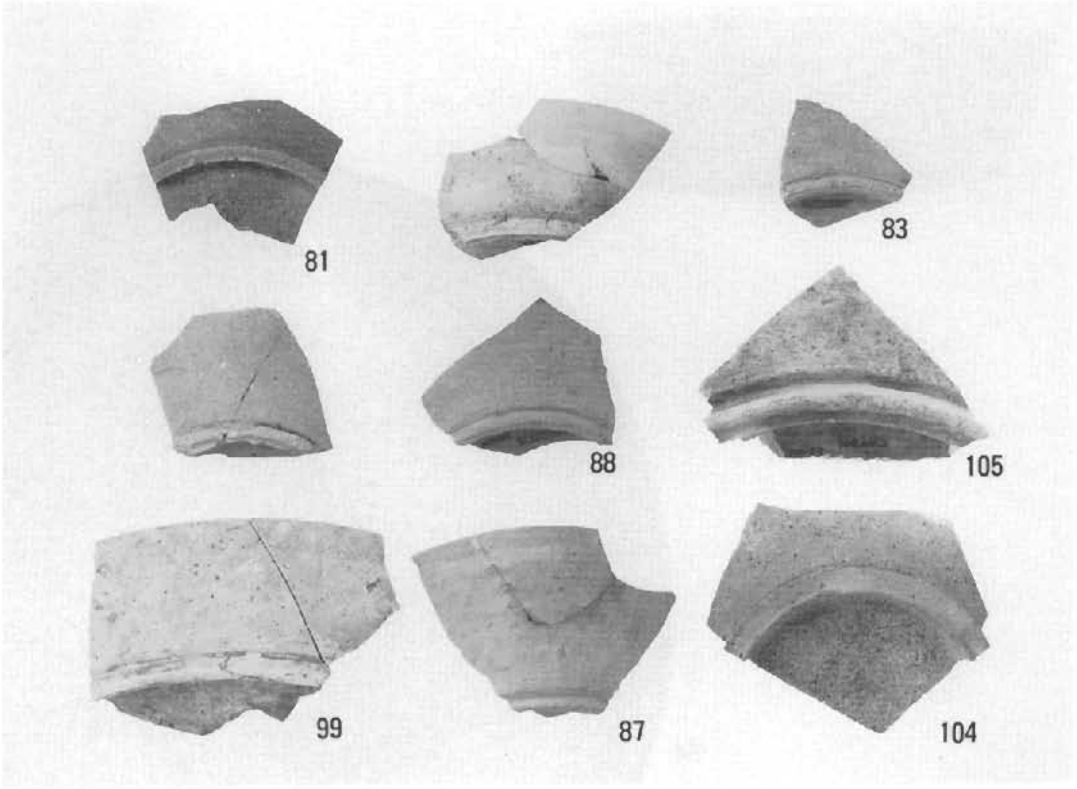
93

94

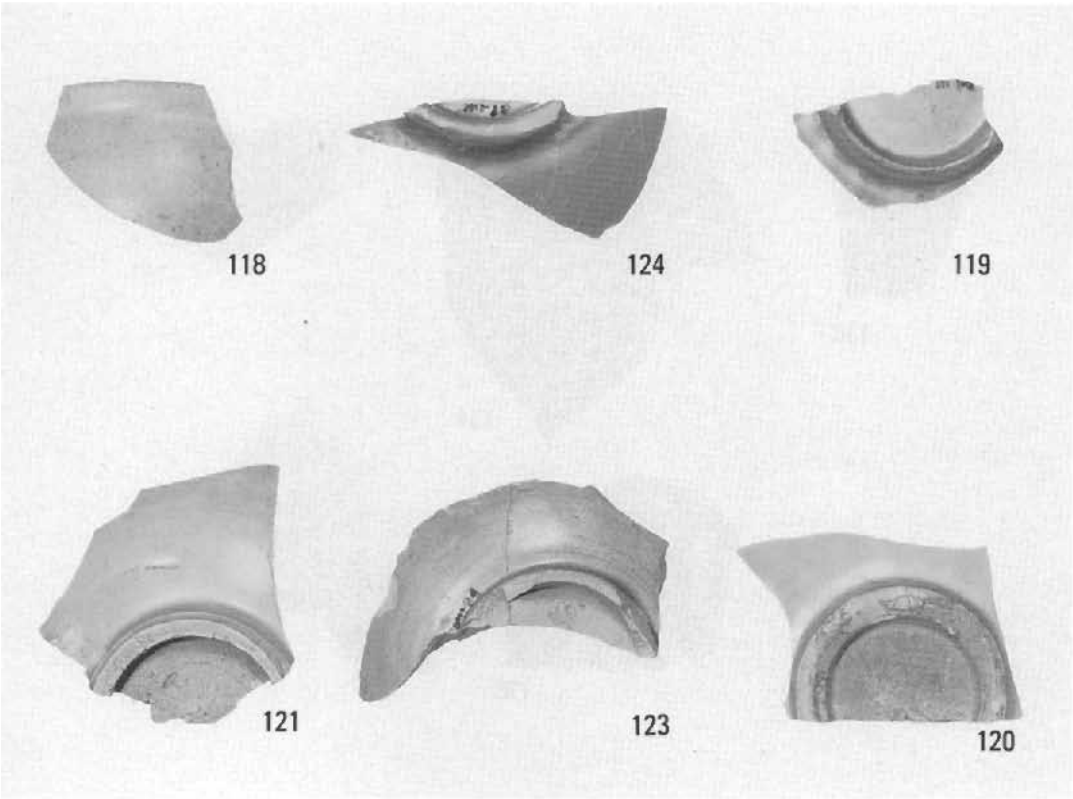

94

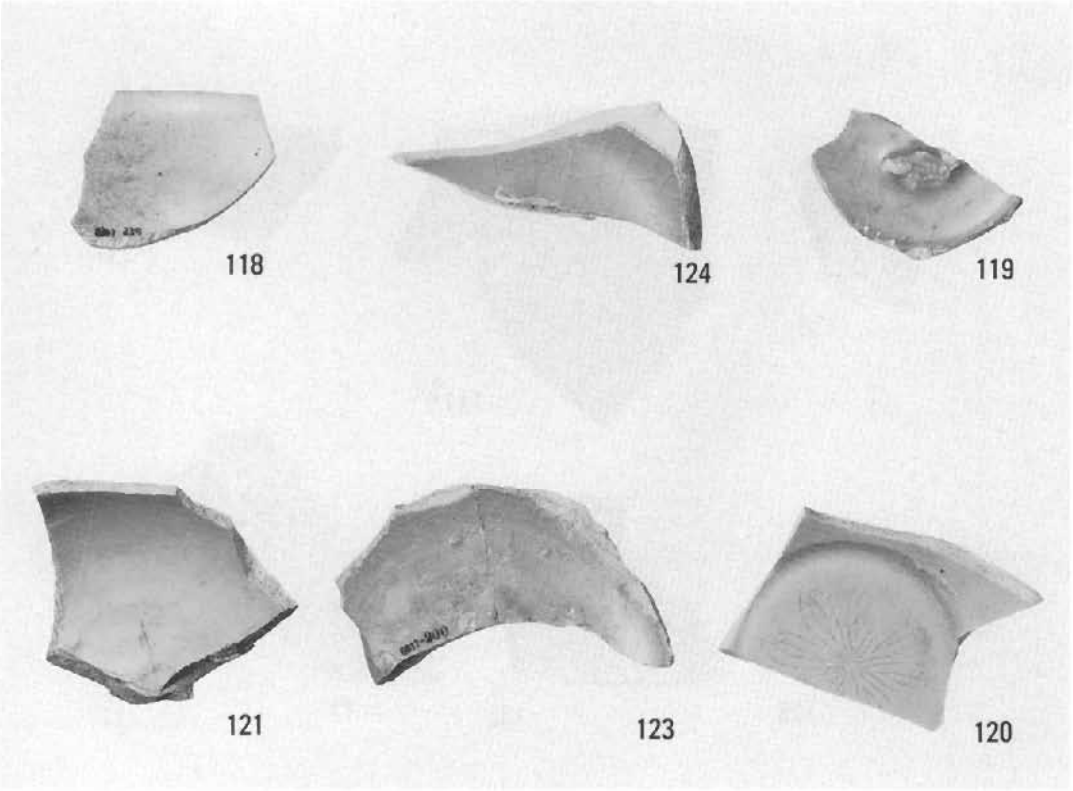
図版二九　須恵器(3)



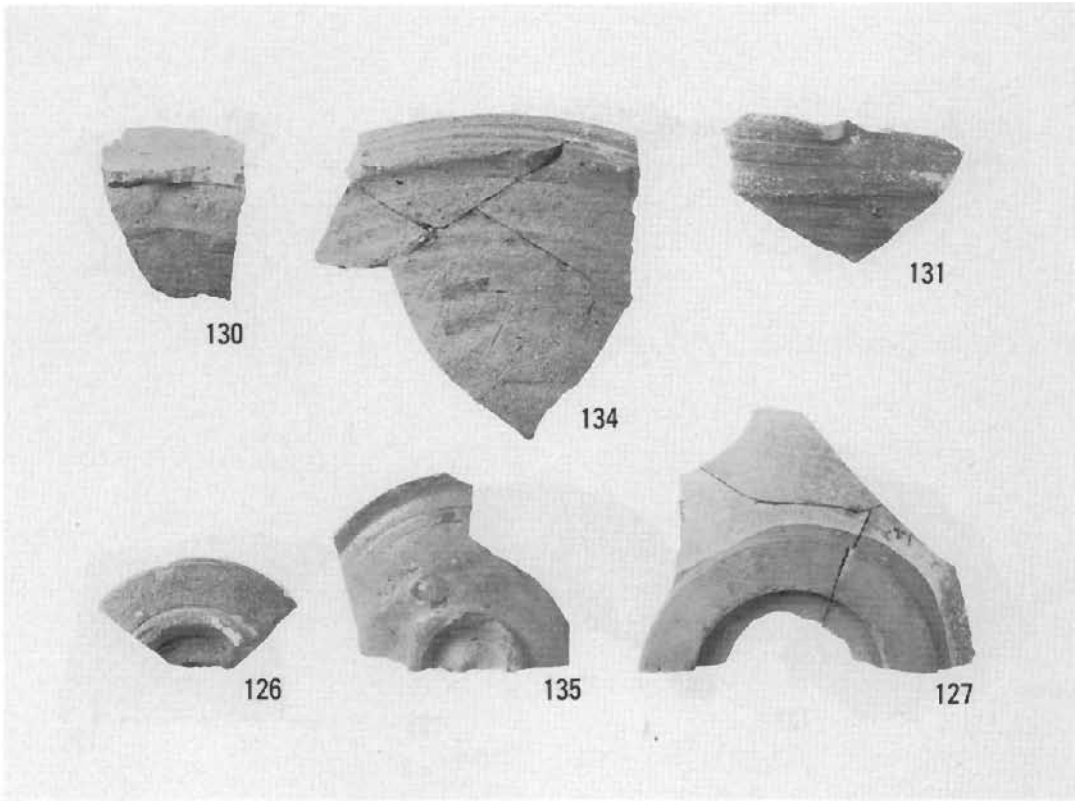


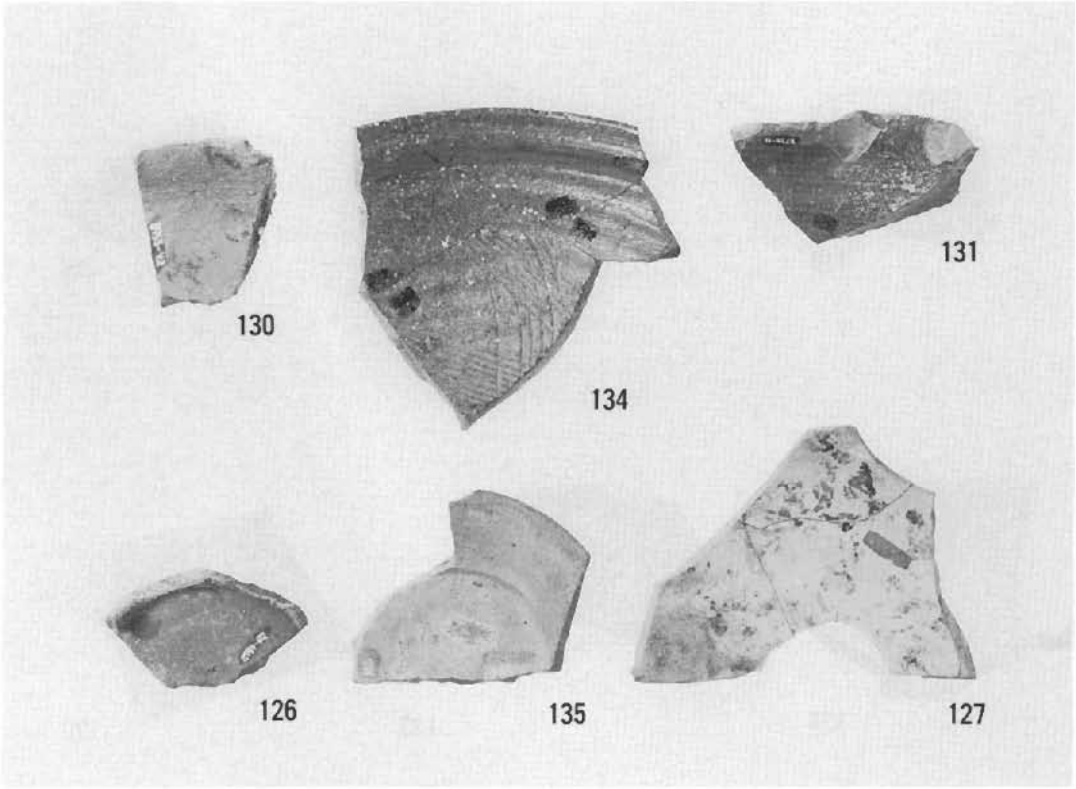
図版三〇　中世以降の土器(1)



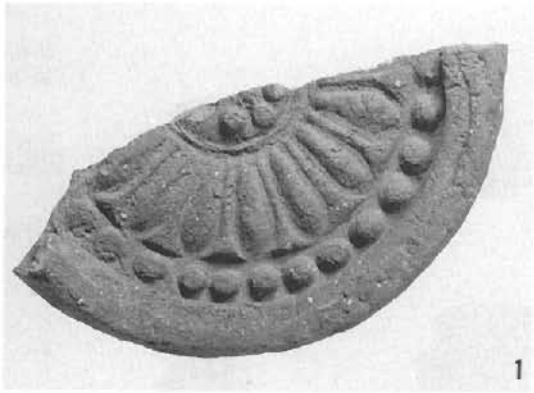


図版三一　中世以降の土器(2)

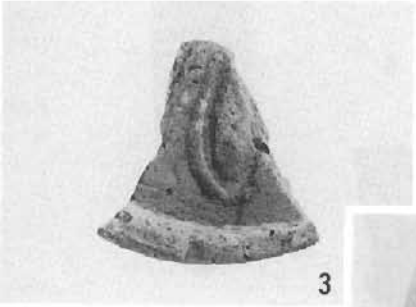




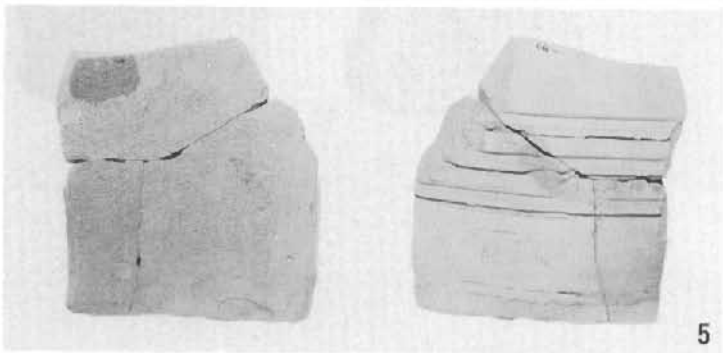
図版三二　瓦

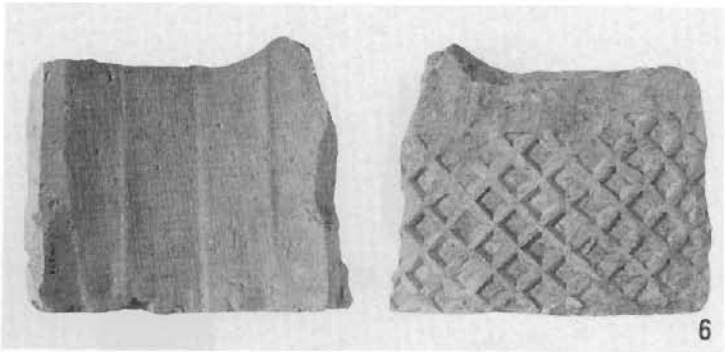

1

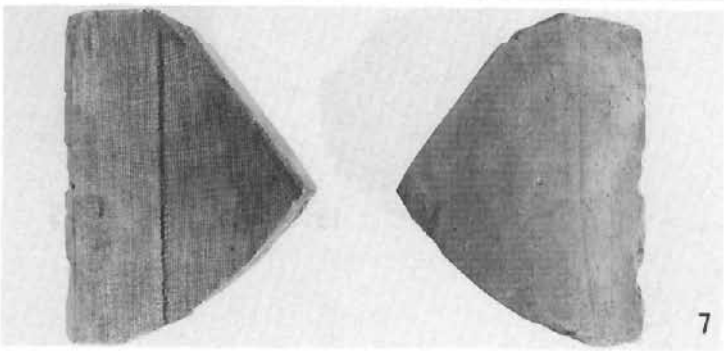
2


3

4

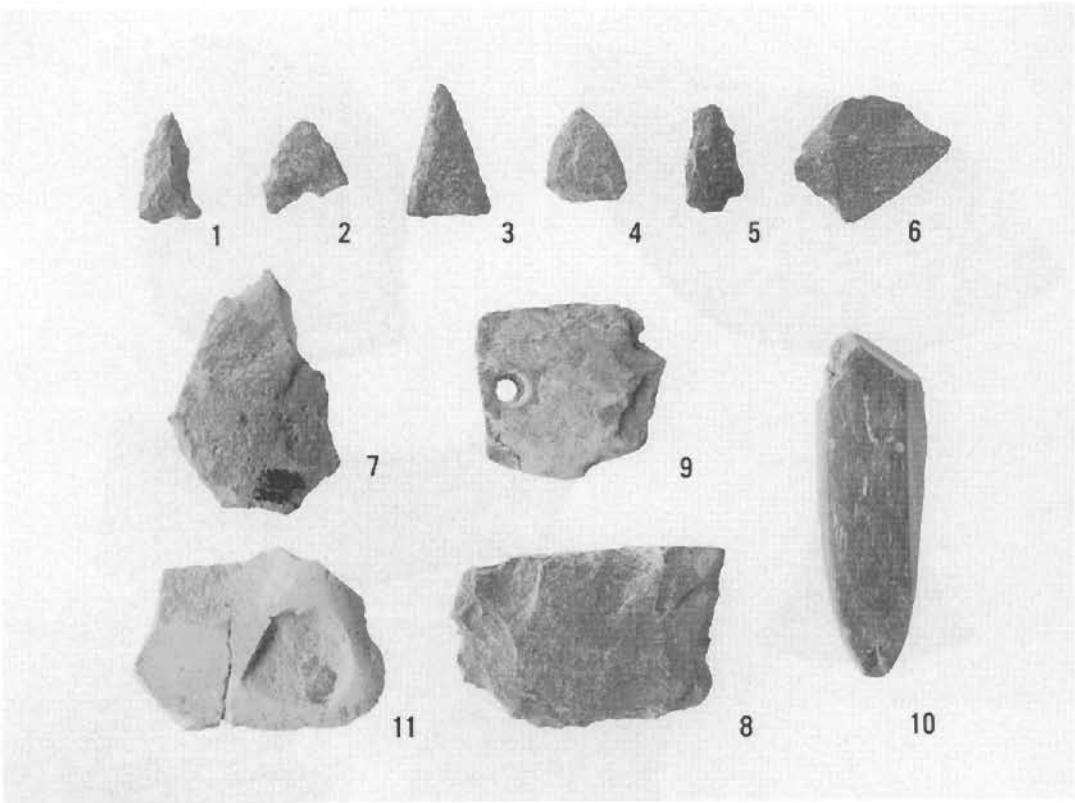

5

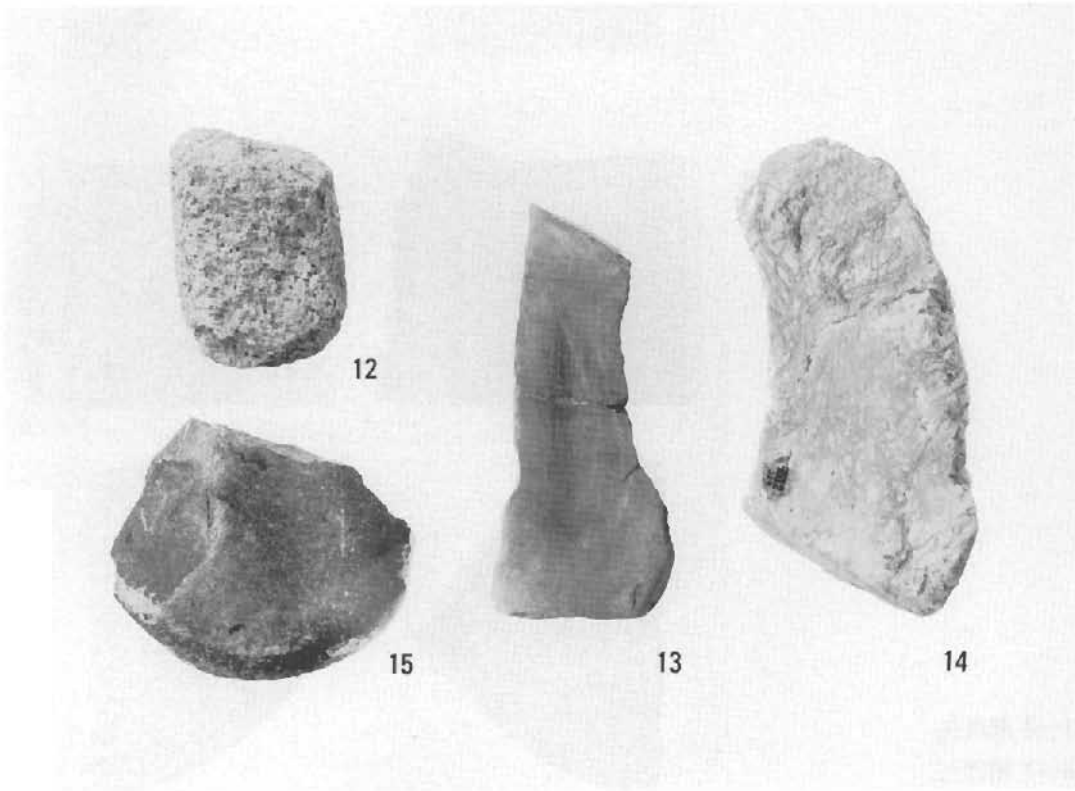

6


7

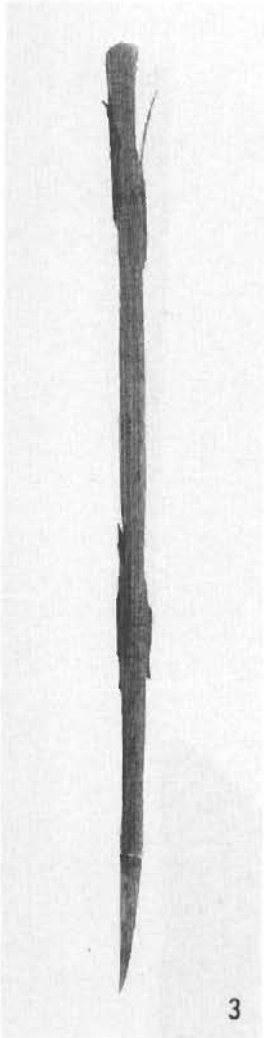
1～4 縮尺 1/2
5～7 縮尺 1/4

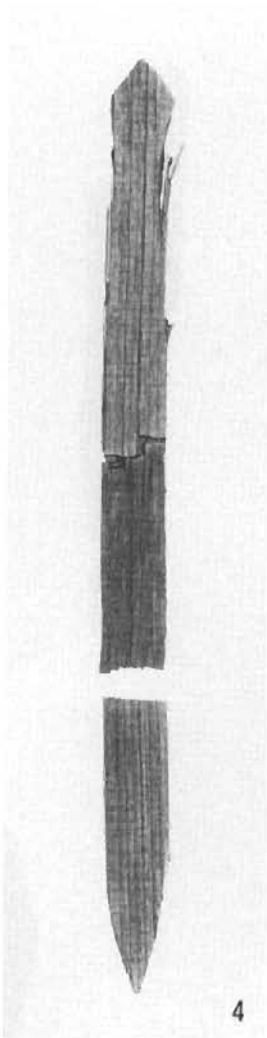
図版三三　石器

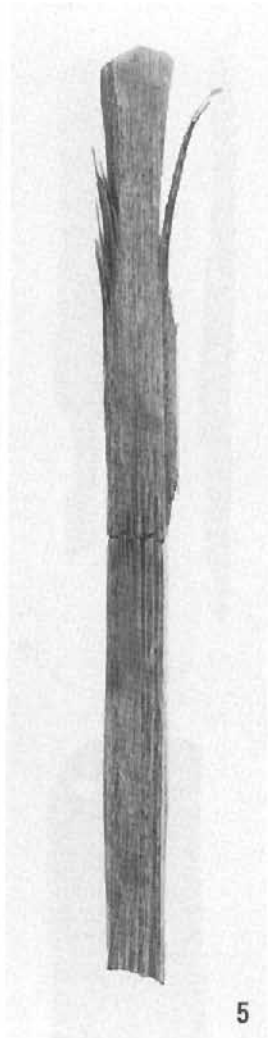


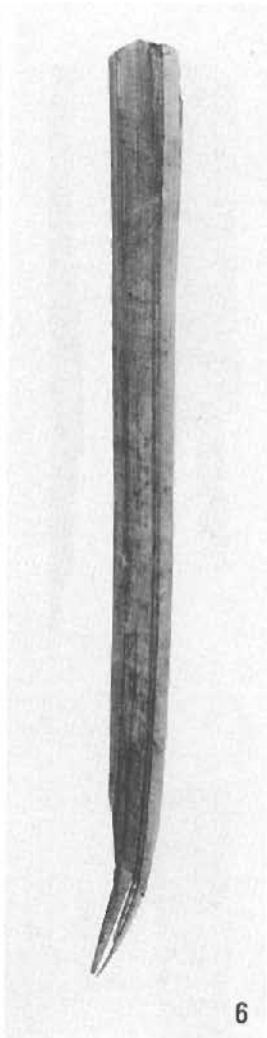


図版三四　木器(1)

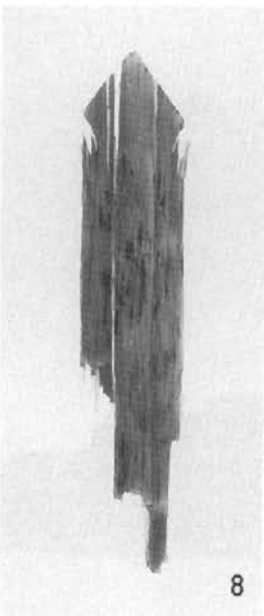

3

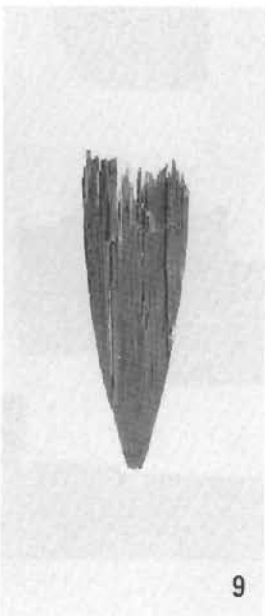

4


5

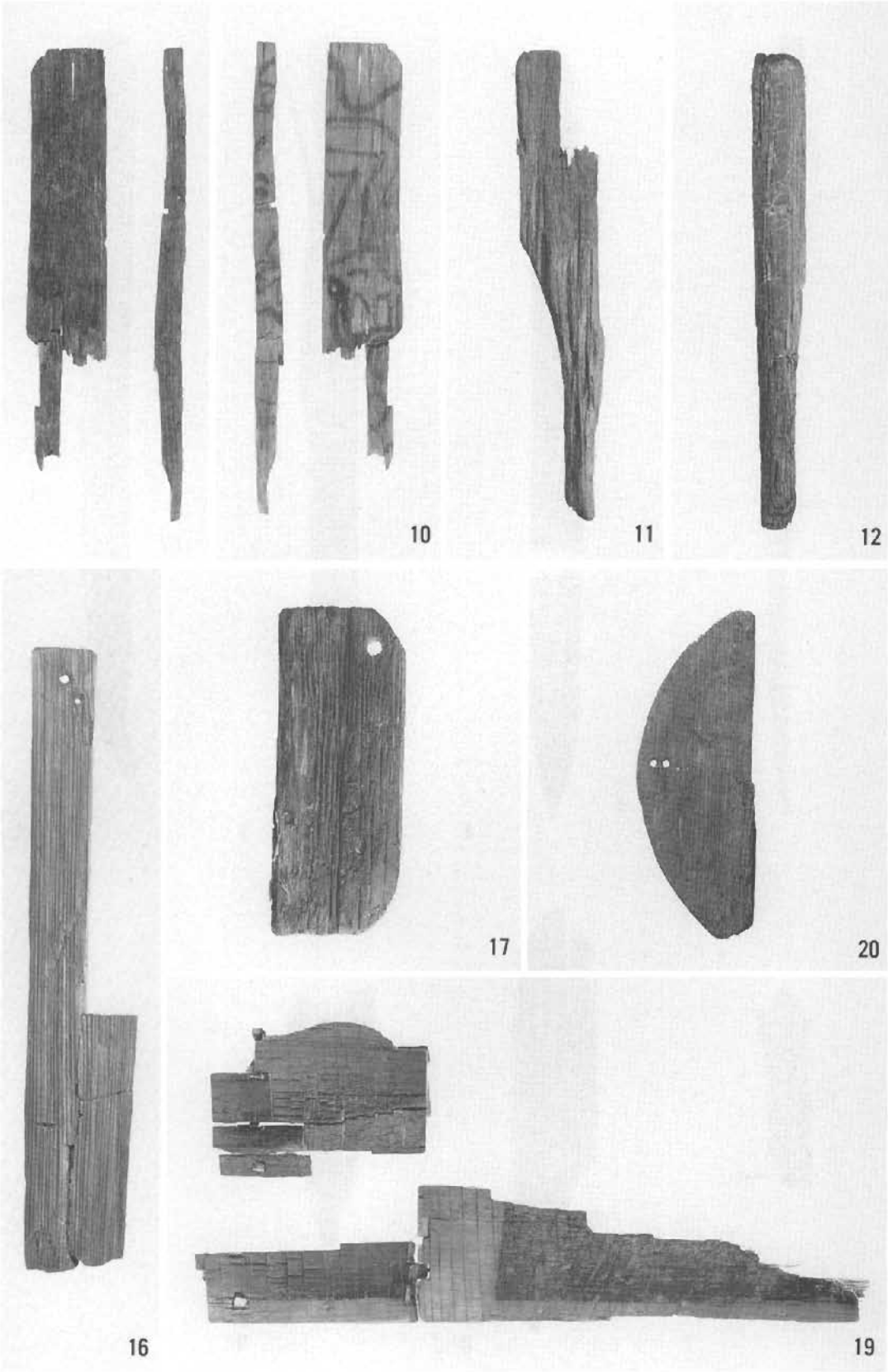

6

7


8


9

図版三五　木器(2)

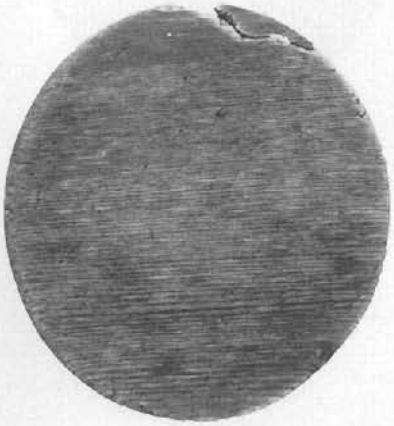


図版三六　木器(3)

21

23

25


22

24

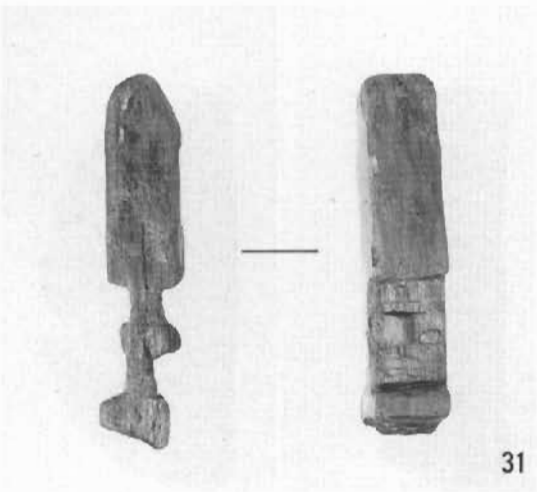
26

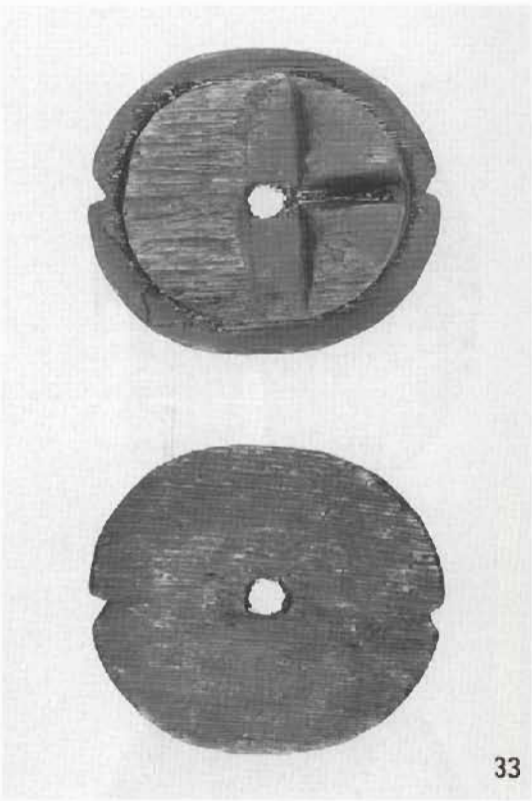
27

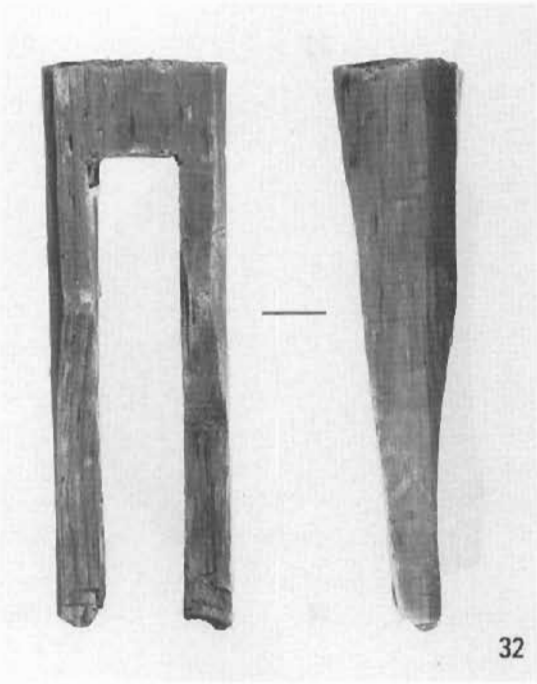
28

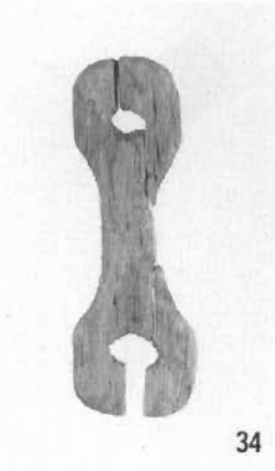
29

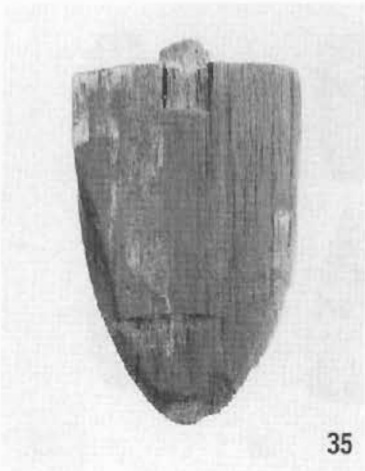
30


31


33

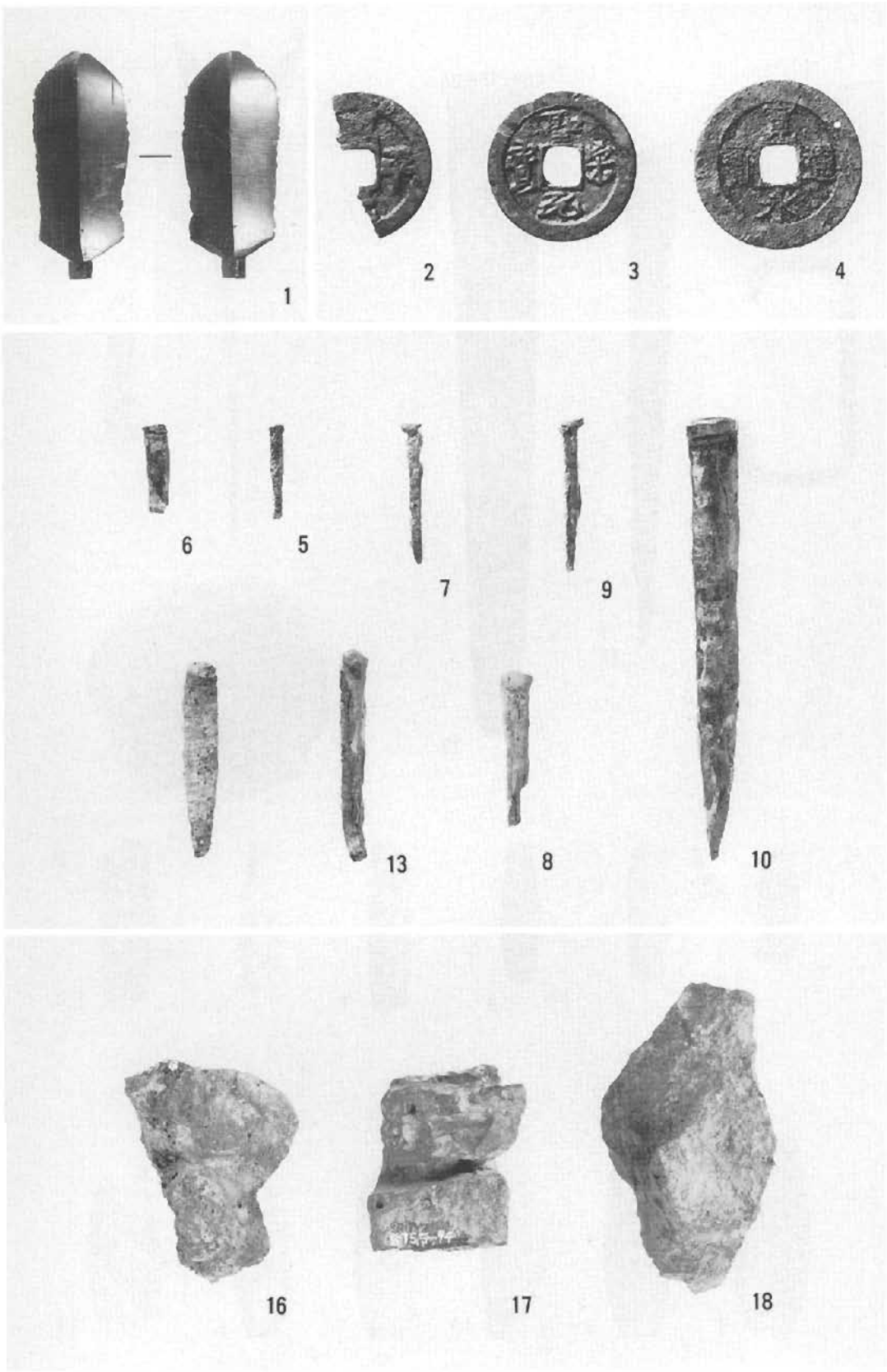

32


34

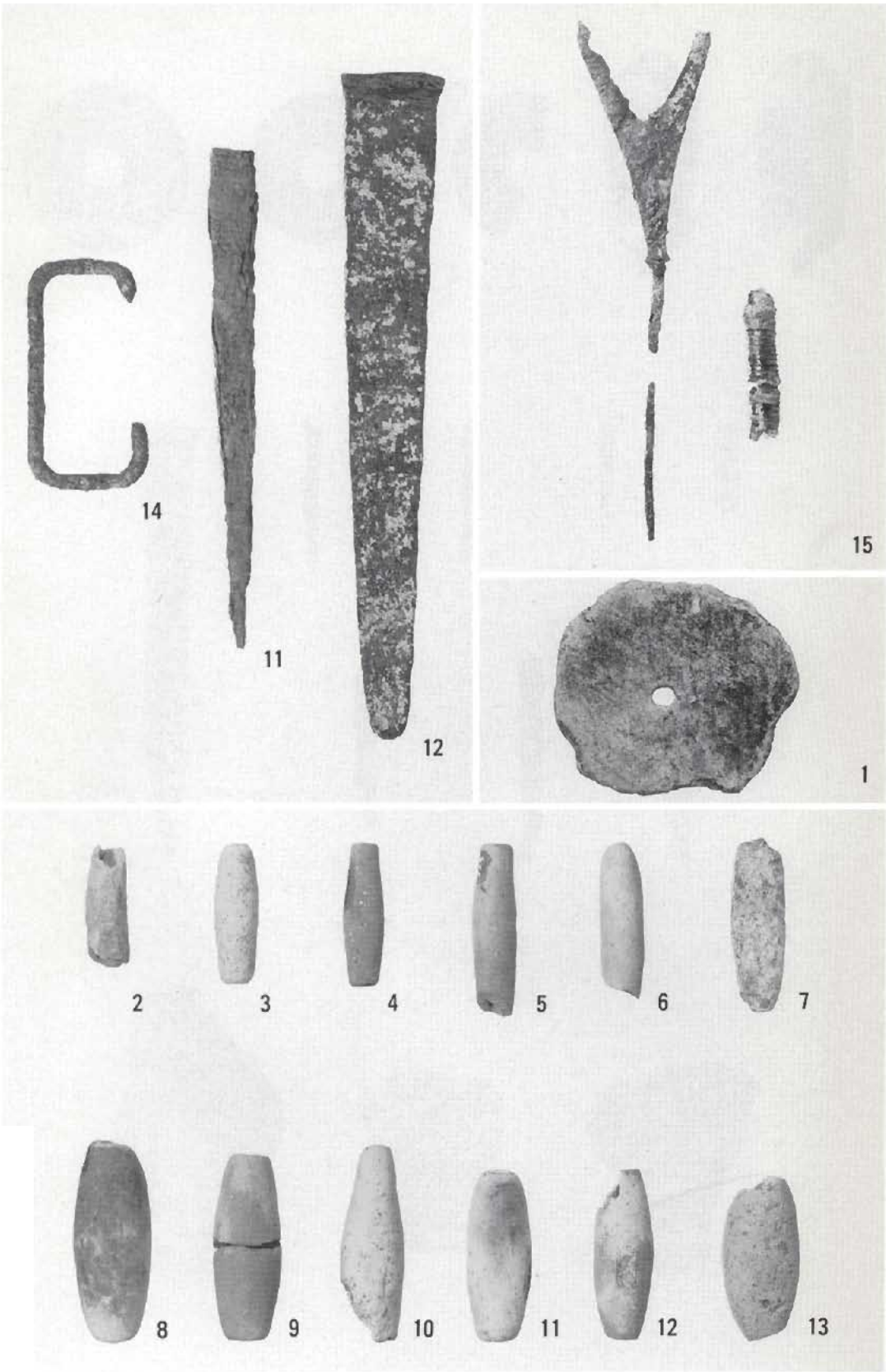

35

36

図版三八　金属器(1)



図版三九　金属器(2)・土製品



兵庫県文化財調査報告書　第100冊

長尾・沖田遺跡（Ⅰ）

－県道下庄・佐用線道路改良工事に伴う発掘調査報告書－

平成３年３月30日　発行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652　神戸市兵庫区荒田町2丁目1番地5号
TEL　(078) 531-7011

発　行　兵庫県教育委員会
〒650　神戸市中央区下山手5丁目10番1号
TEL　(078) 341-7711

印　刷　大神印刷株式会社
〒650　神戸市中央区港島中町2-2-1-5
TEL　(078) 302-2700